UFC、驚天動地のストライクフォース買収劇——!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

enterbrain MOOK

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

2011
157
特別定価940yen

10th thanks! eb!



特集
女子プロレス
ブル中野
ジャガー横田
キューティー鈴木
コンバット豊田
愛川ゆず季
朱里

グレーが許されない時代だからこそ——!!
第2特集
八百長とは何か?

俺たちの女子プロレス伝説!!

女たちの生き様から本当の“プロレス”が見えてくる!

kamipro

2011 No.157 CONTENTS

表紙写真／平工幸雄

特集 女子プロレス

勝負を超えた女の闘い！



MMA & KICK

YAOCHO

PRO-WRESTLING


Columns



帝国の世界制圧が日本に与える影響とは――!?

ストライクフォース

SF買収!!



オレのものは
オレのもの
おまえのものも
オレのもの!!


UFC.S

——いやあ、今回のUFCによるストライ
クフォース(以下、SF)買収の件は、マッ

て、スコットは現時点で声明を出せないみ
たいなんだけど「それは事実だ」と。

ってたキックボクシング団体で、K—1と
も組んだりしてたんだけど。

座談会出席者



ダナ・ホワイト、高笑い!?

UFC、ストライクフォース買収の衝撃

誰もが耳を疑ったこのビッグサプライズ……
MMAナンバーワン団体がナンバー2を飲み込んだのだ!!
いったいその舞台裏は？　そして日本に与える影響は？

試合写真／Esther Lin(STRIKEFORCE)

UFCとSFの力の差は、全盛期のPRIDEとその当時パンクラスぐらいある

――いやあ、今回のUFCによるストライクフォース（以下、SF）買収の件は、マット界にとってPRIDE買収以来の衝撃じゃないですか。

ガンツ　PRIDEの買収と違うのはさ、PRIDEの場合は「PRIDEを生き延びさせるために買ってくれ」っていうことだったじゃない。今回はそうじゃなくて、巨大化したUFCがSFをついに飲み込んだっていう感じだよね。

橋本　単純に気になるのは「SFをなんで売っちゃったの？」ってことなんだけど。これは赤字がかさんでってことじゃないわけだよね。

――SFは急成長を遂げてるイベントですから。で、まずこの話を最初に聞いたのが、12日夜10時ぐらいなんです。どうやらSFがUFCに売却されるらしい、と。ただ、これだけのビッグプロジェクトなら多少なりと噂が出てくるもんじゃないですか。はたしてどこまで本当なのかまったくわかんなかった。

ガンツ　それでウチで海外取材のときに通訳をやっている石井（史彦）さんに連絡したんですよ。石井さんってストライクフォースの本拠地であるカリフォルニア州サンノゼに住んでて、スコット・コーカーともメールのやりとりができる人だからさ。で、朝になってスコットから石井さんへ返信があって、スコットは現時点で声明を出せないみたいなんだけど「それは事実だ」と。

――で、関係者から再度情報があって「どうやら3月11日に売却された」と。あまりにも急展開だし、スコットも声明を出せないって……。

橋本　今回は気配がまったくなかったもんね。PRIDEのときは「ついにきたか!!」感みたいなのがあったけど。

ガンツ　でも、「今日、買いたい」「はい、どうぞ！」ってわけにはいかないから、水面下でずっと動いてたでしょうね。

――で、あらためてSFというイベントの歴史をざっくり振り返りたいんですけど。

橋本　もともとはスコット・コーカーがやってたキックボクシング団体で、K―1とも組んだりしてたんだけど。

――スコットは「師匠は石井館長」と言ってたりして、K―1ラスベガス興行を仕切ったわけですよね。

橋本　そこから、時代の流れでMMAをやるようになって。いまの母体はシリコンバレー・スポーツ＆エンターテインメントという会社。

ガンツ　それは親会社ですね。で、サンノゼ・シャークスっていうNHLアイスホッケーチームの親会社でもある。ホーム会場のHPパビリオンはMMA独占使用権を結んでるから。

橋本　その会場自体もシリコンバレー・スポーツ＆エンターテインメントに出資してたはず。だから、これまではUFCが開催できなかった。

――非UFC系にとってHPパビリオンは聖域だったわけですよね。そのSFって2～3年前まではローカル団体の一つだったわけじゃないですか。それが急成長を遂げたのはエリートXCを買収してからですよね。

ガンツ　エリートXCを買収したことによってジーナ・カラーノをはじめとする選手契約と、CBSとSHOWTIMEのテレビ契約がくっついてきた。

橋本　そこでかなり巨大化したよね。

――そしてヒョードルの獲得にも成功したりして。

橋本　UFCに続くナンバー2の団体になった。けっこう差はあるけど、2位なのは間違いない。

ガンツ　イメージで言うと、全盛期のPRIDEとあの当時のパンクラスくらいかな。

橋本　パンクラスも両国国技館で興行やったりテレ東の深夜で番組やってたことがあるからね。あとジョシュ・バーネットと契約したり、近藤有己という注目選手もいて。それでもPRIDEとはかなりの差があった、と。

――今回売却した理由ってどう見ます？

橋本　純粋にビジネスじゃないのかな。売っちゃったほうが金になるとかさ。親会社がいま売りどきと考えたという。

ガンツ　それに売ったというよりも、SFはオーナーが変わるだけでこのまま続くわけじゃない。そしてその売却先のオーナーは世界最高のビジネス手腕を持ってるものだから、SFはいままで以上の展開ができるっていうのは間違いないわけじゃない。

橋本　ズッファにとってもメリットは大きいよね。一つはUFCで実現していない地上波放映の獲得。あとはベイエリアでの興行権も手に入るし、マーケットの広がりとしてはデカいんじゃないかな。



SFの現場責任者スコット・コーカー。本人はこの買収には反対だったらしいが、親会社の決断に押し切られたという……。

座談会出席者

橋本宗洋
フリーライター。取材対象は格闘技のみならず映画、グルメ、飲み会にうるさい通称〝飲みオジ〟。DEEPメガトンGPの実行委員でもある。

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から熱狂的プロレスファンでならし、『週プロ』の「プレッシャー」会員という恥ずかしい過去を持つ。変態座談会主宰者。

【司会】ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。永久電機など、アントニオ猪木の怪しげな事業の調査をライフワークとする。

――UFCもあれだけ興行を連発しているのに選手契約を回しきれていない状況はあるんですよね。将来的にSFをファームにすることも視野に入れてるんじゃないかって。

橋本　再編成してSFが〝UFC武士道〟になる可能性もある、と。

ガンツ　だからUFC契約が終わった時点でSF契約にさせたりね。

――だからUFC側から見れば凄く整った環境になりますよね、1軍2軍の構造ができれば。

橋本　買収されたってだけで情報が止まっちゃってる人もいるかもしれないから説明すると、ダナ・ホワイトいわく、SFの契約は現状どおりだ、と。要するにSFはCBSとのビジネスも続くし、選手契約もいますぐ変わることはない。ただUFCからSFに行く選手はいるかもしれないけど、逆はないみたいなことを言ってんだよね。だから現状はいまのままだけど、契約が切れた選手がUFCに上がることは充分にありえる。

――しかし、買収することによって市場を独占するっていうのは効果的なやり方ですよね。実力差はあったとはいえライバル団体を潰したうえで取り込めるんだから。それに聞くところによると、PRIDEより安く買ったらしい。

橋本　へえ。

ガンツ　いや、それはPRIDEが凄かったんでしょう。あの時代のPRIDEは世界最大の団体だったんだから。今回はおそらく適正価格で取引されたんでしょう。

――PRIDEのときはロレンゾ・フェティータの趣味で買ったみたいなところありましたし。六本木会見で来日したときもPRIDEグッズを大量に持って帰ったというし（笑）。

ガンツ　趣味にいくらかけてるんだという（笑）。

――あのときは榊原さんが強気だったよね。麻雀でいうと、点棒はロレンゾとかダナのほうが全然持ってるんだけど、ダントツでラス目の榊原さんのノーテンリーチに二人がベタオリしちゃったというか（笑）。

橋本　PRIDEの幻想に怯えてしまった（笑）。

――で、今回のSFって、ヒョードルは連



一説によれば、UFCはSFをPRIDEより安く買ったらしい

敗しちゃったし、親会社も不況でけっこう大変だって話があったからさ、そこに付け込まれたのかなってところがあるのかもしれないですね。

日本への影響

――買収される前日にFEGでは会議があったらしいんですけど、その場ではSFの話は一切あがってなかったらしいですね。で、これによってまた大きな動きが出てくるというか、少なくとも新体制発足の会見は遅れる。

橋本　DREAMとSFの関係性がこれからどうなっていくかだよね。

ガンツ　これはホントにどうなるのか全然わかんないよね。

橋本　まず4月9日のSF大会に関しては、川尻や青木は発表どおりに出るんだろうし、現状のSFのままでオーナー会社が変わりましたって話であれば提携していくことは不可能ではないんだけど。やっぱりいずれズッファとの独占契約が必要になってきたりするんじゃないかな。

――そもそもズッファという会社の体質から考えて、業務提携ってありえるのかなって気はしますよね。DREAMとしても点じゃなく線で考えると、選手を送り出すことが決まってるなかで、そんな重要な通達が直前まで入ってこないのはもの凄く不安だと思うんですよ。ただでさえSFとじゃそこまでガッチリと手を組んでなかったし、書面で契約を交わしてるわけじゃないでしょ。

橋本　そうなるとズッファの出方がポイントになるよな。ズッファが他団体との業務提携、交流を認めるのか。

――おもしろいのは、今度の4・9SFって日本でDREAMが協力して日本で開催する話もあったでしょ。もし実現したうえで売却されてたらSFとDREAMとFEGとUFCが携わるという奇跡のイベントになってたわけですよ！（笑）。

ガンツ　絶対に揉めるでしょ、それ（笑）。

――間違いない！　で、SFってズッファ傘下になってもいまやってるSFヘビー級GPはこのままやりますよね。

ガンツ　もちろんやるでしょう。

――SFの大きな方向性は変わらないと思うんですよ。ただ、対日本戦略って、CBSもSHOWTIMEも日本開催に及び腰だった件を考えると、そんなに重要視してないって感じますよね。だって売却の通達さえしてこないんだよ？（笑）。

橋本　なんとかきついハードルを乗り越えてでも「日本とともに！」っていうマターでは全然なくなるよね。

ガンツ　「日本人選手を使ってあげるよ」っていうのはあるかもしれないけど、「日

りましたし。六本木会見で来日したとき

会社の体質から考えて、業務

っていうのはあるかもしれないけど、「日本に選手を貸してあげます」っていうのはないでしょうね（笑）。

——そうなんですよ（笑）。そうなったときにはたして日本陣営が組織と向き合えるのかどうなのかっていう。

橋本 今後の発展性がなければ交流は続けられないよね。それだったら自分の興行のほうを優先するだろうし。

——へんな話、SFとの交流は4月9日が最後になるかもしれない……。これ、川尻は絶対に負けてほしくないですよ！

橋本 うん、負けられないね。……でも、ちょっと待って。よくよく考えたら、4月9日のカードに影響が出る可能性ってあるよね？　DREAMとしては「こうなった以上、川尻を出すことはできない」とか言ってさ。

ガンツ それはないでしょう。オフィシャルで正式発表されてるってことは、契約書にサインをしたってことですから。だからDREAMが「そんなところには出せない」と言っても、川尻個人に対して「契約不履行」の違約金請求が発生すると思う。

橋本 まあ、そこは推移を見守るしかないけど……とりあえずのことを言うと、4月9日の興行に関しては、川尻・青木に対するDREAMからのバックアップはもういままでと変わらず100パーセントやってほしいよね。海外での闘いで、少しでも不自由がないようにしてほしい。

——このタイトルマッチの結果は本当にデカイよ。こうなった以上、去年の青木vsメレンデス以上にDREAMの今後を占うというか。

橋本 勝って川尻が王者になれば、まだ駆け引きはできる。実際、PUJIの評価のなかにはSFと提携して大物外国人選手が来るとか、そういうことも含めた評価があるわけでしょ。DREAMがヒョードルを抱えてるわけじゃないけど、交渉可能なことでなんとなく持ってるように見せるというかさ（笑）。

アリスターはSFヘビー級GPが終了したら独占契約を求められる



UFC、ストライクフォース買収の衝撃

——そういえば、アリスターってどうなるんだろう。K−1とも契約してるし、SFヘビー級GPにも参戦中。そして吉本興業の所属タレントでもある（笑）。

橋本 「ウチのアリスター」だよねぇ（笑）。

——すべてを回避して『笑ってはいけない○○』のタイキックコーナーに出てもおかしくないんだけど（笑）。

ガンツ それこそ交渉次第でしょう。SFとはヘビー級GPが終わるまで契約してると思うんだけど。それ以降は、おそらくズッファから独占契約を求められるよね。そこでK−1とどっちを選ぶのかどうなのかっていう……。

——そこでPUJIの投資家やテレビ局が「アリスターってズッファ傘下になっちゃったの？」って説明を求められるかもしれない。

橋本 どんな選手を抱えているのかっていう評価につながってくるからね。で、ズッファと独占契約を結ばないとSFにも出られませんってなったときに、日本の格闘技団体というか、とくにDREAMはどういうふうにやっていけばいいのか。これまでは今回、川尻が挑戦するみたいに、SFとの提携によって世界とつながってられたんだよね。じゃあ「これからはどうする？」っていう。提携状況が困難ななかでどうやってアメリカと渡り合っていくのか。

ガンツ いままでみたいな交流はもう不可能になるんじゃないかなって。間違いなく、その影響は出るんじゃないですか。

橋本 たとえば日本人選手がアメリカで試合する場合、独占契約で移籍っていうかたちしかないとか……。

ガンツ そうなると思います。

——ズッファとFEGが手を組むっていう可能性はあるんですか？

ガンツ まずないでしょう。だいたいUFCの日本上陸を手伝うことでFEGになんの得があるのかっていう。

——FEGとズッファだと起用選手や営業圏は重なるしなあ。DEEPや修斗だったらまだありえるんだろうけど。

橋本 営業エリアが違うからね。だけどズッファが協力を仰ぐんだったら、ビッグイベントをちゃんとやった実績があるところじゃないと、あんまり組む意味がないよね。

——実際、水面下では日本人選手にUFCから続々とオファーが来てるんでしょ？

橋本 オファーはたくさん来てるみたいよ。でも、いままではどうしても、ある種、覚悟を決めて日本を捨てないとUFCには行けなかったじゃない。

——日本に戻るということはリリースされたってことだから、日本の団体としてもなかなか使いづらいよねぇ。

橋本 だからオファーはたくさんあっても実現するケースは少なかった。

——だからさ、たとえばの話、DEEPがUFCの日本窓口になったら将棋でいうところの〝詰み〟だよね。佐伯さんにその気はないだろうけど。

橋本 うん。

——いままでは、日本を捨てるかたちにな

るから決断はしづらかったんだろうけど、DEEPや修斗が窓口になったら選手は気兼ねなく北米に挑戦できる。

橋本 「戻る場所」がDEEPや修斗だけなのであれば、アメリカに行く決心をする選手は増えるだろうね。

ガンツ ましてやDREAMの今後が見えないわけだからね。

橋本 いままでは「ここでアメリカに行ったらDREAMやSRCには出られないかもしれない」っていうデメリットがあったんだよね、選手には。でも日本のビッグイベントが世界の中で離れ小島みたいな状況になってしまったら、「ここにいても、もうどっちにしろどうしようもないんだから」と覚悟を決めるでしょ。「格闘技で食っていく手段はアメリカにしかない」と思ったら日本を離れるよね。

ガンツ だから重要なのはDREAMがどうするかですよ。SFの提携にあまり頼れない状況になったわけだから、独自でメジャーイベントとしての立場をキープできるかどうか。

橋本 そこだよね。金は集まりづらい、人も集まりづらい。

ガンツ で、SRCが事実上、ビッグイベントが打てなくなったわけじゃない。そうするとビッグイベントができたとしてももうDREAMしかないわけなんですよ。そうなると。そういう状況を含めてDREAMっていうイベントを再スタートさせないといけないよね。

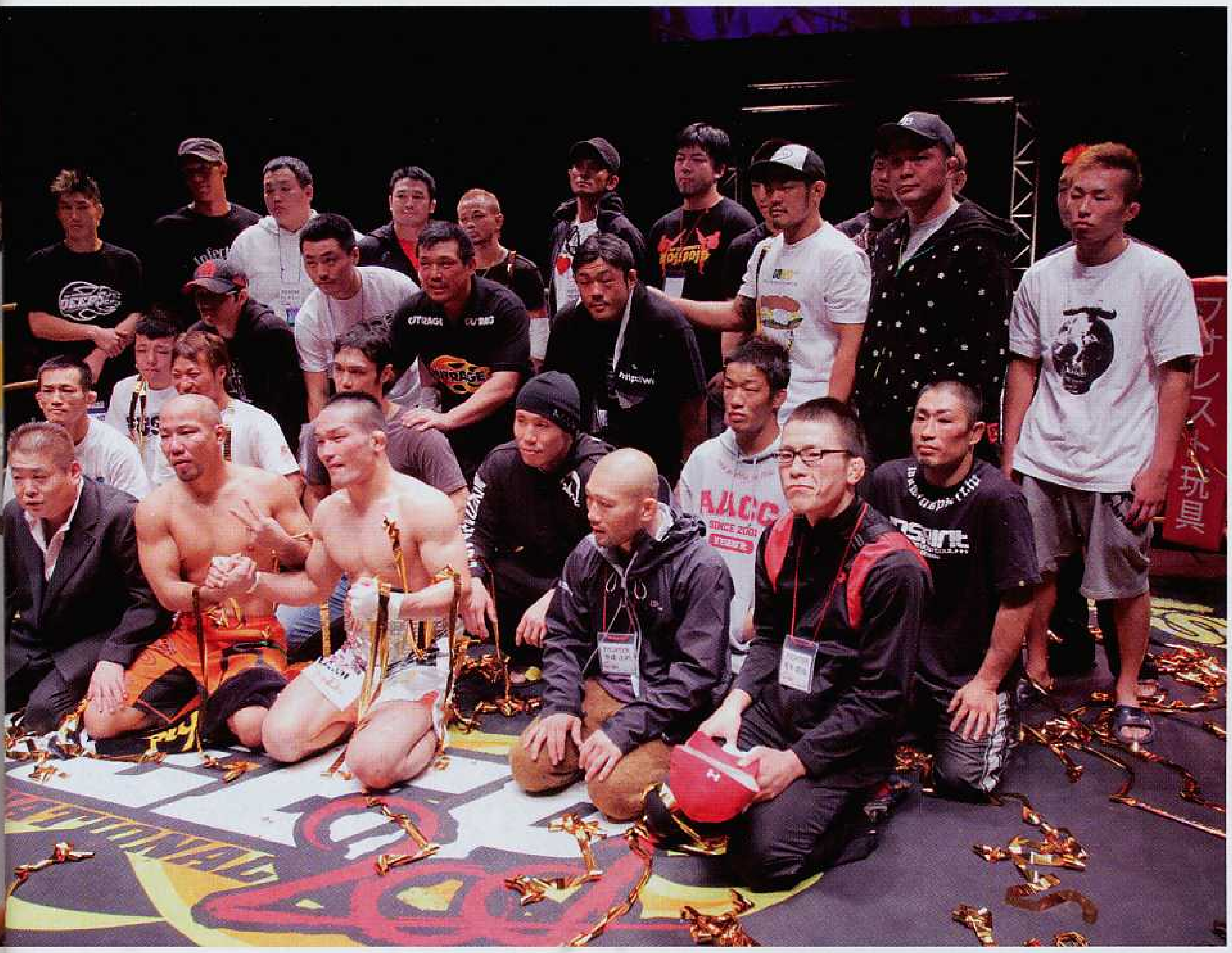
橋本 ところで笹原さんたちがやろうとしてるスピンオフイベントっていうのはなんなの?

――4月18日にJCBホールでDREAMスタッフ、いわゆる旧PRIDEスタッフがDREAM再開までのつなぎイベントを行なう話があって。じつは先週の段階で内定したんですよね。で、今週発表するはずなんですけど、今回のSFの件を受けてどうなるか……。

橋本 でも、4月18日のイベントがつなぎのイベントではなくて、独自のイベントだっていうような話もあるわけでしょ。榊原さんが復活して、とか言われてるわけじゃん。

――いや、榊原さんは絶対にやらないでしょ。こんな市場景気なのに再び参入するとは思えないなあ。

橋本 やらないとは思うんだけど、その話



日本には活躍の場を求める選手が数多く存在する。DREAMやSRCの開催が不安定な以上、海外に活路を見いだすケースは増えるだろう。

榊原さんは絶対にやらない。こんな景気なのに再参入するとは思えない

はなんで出てきちゃったの?

――知らない(笑)。もちろんFEGがもうイベントを打てないなら笹原さんたちが動かざるをえないんでしょうけど。

ガンツ そうですね。だから今回は選手に闘う場を与えなくちゃいけないっていうのがまず大前提であって、DREAM再開を前提としてそれまでにやりますよっていう。

橋本 それでお金集めとかも自力でやって、つないでおきますよみたいにね。

――だって、菊野選手クラスがもう半年近く試合してないんですよね。だから選手に試合の場を作らなきゃいけないっていうのはあるんだけども。4月だけじゃなくて5月にもやるんでしたっけ?

ガンツ 4月にバンタム級の日本トーナメント1&2回戦をやって、5月に準決勝と決勝をやってチャンピオンを決める。その上位選手がDREAMのバンタム級GPに出るいうプランは聞いてますけどね。

橋本 そういう流れがある以上、リアルエンターテインメントのFEG体制からの脱却というのではない。DREAM続行が前提にあるイベントだよね。

――だって、いま独立するってありないでしょ。FEGが再建を断念するなら、それはもう独立するしかないけど。それにいまここで独立するんだったら『やれんのか!』のときにとっくにやってると思うし。

ガンツ ただ、あのときとは状況が違うからね。FEGと組んでも新生DREAMにテレビがつかないんだったら、双方にとって一緒にやる意味はないかもしれない。SFが買収されたことで、FEGがどうなるか、また不透明になったから、正直何が起こってもおかしくはないと思う。

――ということで日本の状況も刻一刻と、SFの買収によって大きな影響は現に出てるんですよね。しかし、谷川さんが知らなかったのは驚いたなあ。

橋本 そこがビックリだよね。てことは、売る側も買う側も日本への根回しは必要なしと判断したんだろうね。

――まあでもポジティブに考えると、これでいろいろなドリームカードが生まれますよね。

ガンツ 単純にSFのチャンピオン連中とUFCのチャンピオン連中の対決。

橋本 GSP vs暴力柔術が観てえなあ。

――ヒョードルはどうなるのかな。

ガンツ ヒョードルをUFCに上げるのは、別契約じゃないとダメですね。いま契約を結んでるのはM―1グローバルとSHOWTIMEとSFであって、しかも共催の元でヒョードルの試合が組まれますっていうことなので。

Mスタッフ、いわゆる旧PRIDEスタッフがDREAM再開までのつなぎイベン

だよね。

M続行が前提にあるイベント

催の元でヒョードルの試合が組まれます

っていうことなので。

市場を独占することによってUFCが選手をコントロールしやすくなっていく

——UFCのナンバーシリーズにヒョードルがひょっこり現われることは、あらゆる契約をクリアしないと無理ってことですね。

ガンツ　あくまでオーナーが一緒っていうことだからね。

——別企業との契約がある以上、オーナーの意向どおりにほいほい契約はできないという。

橋本　いずれは何かあるかもしれないっていうのは可能性としてはあるけども。

——まあ、これもありえないけどさ、川尻がSFのライト級チャンピオンとしてUFCに出ることも理論上は可能なわけでしょ？（笑）。

橋本　川尻がチャンピオンになったら、いきなり契約書が来たりしてね。ズッファとの独占契約。だってチャンピオンだもの。

ガンツ　間違いないでしょう。もしかしたら、いまの契約書でもチャンピオンになったら防衛戦は必ずはたさないといけないっていう項目が記載されてると思うんだよね。タイトルマッチ契約はそれをやってることが多いから。

——……いったいどうなるんだろうな、それ。

橋本　チャンピオンになったときにどういう可能性が考えられるのか。

——いやあ、UFCは完全に制圧しかけてるなあ。

橋本　制圧って考えるとアレだけど、MMAの世界観がスッキリするってこともある。このたとえが適切かどうかわからないけど、明治時代に講道館柔道が柔術を統一したように、「柔イコール講道館、MMAイコールUFC」となっていくみたいな。もちろんブラジリアン柔術が表舞台に出てきたり、柔術の諸流派もあるんだけど、世界的なスポーツとしては柔道っていうね。それに対して、「講道館の野郎～！」って思う他流派もいるだろうけど（笑）。だけど柔道がオリンピックスポーツにまでなったことに対して、「講道館の世界完全制圧」とはあんまり言わないよね。ズッファも講道館みたいなものかもしれない。



ナショナルスターであるKIDが裸一貫でUFC出場を決断する時代。KIDのファイトマネーは1万ドル程度。それでも海の向こうを選んだのだ。



UFC、ストライクフォース買収の衝撃

——前に堀江さんがダンヘンにインタビューしたときに、「一つになるのがよくない」って言ってたんですよね。つまり選手の待遇面がズッファの思いのままになる、と。

ガンツ　もちろんそうでしょう。だって全部、ズッファがすべてをコントロールできるわけだから。

——といってもさあ、ダナの太っ腹話は凄いですよね。このあいだのUFNの特別ボーナスの上げ方とかちょっと尋常じゃないもんね。

橋本　ゲート収入の大半を特別ボーナスとして払ったみたいだね。

——40万ドルぐらいだっけ。凄いよね。

ガンツ　でも、それって日本のMMAの感覚だから凄く払ってるみたいに見えるけども、ほかのスポーツとかボクシングとかと比べると、あきらかにズッファってシブチンで。もしかしたらチャンピオンクラスが訴えるかもしれないってことがあるからね。

橋本　ボクシングの世界戦でいうと、ラスベガスで開催してPPVがあるような試合では、選手がPPV収入の何パーセントをもらうかっていう契約も重要なわけじゃない。興行価値イコール選手の価値、カードの価値だから。でもUFCで同じことができる選手はどれだけいるのかなっていう。まあ興行の仕組み自体が違うんだけど。

ガンツ　だからUFCが得る利益のなかで選手に分配される割合っていうのは、ほかのスポーツと比べると全然低いんだよね。

橋本　MMAの場合はほかに競合プロモーションがなくなるから足元見られるっていう。

ガンツ　で、UFCも選手が巨大化しすぎないようにもしてるんだよね。ランディ・クートゥアーとはそれで揉めたんだよ。

橋本　ヒョードルとかもそうで、団体よりも選手の名前がデカくなることを喜ばない。

——裁判とかなったらおもしろいな。選手組合とかできんのかな。

橋本　ほかのスポーツにもあるけど、いわゆる労働組合とかじゃなくても、MMAファイターズユニオンみたいなのはできるかもしれないね。年金制度とかを整えるっていう。

——まあMMAビジネスって、まだまだ黎明期だからね。整理されるまではまだ時間がかかるでしょうし、もっとビッグビジネスになるんだろうし。


橋本　そのきっかけということだよね、今回の件は。

——SFとDREAMの関係も推移を見守りましょう。

橋本　それより『kamipro』の今後はどうなるんだよ？

——それは近日中に……（汗）。4月2日のイベントであきらかになるかもしれません（笑）。

【11年3月12日／都内・某所にて収録】



FEG新体制にも影響!

日米同盟崩壊!?

FEG代表

谷川貞治

大晦日以降、新体制発足に向けて公式活動を控えていたFEG。3月上旬には何かしらの発表を行なうはずだったが、海の向こうのビッグニュースがその計画を狂わせてしまった!? 日本の未来にも大きな影響を及ぼすSF買収劇——!! サダハルンバはどうとらえたのか。

聞き手／ジャン斉藤

4月9日にSF日本大会を一緒にやる話もあったのに、こんな買収話があるなんて……

「斉藤く～ん、今日の取材はやめにしない？」

2月23日、赤坂見附にあるFEG事務所に訪れた筆者に、谷川FEG代表は開口一番そう言った。は？　いきなり何を言い出してるんだ、このオッさんは!?

その日は、『kamipro』携帯サイトで4週にわたって更新するインタビューの取材をするはずだったわけだが、谷川さんいわく、話をしたくても困難な状況になってしまったという。その理由は近日中にFEGの新体制に関する記者会見を行なうため！

お、ついに発表するのか……。ところが、その概要はまだ完全に固まっておらず流動的であり、迂闊な発言はできないというわけだ。んあ～!!　いつもは迂闊な発言をしてるサダハルンバがなんと慎重なこと!!

しかし、このまま編集部に踵を返すわけにはいかない。「わかりました。でも、ある程度はいまのK－1の置かれた状況を読者に伝えたいです。いったいK－1はどうなるんですか？　テレビは放送するんですか？　笹原さんたちがDREAMから離れるという噂も出ています」

筆者の問いかけに谷川さんは話せる範囲で向き合ってくれた。

「すべてにおいて前向きに話は進んでるよ。テレビも放送するし、笹原くんたちが離れることもない。でも、そのためにはFEGが生まれ変わらないといけない。その土台作りをいま一生懸命をやってるところなんだよ」

確かにボクがフジテレビやTBS上層部の人間だったら、これだけでネガティブな噂が出回るイベントとは契約はしずらいよなあ……。

「早ければ2月中に、遅くとも3月の第一週には会見ができると思うけど……その会見が終わってからインタビューをやったほうがいろいろと話せると思うんだよぉ」

そうして谷川さんの取材は次回へと持ち越しとなったが、3月のカレンダーがめくられたいまなお会見が開かれる気配はない。不安になって谷川さんに連絡を取ったところ、新体制への移行が予想以上に手間取ってるという。あれだけの大組織だ、時間はかかるだろう……。

しかし、業界内部でも「新体制発表会見」の具体的な日時がささやかれ、川尻達也のストライクフォース（以下、SF）参戦のリリースには、DREAMの年間日程が近々に発表されることも付け加えられていた。言うまでもなくDREAMはFEGが主催するイベントであり、FEGがリスタートしなければ、DREAMの年間スケジュールも発表されないだろう。

ところが、その発表をまた遅らせる緊急事態が発生した。

同盟を結んでいるSFが、敵国UFCに売られたというのだ!!

取材日は大地震から3日経った3月14日である。



FEGと旧PRIDEスタッフの協力関係は2007年の『やれんのか！』共催以来。当時はM-1グローバル、そして最近ではストライクフォースと海外プロモーションとの提携がイベントにブランド感を生み出してきたところはある。

――谷川さん！　ご無事で何よりです……。

谷川　今日はボク、都内に出てくるまでに3時間もかかりました。もう（自宅の）千葉のほうはねぇ、電車が全部止まってるし、銀行も閉まってるんだよ。で、ボクらのところは一番最初の計画停電区域に入ってたんです。

――混乱はまだまだ長引きそうですねぇ。

谷川　東北の被災地に比べれば全然恵まれた生活ができていますけど、これからいろんなことが起こりそうですね。

――そんななか、たいへん恐縮ですが、今日はFEGの新体制についてうかがわせてください。

谷川　新体制のほうに関していうと、3月の頭に会見をやる予定だったんですけど、今日の時点でいうと、また白紙になりました。

――んあ～！　また白紙!!

谷川　3月中にはやりたいと思ってるんですよ。ただ、こんな状況なんでね、格闘技のことやってていいのかって問題もあるしさあ。

――やんなきゃダメでしょう！　それが谷川さんの本分なんですから。

谷川　いや、格闘技復活なんていうことよりもさ、まずは世の中が落ち着かなきゃいけないなと思ってるんだけど。

――そうなんですけど、ほかにできることはないですよね。

谷川　そうだね。新潟や神戸の地震のときも選手たちが炊き出しをやったりしたけど、いまはまだ被災地に入れるような状況じゃないもんね。選手たちから「何かやりましょう！」って声はかかってるんだけど、落ち着いたらそういうこともやりたいと思ってます。

――わかりました。

谷川　で、FEGの話をすると、まあSFの買収話はビックリしたね。UFCって独占禁止法に引っかかるんじゃないの、ホントに（苦笑）。

――その言葉がオーバーじゃないくらい市場を独占しちゃいましたねぇ。

谷川　だってさ、今度SFが4月9日にアメリカでやるイベントは日本でやる予定があったんですよ。それなのにこんな買収話があるなんて。

――SFの日本大会はDREAMが協力するかたちで動いてて、会場は幕張メッセを仮押さえしてたんですよね。

谷川　そうそう。アリスター・オーフレイムvsファブリシオ・ヴェウドゥム、ジョシ

ュ・バーネットvsブレット・ロジャーズの二つをメインにDREAMと共催する。そこには川尻選手やら青木選手を出して、それがDREAM復活の仕切り直しのイベントにしていこうかなと思ったんだけど。ところがテレビ局のCBSのほうの同意が得られなくて、結局アメリカでやることになったんだけど。それでもね、4月9日の大会に川尻くんたちを出しつつ、今年はSFと協調しつつやっていこうというプランがあった。

——SFと一緒に世界観を構築してUFCに対抗していこう！　と。

谷川　うん。そういうプランを3月の頭ぐらいから話し合ってたところだったんですよ。アジア圏内を中心としたSFとの合同イベントの企画を立てて、現場の笹原くんたちがスコットと話し合っていたんだよね。でも、そのレスポンスが悪くなり……。

——あ、計画が滞ってたんですか。

谷川　ただ、どこまで話が進んでたかはボクにはよくわからないんだよね。まあ全然知らないわけじゃないんだけど、ボクがSFと直接向き合っていたわけじゃないから。最終的にSFがUFCに買収されるということで、その計画自体が白紙になってしまった。

——じゃあ、新体制の会見が流れたのはSF買収の影響が大きいわけですか？

谷川　大きいねぇ。

——SFのレスポンスが悪くなってたことも会見が延び延びになった理由なんですか？

谷川　そうだね。だからまさかこんな買収なんてことが起こるとは予想してなかったという。

——どうしてレスポンスが悪くなったと

谷川　ホント怖いんですよ。99がうまくいってくれ、最後の一つで信頼性を失なっ

思いました？

谷川　そのときは「その話はあとで」っていう感じになっていったんだよ。「とにかく4月9日の大会をやるまで何も話し合いができない」ってなった。

——そうなんですか。だったらFEGの会見もそこまで遅れる可能性があったってことですよね。

谷川　いや、だけどスコットが来日して記者会見に出席する話はあったから。で、そのときにじっくりと話し合えるかなあと思ってたわけ。

——いまとなってみれば、レスポンスが悪かったのは買収される動きがあったから

谷川　こんな話をするのもなんだけど、やっぱりFEGとSFがなんかやるってい



だたでさえ止まることのなかったUFCの選手獲得。SFを手に入れたことでアメリカは完全制圧をはたした。残るは日本だ……!!

選手の動きもどうなるかわからない。ズッファだったら、潰しにくるからね！

なんでしょうね。

谷川　だからDREAMのほうも含めて今後の展開を考え直さなくちゃいけないなという状況ですね。選手とかもどうなるかよくわかんないんだよね。

——たとえば川尻がメレンデスに勝ってチャンピオンになったとするじゃないですか。そうするとズッファは独占契約を求めてくるんじゃないかという。

谷川　そうそう。そういうことも出てくるでしょう。アリスター・オーフレイムとかにしてもさ。

——そうすると、SFヘビー級GPに参戦中のアリスターもこのままだとズッファ傘下になりかねないですよね？

谷川　だけどウチはアリスターと契約あるからね。（セルゲイ）ハリトーノフにもあるんですよ。でも、SFとだったら協力関係があるから、たとえば「K－1GPのときはアリスターはこっちで使うね」って言えると思うんだよ。でもズッファだったら絶対、潰しにくるからね！（鼻息荒く）。

——外部と手を結ぶことはない団体ですからね。

谷川　逆にいうと、K－1GPの開幕戦に合わせてSFがアリスターの試合を組んでくる可能性があるから、ホントまだちょっとどうなるかわからないんだよね。

——実際、この買収話は耳にしてなかったんですか？

谷川　ボクは聞いてない。スタッフも誰も聞いてないと思う。噂は聞いてたけど、本人たちからは何も聞いてないもん。

谷川　ボク以外にも、いまの日本の状況を立て直す人材も含めて登用しないとダメ

——あ、噂は聞いてたんですか。

谷川　でも、そんな話はよく流れてるじゃん。だからそのたぐいの一つだと思ってたし、スコットたちの口から聞いたことは一回もなかった。

——なるほど。でも、協力関係にあるのに何も聞いてないなんてそれは気分としてはよくないですよね。

谷川　だから会見をやらなくてよかったなと思って。たとえばスコットが来日して新体制の会見やったあとに、こんな発表をされてたら大恥かいちゃうじゃん！

——そうですよね（笑）。それこそ投資家から「どういうこと」って突き上げられてたかもしれない。

谷川　そうそう。スコットっていい意味でも悪い意味でもおしゃべりだから、発奮させるような煽りをしてくると思うんですよ。「これからはDREAMと強調して……」「さらに一歩踏み込んで……」みたいな。

——さんざん煽ってあげくSFはUFCに買収される！　そんなバカな話はないなあ（笑）。

谷川　「なんだ、それ!?」って話になっちゃうところだった。

——ククククク。

谷川　だからホントに情報の扱いを含めて慎重にやらないとダメだね。とくに投資家とかテレビ局が絡んでるものだったから。「そんなこともできなくかったのか」ってことで信頼性を失なっちゃうから。

——怖いなあ。

——なるほど。ちょっと流動的なんでしょうけども、夏ぐらいには再開するってい

貞治

――どうしてレスポンスが悪くなったと

谷川　ホント怖いんですよ。99がうまくいってても、最後の一つで信頼性を失なっちゃうから。だからハッキリ言って、新しい体制とか新しい名前とか、そんなものはもう全部決まってるんです。要は、大会をどういうふうに開くかっていうことが最後の課題だったんだけど。

――世界観、スケジュールを含めてどんな打ち出しをするかっていうなかで、SFというのは一つのパーツであったということですね。

谷川　大きなパーツだったんですよ。やっぱり機会があればヘビー級トーナメントも日本でファンのために見せてあげたかったし。

――川尻選手はこのままメレンデスとの試合に出るんですか？

谷川　いまはまだわからない。これからの話し合いだね。

――谷川さんはどういう考えがありますか？

谷川　ボクの性格からいうと、仕切り直したほうがいいと思う。ボクは慎重にやりたいタイプだから。正確な情報がつかめてないまま、中途半端にやったら悪いイメージがついちゃうから。やっぱり我慢して我慢してね、良いものを出したい。

――しかし、影響は大きいですねぇ。

ボクの性格からいうと、SFとの関係は仕切り直したほうがいいと思う

かったのは買収される動きがあったから

谷川　こんな話をするのもなんだけど、やっぱりFEGとSFがなんかやるっていうことが今回のズッファのアクションに拍車をかけたところはあると思うんだよね。

――SFの買収額はPRIDEのときより安いらしいですもんね。

谷川　全然、安いでしょう。だって、そもそもSFがエリートXCを安く買ってるからね。ただ市場をUFCに独占されるのはよくないよなあ。ま～あ、責任感は重くなるね。ホント頑張らないとなあと思って。

――対抗馬は谷川さんしか残ってないですからねぇ。

谷川　いや、ここで頑張るしかないでしょう！　だからボク……（地震が起きる）揺れてるね。

――ゆ、揺れてます……。



2大メジャーの動きが見えないなか、選手が活躍する場も限られてくる。たとえば我らがリュウ・トクリのデビュー戦が実現しないことも……

本人たちからは何も聞いてないもん。

谷川　ボク以外にも、いまの日本の状況を立て直す人材も含めて登用しないとダメだね。お金と人。もちろん、ボク一人じゃダメでしょう。ボクは指揮者としてちゃんと頑張るけど。

――ちょっとファンが不安なのは、DREAMが独立して見えるっていうところはあると思うんですよね。たとえばウワサのJCBホール大会にしても笹原さんたちがやるわけじゃないですか。

谷川　関係が悪化することはないよね。笹原くんたちにしたら、選手をキープするためにも大会は続けていきたい。そのためにもDREAMが再開するまで独自でなんらかのイベントをやりたいってだけで。DREAMも含めてとにかく選手に試合させる場を作ることがまず第一だと思ってるから「どうしましょう？」ってことだと思う。

――やっぱりFUJIやテレビ局からしても、笹原さんたちが大会をやるにしても、彼らからすればFEG系の大会って認識があるわけですよね。

谷川　うん。それにリアルエンターテインメントが単独の主催で大会をやることはないですよ。

――あ、ないですか。

谷川　ないない。やるとしてもFEGとリアルエンターテインメントで一緒にやります。

――だからこそ、ちゃんと新体制が発表されたうえで大会をやりたいってことですね。

谷川　そう。ただ、それはナンバーシリーズじゃないから。選手を安心させるためにも、早く闘う場を作りたいのはよくわかるし、けれど地震のこともあって時間が微妙だよね。

谷川貞

――怖いなあ。

――なるほど。ちょっと流動的なんでしょうけども、夏ぐらいには再開するっていうのはありますか？

谷川　本格的にDREAMのナンバーシリーズをやるのは6～7月ぐらいだろうね。

――そこは崩れないけども、問題は4月のJCBをどうするかってことですね。

谷川　難しいよねぇ。

――しかしUFCがこうなっちゃうと、何を日本独自の武器にして闘っていくのかっていうのは難しくなってきますね。

谷川　とくにMMAは難しいよ。

――相当、厳しいですね。スーパー『HERO'S』になるしかないと思いますよ。

谷川　ああ、スーパー『HERO'S』をやるしかないのかな。

――まったく競技感がない世界というか。強さだけの世界でいったら、どうしてもUFCと比較されちゃいますもんね。

谷川　うん。強さっていうか競技だよね。競技色がつくと、やっぱ競技って底辺だからね。たとえば同じボクシングのルールでもさ、やっぱりWBAとかWBCには敵わないから新団体を旗揚げしても難しい。お金を集めてとにかく選手を取るしかないよね、まず。

――その"まず"が難しい。谷川さん、4月2日の『kamipro』のトークイベントの頃にはもっと進展があるでしょうから、そのときはもっとしゃべってくださいよ。

谷川　そうだねぇ。『kamipro』も終わることだし。

――んあ～！　終わらないですよ!!　こうなったらどっちが早く仕切り直せるか勝負だ！

【11年3月13日／都内・某所にて収録】



SF買収で衝撃が走る
日本格闘技界の今後とは!?

ストライクフォースとの提携 JCB大会開催 DREAMの今後 どれも見通しが立たなければ……

DREAMイベントプロデューサー 笹原圭一

川尻達也のSF参戦やJCBホール大会の噂が流れていた日本マット界。その真相を聞くべく笹原EPに取材を敢行した。……が、その後ズッファ社によるSF買収のニュースが飛び込んできた。インタビューはそのニュースが流れる前とあとの二度にわたって行なったが、はたして日本はどうなってしまうのか!?

聞き手／ジャン斉藤

たとえば「ベルト統一」みたいな大きな世界観を作るのが理想

——川尻さんのストライクフォース（以下、SF）参戦がついに決まりましたね。

笹原　ようやく発表できました。

——この件について、SFとはどんなお話をされてたんですか？

笹原　もともと川尻達也本人の思いのなかで、もちろん主戦場はDREAMですけど、機会があれば一度SFで試合をしたいという気持ちがあったんですよね。それは本人が石田選手のセコンドについたり、青木真也のナッシュビルの試合を観たりしているなかで、「一回あのケージに入ってみたい」という思いが湧いてきたんだと思うんですけど、ボクらもそれを踏まえてSFとずっとそういう話をしていたんです。

——ただ、当初はイベント自体を日本で開催するというお話がありましたよね？

笹原　ホントは日本であのヘビー級のトーナメントをやって、ワンマッチで川尻vsメレンデスができればよかったんですけど、まあそれがちょっと実現できなかったのでアメリカでやりましょう、と。

——それはなぜできなくなったんですか？

笹原　そこが難しいところなんですけど、ボクらが向き合ってるスコット・コーカー自身は早く日本でやりたいという思いがあるんですよね。ただその先の、たとえばCBSやSHOWTIMEからすると、海外でやるには経費もかかるし、そもそもメリットもないってことなんだと思いますけど。

——逆にスコットが日本でやりたいというのはどうしてなんですか？

笹原　当然プロモーター的な発想からすると、できるだけ広くパイを取りたい。ただアメリカでUFCの牙城を崩せないなかでいうと、じゃあDREAMと業務提携している現状があるんだったらアジアのマーケットを取りにいきたい。そういうことだと思いますよ。

——でも両イベントが業務提携しているなかでいうと、去年青木真也をSFに出すことでニック・ディアスやKJヌーンがDREAMに出ましたが、大晦日にメレンデスが来なかったことに関してちょっと歯車が合ってないという感じはないんでしょうか？

笹原　というか、それってじつはお互いさまで、こっちとしては青木真也も石田光洋も貸してるし、それこそDREAMのチャンピオンだったザロムスキーも貸してるし。



昨年大晦日のジョシュ・トムソン戦で完封勝利を挙げた川尻。この勝利で一気にメレンデス戦への熱が高まったが、ここにきてその戦いが本当の意味で日本格闘技界の行方を占う一戦に。これはもう全力で応援するしかない！

——たとえば、ザロムスキーみたいな選手でもお互いの話し合いはあるんですか？

笹原　そこは基本的に、我々の契約に抵触しなければ問題ないですよ、もちろん。だから勝手にやれちゃうんですけど、DREAMからすると「うちのチャンピオンも使って……」という気持ちがあるじゃないですか。でも向こうからすると「借りたのは青木だけだよ。おまけにこっちはギリギリのタイミングで調整して年末にジョシュ・トムソンも貸してるし」って。そういう貸し借りの重さの認識がお互いに違うんですよ。協力関係にあるといっても、「いかに自分たちのほうが大きな貸しを与えたか」を相手に思わせるように交渉するのは、お互いさまですからね。で、川尻選手の参戦に関して言えば、川尻選手が出たいという気持ちと、我々の思惑と、SFの借りたいというお願いがピタッと一致したということです。

——ちなみに、川尻さんの参戦が発表されたときに、リリースには「SFの大会の演出面も協力する」という文面もありましたよね？

笹原　あれはDREAMの世界観の一翼を担っている人たちをレンタルするという感じです。たとえばレニー・ハートさんとか。本当は〝ストライクフォース Supported by DREAM〟みたいに、「DREAMとSFが一緒にイベントを作ってます」というやり方が一番いいんですけど、やっぱりSFってスコットのものでありながらCBSの意向が強いわけですよ。そういうなかで、できる範囲でやりましょう、と。自由にできない部分があるにせよ、お互いの世界観を一緒に歩んでますよと、そういう狙いがあったワケなんです。

——でも理想的な協力関係になるにはまだいろいろややこしそうですね。

笹原　協力関係といっても、お互いに思惑がありますから、それはしょうがないですよね。本来であれば、たとえば「ベルト統一」みたいな大きな世界観を作らなきゃいけないんでしょうけど。

——UFCに対抗するのであればそうしていくしかないですもんね。だから理想でいうと、スコットがやるのはSFで、笹原さんたちがやるのはDREAMだけど、同じ連盟である、と。そのなかで一つのベルトを争っていこうという感じですよね。

笹原　まぁ、それは一つの理想の形ですね。

——しかし、今回川尻さんにとっては大勝負になりますね。

笹原　もちろんそうですが……。

——しっくりこない部分があるんですか？

笹原　いやホントはね、川尻達也には日本の格闘技が盛り上がってて日本中の誰もが川尻選手の勝利を応援しているという万全の態勢で送り出してあげたいんですけど、この厳しい状況のなかで行かせるのは正直忍びないなあって。

——去年の青木選手の場合はまだそういう気運はありましたよね。今回の川尻選手は知る人ぞ知る人たちが楽しみにしている感じになってるかもしれないですね。

笹原　そういう雰囲気を作りきれてないところがボクらの力不足だなあ、と。それに、じゃあ川尻達也が試合をしたあとにどうなるの？　と考えると、結局先の話が決まってないとなんだか盛り上がれないじゃないですか。

——単純な話、勝ったからどうなるの？ということですよね。

笹原 その後のDREAMの日程なんかが決まっていればいいですけど、まだ何もないなかで4月の大会だけ出ていきますって、なんか観る側は乗りきれないですよね。だから本当なら順番的には未来のDREAMのことが決まってて、それのまず第一弾として4月は川尻選手の試合がありますという状況だといいんですけど。

——それを聞くと不安の残る出撃ということですね。はたして帰りの燃料はあるのかみたいな……。

笹原 まぁでも、川尻選手の選手キャリアという視点でいえば、大勝負であることは間違いないですから、いまの状況のなかで全面的にバックアップして盛り上げていこうと思っていますよ。

——そういうなかでFEGを除いたDREAM制作チームが4月18日にJCBホールを押さえてバンタム級GPをやるという話が噂されていますよね。

笹原 ………うーん、まだちょっとどうなるかわかりませんけど。

——そうなんですか？

笹原 これも先ほどと同じ話なんですけど、先が見えているならいいと思うんですよね。

——でもFEGの見通しが立たないなかでリリーフ的にやるのはいいことなんじゃないですか？

笹原 もちろんそうですけど。でもやはり一番いいのは先の話を決めてからですよ。

——笹原さん的には、ただ選手を食わせるためだけにとか、大会がないからやるとか、そういう安易な理由ではやりたくない、と。

笹原 もちろんその考え方自体は理解できますよ。そういう責任もボクらにはあると思ってます。ただ明日の米びつの話は大事ですけど、選手からするとその瞬間の米よりも、半年待てばもっと安定した未来が描けますよとちゃんと提示してもらったほうがいいと思いますけどね。

——大会をやってその場のバランスをとるよりも、長い目で見てバランスをとるほうがいいんじゃないか、と。ちなみに、JCBホール大会の話はFEGと分かれるとか、そういう話じゃないんですよね。

笹原 全然違います。

——その肝心のFEGの動向というのはどう聞いてますか？

笹原 一生懸命やってるみたいですよ。徐々に進んでるということしか聞けてないですけど。その話をまとめなければ自分たちが倒れちゃうだけの話なんで、石にかじりついてでも話をまとめるしかないですから。

——では、笹原さんとしてはもしかしたら大会はやるかもしれないけども、FEGの今後が決まってから考えたいということですね。

笹原 それとセットの話ですからね。理想の順番は、未来の話をして大会を開催したいということです。けどオプションとして、大会をひとまず開催して、今後の話を発表するということも考えていますよ。開催が正式決定すれば、もちろん全力を傾注して日本の格闘技が元気な姿を見せられるように頑張るだけですけど。

——谷川さんによると、近々会見があるという話ですけど、それがはまるようであればJCB大会もやってもいい、と。

笹原 ええ。FEGの話、4月のJCBの話、4月の川尻達也の試合というのは全部一緒になって進んでる話なので、まあ川尻選手の参戦は発表しちゃいましたけど、本当はまとめて発表しないといけない話なんですよね。……はぁ（ため息）。

——もう疲れましたか（笑）。



昨年夏にPUJIからの投資に関する会見を行なったFEGだが、現状まだその資金投入は実現していない。笹原EPの話によると、SFを絡めた世界戦略がプレゼン材料だったというだけに、今後の行方が気になる……。

このマーケットを元に戻すには中長期的な展望が必要ですよ

笹原 いやいや、こえなきゃいけない山がたくさんあるなぁと思って。DREAMという、仮にもメジャーを名乗るイベントであれば、やらなきゃいけないことが多いことも、課せられた使命が大きいことも承知してるんですけどね。だから、本当に格闘技の大きな絵を描かなきゃいけませんよね。やっぱり選手たちがDREAMを魅力に感じてるのって、ほかのイベントよりもギャラもよくて、露出もできることじゃないですか。それがないDREAMってレゾンデートルが揺らいじゃいますよね。だからこそ、普通にイベント開催しました、ではなく、そのイベントに付帯する価値観をいかにつけるかってことだと思います。

——とはいえ、開催されるとなれば大会前1ヵ月がいろんなリミットですよね。そんななか榊原さんが復活するという話が妙に出てきてますけど（笑）。

笹原 100パーセントないです（キッパリ）。そんなのあるわけないですよ。ただ、そういうのを聞くと救世主がほしいんだなあと思いますね。でも、かつてあれだけのマーケットがあったわけですから、もう一度そうなることは可能性はゼロではないんですけど、そのためにはやっぱり本当に中長期的な展望が必要ですよ。

——しかも当時の状況とは違ってUFCの爆発という状況も加味しないといけないですからね。そのUFCが日本に入ってくるという話もありますし。

笹原 そうですね。ただUFCが本当にアジアというか日本のマーケットを奪うつもりならいいと思うんですけど、絶対にそうじゃないと思うんだよなぁ。

——そういう意味ではWWEって日本上陸の際のプロモーションってもの凄かったですけど。

笹原 イベント自体はそれこそ日本向けにKID選手や小見川選手を参戦させてやれるんでしょうけど、ボクが言ってる戦略性って、UFCの人たちが本当に日本の文化を理解して、本気で日本に根づかせようとしているのかということですよ。ボクは彼らにはもともとその発想がないんじゃないかって思うんですよね。「日本人は何を考えているかわからない」という感覚を払拭しろとは言わないですけど、それでもビジネスとして日本文化を理解できないと成功しないと思うんですよ。

——なるほど。

笹原 象徴的なのが、「ダナ・ホワイ

ト」を「ディナ・ホワイト」と呼んだり、表記したりすることにあると思うんです。日本だと「ダナ」と呼んでますよね。でもUFCがなんと言っているかわからないですけど、英語の発音が「ディナ」だから「ディナ」にするという発想は、彼らのなかでまったく疑問がないんだと思います。でも日本で根づかせるのであれば、「ダナでいいよ」という発想がないと成功しないと思うんですよね。

——昔、「闘魂三銃士」を『週刊ファイト』だけ「闘魂三羽ガラス」って言い続けてたという話があって、それは非常に笑えたんですけど、こっちの話は笑えないですねえ。

笹原　だからもしWOWOWが本当にUFCを日本に根づかせようとしてるんだったら、「日本人にとっては『ダナ』のほうが浸透します」って説明してあげないといけないんですよ。いい例が、「マクドナルド」って英語で発音すると「マクダナー」みたいな感じになるじゃないですか。でも日本に入ってくるときに日本マクドナルドの初代社長の藤田田さんは、「日本ではそんな呼び方じゃ絶対に浸透しない。3文字とか3文字の区切りのいい表記じゃないとダメだ」ということで、3文字3文字を組み合わせた「マクドナルド」でアメリカの本社を説得したらしいんです。それがもういまでは誰もなんの違和感もなくそう呼んでるじゃないですか。たぶんそういうことだと思うんですよ。

——いや、勉強になります……って、まったくDREAMの話じゃなくなりましたけど（笑）。

笹原　いや、ボクはあえて言ってるわけですよ！（ドンッ）。ダナをはじめUFCのスタッフって本当に格闘技に情熱を持って作ってるんで、だからこそほかの国でやるときにはそこを考えたほうがいいと思うわけなんです。って、よけいなお世話ですけど。

——でもスコットもそうですし、笹原さんたちもそうですけど、そういう人たちを相手にしないといけないわけですからねえ。

笹原　もう面倒ですよねえ……。

——というわけで、見通しを立てるのが先決だという笹原さんのお話でした。ついでに聞きますけど、女子格ってどう思われます？

笹原　ああ、もういまは女子格やったほうが儲かりますね（アッサリ）。

——ダハハハ！　今後の展開に期待してます（笑）。

【11年3月9日／都内・リアルエンターテインメントにて収録】

SFとの話もJCBの話も現状、ここまでしか話せません

当インタビューを収録した3日後の3月12日、なんとズッファ社によるSF買収が発表された……。この日本格闘技界を震撼させるニュースを受け、本誌は校了日にもかかわらず、笹原EPに再度取材を敢行した。

——ストライクフォース（以下、SF）買収のニュースを受けて再取材させていただきます。まず今回のズッファ社による買収の件はご存知だったんでしょうか？

笹原　噂は聞いていたけど、本当にそうなるとはという感じです……。

——事前の通達やその後の連絡などはあったんでしょうか？

笹原　通達もないですし、発表後もこちらから問い合わせたという感じですね。だから地震があってあわてふためいてたところに、さらに衝撃が襲ってきたという……。



JCBホール大会が現実のものとなれば、PRIDE消滅後に開催された『やれんのか！』以来の興行となるが、当時と違うのは日本格闘技界の現状だ。笹原EPも言うが、やはり先の見通しが立たなければ難しそうだ。

——いろいろあると思うんですが、笹原さんのなかで一番気にかかるのはどこですか？

笹原　一つはPUJIの投資家に対するところです。そのプレゼンのなかに、SFと組んで大きな世界観を作っていきますというアイデアは当然入ってますから。それがUFCに飲み込まれたとなると、今後どう変えていくのかという話になりますから。

——その後、SFとはどんなお話になってるんでしょう？

笹原　いまはまだ情報を収集している段階です。

——ではズッファが親会社になって、SFとDREAMのいまの関係がどうなるかもまだわからない、と。

笹原　わからないです。いろんな状況、いろんな話を聞いて決めていくしかないです。

——ズッファがSFのバックにいることについて、笹原さんはどうとらえてますか？

笹原　うーん、難しいですねえ。

——簡単にシェイクハンドできるような関係ではない、と。

笹原　当然相手あっての交渉なので、ズッファがどう考えてるかはわからないですし、ボクらの希望が一方的に通るわけでもないですし。

——今回の件は川尻選手らのストライクフォース参戦にも影響はありますか？

笹原　彼らも万全の準備をしていますし、試合をやらせること自体は簡単なんですけど、その結果どう影響していくかということですよね。

——川尻選手がSFのベルトを獲ったとすると、今後はズッファが独占契約をするかもという話にもなってきます。

笹原　契約に関する部分は両者が合意しないかぎり進まない話なので、そこはあまり心配していませんが……それよりも試合そのものですよね。当然勝てばいいんですけど、勝負だから何があるかわからないですから。川尻達也の試合の意味が日本格闘技界にとってさらに大きくなってきてますよね。

——ベルトを獲れば次につながりますが、もし負けるとズッファの体質から考えて協力関係は危うくなりますよね……。最後に、発表されるはずだったJCBホール大会への影響というのもあると思うんですが、その点はいかがでしょうか？

笹原　やはりそれと今回の川尻選手らのSF参戦、投資家の話はセットの話なので、一個ピースが欠けると再考しないといけないですね。現実的に地震の影響もありますし。

——どうなるにしろ状況を見据えながらということですよね。

笹原　現状ではそこまでしかお話できないですね。

——わかりました。お忙しいところありがとうございました！

【11年3月15日／電話取材にて収録】


達也

日本格闘技界の命運をかけた大一番！　因縁のメレンデスとついに“決着戦”!!

「日本じゃなくアメリカで勝つことに意味があるんです」

停滞する日本格闘技界に風穴を開けるべく、満を持してクラッシャーがアメリカに殴り込み！
昨年7月、青木真也との運命の対決に敗れてドン底に突き落とされるも、
『Dynamite!!』でのジョシュ・トムソン戦で見事な復活劇を演じてみせた川尻達也。
あの“ナッシュビルの悲劇”から約1年――川尻がメレンデス戦への思いを語る！

聞き手／鈴木佑　撮影／笹井孝祐　試合写真／乾晋也、今村陽子、Esther Lin（STRIKEFORCE）

4.9ストライクフォースに殴り込み！

川尻

――川尻さん、ギルバート・メレンデス戦が正式決定しましたね！

川尻　うん、決まりましたね。

――トムソン戦のときはネットでその決定を知って残念だったってボヤいてましたけど、今回はしかるべき人から？

川尻　今回はちゃんと教えてもらえました（苦笑）。まあ、大晦日が終わった時点でメレンデス戦は噂されてたし、その心構えもあったんで。

――今回のストライクフォース（以下、SF）は日本開催かもしれないという話もありましたけど。

川尻　でも、できれば僕としてはアメリカでやりたいと思ってましたよ。日本でメレンデスに勝ってベルトを巻いても意味がないと思うんで。

――それは去年の青木さんとメレンデスの試合も踏まえて？

川尻　それもあるし、ここ最近は海外で日本人選手が結果を残せてないというのもあったし。

――いまだにDREAMもSRCも興行予定が発表されず、閉塞感が漂う日本の格闘技界のなかで、この一戦の持つ意味合いをどんなふうにとらえてます？

川尻　いや、あんまりそういうのは考えたことないですね。

――え、考えたことない？

川尻　うん、興味ないですね。もう、単純にメレンデスと闘ってアメリカで結果を出したいっていうだけで、それがいま僕のできる一番のことだと思うから。

――去年の大晦日にジョシュ・トムソンから勝利を収めた際、「またいろいろ背負える選手になりたい」って言ってましたけど、いまそういう心持ちは？

川尻　まったくないです。

――な、ない？（汗）

川尻　だって、僕はDREAMのタイトルマッチで負けた人間だから、その僕が何かを背負うとかおこがましいと思うし、それを背負うべきは青木真也だと思うし。僕は僕のやるべきこと、自分のやりたいことをやって、その結果として日本の格闘技界、DREAMのファンのみんなが盛り上がってくれればいいと思ってるんで。

――青木戦が終わってから悪夢を見るようになったそうですけど、いまはどうですか？

川尻　いや、変わんないですね。もう、一回死んでる人間だから、僕は（笑）。

――まだ、うなされたりとか？

川尻　うなされることはないですけど、気持ちは晴れないですよね。あれだけの負け方して、一回勝っただけで気持ちが晴れてたら、相当能天気なんじゃないですか？

――いまは単純に不安と楽しみはどっちが？

川尻　それは不安のほうが大きいですよ。不確定なことが凄く多いじゃないですか。初めてのアメリカ、初めての5ラウンド、初めてのオクタゴン。新しい環境で闘うという部分では、自分のプロデビュー戦に感覚は近いですね。おもいっきり心が折れた試合。

――タクミ選手に負けたときですね。

川尻　はい。「もう一回そういうことにな

っちゃうのかな」っていう不安もあるし。でも、「そういう場所に身を置いたら自分はどうなるのかな」っていう興味や楽しみもある。「いけるんじゃないかな」っていう気持ちや、「相当厳しいだろうな」っていう気持ちもあるし。

――「いける」という部分では、トムソン戦の勝利は大きいんじゃないですか？

川尻　そんなに関係ないですかね。もともと、去年の4月の青木vsメレンデス戦の時点で、「次は俺がアメリカに行こう」って思ってたから、金網対策とかもある程度は経験して、闘うイメージはできてたんで。

――そもそも、川尻さんがアメリカを意識しだしたのはもっと前なんですよね。本来なら2年前の大晦日のときに、SRCとの対抗戦ではなく青木さんとタイトルマッチをやって、勝ったらアメリカに乗り込むつもりで。

川尻　そうですね。それにアメリカの前に金網の経験も積みたかったから、去年の5月のDREAM（※ケージで開催）にも、ずっと「出させてくれ」とは言ってたんで。本来ならあそこで一戦、金網でやっておきたかったんですけどね。

――トムソン戦のあとに「もう、博打みたいなことはできないから、メレンデスと金網でやる前に一回挟みたい」って言ってましたもんね。

川尻　まあでも、僕とメレンデスが闘うタイミングとしては今回がベストだと思うし。

――よく、川尻さんは自分のことを「大事な一戦を落とすから"助演男優賞"だ」って表現してますけど、それだけ"演技"をする場をつかんできて、今回また最高のシチュエーションがめぐってきたというか。

川尻　うん、五味（隆典）戦、（エディ・）アルバレス戦、魔裟斗戦、青木戦……さんざん負けてきてるのにね（苦笑）。だから、逆に不思議な感じはしますよ。そんな僕に「なんでそんなに期待するのかな」って。

――失礼な言い方かもしれないですけど、「川尻達也、しぶといな」っていうか（笑）でも、それだけ重要なキャストなわけで、求められてるってことですから。



昨年の大晦日に、ストライクフォースのナンバー2であるジョシュ・トムソンと対戦した川尻。トムソンの距離を潰し、何度もテイクダウンを奪った川尻は、終始試合のペースを握って完勝を収めた。この試合後からスコット・コーカーは「メレンデスvsカワジリを組みたい」とコメントを残していた。

川尻　まあ、微妙なラインで生き残ってきたんで（苦笑）。死んだと思った青木戦から一年も経たずに、こんなビッグチャンスをもらえるとは思ってなかったから、それはありがたいですね。

――PRIDEが終わってから最強の測定場がアメリカになっても、中軽量級に関しては日本も対抗できるというなかで、い

死んだと思った青木戦から一年も経たずチャンスをもらえるのはありがたいです

ろんな流れがありましたけど、ここで川尻さんが勝ったら「全部持ってっちゃうな」っていう気もしますけどね。

川尻　う〜ん、まあそれは去年の7月にも同じようなこと言われてたし（笑）。あんまり興味ないですね。あの、いま僕がやりたいのはそんなことじゃないんです。観るほうが日本の一年越しのリベンジだとか、どうとるかは自由ですけど、とにかく「アメリカでメレンデスに勝つ」っていうことだけ。勝てばDREAMも格闘技界もおのずと盛り上がると思うから、それ以外のことについては僕がそこまで考える必要はないかなって。

――なるほど。さっきも話に出ましたけど、今年に入ってからは水垣偉弥さんが勝ったくらいで、1月に五味隆典さん、2月に山本"KID"徳郁さんと小見川道大さん、福田力さんと立て続けにアメリカに乗り込むも、残念ながら結果を残せませんでした。

川尻　単純に悔しいですよね。でも、そんなに他人に興味ないというか、頑張ってほしいとは思うけど「どうでもいいかな」って。正直、そんな心境です。

――そうは言っても、「アメリカ、アメリカ」と周囲が騒ぐ風潮にはイライラしません？

川尻　それはしますよ。だから乗り込もうと思ったわけだし、「そんなにすげーのかよ」って。ほら、「アメリカ凄い、アメリカ凄い」とか『ゴン格』とかが煽ったりするじゃないですか？

――ま、まあ、そうなんですかねえ。

川尻　大丈夫ですよ、『ゴン格』にも直接言ってるから（笑）。だからもう、練習方法が向こうはどうとか言われても、「知らねーよ」っていうか、「なら、俺のやり方でアメリカで結果出してやる、それにはメレンデスに勝つのが一番だ」っていう思いですよ。いま僕を動かしてるのは。

――最近、以前にも増して日本の危機ということが言われてますけど、川尻さんはどう受け止めてます？

川尻　まあ、危機なんじゃないですか。日本の危機というか、僕の危機だから（笑）。僕の危機っていう点では、相当あせってますけどね。

――追い込まれてる？

川尻　ホント、情緒不安定にはなりますよ。だから、嫁はたいへんなんじゃないですかね。相当迷惑かけてると思います。普通は子ども産んだ母親のほうが育児ノイローゼになったりするもんなのに、なんか僕がノイローゼ気味だから。

――でも、子どもに癒されたりしませんか？

川尻　もちろん、寝顔とか見ると「カワイイな」って思いますよ。でも、すぐ現実に戻ります。なんか、僕のほうが手のかかる大きい子どもかもしれない（笑）。

――ほかの選手も危機意識の高まりの表われなのか、たとえば菊野克紀さんが青木さんと出稽古したり、北岡悟さんがアメリカに武者修行に行ったりしてるみたいで。五味さんはハングリー精神を取り戻した

AKAWAJIRI

川尻 そうん 五味（隆典）戦（エディ・）ア

しては日本も対抗できるというなかで、い

るじゃないですか？

五味さんはハングリー精神を取り戻した

いまのメレンデスは賢くなったというかストップ&ゴーができるようになった

めに、風呂なしのアパートに引っ越したそうですよ（笑）。

川尻 そうですか、今度ぜひ遊びに行ってみたいです（笑）。

――ハハハハ。青木さんとはメレンデス戦が決定してから何かしゃべりました？

川尻 正式決定前ですけど、この前のDEEP（2月25日・後楽園ホール大会）の控室で「どんな感じ？」っていうのは聞きましたよ。まあ、青木くんと僕は持ってるものが違うし、対策っていうほどじゃないですけどね。

――なんて言ってましたか、青木さんは？

川尻 「ヌルヌルする」って言ってました（笑）。

――あ～、メレンデスは以前からヌルヌル疑惑がありますよね。

川尻 石田くんも「ヌルヌルする」って言ってましたね。僕もメレンデスとやったとき、ヌルヌルしたかもしれない（笑）。「これ、寝技で押さえ込めないな」って思いました。

――カギはスタンドの攻防になりそうですね。対策用にメレンデスの試合はチェックしてますか？

川尻 石田くんとやった試合映像を石田くんから借りて、あらためて観ましたよ。いまのメレンデスは賢くなったというか、ストップ&ゴーができるようになりましたよね。前はもうゴーゴー、ゴーゴーだけだったけど、いまはやみくもに行かず長いリーチをうまく使いながら、ジャブとかも打てるようになったし。でも、行くときは変わらずダンプカーみたいにガンと行くし。その切り替えがうまくなりましたね。

――そのへんは川尻さんもそうなんじゃないですか？

川尻 まあ、お互い学んだというか、賢くなったっていうことじゃないですか。

――いまもケージのある秋山成勲さんのところで練習を？

川尻 いや、いまは行ってないです。基本的にJBスポーツとT-BLOODとパラエストラ松戸ですね。とくにケージでは練習してないです。「やったほうがいいのかな」ってちょっと思ったり、「いまさらやってもしょうがないかな」って思ったり。

――行かなくなった理由は？

川尻 いや、べつにないですよ。あのときは大晦日前で高谷（裕之）さんも試合だったからマンツーマンでやってたし、重い人ばっかりなんで。あとは茨城でしっかりやれてるから、「練習が足りなければ行くけど、足りてるからいいかな」っていう感じですかね。

――いまやってる練習で勝てば、「アメリカ式の練習を」っていう向きをギャフンと言わせられますね。

川尻 そうですね。「おまえらみんな死ね！」って言います。ハハハ。

――乾いた笑いだな～（笑）。トムソン戦のときは「自分が変わるためにも」ということで、KOと一本にこだわってましたけど今回は？

川尻 希望としては倒して勝ちたいですよ。判定で勝とうと思って闘ってる選手はそんないないと思うし。なんとか一歩踏み出してKOしたいですけどね。ただそんな甘いことだとは思ってないし、相当厳しい闘いになるだろうなって。

――メレンデス戦に向けて何を一番懸念してますか？

川尻 う～ん……（熟考）。まあ、リングとケージの違いとかいろいろあるけど、一番はそういうのを気にしすぎることじゃないですかね。

――メンタル面というか。

川尻 そうそう。フィジカル面や技術をしっかり高めておいて、最後は気持ちだと思うんで、そこで負けないように。

――川尻さんは06年大晦日のメレンデス戦は「負けた気がしてない」って言ってましたけど、今回は個人的にそのリベンジという感じですか？

川尻 リベンジというよりは「決着つけてえな」っていう感じかな。前回の試合はお互いに納得いってないと思うので、今度はどっちかが倒れるような試合がしたい。

――まだ正式決定ではないですが、青木さんと高谷さんも同じ大会に出場するみたいですね。

川尻 やっぱり、いっぱい日本人がいたほうが心強いですね。（大会サポートで）DREAMの人たちも現地に来るみたいだし、恵まれてるかなって。逆にそうじゃないリアルな環境で試合したかったかなっていう部分もあるけど。

――ああ、完全アウェーで。今回はたぶん、アメリカのファンにしてみれば「俺らのトムソンを倒したカワジリが乗り込んでくる」って感じなんでしょうね。

川尻 ……そうなんですか？ そもそもトムソンって有名なんですか？

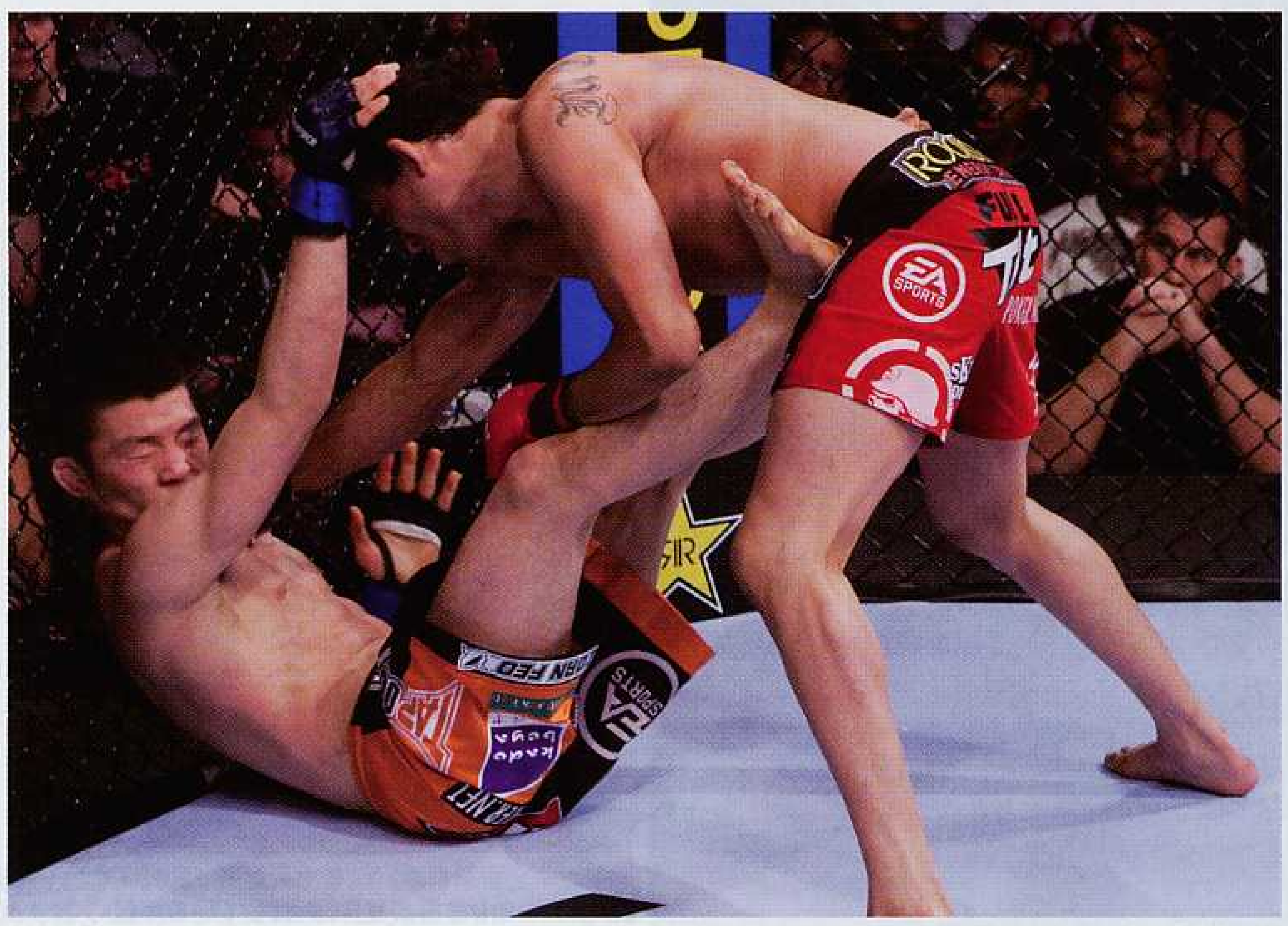
――え？ ライト級のナンバー2じゃないですか、向こうで。

川尻 いや、そもそもSF自体、有名なのかなって（笑）。

――また、ひねくれたことを（笑）。川尻さんは09年に石田さんのセコンドで会場に行ったときは向こうのファンに全然話しかけられなかったそうですけど、今回はタイトルマッチのチャレンジャーとして乗り込むわけですから注目も大きいと思いますよ。「カワジリってどんなヤツなんだ？」みたいな。

川尻 ……今度は話しかけてくれるかな？（笑）。

――ハハハ。青木戦以来、「先のことを考えるのはやめた」って言ってましたけど、



昨年4月17日、青木は川尻とのタイトルマッチを先延ばしにして、アメリカに乗り込みメレンデスと対戦。戦前から「DREAMを背負う」と意気込んでたものの、結果はメレンデスに判定負け。試合後は「このままじゃ井の中の蛙で終わる」と涙にくれた。

TATSUYA K

そこは今回も変わらないですか?

川尻　そうですね、次の試合で終わりだと思って。先のこと考えるとろくなことないから。けど、これを機にアメリカに定期参戦したいとは思いますよ。

――ほう、というのは?

川尻　一発で終わらせたくない。アメリカで結果を出したいんですよ、たとえ勝っても一試合じゃまぐれだと思われるから。今年中に3回ぐらいアメリカで結果を出せば、間違いないんじゃないですかね。

――でも、それだと日本で試合する間がないですよね?

川尻　もう、それはそれでいいんじゃないですか? それが僕のできる日本の格闘技界を盛り上げるやり方だと思うし。

――向こうで活躍するという意味では、岡見勇信さん方式じゃないですけど。

川尻　そうですね。やっぱり、いまの日本の状況でいくら勝ってもそんな盛り上がんないでしょ、ハハハ。いや、ぶっちゃけると、小見川さんが負けたのとか凄いショックだったんですよ。だから、岡見くんにもアンデウソン（・シウバ）を倒してベルトを獲ってほしいし。僕はGSPが凄く好きなんですけど、今回だけはホント、シールズが勝ってほしい（笑）。

――ああ、シールズがGSPに勝ったら、岡見さんがアンデウソンの次期挑戦者になりそうな流れになってますね。

川尻　岡見くんとアンデウソンは観たい。僕とメレンデスと同じぐらい観たい（笑）。まあ、アメリカで結果を出し続けてる岡見くんって、ホントに「凄いんだな」って。

――浮き彫りになってますよね、ほかの選手が負け続けていくなかで。



06年の『PRIDE 男祭り』で対戦している川尻とメレンデス。両者ともに下がらないでどつき合う一進一退の展開に、場内は大熱狂。今回の対戦ではどのような攻防が見られるか?

一発で終わらせずに、今年中に3回くらいアメリカで結果を残したい

川尻　そうそうそう。

――じゃあ、川尻さんもアメリカで結果を出し続けて、大晦日に凱旋みたいな?

川尻　いやもう、今年はアメリカオンリーでもいいぐらいの気持ちでいますけどね。

――でも、メレンデスにも勝ったら実質ライト級のトップ2を倒したことになるので、ふさわしい相手がいるのかっていう。

川尻　ほかにもいるんじゃないですか? ……フランク・エドガーとか。

――その方はSFじゃなくUFCのライト級王者です（笑）。

川尻　フフフ。まあ、とにかくアメリカで結果を出し続けて。

――"打倒アメリカ"を。

川尻　"打倒アメリカ"っていうか、"打倒アメリカをすげーと思ってるヤツ"ですね。

――ああ、なるほど。単純に川尻さんがSFの王者になったら、DREAMの王者である青木さんとの王者対決でリベンジマッチ、というように見る向きもありますね。

川尻　まあ、それはファンとかマスコミが思うのは自由ですから。僕が闘い続けていくなかで、いずれは「また青木くんとやりたい」ってなると思いますけど、いまはどうにかしたいという気持ちはないですよ。いま、間違いなく日本のライト級で一番強いのは青木真也なんです。僕が次の試合でどうなろうが、日本で一番強いのは青木真也。だって、結果でそう出てるんだし。でも、僕はそのままで納得できるほど人間ができてないから、勝ち続ければ自然にそういう気持ちは出てくるんじゃないかって思ってますけどね。まあ、とにかくいまは……あれ、なんの話してたんだっけ?

――青木さんの話です!

川尻　ね、情緒不安定なんです（笑）。

――話を見失うぐらい（笑）。

川尻　いやもう、頭ハゲるんじゃないかなっていうぐらいの精神状態ですよ、ここ半年ぐらいは。いままでいろんな人と闘ってきたけど、正直あんまりプレッシャーとかって気にしたことなかったんですよ。

――あ、そうなんですか?

川尻　魔裟斗戦とか青木戦とか、JZカルバン戦とかもべつに普通でしたね。「背負ってる、背負ってる」と言いつつも、僕もB型で適当なんであんまりそこまで気にしたことなかったんです。でも、やっぱり青木くんに負けてから「それじゃダメだな」とも思ったし。

――それだけ意識が変わる敗戦だった、と。

川尻　そうですね。だからトムソン戦のときもいろんなプレッシャーから逃げずに、闘おうと思ったし、今回も……ホント、頭がハゲそうです（笑）。

――いまはもう、日本の格闘技界の現状をすべて受け止めて頑張るしかないって感じですか?

川尻　う～ん、というか必死に頑張ってきても結局こういう状況になって、僕の力じゃどうにもなんなかったし。お手上げ状

AKAWAJIRI

仮にDREAMとSRCがなくなっても僕は格闘技でメシを食う覚悟はできてる

態といったらお手上げ状態だから、「じゃあ、違うかたちで」ってことですよね。

——アメリカで結果を、と。

川尻 そうですね。「日本もまだまだいけるぞ」って、違うかたちで盛り上げたいなって。だって、必死に頑張っても僕はテレビにすら映らないんだから。

——今回のSFは地上波こそなさそうですけど、PPVはあるんじゃないですかね。

川尻 じゃあ、カットされる心配もないかな(笑)。

——SFといえば、エメリヤーエンコ・ヒョードルの敗戦についてどう思いました?

川尻 やっぱり日本人としては超ショックでしたよ。あれは観たくなかったな。でも、あんなにドキドキして格闘技を観たのはひさしぶりでしたね。PRIDE以来って感じでした。

——今度はあのリングに川尻さんも立つんですよ。

川尻 ね、どうなるんだろ。負けるかな、大丈夫かな(ニヤリ)。

——そんな他人事みたいに!

川尻 もうなんかね、どうでもいいんです。「メレンデスに勝てればなんでもいいや」って感じですよ。もう、「いろいろ面倒くせえな」って。

——面倒くさい(笑)。あの、川尻さん、いま格闘技は好きですか?

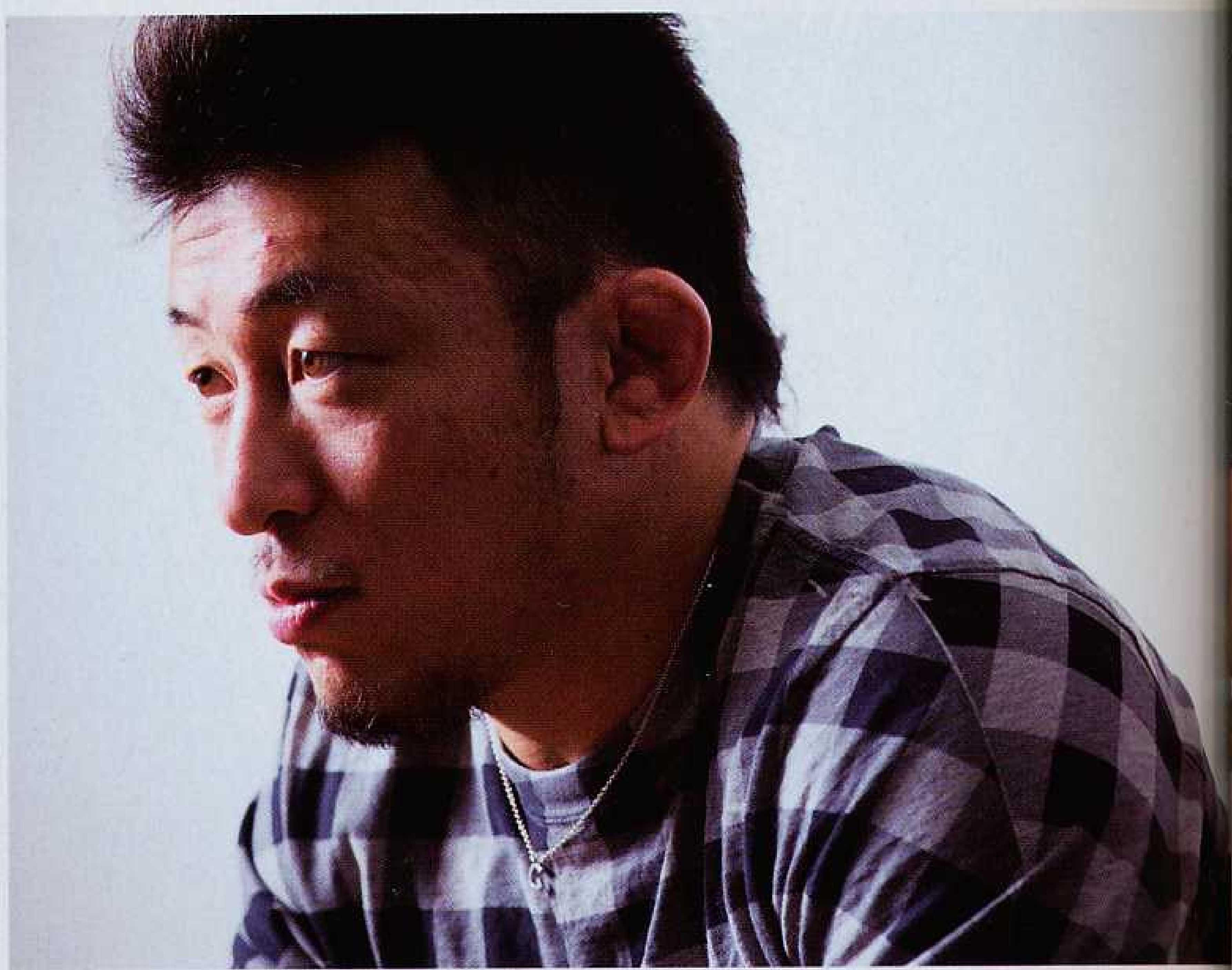
川尻 そりゃあ、格闘技は好きですよ!

——じゃあ、格闘技業界は?

川尻 格闘技業界か……それは深いですね。この業界で生きてる人間だから、嫌いとは言えないですよね。ハハハハ。でも、なんだろうな。「試合に集中させてほしいな」っていう感じですかね。ぶっちゃけ、プロモーションがどうだとか、知ったこっちゃないから。

——川尻さんはデビューしてからいままで、格闘技がイヤになったとか辞めようと思ったことはあります?

川尻 ありますね。09年の大晦日。横田(一則)選手をぶっ倒したら辞めようと思ってました。



かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王者に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。10年7月にDREAMライト級タイトルマッチで青木真也と対戦するも敗北。復帰戦となったジョシュ・トムソン戦で勝利を収め、4.9 ストライクフォースでギルバート・メレンデスのライト級タイトルに挑戦。171cm、69.9kg。

TATSUYA K

——え、そうだったんですか!?

川尻 はい(アッサリ)。

——あのときはそんなこと言ってなかったですよね。それは要するに格闘技界を取り巻く政治状況に振り回されて嫌気がさして?

川尻 それもそうだし、ああいうことをして日本の格闘技界がよくなるとは思えなかったし。なんか「くだらねえな」とか思って。誰のなんなのか、どんな力なのかわかんないけど、「格闘技をそういう力で汚さないでくれ」っていう気持ちはあったかな。間違いなく、あそこでいったん途切れましたね、気持ちが。ただ、そのあとに青木vsメレンデスがあったから、また燃えられたのも事実だし。

——燃えて、7月に青木戦を迎えて。

川尻 で、またそこで消えて(笑)。

——でも、またトムソン戦で燃え上がった、と。

川尻 アップダウンの繰り返しです(笑)。だけど、09年はホント引いちゃいましたよ。それまでも自分がどんな負け方しても、引いたりすることはなかったけど。あのときの一ヵ月間だけはドン引きしてました。誰もべつに信用したくなかったし。

——そしていま、そのメジャーイベントに具体的な動きが見られず、日本の格闘技界の先行きが見えない現状で。

川尻 できればDREAMもSRCも生き残ってほしいし、どっちかが潰れてもダメだと思いますよ。そうしたら格闘技界は絶対に終わると思うから。理想でいえば一つになったほうがいいというのもあるけど、やっぱり対抗組織があって、お互い意識しあってるからこそ生まれる熱というのもあると思うし。できれば両方続けてほしいですね。でも、仮に両方なくなっても、僕は格闘技界でメシ食っていくっていう覚悟はできてますよ。

——それはアメリカを主戦場にして?

川尻 まあ、アメリカになるだろうし。

——「日本だとDREAM以外に上がる気はない」って言ってましたし。

川尻 いまのところはないですね。なぜなら、僕は格闘技でメシを食っていきたいし、食っていくから。

——ファイトマネーで生計を立てられるのはメジャーイベントしかない、と。

川尻 うん。だからDREAM以外は出たい出たくないじゃなく、格闘技でメシを食うというときの選択肢としてはないですね。

——しかもいまは家族を養っていかなきゃならないですしね。

川尻 そうそう。一人だけだったら、新聞配達でもなんでもバイトしてやっていきますけど。でも、DREAMのこともいろいろ聞くなかで、もうボチボチ大丈夫なんじゃないかなって思ってますけどね。

——ずっと闇で覆われてたのが、ちょっと光が見えてきた感じですか?

川尻 そうですね。あとは自分の試合。たぶん、今回は8−2ぐらいでメレンデス有利というか、「相当厳しい闘いにはなるだろうな」とは思ってますけど、そういうなかで結果を出したいっていう気持ちが凄く大きいです。ホント、いろいろ考えると気が狂いそうになるけど、格闘技業界もいい話が一つぐらいないとね。つまんないから。

——川尻さんが格闘技業界を好きになるためにも期待してます(笑)。

川尻 いやいや、好きですよ(笑)。まあ、俺がおもしろくしてやりますよ!

【11年3月11日/都内・JBスポーツにて収録】

——練習を少し拝見させていただきましたが、3年ぶりの試合に向けて気合い充分

——へえ~。それは『SMASH』での試合でですか?

いう表現ではなかったですよね。

小路　でも最後の試合というのは決めて

——だからリングもあのときと同じDEEPですもんね。



4.22
『DEEP 53 IMPACT』
三崎和雄戦を最後に引退!

ハッスル&スマッシュ参戦の裏話にも直撃!

“最後の日本男児”決死の引退試合へ——

小路晃

総合格闘技の黎明期から闘い続け、PRIDE、そして『ハッスル』や『SMASH』のリングでも活躍した小路晃。この“最後の日本男児”と呼ばれた男が4月のDEEPで引退することが決定した。最後の相手に三崎和雄を選んだ理由とは?　そして引退を決意したその思いとは!?

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾晋也

髙田さんがある席を設けてくださって三崎選手と僕とが同席したんです

――練習を少し拝見させていただきましたが、3年ぶりの試合に向けて気合い充分ですね。

小路　あ、3年ぶりですか？　そうか、3年ぶりでしたか……（しみじみと）。

――気づいてなかったんですか（笑）。実際、ブランクは感じられてるんですか？

小路　やっぱり凄く。去年の1月から古木（克明）選手の練習を岩崎（達也）先生に見てもらってるんですけど、引退試合に向けて自分も一緒に練習をし始めまして。

――ほう、そうだったんですか。

小路　ええ。本格的に追い込み始めたのが今年の1月からの合宿からなんですけど、もういまは髙田道場で練習してて、吉田道場でも現役バリバリの中村カズとか小見川選手とか、長南選手とかといい練習をさせてもらってます。

――PRIDE休止後は『ハッスル』や『SMASH』とプロレス方面で活躍されていましたが、最後はやっぱり総合の試合で引退したいという思いがあったんですね。

小路　それもいろいろ……いろんな心境の変化ですね。まあ、古木選手と一緒に練習させていただいて自分も思うところもありましたし。正直プロレスをやってても、なかなか燃え上がる気持ちというのか、どこかモヤモヤしてる気持ちがあったんです。そんなときに、ちょうど鈴木みのる選手と試合をしたんですけど、鈴木さんに「なんかおまえ中途半端だよ。格闘技の殻から抜けられてねえ」みたいなことを言われて。

――へえ～。それは『SMASH』での試合でですか？

小路　たしか11月ぐらいだったと思います。その言葉を聞いて、自分自身もやっぱり「まだ自分は格闘家として、武道家として身を立てていきたい」と思ったんですよね。だから『SMASH』では古木選手のコーチはやらせていただいてるんですが、選手としては完全に撤退したんです。

――なるほど。でも、総合に復帰すると発表された今年1月の時点では、引退するという表現ではなかったですよね。



06年のDEEPで一度対戦経験がある小路と三崎。1ラウンド、フロントチョークで一本勝ちをはたした三崎はその後武士道のウェルター級GPに参戦することとなり、二人にとっては言葉どおり明暗を分けた試合となった。

小路　でも最後の試合というのは決めてましたね。ただDEEPさんの発表のタイミングとかもあったので引退試合というのは伏せてました。

――その時点でもう最後に三崎選手と闘いたいと胸の内に秘めていたというか。

小路　ええ。というか、じつは自分が『ハッスル』をやってたときに髙田さんがある席を設けてくださって、じつは三崎選手と僕とが同席した席があったんですよ。

――あ、そんなことがあったんですか⁉

小路　だからもう2年前ぐらいですかね……。その席で、髙田さんが「小路は最後の試合をおまえとやりたいと言ってるけど、三崎、おまえ、やれんのか？」と言ってくださって。

――「やれんのか？」と（笑）。

小路　はい。三崎選手も「小路選手の最後の試合なんだったら自分がやらせてください」って。それが、流れ流れてちょうどこの時期になったんですけどね。

――しかし、なぜ最後の試合を三崎選手と闘いたいと思われたんですか？

小路　やっぱり06年に対戦したのがきっかけです。

――というと、06年2月5日のDEEPでの試合ですか。

小路　やっぱりあのときに対戦させていただいて、自分が突っ込んでいったところをフロントチョークでやられちゃったんですけど、自分の力を全部出しきれなかったという気持ちが凄くあったんです。

――ずっとその思いを抱かれてた、と。

小路　はい。だからやっぱり最後もう一度完全燃焼したいという気持ちがあって、その相手としては三崎選手と一番やりたいという気持ちがずっとあったんです。

――だからリングもあのときと同じDEEPですもんね。

小路　そうですね。やっぱり同じ場所、同じシチュエーションで三崎選手と闘いたいなって僕自身も思ってましたし、それを佐伯さんも理解してくださって。

――でも、三崎選手自身もその06年の小路さんとの試合が、ご自分の格闘技人生のなかで一番のターニングポイントになったとおっしゃっていますよね。

小路　どこかでそういうふうに言っていただいたというのを聞いて、凄く僕もうれしかったです。ただ自分もあれで勝ってれば、たしかPRIDEのグランプリに出るという試合だったんで、自分はやっぱり負けて悔しい思いはしてました。

――たしか、あの一戦は勝者がPRIDE武士道のウェルター級GPに出場できるという試合でした。格闘技の残酷さではないですけど、勝者と敗者で本当に明暗が分かれる試合になっていたというか。

小路　そうですね……。そうだったと思います。でも今回、三崎選手にとっては何もメリットのない試合になるにもかかわらず、自分の気持ちを正面から受けてくださったことに本当に感謝しています。

――引退を決意したときに、髙田さんはどういった言葉を？

小路　前々からちょっと相談はしてたんですけど、あらためてまたご報告したときは「もう胸いっぱいやりなさい。必ず行くから」と言ってくださって。

――ああ、それは本当にいいシチュエーションですね。しかし、今回引退されるということで、やっぱりご自身もそうでしょうし、ファンも小路さんのこれまでの闘いが頭によぎると思うんですけど、何かご自身が印象に残ってる試合はありますか？

小路　そうですね、一番思い出に残ってるのはやっぱりPRIDEでいうとマーク・コールマンとの試合とか、イズマイウ戦、あとはボブチャンチンとやったのも凄く記憶に残ってますね……（しみじみと）。

——それを聞くと、当時はまだ階級もなかったんだなって思っちゃいますね。

小路　それはもう、あたりまえだと思ってやってましたので。街で会って体重とか聞かれるようなケンカはないですからね。

——その後、PRIDEのレベルは急速に上がっていったと思うんですが、なかなか勝つことも難しくなっていった状況のときはどういった心境的でした？

小路　心境的には、「もう死のう」と思ってました。

——えーっ！

小路　ククククク、それは冗談です（笑）。ただアメリカで練習したりして、気持ちは凄く充実してたんですけど、なかなか結果がついてこなかったので「難しいなあ」って。だけどいま振り返ってみると、15年間闘ってきたなかでいい状況で闘える試合って本当に何試合かしかなかったのかなって思いますね。だからやっぱり闘いというのは、そういうものなんじゃないかなっていま頃思ってますけど。

——でも連敗されていた頃、闘っていた面々も凄いメンツですね。ダンヘン、シュルト、ショーグンという。

小路　懐かしいですね。だからやっぱりショーグンからかなあ。そのときショーグンは知名度はなかったですけど、僕は前々から知ってて「若いいいヤツが出てきたな」って思ってたんですよね。だからどうしてもやってみたいって手を挙げてたんですけど、ショーグンに負けたときは、壁みたいなのを初めて実感しましたね。

もしれないですけど（笑）。最高のものを

——世代交代といいますか……。

小路　でも、そういうなかでも最後のPRIDEに呼んでいただいたのはホントにうれしかったです。これも縁なのかなあと思いましたし、凄く光栄でした。やっぱり自分はPRIDEに育ててもらったという気持ちはいまでも凄くありますから。

——〝ミスターPRIDE〟というあだ名もついてたぐらいですもんね。あれは髙田さんがつけられたんですか？

小路　いや、誰につけていただいたかはわからないですけど。僕も知らないうちにそういうふうに呼ばれてたというか（笑）。でも、もうPRIDEがなくなった時点で、なんかポッカリ自分のなかで一区切りついたみたいな感じになりました。闘う気持ちが枯れたというか……。

——それだけ存在が大きかったというか。

小路　ええ。でも、PRIDE初期はファ



マウリシオ・ショーグンのPRIDE初登場の相手を務めた小路。ショーグンのその後の活躍はご存知のとおりだが、その“壁”を最初に感じたのは小路だったのかもしれない。しかし、残酷さとロマンを併わせ持つ世代交代を目の当たりにできるのも格闘技の見どころの一つである。

続いていればずっと上がりたかった。『ハッスル』の最後のほうは残念だった

イトマネーだけで食べていける時代がくるとは思わなかったですねえ。だって自分も『PRIDE・3』くらいまではバイトしてましたし。

——そうだったんですか！

小路　あの頃は24～25歳ですよね。格闘技はそうやってやるものだって思ってましたね。そう考えると凄い発展ですよね。

——ホントですね。じゃあ、PRIDE消滅後は総合ではなく『ハッスル』に参戦されてたのは、やはりもう総合に対する気持ちは切れていたからというか。

小路　PRIDEがなくなった時点で、自分のなかでは気持ちが……。やっぱりPRIDEという舞台にこだわりがあったんでしょうね、自分のなかで。それに、ちょうど髙田さんとダイヤモンド・キッズ・カレッジというイベントでご一緒させていただいて、そのとき髙田さんに「くすぶっている歳じゃないだろ。もしあれだったら『ハッスル』一緒にやらないか？」って誘っていただいたんです。

——『ハッスル』参戦は髙田さんのお誘いだったんですか。実際、上がってみていかがでした？

小路　いやー、凄くいい経験でしたね。天龍さん、川田さん、タイガー・ジェット・シン、ああいう人たちと絡ましていただいたので感激というか。自分はもともとプロレス大好き少年だったので、自分の青春時代を取り戻したみたいな気持ちでした。ホントに、最初の1年間はずっとリングの手伝いもやってましたし、設営もずっとや

つぐらいだったんでしょう？

ってました。そういうのを自分でもやりたかったので。

——でも、PRIDE時代から観てたファンからすると、けっこう衝撃的というか……。

小路　二等兵でしたからね（笑）。

——しかも、『ハッスル』デビュー戦は「小倉優子の刺客」という体で、ゼウスにフライパンで殴られて失神するという衝撃的展開で（笑）。

小路　そんなのありましたねえ（笑）。やっぱり楽しかったですね。打ち上げのときなんかでも、天龍さんや川田さんには凄くたくさん飲ましてもらいましたし、髙田さんももちろんそうですし。やっぱり昭和のレスラーは凄いなって。

——ちなみに、小路さんは昭和の飲みっぷりについていけるタイプだったんでしょうか？

小路　僕は大丈夫なんです（アッサリ）。自分も富山の漁師の息子なんで。

——いい意味で昭和組なんですね（笑）。

小路　僕も一応、ギリギリ昭和なんでしょうね。フフフ。だから、最後のほうは凄く残念でしたけど、ずっと続いてれば自分もやりたかったですし。

——なるほど。そんな小路さんから、山口日昇さんに向けて何か一言ありますか？

小路　山口さん……山口さんにはもっと元気出してほしいです。

——あ、逆にエールを！

小路　山口さんは本当に凄いクリエイターだと思うので。社長には向いてないかいまが一番つらいのは間違いないですね。

小路晃

じつは秩父の三峯神社に私も滝浴びに連れていっていただいて

壁みたいなのを初めて実感しましたね。

もしれないですけど（笑）。最高のものを創りあげるのは凄い人だと思うので。またどこかでご縁があれば一緒に仕事したいなっていう話は電話で言ったんで。

――え？　電話でお話したんですか？

小路　はい。じつは引退会見をしたときに山口さんからお電話いただいて。

――あんなに電話に出ない方が（笑）。

小路　ハハハハハ。そうなんですか？

――その後、小路さんはDREAMでジャッジになるわけですけども。

小路　やっぱり『ハッスル』では島田レフェリーと同じモンスター軍団だったんで。……最後に裏切りましたけど、裏切る前から相談してて「携わりたいんで、勉強させてください」って。その時点で、ちょっと選手としてもうやらないという気持ちはあったので。でも、あらためて思うというか、リングサイドのホントもう目の前で試合を観てると、やっぱり危険な仕事だなって思いますよね（笑）。

――ワハハハハ！　それと並行して『SMASH』に参加されたのも島田さんからのお誘いだったんですね。

小路　ええ。島田さんと酒井社長です。酒井代表から「古木選手を新しく取りたい」という話を受けて、「ぜひコーチ兼選手で、一緒にやってくれないか？」って。

――やっぱり古木さんを教えていくなかで、自分のなかでも格闘技をやりたいという思いが湧いてきたんですか？

小路　やっぱり触発された部分もありますし、古木選手は『Dynamite!!』であれだけ頑張ったので凄く僕も感動しましたし。

――そういう思いがあって、最後はやはり格闘技の試合で引退したいということなんですね。しかし、15年間の長い現役生活を振り返ってみて、いかがですか？

小路　いま思えば、凄くいい思い出ばかりですね。つらかった思い出も、いまは凄く、ああいうことがあったから勉強になったんだなと思うことがたくさんありますし。ありがたい経験たくさせていただきました。慧舟會時代も懐かしいですね。

――ちなみに、一番つらかった時期はい



しょうじ・あきら■1974年1月31日、富山県出身。PRIDEでは『PRIDE.1』から『PRIDE.34』まで参戦し続けた唯一のファイターで、ダンヘン、シュルト、ショーグンら数々の猛者と激闘を繰り広げた。その後『ハッスル』『SMASH』とプロレスのリングにも参戦。4月22日DEEP三崎和雄戦を最後に引退する。172cm、90kg。



手伝いもやってましたし、設営もずっとや

つぐらいだったんでしょう？

小路　一番つらかった時期ですか？……いまが一番つらいですかね（苦笑）。

――そうなんですか？（笑）。

小路　もう気持ちでカバーできなくなってきたというか（笑）。

――冒頭で岩崎先生に練習をつけてもらっているというお話でしたが、やっぱり厳しいんですね。

小路　そうですね。今年の1月にじつは秩父の三峯神社に、私も滝浴びに連れていっていただいて……。

［同席した岩崎が滝浴びの写真を見せる］

岩崎　これですよ。

――わーっ、凄い！　寒そうですねえ。

岩崎　三峯神社での滝浴びは毎年やってますからね。なので今回私が教えている小路選手や古木選手も連れていったんですよ。

――うわ～、となると、今回の引退試合はここまで気合いを入れて臨もうとされてるわけですね。

岩崎　やっぱり私は彼の引退試合を〝イベント〟にしたくないですからね。

――なるほど。

岩崎　彼の場合はいままでの実績であったりとか、どうしても興行側の論理としては盛り上げるために伏線を張るじゃないですか。でも、どう考えても三崎選手はいい選手で一線級の選手ですけど、勝負は勝たないといけない。そうなったときに、15年間闘ってきたというのは彼のブランドかもしれないけど、でもブランドがリング上でおまえを助けてくれるの？　って。そういう身も蓋もないことを毎日言ってるだけです。ガハハハハ！

小路　だからホントに合宿で「いままでぬるかったな」って感じました。やっぱり、

小路　山口さんは本当に凄いクリエイターだと思うので。社長には向いてないか

いまが一番つらいのは間違いないですね。

岩崎　でもね、彼はもう一生懸命頑張ってますよ。とくに正月明けてからはもう別人。だから本当に期待していただきたいですね。

――そういった厳しい練習を経て、最後の試合では何を一番見せたいですか？

小路　生き様です。もう自分は行くしかないですから。稽古してることをちゃんと貫き通して、絶対に勝つんだという強い気持ちを出していくというだけですね。三崎選手のほうが一線級でやってますけど、もうそういうのはおかまいなしの方ですから。行くしかないですよね。

――DEEPのリングでは三崎選手に対して「介錯人になってください」という言葉を使われてましたけども。

小路　あれはこの業界に未練がないように、すべてをスパッと出しきるという意味なんです。もう、全部出しきるから受け止めてほしいなって。

岩崎　「へんなことしやがったら、息の根止めるぞ」ぐらいの気合いで私も指導してますんでね。負けて岩崎に何言われるかわかんない、と。そう思わせることが私の役目ですよ。

――三崎さん以上の強敵かもしれないですね……。


岩崎　そうしたらあんまり三崎選手はイヤじゃないでしょ？


小路　そうですね。それにやっぱり僕の引退試合なんで、僕のために三崎選手がなかなかやりにくい試合を受けてくれて、ホントに意気に感じています。だから一生忘れない、大切な試合になると思います。

――観る側も心して観させていただこうと思います。期待しています！

【11年3月4日／都内・高田道場にて収録】

三崎和雄





4.22 DEEP 後楽園ホール
“最後の日本男子”継承マッチ後
ラストサムライがついに北米進出へ!!

海外で日本人の魂を見せるのがいまの自分の使命だと思う

**小路晃引退試合の相手を務めるため、三崎和雄が5年ぶりにDEEPの、そして後楽園ホールのリングに登場!
この思い入れのある一戦を終えたあと、三崎にはある大きな決意があるようだ。
日本格闘技界が混迷をきわめるなか、憂国のサムライがその胸中を語る!**

聞き手&撮影／堀江ガンツ　試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）

――4・22『DEEP53』後楽園ホール大会で、小路晃選手の引退試合の相手を務めることが決定しましたけど、率直にいまの気持ちはいかがですか？

三崎　小路さんの引退試合の相手を務めさせていただけるのは、凄く光栄ですね。小路さんというのは、僕が格闘技を始める前から憧れていた人ですし、生き方においても凄く僕の胸に届くものがありましたから。〝最後の日本男児〟と呼ばれていましたけど、本当にそのキャッチフレーズがふさわしい人だと思ってましたし、「いつかは自分もこういうふうに、人に何かを伝えられる選手になりたいな」って思っていましたから。

――小路さんは『PRIDE・4』で、ブラジリアン柔術の強豪であるヴァリッジ・イズマイウを倒して、日本人の強さを証明した先駆けですもんね。

三崎　そうなんです。日本に希望を与えてくれた選手ですからね。僕も格闘技を始めたばかりの頃は、ホントに雲の上というか、手の届かない存在として見てましたけども、それから「自分も同じPRIDEというリングに上がりたい」という気持ちにもなりましたし。小路さんというのは、それくらい特別な思い入れがある選手だったんですよ。

――そんなに前から思い入れのある選手だったんですか。

三崎　その小路さんと2006年に、PRIDEウェルター級GP出場の最後の一枠を争うかたちでDEEPで闘わせてもらって、そのときは自分がたまたま勝つことができて。トーナメントに出場でき、優勝したことで、いまがある。すべては、あのDEEPでの小路さんとの試合が分岐点だったし、あの試合なくして、いまの自分はないと思ってますから。

――ホントにターニングポイントだったわけですね。

三崎　だから小路さんだけじゃなく、DEEPの佐伯代表に対しても言葉にならないほどの思いがあるんですよ。

――あのときの三崎さんは、ホントに背水の陣というか、佐伯さんから〝最後のチャンス〟をもらったような感じだったんですよね？

三崎　そうですね。もうあとがなかったですから。いま考えれば自分の格闘技人生を問われるような試合でした。だから僕も必死だったし、小路さんは憧れの先輩ではありましたけど、「胸を借りるんじゃなくて超えるんだ」っていう気持ちで闘いましたね。

――では今回、試合が決まりましたけど、「いつか小路さんと、もう一度DEEPのリングで」という思いは前からあったわけですか？

三崎　それはハッキリと思ってましたね。数年前、小路さんが格闘技からプロレスにシフトされて、畑が変わってきたタイミングで髙田（延彦）さん、小路さんと食事をする機会があったんですよ。そのとき髙田さんに「小路の引退試合の相手はおまえしかいないぞ」っていうことを言われて。「それは僕からお願いしてでもやりたい試合です」って答えたんですよ。

――そんな約束が交わされていましたか。

三崎　ただ当時は、自分もSRC（戦極）に出始めた頃だったと思いますから、契約の問題もあるので「非常に光栄なんですけど、いますぐに返事はできないんです」ということも伝えて、保留にしてもらっていたんですね。それでも自分の気持ちだけは、佐伯さんにも伝えておいて。今回、あらためて佐伯さんから「ホントにできるか」という話をいただいたので、SRCサイドと話をして了解を得たうえで「お願いします」という返事をさせてもらったんです。

――では、数年越しの思いが実ったカードでもあるんですね。

三崎　そうですね。小路さんも僕自身もずっとそういう思いを抱いていましたからね。いま、日本人でやりたい相手ってなかなかいないんですけど、そのなかで小路さんだけは、どうしてもやらせていただきたい相手でしたから。いま日本の格闘技界もよくわからない状態になってますけど、このタイミングで小路さんと、DEEPの後楽園ホールで闘えるっていうのが、ホントになんとも言えないですね。いまから緊張してますから。後楽園ってホントに緊張するんですよ。

――大会場であれだけ大一番を経験してる三崎さんですけど、逆に後楽園のほうが緊張するんですか？

後楽園のあの逃げ場のない独特な雰囲気は、特別な緊張感があるんです

三崎　メチャクチャ緊張しますね。あの独特な雰囲気は、なんともいえない緊張感があるんですよ。ファンの皆さんは、もちろん後楽園の控室は見たことないと思うんですけど、あの狭い中での悶々とした空気っていうのは、ほかにないものですからね。

――敵も味方もあらゆる選手が、あの狭いスペースにいるわけですからね。

三崎　狭い通路で、これから闘う相手とすれ違うこともあるし。狭い中でアップするスペースもなくて、緊張で押し潰されそうになりながら、逃げ場はないんですよ。そういう独特な緊張感も含めて〝聖地〟なんだと思うんで。そこでまた小路さんと闘うというのは、ホントに感慨深いですね。当日はなんのしがらみもなく、自分の気持ちをぶつけたいと思います。

――そういった三崎選手の〝原点〟のような試合が決まった一方で、日本の格闘技界はSRCもDREAMも先が見えない状態ですが、それについてはどう思いますか？



4.22『DEEP 53 IMPACT』後楽園ホール大会で実現する小路晃vs三崎和雄の再戦。格闘技界を代表する"男"同士の対戦だけに、勝敗を超えた闘いが観られそうだ。



SRC（戦極）のリングで二度にわたる激闘を繰り広げたジョルジ・サンチアゴ。このライバルと、あの秋山成勲がいるオクタゴンへ三崎が参戦するのは必然なのか。



08年9月にストライクフォースに参戦し、ジョー・リッグスにTKO勝ちした三崎。ストライクフォースとの契約はまだ残っているというが、はたして今回のズッファによる買収によって、三崎の今後はどうなるのか？

日本人がナメられている現状にはムカつくし、ギャフンと言わせたい

三崎和雄

三崎　まあ、天気のようなものだって感じですかね。雨の日もあれば、晴れの日も雪の日もありますから。いまの日本格闘技界が雨なのか嵐なのかわかりませんけど、もしかしたら氷河期に突入してんのかな、とも思っちゃいますよね。でも、そんななかでも選手は日々練習して上を目指すっていうスタイルは変わらないですから。やっぱり夢は残さなきゃいけないと思うし。日本がダメなら外に出ていって、一旗揚げて戻ってくればいいだけだし。それによって、また日本が盛り上がればいいと思うんですけど、いまはことごとく〝門前払い〟されてる状態ですからね。

――日本人選手はなかなかアメリカで結果を残せない状況が続いていますよね。

三崎　ホントに言いたいことはいろいろあるんですよ。福田（力）の試合の判定なんて、ホントに「どうなってるんだ？」って思いますし。

――確かにあれはひどいですよね。選手は命懸けで闘ってるのに、ジャッジがああだと。

三崎　なんか日本人がナメられてることがムカつきますよね。岡見（勇信）なんて、挑戦者決定戦までやって勝ってるのに「なんで次のタイトル挑戦者は岡見じゃないの？」って思うし。そのへんは、よくわからないですね。そういう意味では、向こうに乗り込んでギャフンと言わせたいけど。へんな判定にされないためには、一本、KOで勝ってタイトルマッチまでたどり着くっていうのが、ホントにたいへんなことだっていうのはわかってますしね。

――あの層の厚さで、しかもアウェーですからね。

三崎　ただ自分的には日本人の姿、本物の日本人の魂というものを海外のリングでお客さんに見せたいなっていう気持ちはありますけどね。もちろん結果は大事ですけど、結果以上に自分の生き様を見せることが大事だと思うし。もし負けたとしても、それで自分の人生が終わりなのかっていえばそうじゃないし。だったら海外に行って、向こうのプロモーターやお客さんに、闘いというのは勝ち負けがすべてじゃないんだ、ということを伝えたいな、と思うんですよ。

――〝ゲーム〟ではない、格闘技の本質を見せつけたいというか。

三崎　そうですね。総合格闘技というのは、ルールも決まっているし、闘う場所も金網かリングかで決まっていて、競技でありゲームなのかもしれないけど。そこで闘っている人間の魂は、ある意味、殺し合いなんで。そういうものを見せられれば、あとは勝とうが負けようが結果はどうだっていい。不愉快な判定で負けようが、反則負けにされようが、その場所で命懸けの闘いをしたという事実が、観ている人たちに伝わればいいと思ってますから。

――いまアメリカのMMA界は巨大な市場になっていて、選手のレベルも凄く上がっていますけど、格闘技の本質という意味では「ちょっと違うんじゃないか」という思いが強いわけですか？

三崎　いろんな意味合いがありますけど、UFCは非常に賢いなとは思いますね。ただ、「それだけじゃない」という思いは当然ありますけどね。

――三崎さんはストライクフォースから、ずっとラブコールを受けていましたけど、いまはUFCという舞台で闘う意識もあるわけですか？

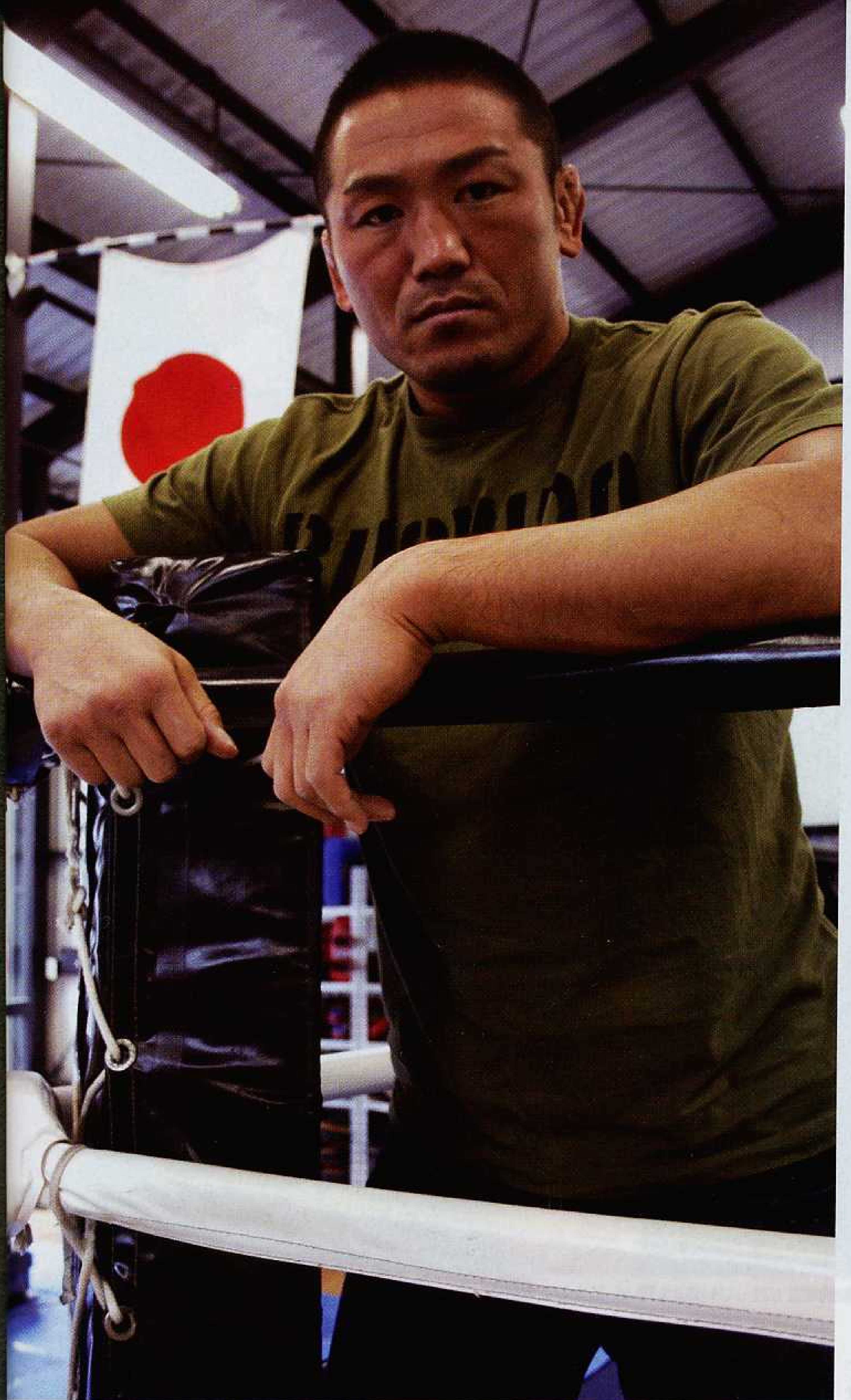
三崎　UFCでもいいですし、もちろんストライクフォースでもいい。舞台はどこでもいいんです。僕自身を待っていてくれているというか、自分を懸けられる舞台があればどこでも。だから海外じゃなくて、もちろん日本で闘うという選択肢もあったんですけど、自分が日本でもう一度闘わなきゃいけない相手がUFCと契約しちゃいましたからね。

――二度にわたる壮絶な闘いを展開したジョルジ・サンチアゴですよね。

三崎　やっぱり、いまの自分の立場というのは、追われる立場じゃなくて、追う立場なんで。その相手が行ってしまったなら、追いかけるしかないし。ただ、いますぐ闘わなきゃいけないわけじゃないんで、自分が生きた証を刻める場所であれば、どこでもいいと思ってますね。

――海外に出たなら、もちろんベルトを狙いたいという気持ちもありますか？

三崎　やっぱり海外でベルトを獲って「日本人は強いんだ」ということを見せられれば、それが一番いいとは思ってますけど。それだけじゃなく、もう単純に日本人の魂を伝えるというのが自分の役目、使命じゃないかな、と。応援してくれる人たちの期待には応えたいと思ってますけど、海外で日本人の魂を見せる、それこそが自分がはたさなきゃいけない本分なんじゃないか、と思いますね。



みさき・かずお■1976年4月25日、千葉県出身。01年にパンクラスでデビュー。04年から『PRIDE武士道』に参戦。06年のPRIDEウェルター級GPでは、敗者復活で勝ち上がり見事に優勝。PRIDE活動休止後、『やれんのか！』での秋山成勲戦で大ブレイク。その後は戦極（SRC）のリングで活躍。178cm、83kg。

自分の本当の役割をはたすためには海外という舞台が必要だと思う

三崎和雄

――UFCやストライクフォースなど、海外で闘うにあたって、契約的には大丈夫なんですか？

三崎　それはもう、ノープロブレムです！

――では、いつでも海外出撃準備OKだ、と。

三崎　そうですね。でも、その前に小路さんとの試合がありますから。いまは、その試合に向けて全力を傾けるだけですけどね。最近、格闘技を見始めた人のなかには、小路さんの強さを知らない人もいるかもしれないですけど、小路さんはホントに強いですからね。引退試合とはいえ、一つも気は抜けないと思ってるんで。

――小路さん自身、引退試合に向けてもの凄い練習しているみたいですしね。

三崎　やっぱり最後の試合となれば、本気の勝負でしょうし、自分も簡単な相手だとは思ってないです。ただ、小路さんが安心して日本の格闘技から去れる試合にしたいと思っていて、そのためには圧倒的に勝たなきゃいけないと思ってるんで。自分もキツい練習してきましたけど、残りの時間、さらに追い込んで、当日のリングに立とうと思ってますね。

――じゃあ、また小路さんとの試合が、三崎さんにとってもターニングポイントになるかもしれないですね。

三崎　そうですね。もう日本で次にいつ試合ができるかわからないですからね。

――そんな状況ですか。ということは、三崎さんクラスですら、SRCからは次はいつ頃になりそうだ、という話はないわけですか？

三崎　全然ないですね。それでも、もちろん日本の格闘技がなくなってしまうなんてことは絶対にないと思うし、メジャーな舞台もちゃんと続いていくとは思うんですよ。でも、自分はずっと日本でやってきたんで、これからの残り少ない格闘技人生、自分の本当の役目をはたすためには、海外の戦場が必要だな、と思ってますね。

――では、ある意味、4月22日の小路選手との試合は日本での集大成の試合でもある、と。

三崎　それぐらいの気持ちで臨むつもりです。最初にも言いましたけど、小路さんは日本で闘いたい、数少ない選手の一人ですから。まあ、ホントはほかにも、日本に闘いたい相手がいますけどね。

――どうしても闘いたい相手……とは？

三崎　まあ、名前はいいでしょう。とにかく小路さんと目一杯闘って、あとは自分の使命をはたしたい。いまはそういう気持ちですね。

【11年3月7日／都内・足立区「タンタン・ファイトクラブ」にて収録】

特集

八百長

「この八百長野郎！」と誰かが言ったかどうかは知らないが、今回の特集は〝八百長〟である。2月に発覚した、大相撲の力士が勝ち負けや取組内容を事前に携帯メールで連絡していたとされる問題は、〝国技〟の根幹を大きく揺さぶる大騒動になった。

日本相撲協会は公益法人として適正なのか。相撲は競技なのか、神事なのか。そもそも競技と神事は完全に相反するものなのか。さまざまな人がさまざまな意見をぶつけ合うなかで、あらためて八百長を広い意味で考えてみたいと思うのだ。

八百長の意味をネットの『goo辞書』で調べてみたところ〈勝負事で、前もって勝敗を打ち合わせておいて、うわべだけ真剣に勝負すること。なれあいの勝負〉〈なれあいで事を運ぶこと〉と書かれてあった。まあ、たしかにそういうことだろう。

競技において〝前もって勝敗を打ち合わせておく〟のが完全な不正だというのはわかる。しかし一方で〝なれあいの勝負〟とはどこからどこまでのことをいうんだろうか。徹頭徹尾、手を抜かずに勝利に向かって一直線に前進する。それが勝負の基本だ。でも、あくまでも基本であって応用も存在するわけである。格闘技を観ていると〝応用編〟はしばしば観られるのだ。

たとえば……実力差のある試合で、いつでもノックアウトできるのに来るべき大勝負に備え、実戦におけるスタミナをチェックするためにあえて倒さず、フルラウンド闘った選手はどうなんだろうか。寝技を試したいという理由から、得意の打撃を封印した選手は？ 〝なれあい〟とはいかないまでも、全力で勝負していないことになってしまわないだろうか。その逆に、あえてリスクを冒してでもKO・一本を狙う場合はどうだろう。いや、〝あえて〟ではなく、勝つためにはそれしかないと信じて闘う選手だっている。

本を狙う場合はどうだろう。いや、〝あえて〟ではなく、勝つためにはそれしかないと信じて闘う選手だっている。

あるいは、勝負においては敗者が喝采を浴びるということもある。かつてのPRIDEなど、主催者サイドがつまらない判定勝ちよりも、アグレッシブに闘ったうえでのKO・一本負けのほうを評価する場合もある。となると、勝敗は絶対的な価値ではないのか。ひたすら勝利を目指すことに意味はなくなってしまうのか。〝負けっぷりのよさ〟が評価されてファイトマネーが上がったり、試合の機会が増えたりしたら……。

ちょっと極端な表現を使ってしまったかもしれないが、言いたいのは〝真剣勝負にも幅がある〟ということだ。まったく同じ試合内容でも、シチュエーションによってたたえられることも批判されることもある。

勝負とは、勝つか負けるか、白か黒かという単純なものではない。〝勝利に向かって一直線〟から〝前もって勝敗を打ち合わせておく〟のあいだには大きなグレーゾーンが広がっているのだ。そこまでがよくてどこからがダメなのかは、主観でしかないだろう。真剣勝負の〝真剣〟という感覚にすら濃淡があってもおかしくはない。

〝八百長〟をキーワードにすることで、格闘技のおもしろさや複雑さをあらためて考えることができると思う。何がよくて何がダメかを考えることは、それぞれの格闘技観を問い直すことにもつながる。もしかすると「事前に勝ち負けが決まってたって、おもしろければそれでいい」という人がいてもおかしくはない。

八百長について考えることは、すなわち勝負について考えることだ。相撲、格闘技、そしてプロレス。そこで繰り広げられている多様な〝勝負〟のありようを、この特集から味わっていただきたい。

橋本宗洋


玉袋　今日も椎名おせえなあ。

玉袋　おいおい、それも忘れちまっ

玉袋　で、今日のテーマは?

ガンツ　プロレスに裏切られたトラ

かっていうのが燃えるんだよな。だ



八百長野郎!

いまこそ〝八百長〟を誇るときが来た!?

浅草キッドの玉ちゃんと語る!

八百長変態座談会

「相撲もプロレスも知らねえコメンテーターが、八百長を語るんじゃねえ!」
大相撲八百長問題について、ワイドショーを中心に識者がしたり顔で語る現状に
変態たちが立ち上がった!　幼少の頃からプロレスファンというだけで、
「八百長」という言葉と闘い続けてきた男たちが、いまこそ八百長への愛を語る!!

構成／堀江ガンツ

「八百長がダメだ」って言ったらテレビ番組もみんななくなるよ！

玉袋　今日も椎名おせえなあ。

ガンツ　すでに約束の時間から15分すぎてますね。ちょっと電話かけてみますね。

玉袋　おう、頼むよ。俺も前回、打ち合わせが長引いて遅れちまったから、あんまり人のこと言えないんだけどな。

ガンツ　（電話をかけて）もしもし、椎名さんですか？　……今日ですよ。もう始まってます。すぐ来てください！

玉袋　いま、どこにいるって？

ガンツ　まだ自宅で、完全に忘れてたみたいです（笑）。

玉袋　おいおい、こりゃ来るの1時間後だろ。しょうがねえ、待つしかねえか！

（※1時間15分経過）

椎名　すいませ〜ん！　ホントにごめんなさい！

玉袋　午後5時に加賀屋で待ち合わせが、もう6時半だもんなあ。いちおう俺もスターだからさ、1時間半も営業に出たら、いくらかもらえるんだよ？　その時間が単なる待ち時間とはなあ。

椎名　ごめんなさい。すみません。

玉袋　この変態座談会もこのたび一冊の本になることが決まり、イベントも開催する。その決起集会に遅れちゃならねえよな〜。

椎名　えっ!?　イベントやるんでしたっけ？

玉袋　おいおい、それも忘れちまってるのかよ。

ガンツ　4月2日に北沢タウンホールでやる『kami-pro BOM-BA-YE』の"メインイベント"が僕らの変態座談会ですよ！

椎名　ああ、そっか！　聞いてたわ。

玉袋　頼むぜ、椎名！

ガンツ　では、『浅草キッドの玉ちゃんと語る 俺たちのプロレス変態座談会』の購入と、イベント『kami-pro BOM-BA-YE』へのご来場お待ちしております、ということで本題に入りましょうか。



椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌の好評長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみ、変態座談会癒しの重鎮。構成作家、放送作家。血なまぐさい闘いや、衝撃の結末が大好きな遅刻王。

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の43歳。ご存知、浅草キッドの片割れ。子どもの頃から蔵前国技館に通った変態プロレスエリート。スナック探求もライフワークとしており、毎月『スナック玉ちゃん』開催中。

堀江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の37歳。変態座談会主宰者。子どもの頃から変態的プロレスファン&格闘技ファンとしてならし、UWF研究家を自称。ストライクフォースがズッファに買収されて唖然。

玉袋　で、今日のテーマは？

ガンツ　え〜、今回は「八百長変態座談会」として行なわせていただきます！

玉袋　変態に八百長を語らせたらうるさいよ！

椎名　俺たちは小さい頃から、「プロレスは八百長だぞ」って言われて、それと勝手に闘ってきましたからね。

玉袋　まず親父に「プロレスは全部八百長だ」とか言われるんだよな。

ガンツ　あれはなんなんですかね。息子が大好きなものを親が腐すという（笑）。

椎名　なんか親もさあ、気づいた瞬間があったのかな。木村（政彦）vs力道山のときとか。俺らが、髙田vsヒクソン戦で受けたショックみたいなのが。

ガンツ　プロレスに裏切られたトラウマですか。

玉袋　もしそうだとしたら、自分が力道山時代に受けたトラウマを自分の子どもにも同じように味わわせるっていう。凄いバトンタッチだな。

椎名　八百長のバトンタッチ（笑）。

ガンツ　嫌なバトンですね（笑）。でも、日本でテレビ放送が始まって、これだけ「八百長」という言葉が連呼されたのは、今回が初めてじゃないですか？

玉袋　そうだろ。「八百長」っていうのは、業界の人はみんな知ってるけど、テレビの電波に乗っけちゃいけない言葉でもあるからね。楽屋で言う言葉だもん。

ガンツ　もしプロレス会場で言ったら、北尾光司がSWSを一発解雇されるくらいの言葉ですからね（笑）。

玉袋　あの北尾がクビになったのは90年代だろ？　だから「八百長」って言葉にアレルギー反応がなくなったのって、意外とここ最近なんだよな。

ガンツ　もともとケーフェイ的なことは、一番触れちゃいけないことでしたからね。

椎名　初期『kami-pro』って、90年代にヤオガチ論争を扱うっていうのが、雑誌のアイデンティティとしてあったでしょ。「プロレスはホントに強いのか？」っていうのが、PRIDEを大きく扱うきっかけだと思うし。そんななかで菊田（早苗）の問題発言があったりね。

ガンツ　「天山、小島はロクな死に方をしない」と言ったとか言わないとかいう話（笑）。

玉袋　そのホントなのか、ウソなのかっていうのが燃えるんだよな。だいたい「八百長はダメだ」なんて言ったら、テレビ番組から何から、みんななくなっちゃうよ。

椎名　いまはバラエティ番組でも「やらせ」とか言われるもんね。

ガンツ　いまの番組は、やたらヘンな但し書きがつきますもんね。

玉袋　あれって興ざめだよなあ。そんなのはわかってるっつうんだよ。こっちは全部わかって観てんだから。『○○○○○○』をみんな一生懸命観てた時代だってあるんだから！　ジュリーが『勝手にしやがれ』で大賞を獲るかどうかでドキドキしてた時代があるんだよ。

ガンツ　受賞者の名前が封筒に密封されてるのがいいですよね。真剣勝負に見せる演出（笑）。

椎名　まさにプロレスだよね（笑）。

玉袋　でも、たまにガチンコでひっくり返ることがあるから、またおもしれえんだよ。『○○○○○○』で、ホントは大賞獲るはずだったのに、ひっくり返された○○○○○のマネージャーが、スタッフに殴りかかったことがあるんだから。

ガンツ　文字どおりコブシが効いちゃって（笑）。

玉袋　そんな話があんだよ。

ガンツ　そういう裏の攻防も含めて勝負なんですよね。

玉袋　裏の攻防まで楽しめたら最高だよ。それをいまは「やらせだ」「コンプライアンスだ」って言うんだよな。でも、人間が生きていくなかでは八百長なんていっぱいあるわけじゃないか。だからこそ「みなまで言うな」って言葉があるんだからさ。

ガンツ　それを暴いて幸せがあるのかってことですよね。

玉袋　うん。そりゃ暴くところを見たい部分もあるんだけど、それが正義っつうのはいかがなもんかと思うんだよな。最近騒がれたカンニングの子どもだって、あんなに殺人犯みたいに言われることはないんじゃないの?『ザ・カンニング』って映画もあったぐらいなんだから。あれだと思えばいいじゃない。

椎名　ホントですよね。どうせ落ちちゃうんだからね。

玉袋　俺も正直に告白すると、セイコーのデータを入力できるデジタル時計があって、高校時代、それに全部の公式を入れといて、ずっ～っとデータ流しっぱなしで簿記のテスト100点取ったもん。工業簿記の。

椎名　ある意味、頭がいい（笑）。

玉袋　生きる知恵だよ。あんまりほめてもいけねえんだけどよ。家庭環境も聞いてみればね、お父さんが早くに亡くなってたり、お母さんを助けたいがために早稲田に受かってるけど京大に受かりたいって気持ちがあたっていうさ。タイガーマスクだよなあ。

ガンツ　一歩間違えたら美談ですよね。

玉袋　それで、テレビでもよ「知恵袋、知恵袋」って言ってて、それ聞くたびに、俺のことかと思うよ。

ガンツ　NHK用の芸名「知恵袋賢太郎」ですね（笑）。

玉袋　だからよ、いまはなんか魔女狩りが横行してるような気がするんだよな。相撲だってよ、八百長を含めて観てるところがあったんだからさ。"キックの鬼"沢村忠だったそうだろ? 三冠王を達成したときの王貞治を押さえて（73年の）日本スポーツ大賞獲っちゃってるんだから。

椎名　○○○○は国民栄誉賞ですからね。

ガンツ　でも、沢村忠の真空跳びヒザ蹴りの映像観ると、ホントに素晴らしい芸術ですよね。

玉袋　芸術だよ。スゲエよ。日芸出身だからな。だけどあの戦績みてみろ、200何十勝して5敗だよ。どんなやつだよ、それ。

ガンツ　プロレスラー以上ですね（笑）。

玉袋　結局、沢村忠が引退したあと、表舞台からいっさい姿を消したっていうのは、そういう部分があったんじゃねえかな。

椎名　うしろめたさが。

玉袋　だから、いまの八百長論で沢村忠にインタビューしてみてえよ。

ガンツ　とくに昭和のプロ格闘技に、エンターテインメント性は常につきまとうわけですからね。

椎名　また相撲って、八百長やってもなかなかわかんない競技だよね。転がりゃ負けなんだから。

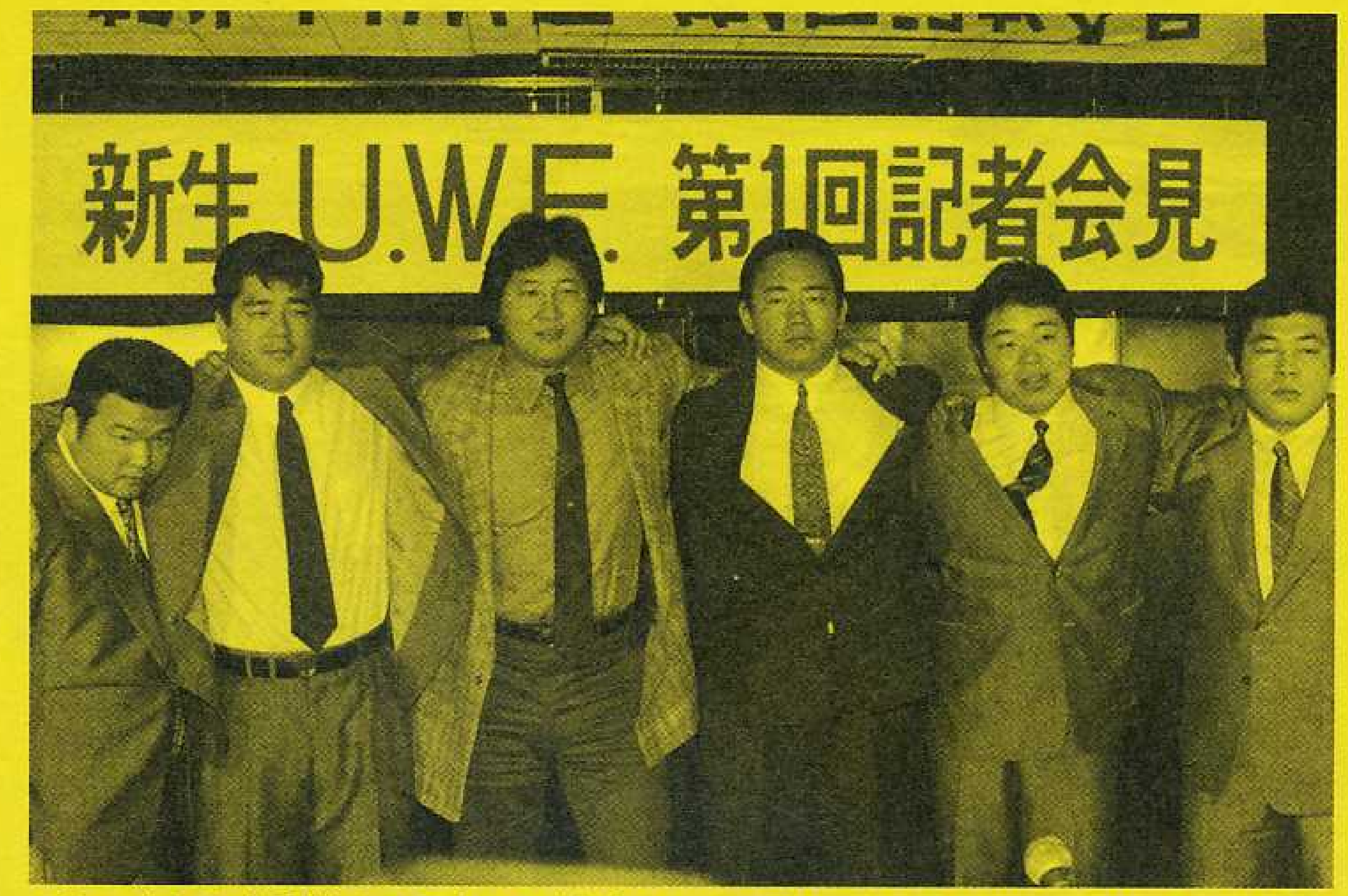
玉袋　"リングアウト"でいいんだからな。

椎名　叩きのめされるわけじゃないからね。

玉袋　だからよ、メールが出てきてから「八百長だ」とか騒いでる連中に言いてえよ。「だったら、相撲観てるときに八百長を見抜いてみやがれ」って。それさえもできねえ輩が何言ってるんだって話だよ。

椎名　相撲を観てないヤツが言うから腹立つんだよね。

玉袋　そ～うだよ。へんなコメンテーターとかよ。全然、相撲なんか観ねえ女が偉そうに語ってたりするからな。こっちは八百長を許してんだから。女の人の化粧だってシミとか隠してるわけだから、言ってみれば



スポーツとして、格闘技としてのプロレスを標榜したUWF運動。これは間違いなく、プロレスが「八百長」と呼ばれ続けたことから生まれてきたものだと言えるだろう。

お笑いだってホントの実力者はガチができる"プロレスラー"だよ

八百長だろ? セックスで感じてねえのに、感じたフリしてるのだって八百長じゃねえか。それ込みでこっちは楽しんでるんだから。

椎名　でも、今回の八百長報道によって、ガチンコ横綱である貴乃花が、またガッと存在感を増してきた気がする。

玉袋　それを言ったら、大乃国だって戦績を見たらそうだよ。

椎名　千代の富士を53連勝でストップさせたもの大乃国ですよね。

玉袋　でもよ、ガチンコだけじゃなくて、八百長込みだって強い人はいっぱいいるんだよ。たとえばルー・テーズはホントにメチャクチャ強かったって言うからね。○○○○はルー・テーズなんじゃねえかな。

ガンツ　強くてしかも客が呼べる。真のグランドチャンピオン。

椎名　あとは土俵外っていうか、睨みの強さも必要でしょ?

玉袋　だから、そっちも込みで言うと、ハーリー・レイスが一番つええんじゃねえかな。

椎名　シュートも強くて、裏の顔も強い。トップってナメられたら終わりだから、そうですよね。

ガンツ　だからプロレスのチャンピオンとか、相撲の横綱って凄いんですよね。強いのはあたりまえで、団体に所属するすべての人たちの生活を背負う顔でなくちゃならないという。

玉袋　背負ってるもんが違うよな。

椎名　しかも、みんなが蹴落とそうとしてる世界で、上に君臨するってホントの意味での実力者だよね。

玉袋　だから（笑福亭）鶴瓶さんみたいなもんだよな。若手と一緒に出たら花持たせてくれるんだけど、ホントにやらせたら鶴瓶さんが強いんだよ。残ってるビッグな人はみんなそうだと思う。

ガンツ　シュートが強いから、ワークがうまい、みたいな。

玉袋　○○○ちゃんだってそうだぜ。いっとき松本（人志）さんがエッセイで○○ちゃんを攻撃したじゃない。俺もあの頃は、確かに○○ちゃんの何がおもしろいかわからなかったよ。でも、でも、いま闘ったら強いからね。えれえ強えよ。

椎名　海千山千だから強いってことですよね。

玉袋　えげつねえことやったって全部返してくるしさ。強いよ。

ガンツ　相手がワルツで来たらワルツ、ジルバで来たらジルバを踊るニック・ボックウィンクルのように（笑）。

玉袋　ホントそうなんだよ。殿（ビートたけし）なんかもガチ信奉者なんだけどよ、自分のバラエティ番組のなかじゃプロレスやってるからね。ということは、みんなガチもできてプロレスもできるってことで君臨してるんだと思うんだ。

ガンツ　そう考えると、単なる競技

めて観てるところがあったんだから

玉袋 "リングアウト"でいいんだか

隠してるわけだから、言ってみれば

う。

ガンツ そう考えると、単なる競技

「熱湯風呂」で火傷しなかったら "八百長だ"って言うのかよ！

のチャンピオンより、プロレスの世界王者や、相撲の横綱のほうが総合的に凄い人だって思いますよね。

玉袋 ただ、そのプロレスラーのトップが、ホントにガチンコ勝負したらどうなるんだっていうことに白黒つけたのが髙田なんだよな。あれから一時、俺たちもプロレス的なもの、そのジャンルを捨てちゃった悪い時期があったよね。いまなら「それは悪かった」って謝るよ。でも、あのときはプロレスってジャンルに白黒つけたかったんだよな。知りたかったんだよ。ドレッシングルームで強いっていうだけじゃなく、実録で観たかったっていうのもあったよ。

ガンツ その影響は甚大でしたけど、髙田vsヒクソン戦によって、プロの総合格闘技というものが成立して、またプロレスも生まれ変わるチャンスを得たとも言えますしね。

玉袋 だから完敗を喫したけど、実測に出ていった髙田はかっこよかったんだよ。

椎名 今後のことで考えると、相撲はどうなるんだろうね。プロレスがPRIDEに変わったように、ガチでガンガンやっていくのかな。

玉袋 そしたら、まず場所数を減らすんだろうな。

椎名 やっぱり6場所は多いですよね。以前は4場所だったんだから。

玉袋 でもよ、相撲の今後とか、改革案みたいな話になったときスポーツジャーナリストの○○○あたりに入ってきてほしくないね。

椎名 したり顔で語るんですよね。

ガンツ どんな顔ですか（笑）。

椎名 良識派ぶって出てきてさ、もっともらしいこと書こうとするんだけど、実際はなんにも書いてないようなもんでしょ。ポエムみたいな、コンプライアンス文章ばっかりでさ。

ガンツ ワイドショーなんて、「相撲に興味ねーだろ！」っていう人ほど、八百長問題語りたがる気すらしますからね。

椎名 女のタレントとはムカつくよね。わかってたまるか！って思う。俺なんて相撲好きだから、これから相撲がガチでやるなら、凄いことになるって思ってるんですよ。

ガンツ 本場所が再開されたら、観に行きたいですよね。

椎名 だって相撲の特訓はひどいよ！

玉袋 相撲の稽古はホントすげえんだよな。

椎名 新弟子が入門してすぐの頃って、頭が全部、真っ黒になっちゃうんだって。内出血で。

玉袋 うわ〜！

椎名 ガンガン柱に当たるから。

玉袋 それを中卒で15歳とかのヤツがやってるのがすげえよ。

椎名 だから普通の人たちの常識で計っちゃいけないんですよ。

玉袋 年がら年中、フンドシ一丁で勝負してるんだぜ。プロレスだってパンツ一丁だもんな。そういう人たちのことをコメンテーターあたりが語ってほしくないね。

椎名 相撲部屋って男だけの世界じゃん。ちょっと入門したくなかった？



プロレスにとっての巨大なターニングポイントになった『PRIDE.1』での髙田延彦vsヒクソン・グレイシー。ここから完全ガチンコのMMAへと時代は移っていくことになる。

玉袋 稽古やって、ちゃんこ食って、どんぶりでビール飲んでるのがいいんだよ。

椎名 それを回しちゃったりなんかして、ちょっと修学旅行みたいな。

ガンツ 我々が新日本プロレス道場に憧れたのと一緒ですよね。

椎名 そうなの。それはワイドショーに出てる女にはわかんないよ！

玉袋 わかってたまるかよお。

ガンツ ただ、その特殊な世界の人たちがやることだって言っても、八百長がメールでバレるっていうのはしょっぱいですよね。

玉袋 しょっぺえ、しょっぺえ。

椎名 その点、プロレスのほうが凄いよね。バックステージの簡単なやりとりだけで、20分、30分の試合を成り立たせてるんだから。

玉袋 そうやって客を手のひらに乗せて、東京ドームを何回一杯にしたと思ってんだってことだからな。

ガンツ それで何十年も観客を惹きつけてるわけですからね。プロレスはやっぱり凄いですよ。

玉袋 すげえ。そりゃ、なかなかデビューできないよ。たけし軍団だってそうだからね。熱湯風呂って言ったって、そりゃ100度のお湯に入ってるわけじゃねえから、「八百長だ」って言うヤツもいると思うんだよ。でも、ぬるくてもダメで、ちゃんと熱くてギリギリ耐えられる温度があるわけよ。

椎名 笑える温度が設定してあるんですね。

玉袋 それをわかんねえADとかがさ、マジで熱い80度にしてたりすることがあるんだよ。そんなの入れるわけねえじゃん。

ガンツ 絶対に火傷しますよね。

玉袋 こっちはしゃぶしゃぶじゃねえんだから、無理だよ。ADがプロレスをわかってねえんだよな。

椎名 そんなことあるんすか、危ないっすね。

ガンツ 熱湯風呂っていうのは、プロレスのデスマッチと同じですよね。危険だけど、致命傷にはならないという。

玉袋 そうなんだよ。でも、松尾（伴内）さんはホントに80度のお湯でやってよ、風呂に入らないで20分もたせたからな。

ガンツ 入らないという芸で。

玉袋 それも芸だぜ。入ったあとのリアクションで笑わせる熱湯風呂で、風呂に20分入らないで笑わせた松尾さんにはシビれたよ。「熱湯やらせたら、この人は日本一だ」って思ったね。これを「八百長」って言うのか？

椎名 プロの技術ですよ！

玉袋 そうだろ？

ガンツ なんか、プロレスがゴールデンタイムを外れたことは、日本にとってよくないことなんじゃないか、とすら思いますよ（笑）。いまはプロレスがわからない人が多すぎる。

玉袋 白黒しかつけられねえんだよ。グレーもあったり、ときには全然違う色に見えたりしていいんだから。

椎名 グレーっていうのは、簡単にわかるもんじゃないから、興味がつきないよね。

ガンツ だからミスター高橋本が出たあと、過去のプロレスについても

八百長 変態座談会

ディズニーランドだって八百長だ。みんな国技館や後楽園に行け！

う一回、興味が出ませんでした？

玉袋　出たよ。で、「やっぱりスゲエ」っていう。同業者である上田馬之助が怒るのは当然だけどよ。俺たちは、高橋本を読んだことで馬之助のホントの凄さを知ることもできたんだよな。

ガンツ　上田馬之助、マサ斎藤、ラッシャー木村とか、大人になってから、そのホントの素晴らしさに気がついて、より好きになりましたよね。

玉袋　最高だよ。そしてガイジンレスラーっていうのも素晴らしいよ。俺、スタン・ハンセンと対談したとき言ったんだから。「俺たちは『荒野の七人』のメンバーよりあんたらのほうが好きだ」って。「あんたらのほうが名優だよ。（スティーブ・）マックイーンがいようが、（ジェームズ・）コバーンがいようが、ユル・ブリンナーがいようが、あんたらのほうが上だ」って言ったら、喜んでたよ～。

椎名　カウボーイ冥利につきる（笑）。

玉袋　それぐらい俺たちにとって身近でありながら憧れる外国人スターだったわけだからな。

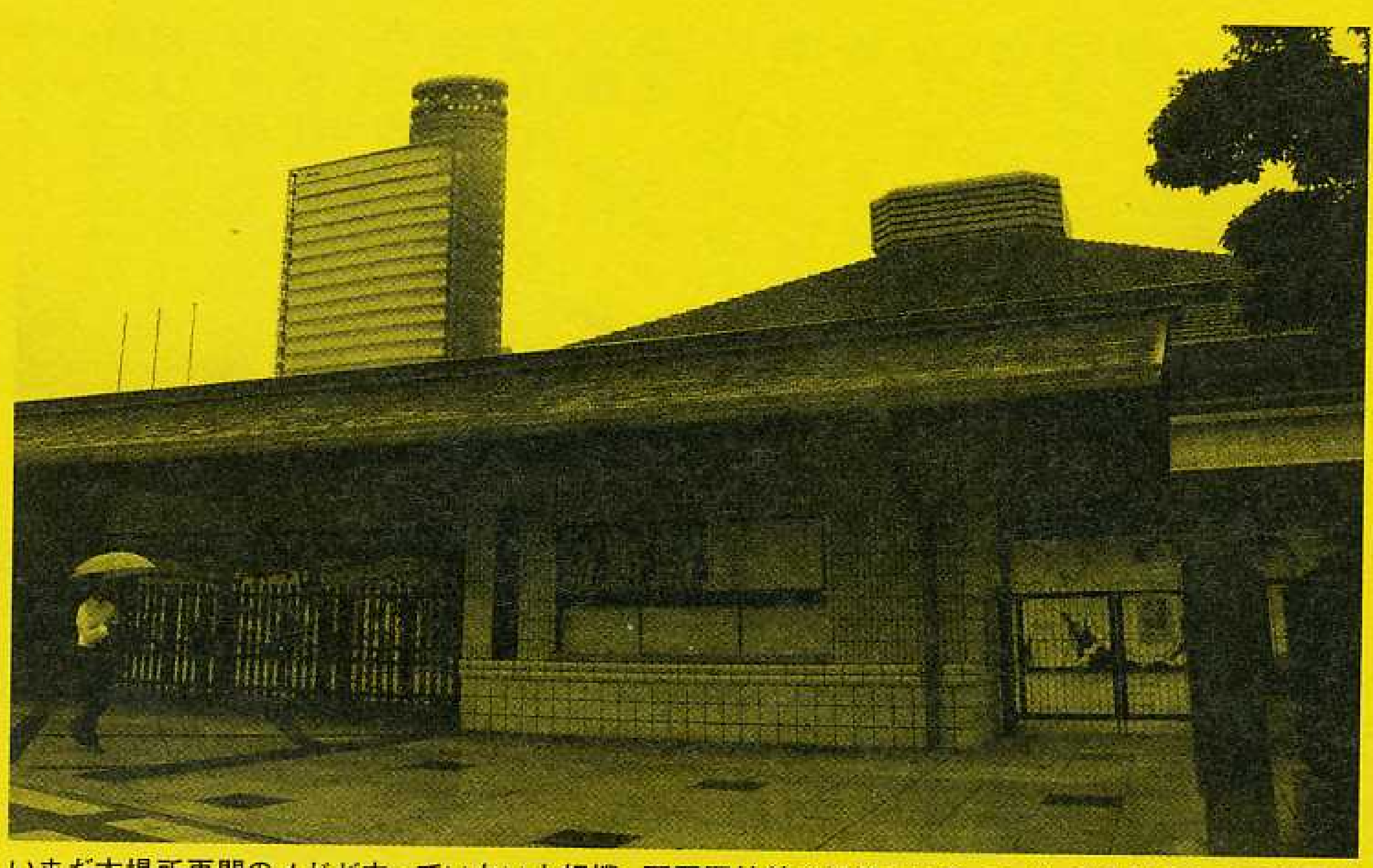
椎名　あ～、このロマンがわからない女が憎い（笑）。

ガンツ　なぜか女を目の敵に（笑）。

玉袋　でもよ、いまは女だけじゃなくて、全体が見れなくなってる人が多いから、俺たちプロレス変態が啓蒙活動していかなきゃならねえんじゃないかと思うよ。10代のいまの子たちに教え込むっていうね。それは大事だと思うよ。

ガンツ　八百長があるからすべて悪いじゃなくて、力士やプロレスラーがどれだけ凄いかってことですよね。横綱なんて、ホントになかなかなれるもんじゃないですからね。

玉袋　なれないよ～。歴代で69人しかいねえんだから。



いまだ本場所再開のメドが立っていない大相撲。両国国技館で相撲という、スポーツを越えたものが再び観られるのは、はたしていつになるのか。そして相撲はどう変わっていくのか。

ガンツ　オリンピックの金メダリストなんて何百人、何千人といますけど、横綱はそんだけですからね。その地位に誰がなるのかっていう争いは、ガチンコですしね。

椎名　それに八百長で星を売るっていってもさ、今回の報道見たら上位陣が幕下に勝つために70～80万円払うらしいよ。

玉袋　その金額がガチだよな。

ガンツ　普通にやっても70パーセントは勝てるだろうっていう相手に、100パーセント勝つために80万円かける。

椎名　金持ってるヤツが有利ってのが、またシビアでいいよね。

玉袋　そりゃ、手金があるヤツが強いよ。それも含めて人生なんだから。いまこそプロレス、相撲だよな。

椎名　この文化が衰退しないようにするにはどうしたらいいんだろう？

玉袋　カミングアウトっていうのも一つの選択肢だよな。

ガンツ　それによって、大人は裏の裏まで見て、子どもはサンタクロースを見るという仕組みですよね。

玉袋　俺が納得いかねえのはよ、プロレスや相撲が「八百長だ」って言われて、ディズニーランドの八百長は許されてることだよ。着ぐるみの八百長は許して、相撲をとやかく言うんじゃねえって！

椎名　そうなんですよ！　女ってヤツは！

玉袋　ディズニーランドの「ファンタジー」っていうのは、変態的目線の言葉に置き換えたら「八百長」のことだろ？　「夢の国だからファンタジー」で相撲だったら八百長だって冗談じゃねえ。俺たちにとって相撲やプロレスこそ、夢とロマンの国なんだから！

ガンツ　こっちはどんなに迫害されても「プロレスファン」っていう人生を送ってるんですからね。相当でかい夢ですよ。

玉袋　あっちの着ぐるみは、プロレスのマスクマンと一緒だろ？

椎名　それなのに「中に人なんか入ってない」とか言うんですよ。バカじゃねーかって！（笑）。

玉袋　きっとドナルドダックの中に入ってるのは「田中さん」だったりするんだよ。でも、それは言っちゃいけねえ。ところが、こっちは言っちゃいけねえはずのマスクマンの正体を「おまえは平田だろ！」って言っちゃうんだから！

ガンツ　ダハハハ！　ミッキーマウスがドナルドダックに対して「おまえは田中だろ！」って言うのかって話ですよね（笑）。

玉袋　言わねえよな（笑）。こっちのプロレスランドにはアニメのキャラクターより、よっぽど個性的なキャラクターが揃ってるんだから。ジャイアント馬場がいたり、ブッチャーがいたりするんだから。

ガンツ　まさに〝闘いのワンダーランド〟ですよね。

椎名　古舘語録良かったよね～、いまはあんなふうになっちゃったけど（笑）。

玉袋　とにかくディズニーランドより、相撲ランドとプロレスランド！　両国国技館と後楽園ホールに行け！　八百長うんぬんを語るのはそれからだってことよ！

【11年3月4日／都内・『加賀屋』中野坂上店にて収録】

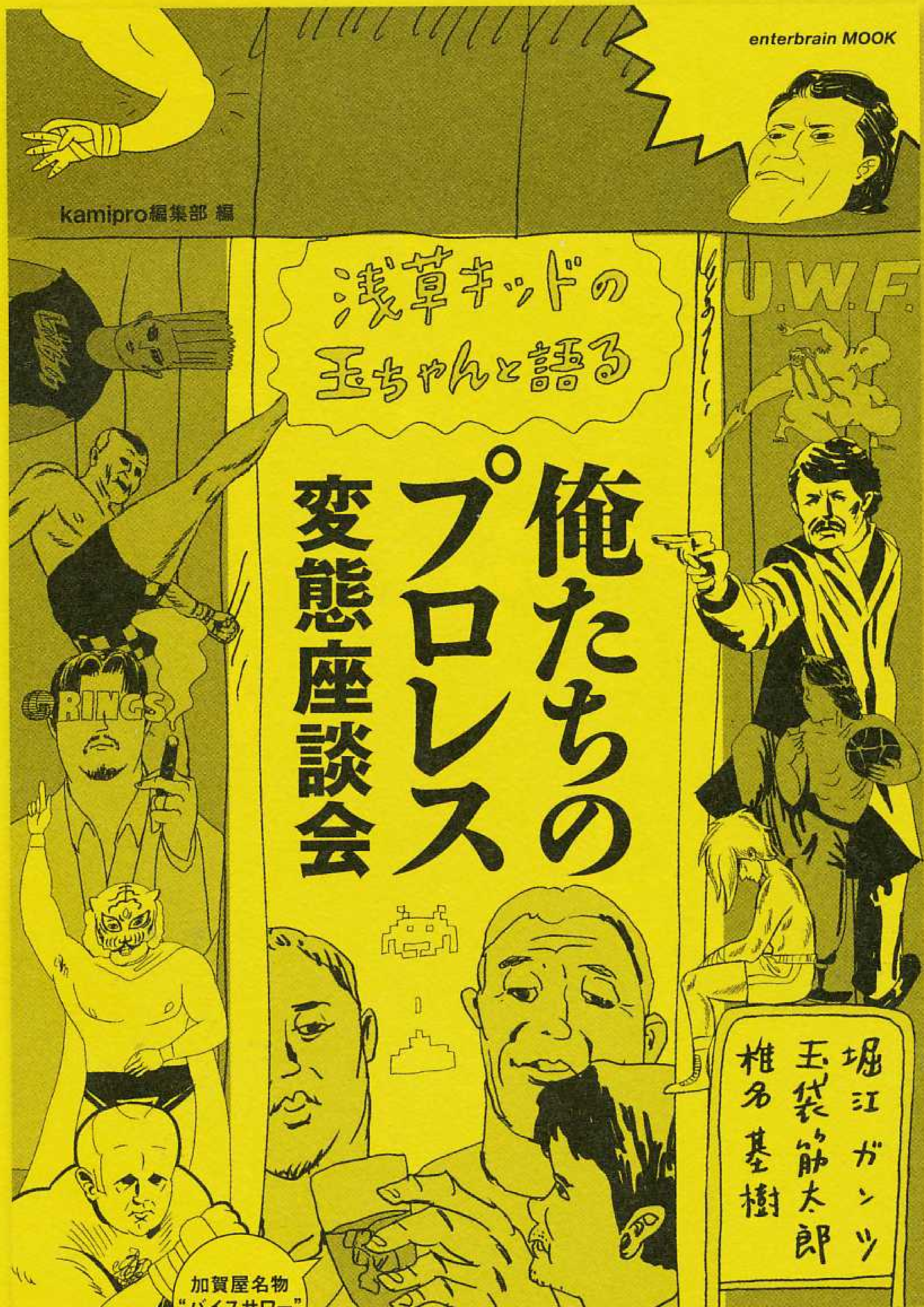
浅草キッドの玉ちゃんと語る

読めば読むほど酔っぱらう!?

本誌大人気コーナー

「変態座談会」が本になった!!

俺たちの五味から俺たちのジョーまで!



加賀屋名物"バイスサワー"が目印!

A5判 256ページ

抱腹絶倒の変態的ラインナップ

桜庭vs田村以後変態座談会	リングス変態座談会	ゲーム変態座談会
五味隆典変態座談会	女子プロレスど変態座談会	アントニオ猪木変態座談会
対抗戦変態座談会	あしたのジョー変態座談会	入場テーマ曲変態座談会
2000年代変態座談会	映画変態座談会	2011年変態新年会
青木vs廣田変態座談会	ヒョードル変態座談会	タイガーマスク変態座談会

全国書店にて4月2日(土)発売予定

定価=本体1,143円+税

eb! enterbrain

おかげさまで10周年 エンターブレイン

ANNIVERSARY 10th

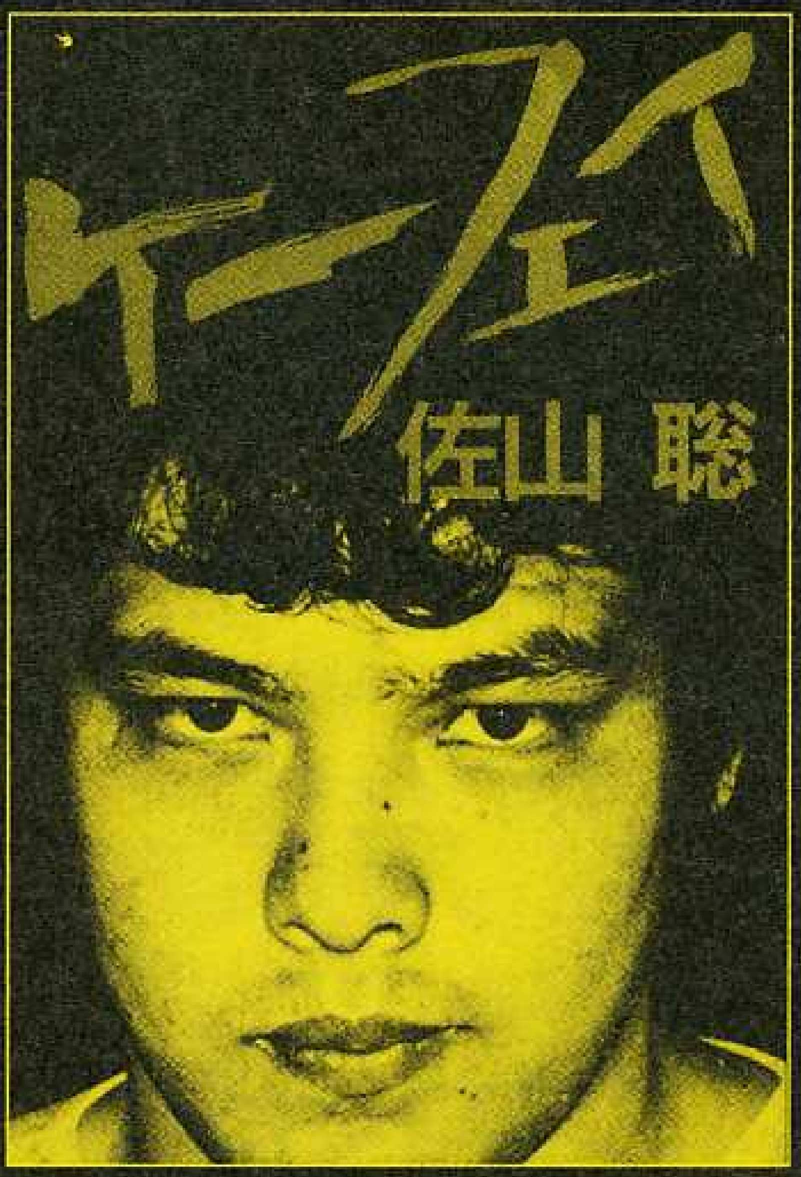
発行／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売／株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

みんな国技館や後楽園に行け!

玉袋 ディズニーランドの「ファン

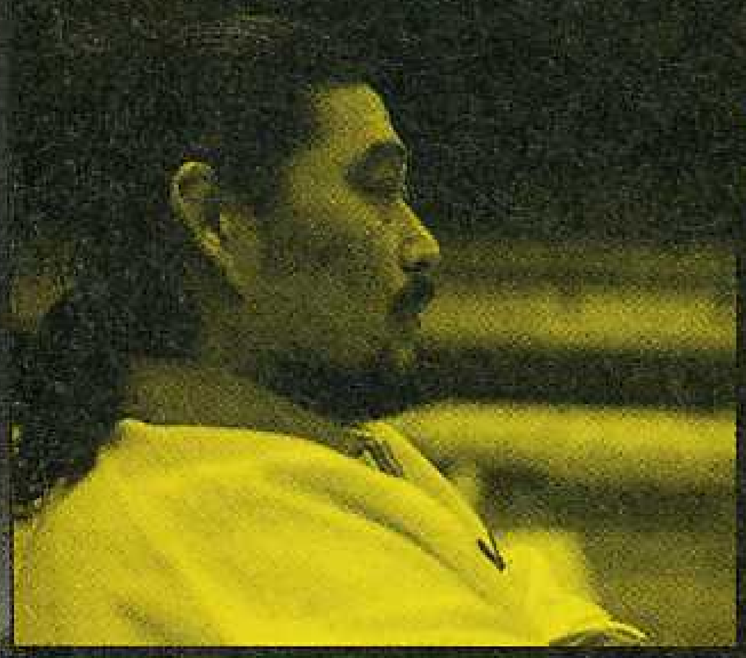
古今東西マット界八百長語録

“ケーフェイ”の向こう側にあるものとは？



プロレスとは切っても切り離せない言葉、“八百長”。
ここでは『kamipro』バックナンバーを中心に、八百長にまつわるさまざまな語録を網羅。
いま、あらためて“八百長”という言葉の意味を考えてみませんか？

構成／鈴木佑



三沢、川田ともう一回ガチンコでやっても、目ぇつぶって30秒で勝てるよ!

▲谷津嘉章／『kamipro』No.9

かつて本誌で一声を風靡した名フレーズ「目ぇつぶって30秒！」の初出がこちら。谷津は足利工大付属高アマレス部の直属の後輩である三沢と川田に対して、「俺が教えたんだからさ。なんで俺が負けちゃうの？」と余裕の発言。当時は総合でアマレス出身者が大活躍した時代でもあり、"凄いヤツ"幻想が一気に高まった。

もし、八百長があるならば、アタシがビューティー・ペアのジャッキー佐藤に勝てるわけがないわけですし

▲ジャガー横田／『kamipro』No.7

1998年、プラム麻里子の悲劇や、全日本女子プロレスの経営悪化報道など暗い話題が続くなか、女子プロレスに八百長があるかどうかを聞かれた際の最強女帝による発言。最狂団体でガチの実力でトップに立った者の貫禄が感じられる一言だ。

小島、天山は試合の見せ方はうまいと思いますけどね。それだけであれだけ客を集めちゃうじゃないですか。ロクな死に方しないんじゃないかと

▶菊田早苗／『kamipro』No.12

98年当時、おおいに物議を醸した発言。ほかにも「ファンは真剣に見に来てる人がいるんで。人間的にちょっとバカにした商売じゃないかなぁって」「ひと言で言えば宗教ですよ。騙して連れてきて金取って」と、まるで何かへの恨み節のように言いたい放題（のちに菊田は「ああいうニュアンスで言ったのではない」と発言）。これにアレクサンダー大塚が大激怒、菊田と『PRIDE.20』で不穏な試合を行なった。

基本的にああいうスタイル（＝バーリ・トゥード）ってのは受け身をやるまでの流しの練習の一環ですよ

▲三沢光晴／『kamipro』No.29

ノア旗揚げ当時、三沢光晴がバーリ・トゥードについて語った、きわめて貴重な発言。さらにこのコメントは、「新弟子が入ってきたときに『プロレスってのは痛いんだぞ、つらいんだぞ』っていうのを教え込むときにやる練習ですから」と続く。じつに"ノアだけはガチ"幻想が高まる一言。

バーリ・トゥードと言われてますけど、あれが新日本の原点ですから!

▶小川直也／『kamipro』No.15

99年1月4日、vs橋本真也におけるシュート暴走について語ったもの。当時、リング内外で"新日潰し"を仕掛け、かつて前田日明の長州蹴撃事件を「プロレス道にもとる行為」と断罪したアントンによる指示と言われた。

プロレスラーはバーリ・トゥードとかで負けても帰る家があるじゃないですか

▶郷野聡寛／『kamipro』No.15

まだプロレスと総合が地続きだった98年、当時から舌鋒鋭かった郷野聡寛の歯に衣着せぬコメント。さらに「オレらは負けたら終わりですよ。そのへんがズルイですね、プロレスラーは」「絶対プロレスとバーリ・トゥード系の試合は両立できないですよ」と、レスラーが総合に参戦する当時の風潮に苦言を呈した。

みんなリキパレスの下でガチンコの練習やってたんだ

▲タイガー戸口／『kamipro』No.17

"伝説のビッグマウス"タイガー戸口が、日本プロレス入門時を振り返って。当時、若手同士の練習試合がガチンコで行なわれていたのは、よく知られるところであり、そこには「レスラーはナメられちゃいけない」という古参ならではの自負が感じられる。

人間には二種類いる。実際に闘う人間と闘わないで文句を言う人間だ

▲ウィリー・ウィリアムス／『kamipro』No.23

"熊殺し"ウィリーが熊と闘った当時を振り返って。この一戦をフェイクと言う人間に対して、「闘わないでアレコレ言う人間をオレは信用しない」「ベアーの前でファイティングポーズをとってから、そういうことは言うべきだ」とコメント。

八百長でも真剣勝負でもなんでもいいの。金を払って見にくればいいんだ、こっちに

▶冬木弘道／『kamipro』No.12

在りし日の理不尽大王が、FMWでエンターテインメントプロレスを標榜していた時代の一言。ほかにも「プロレスを進化させたらWWE、退化させたらUWFになる」と、リック・フレアーに憧れた冬木らしい、ショーマンシップあふれる独自のプロレス論も展開。

プロレスには相手との信頼関係が必要なわけだよな。それは八百長とか筋書きとは違うからね

▲嵐／『kamipro』No.24

元大相撲出身のレスラー、嵐が大相撲の八百長について触れて。いまに先立つ11年前の00年、元小結力士の板井圭介氏が「大相撲に八百長あり」と暴露したことに対して、「賛同できない」としたうえで、独自のプロレス観を披露。

プロレスに映画のような台本があるとしよう

◀ビル・アーウィン／『kamipro』No.32

伝説のインディー団体、『世界のプロレス』に来日したビル・アーウィンのコメント。筋書きの存在を一旦認めるかに見せかけて、「オレらは演劇を見せてるわけじゃない。探りながら試合を作っていくんだ」と続け、プロレスは予定調和の寸劇でなく、あくまで生き物なのだと主張した。

裏側を暴く？ 裏側もクソもねえ。プロレスはプロレスだ

▶ドン・フライ／『kamipro』No.52
ミスター高橋本について聞かれたドン・フライの豪快な一言。続けて「そいつは、プロレスでマネーを稼いだくせに、今度は裏切ってまたマネーを稼いだわけだろ？ 人としておかしいんじゃないか？」と、バッサリ斬って捨てた。おまえ、男だ！

打ち合わせをしていたら、ここまではやらせない

▶テリー・ファンク／『kamipro』No.33
プロレスの打ち合わせをカミングアウトしている映画『ビヨンド・ザ・マット』について問われると、テリーはブッチャーにフォークでズタズタにされた腕を見せながら反論。一方でこのテリーが、同映画のプロモーションを務めてたのもいい話？

横浜アリーナで髙田vs船木のときかな。あのあたりから「あれ？」っていうのは当然出てきましたよね

▲小島和宏（元『週刊プロレス』記者）／『kamipro』No.130
第二次UWFブームを牽引した『週プロ』の元記者が当時を振り返って。「あのときは凄く困った空気が流れたのは覚えてますね。見ちゃいけないものを見ちゃったというのがあるじゃないですか」（小島氏談）。



（星の）「『売り買いはない』と断言する。（中略）プロレスは最初から勝負が決まっているショーだから、もともと裏で売り買いなどする必要はないということである

▲ミスター高橋／『流血の魔術　最強の演技』（講談社・2001年刊）
プロレス人気停滞の元凶として挙げられることの多い暴露本史上に残るベストセラー。団体関係者（元・新日本プロレス審判部長）が、プロレスの"ケツ決め"について初めて赤裸々に語ったという部分で、一大センセーションを巻き起こした。

（松永4兄弟が）「ウチのはガチンコの試合やってるから、他のところが一緒にやるのはイヤだって言ってくる」って話してたわよ

▲小畑千代／『kamipro』No.50
「ガチンコ、言っちゃ悪いけど、いまでも負けないよ」と、その実力に自信満々だった伝説の女子プロレスラー、小畑千代さん（1930年代生まれ）のインタビューから。こんなところからも、最狂団体・全女の凄まじさがうかがえる。

情報公開？ いいんじゃないの

▶カト・クン・リー／『kamipro』No.33
01年、『ビヨンド・ザ・マット』の日本公開の際のコメント。カト・クン・リーといえば、ルチャドールながら、空手は黒帯かつ、飛んでくる銃弾をそのまま避けたという伝説の持ち主だけに、はてしない余裕すら感じさせる至言なのである。

UFCなんかに（ハーリー・）レイスが出たらたいへんなことになるだろうな！

▲ダスティ・ローデス／『kamipro』No.59
「UFCで通用したレスラーは？」と聞かれたローデスは、往年のライバルの名を挙げると、さらに「レイスは試合の枠を越えて暴走するのは間違いない」「勝つか負けるかはわからない。たいへんなことになると言ってるんだよ（不気味に笑って）と、闇社会とのつながりもウワサされるレイスの幻想高まるコメントを残した。

バード（＝バーリ・トゥード）じゃないけど、ガチンコに近い凄い試合を俺はやってきたと猪木は言ってるわけでしょ

▶井上義啓（元『週刊ファイト』編集長）／『kamipro』No.61
03年5月2日、新日本プロレスの東京ドーム大会で、バーリ・トゥード戦5試合が組まれたことに対して、猪木への思い入れ深いI編集長が示した、氏ならではの見解。「プロレスはヘナチョコなもんでバード（＝バーリ・トゥード）は凄いもんみたいな考え方をするなってことだね」と、その猪木愛を示してくれた。

もし彼が「フェイクだ」とか、なんだかんだ言うんだったら、「おまえはリアルなのか？」と言いたいよ

▲ビッグ・ジョン・テンタ／『kamipro』No.57
あの北尾光司の「八百長野郎！」発言に対して、当事者であるテンタがコメント。目潰しポーズやヒザを前から蹴るなどのシュート殺法を見せた北尾に一切動じなかったテンタには、アメリカ帰国後、「横綱が仕掛けたシュートを返り討ちにしたシューター」という、高評が与えられたという。

菊田選手とも、プロレスの試合だったらやってみたいですけどね。向こうの土俵だったらオレなんか足元にもおよばないから

▶小島聡／『kamipro』No.49
菊田早苗の「ロクな死に方しない」発言について、あまりに正直すぎる小島の返答。ちなみにこのあと、「単純な強さとかそんなものを比べるのは、凄くナンセンスだと思うんですよね」と続き、プロレスに準ずる者ならではの考えを披露した。

そんなもんが出たからって揺るぎはしないさ。プロレスはそんなちっぽけなものじゃないからな

◀バリー・ダーソウ／『kamipro』No.32
『レスリング・ウィズ・シャドウズ』や『ビヨンド・ザ・マット』などの、いわゆる"プロレス内幕モノ映画"が誕生している現状について語ったもの。古きよき時代のレスラーらしい豪快さを感じさせた。

VTはプロレスだったものだからね。そこをバカどもが勘違いしてるだけであってさ!!（怒）

◀宮戸優光／『kamipro』No.52
新日本プロレス迷走期の象徴ともいえる『ULTIMATE CRUSH』。そこでバーリ・トゥードが5試合組まれたことに対して、宮戸氏はハイテンションで激語り！さらに「バーリ・トゥードを導入する理念を客に説明してほしかった」と、鋭く突っ込んで見せた。

（日本のプロレスの）一番の間違いは、プロレスとMMAを混同したことだろうね

▲クリス・ジェリコ／『kamipro』No.113

WWEのスーパースター、クリス・ジェリコによる、あまりにもごもっともな分析。「プロレスはエンターテインメント性を含んだファイトなんだよ」と、スポーツエンターテインメントの最高峰でトップを張った人間の矜持を垣間見せた。

極論すると「いかにうまく客をダマすか」という職業でしょ?

▶森達也（ドキュメンタリー映画監督）／『kamipro Special 2009 JULY』

映画『レスラー』を高評価した森氏が職業・プロレスについてコメント。「複雑な葛藤はあるだろうし。胸を張れる職業じゃないと思う」と、レスラーの胸中について興味深い分析。

"路上の現実"に一番近いのは、僕の見る限り初期リングスですね

▶菊地成孔／『kamipro』No.88

本誌論客、菊地氏が幼少期に地元の銚子で日々、目の当たりした路上での喧嘩を振り返っての発言。初期リングスに"ガチ"を見るとは、さすがに他人とは視点が違う菊地氏。さらに、「初期リングスがよかったのは、リングス・オランダから来てた人たちが、『じつはアスリートじゃなくて、バウンサー』だったり（笑）」と、初期リングスへの賛美は続く。

猪木君は、アリを八百長じゃない試合で倒して、プロレスの地位を獲得することが悲願だったわけですよ。（中略）でも、アリ側は「コレは八百長としてやるのか」と

▲康芳夫（自称・虚業家）／『kamipro』No.71

稀代の興行師である康芳夫氏が、猪木vsモハメド・アリをコーディネートしたときのエピソード。康氏によれば、アリサイドは「いわゆるフィックス・ファイトとしてとらえていた」とのことで、猪木が真剣勝負で臨みたい旨を聞かされたときも、「じゃあ試合のしようがないじゃないか」と反応したとか。

俺だったら棺桶まで口をつぐむぞ!

▲上井文彦（元新日本プロレス取締役兼執行役員）／『kamipro』No.75

高田延彦の『泣き虫』に対する上井駅長のコメント。一見、プロレスを守ってるかのように見えるが、おもいっきりケーフェイの存在をバラしているズンドコ発言なのだ。



（K-1のレフェリング疑惑について問われて）ぜんぜんそんなことないのになあ。だって、魔裟斗くんを勝たせようってことなら、もうとっくに勝たせてるしね!　そんなことができるんだったら、武蔵だって勝たせてるよ!

▲谷川貞治／『kamipro』No.129

08年のK-1 MAX決勝戦で、アルトゥール・キシェンコに同試合唯一のダウンを喫しながら判定勝ちした魔裟斗の試合が、「八百長なのではないか?」というインタビュアーの問いに対して。続けて「勝敗まで決めちゃうような禁断のとこまではいかないですよ」と、主催者には越えてはならない一線があることを示した。それにしたって「武蔵だって勝たせてる」はよけいな発言か。

タイガーマスクに挑戦したい人大募集って。（中略）集まってきた人と戦うのはぼくたちだったんですよ。（中略）一人、壊しました。ガチンコでやったって言えるのは、このときだけですね

▲髙田延彦／『泣き虫』（幻冬舎・2003年刊）

『泣き虫』の中でUWFもプロレスだったことに苦悩したという髙田が、自らのガチンコ体験を明かしたもの。集まって来たのはほとんど素人で、迎え撃った中には、山本小鉄と前田日明もいたという。なお、髙田は真剣勝負を標榜していたUWF時代に関しては、「ぼくにとってもの凄くつまらない中途半端な時代でした」と同書で綴っている。

3連戦最後の試合は桜庭にシュート指令を出したの

▲鈴木健（元『UWFインターナショナル』取締役）／『kamipro』No.130

田村がUインター離脱前に行なった桜庭との3連戦について。時のUインターは新日との対抗戦がメイン。鈴木氏はだからこそ「ホントのUインターのスタイル」を知らしめたかったのだと明かした。

私のなかではとくにヒョードル戦が煮え湯を飲まされた!って思いましたね。（中略）だって、（総合格闘技の）練習してないんですよ?

▶永田ちえこ（永田裕志夫人）／『kamipro』No.113

永田裕志夫人が、一時期アントンに振り回されまくった夫のレスラー生活を振り返って。03年大晦日のヒョードル戦と従来のプロレスの違いを認識していた夫人は、「大会がなくなればいいなあ〜」と思っていたとか。

往年のヒールレスラーが「八百長」という見方をされるプロレスについての含蓄あふれる持論を展開。「プロレスをダメにした原因は暴露本を出した（ミスター）高橋だ」と断罪し、「プロレスを知らない素人が紛れ込むとああいうことになる」と、シビれるセリフを炸裂させた。

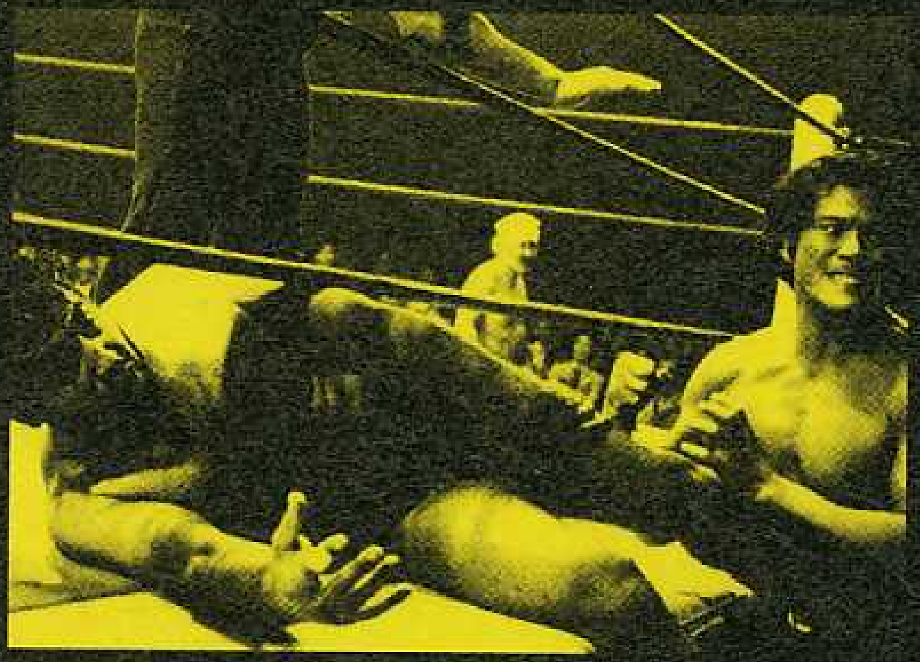
▼上田馬之助／『kamipro』No.155

プロレスは"八百長"ではないんだ。八百長というのは、どちらが勝つか負けるか、金を賭けて不正をするのが八百長だろ。プロレスに金賭ける人いる?

髙田さんはプロレスについての内容を公表することを、最後のギリギリまで迷ってましたから

▲金子達仁（『泣き虫』著者）／『kamipro』No.69

髙田延彦「泣き虫」の著者である金子達仁氏が、その制作の内実を語ったもの。「やっぱり、その部分を触れなかったら、髙田さんの人生は語れませんから」と語る金子氏のこの一冊があったからこそ、のちに髙田総統が誕生したと言っても過言ではないだろう。



▶アントニオ猪木／『今こそ燃えよ・君よ苦しめ そして、生きよ』（ビッグセラーズ・ジャパン／1982年刊）

いわゆる猪木本の中では、最初にベストセラーになった名著から。刊行した82年といえば新日本黄金期であり、暗に他団体を揶揄したような表題コメントのほかにも、「女子プロレスはレスリングじゃない。スポーツとして認めてません」など、我が世の春を行く奔放なアントン語録が目立つ。

そりゃ八百長をやるレスラーもいるだろうが、私たちが真剣に闘うからこそお客が来てくれるのだ

ガチンコのスパーリングで勝ったことがあるので、アガることもなかったし、気は楽でした

▶ジャイアント馬場／『たまにはオレもエンターテイナー』（かんき出版／1983年刊）

ジャイアント馬場が自身のデビュー戦である田中米太郎との一戦（60年9月30日）を振り返って。馬場さんが〝ガチンコ〟なんて言葉を使うと、思わずドキッとするってもんだ。ちなみにユセフ・トルコ翁は「猪木より馬場のほうがシュートは強いんだよ！」と、興味深い発言を残している。ただ、アントンが嫌いなだけ？

先日は新日本のリングで試合を、いやいや、芝居をしてきました

▲佐山聡／1994年5月6日・修斗興行にて

94年5月1日の新日本プロレス福岡ドーム大会にて、獣神サンダー・ライガーとエキシビションを闘った佐山聡が、その5日後、自らのホームである修斗の興行にて発言したもの。後日、その真意を問われると、「だって、本当に芝居じゃないですか。エキシビションなんだから、は〜い」と、苦しい言い訳をしていた。

タンカで運ばれる猪木さんを見て、「こりゃエライことになった！」と焦る俺に、「オマエ、何年プロレスやってんだ？」と言った先輩がいたよ

▲前田日明／『真格闘技伝説』（飛鳥新社・1994年刊）

83年6月、猪木がホーガンのアックス・ボンバーを食らって舌出し失神し、病院に搬送された際のエピソード。同書には明記されてないが、このときの先輩の名に関してはドン荒川説が根強い。というか、きっとそう。

髙田さん、僕と真剣勝負してください！

▲田村潔司／1995年8月18日・東京NKホール

95年、髙田延彦が参院選に出馬するなか、代わりにUインターのメインを務めてきた田村が、団体トップに対してまさかの真剣勝負での対戦要望。まるで、普段のU系スタイルが真剣勝負ではないと取られかねないこの言葉の真意については諸説あるが、少なくとも髙田本人の感懐は「ものすごく冷めた気持ちで、なにを言ってるんだ、こいつはって 思ったぐらいですね」とのこと（『泣き虫』より）。

日本での最初の対戦相手は長州力。（中略）たいていの試合では勝者と敗者が決められていたが、この一戦だけは例外だった

▶ハルク・ホーガン／『ハルク・ホーガン自伝』エンターブレイン・2003年刊

ホーガンが来日第一戦を振り返って。このあとは「興行主は俺たちに20分フルタイムを闘わせて引き分けで終わるという結果を望んでいた」と続くが、フレッド・ブラッシーに、「潰してしまえ」と厳命されたホーガンは、「前腕で力の限り殴った。彼は二度と立ち上がれなかった」と述懐。

「なんだ、真剣勝負じゃないのなら、もう見ない」と思ったプロレスファンはどのくらいいるでしょう。おそらく、ほんの微々たる数だと思います

▲荒井昌一元FMW社長／『倒産!FMW』（徳間書店・2002年刊）

ミスター高橋本が出た翌年、元FMW社長の荒井氏も自著を刊行。「プロレスというのは、ショーだということがわかったくらいで、その魅力を失うようなものではありません」と、その変わらぬプロレス愛を語っている。だが、自著刊行の半月後、多額の負債を理由に、荒井氏は自ら命を絶った……。

UWFのやった事も全部プロレスなんですよね。ところが、彼らはそれをプロレスではないという形でアピールした

▲松浪健四郎／『UWF革命』（エスエル出版会／1988年刊）

松浪氏は「きちんと入ったアキレス腱固めがなぜ極まらないか」と指摘。ちなみに松浪氏は「UWFは真剣勝負」と主張する向井亜紀に対して、「そういうことを言うとほかのレスラーは怒っちゃう」と諭したこともある。

今夜のメインエベントはいったいどんな試合になるのかまったく予測がつきません。これは会社も了承済みなのですが、急きょ〝なんでもあり〟の完全決着ルールで行なうことになりました

▶ジャパン女子プロレス広報／1987年7月18日・ジャッキー佐藤vs神取忍戦の試合前

伝説のシュートマッチであるジャッキーvs神取の試合前のやりとり。世にも珍しい〝予告セメントマッチ〟であり、時の広報は表題コメントを残すと、手をピストルのかたちにしたシュートサインを出したが、ピンときていない報道陣も多かったという。

セメント＝たまに行なわれる真剣勝負

おい、このマガジンはトリックを明かしても平気か？

▶プロレス用語解説／『いちばんくわしい怪物怪人プロレス超百科』（立風書房／1980年7月刊）

いわゆる"子ども向きプロレス百科"に掲載された「プロレス用語辞典」の「サ行」より。この時代にあって、子ども向けにもかかわらず、サラッと通常のプロレスが八百長と受け取られかねない説明をしているところが、いやはやなんとも。

▶ビッグ・ボスマン／『kamipro』No.71

80～90年代にWWF（現WWE）で活躍した往年の名レスラー、ビッグ・ボスマンのあけすけなコメント。インタビューでは自らが99年の『レッスルマニア』で体験した首吊りギミックが、コスチュームの中にフックをかけるという形式の、安全なものであることを明かした。

プロレスも選手権を賭けた試合となると八百長はない。命懸けの真剣勝負だ

▲力道山／『週刊サンケイ』（産経新聞社）1953年4月5日号

力道山が日本プロレスを旗揚げする約1年前、アメリカ修行を振り返った貴重な発言。さらにこのコメントは「しかしこうした試合は月に一回か、せいぜい二回だ」と、暗に八百長を認める発言。翌年、シャープ兄弟との一戦で日本全国に大プロレスブームを巻き起こしてからは、こういった発言がなりを潜めたのは言うまでもない。

「俺には日本がある。そんなことはできない」とブロディが凄むと、ほとんどのプロモーターは了解して自分たちが持ちかけたフィニッシュ案を引っ込めたね

▲バック・ロブレイ／『ブルーザー・ブロディ 私の知的反逆児』）（東邦出版・2008年刊）

日本で高い人気のあった外人レスラーの一人、ブルーザー・ブロディについて詳述された伝記より。同書では、ブロディやスタン・ハンセンなど、日本を主戦場にするトップレスラーが、そのイメージを守るため、海外での試合結果にも極めて敏感だったことが明かされている。



ニールセン戦が悪いんじゃないが、ヒョードル戦とはジャンルが違うだろ。胸に手を当てて考えろ

◀永田裕志／2005年4月26日・ヒョードル戦惨敗を中傷した前田日明に対して）

前田が「（ヒョードルとの）試合中にうしろ見て。怖いんだったらやめとけって」と揶揄すると、永田はドン・中矢・ニールセン戦を引き合いに出して表題のコメント。さらに「同じもののように言って、前田さんはいまのプロレスを中傷している」と、青い正義をぶちまけたのだった。

新日本プロレスも厳しい練習はしてるけど、それは巡業の合間にやる練習でしょ。やっぱり四六時中、勝つための練習をしてる人とは違いますよ

▶更級四郎（イラストレーター）／『kamipro』No.130

旧UWFのブレーンであり、あの『ケーフェイ』を書いたとされる更級氏のコメント。インタビューでは格闘技とプロレスの違いを認めたうえで、そのジレンマについての苦悩を忌憚なく明かした。

何もなしのセメントで闘ったのは、高橋と2回、あとは冨宅とも大阪で1回やっている

▲船木誠勝／『船木誠勝の真実』（エンターブレイン・2003年刊）

藤原組時代の船木が、プロレスのかたわらでセメントにも挑んでいたことを明かしたもの。ちなみに藤原組の東京ドーム大会（92年10月）のモーリス・スミス戦に関しては、「（東京ドームの）ほかの選手の試合はほとんどセメントだったのに、その中で『自分だけが…』というのが、凄くやるせなかった」と、その内情を明かしている。

そんなに蹴ってなくても、大腿部を叩いて蹴り音を出すとかあるじゃないですか

▲池田大輔／『kamipro』No.123

『バチバチ』を主宰する池田大輔が、「プロレスと効果音」特集で、大腿部を叩いて"効果音"を出すプロレスに対して苦言。そして「プロレスラーだったら、自分の身体で表現してみようよ」と、プロとしてのプライドを示した。

新王者になるためには委員会のメンバー9人中5人の票が必要だ

▲ハーリー・レイス／『ハーリー・レイス自伝』（エンターブレイン・2006年刊）

通算8度にわたってNWA世界ヘビー級王座に就いたレイスが、二回目の同王座をテリー・ファンクから獲得した際のエピソード。「このときは全会一致で俺に決定されたそうだ」と、プロレス界で最も権威のある王者決定の仕組みを自伝で明記した。

勝ち負けは決められてました。ただ、試合に関して具体的なことは何もなく、言われたのは「気迫を見せろ」と

▶山本喧一／『プロレス悪夢の10年を問う』宝島社・2008年刊）

Uインターでのプロデビュー戦（94年10月）を、ヤマケンが述懐したもの。ちなみに桜庭和志に6分27秒、逆片エビ固めで敗れている。「気迫を見せろ」と言ったのはいったい誰なのか……？

MMA世界最高峰のステージ

UFCに八百長はあるのか？

文／高橋ターヤン

今回のお題は「UFCと八百長」だ。

そもそも長年UFCを観ているが、UFCに「八百長」というキーワードやフィルターをかけて観たことはなかった。とりあえず日本語で「UFC　八百長」で検索しても芳しい結果はあまり出てこない。少なくとも日本人はUFCで八百長が行なわれているという感覚はないようだ。

しかし「UFC　FIXED」で検索をかけてみると、山のような検索結果が出てくることに驚く。だがその一つ一つを読んでみても、「チャック・リデル対ヴァンダレイ・シウバは八百長だ！」とか「ジョルジュ・サンピエールvsマット・セラの2回目はヤオ」みたいな書き込みは多いものの、説得力のある理由はつけられていない。

少なくとも僕が聞いているなかで、アスレチック・コミッションが管轄している北米のMMAイベントで八百長が行なわれたという話は寡聞にして聞いたことがない。はたして北米のMMA、とくにその最高峰であるUFCで八百長は行なわれているのであろうか？

まずUFCと所属選手の関係には、連敗すればリリースの可能性が非常に高まるという非常に大きな特徴がある。一部の人気選手は例外としても、前座試合に出ている選手にとっては「連敗」というのは恐怖の最後通牒だ。これは勝ち星の調整を八百長で実施していた、幕下に落ちたくない十両力士の状況に非常に近しい。

またUFCに出場する選手の多くがまったく異なるジムに所属していた昔とは違い、現在のように各地に点在するメガジムや、ジャクソンズMMAのような超名門ジムで同階級の多くのトップファイターが合同キャンプを張るなど、選手同士の接点も増えているという現状もある。これにより選手同士の横の連携が強くなり、通常の情報交換だけでなく、過度に交友を結ぶ選手が増えているというのも想像に難くない。

しかも不可解な試合というのは、上記の例は別にしても少なくない。たとえばUFC初のカナダ大会として開催された『UFC83』では、地元カナダ出身ファイターとしてPPVマッチに大抜擢されたカリブ・スターンズが、地元の大声援を受けながら、対戦相手のネイト・クォーリーから終始逃げ回るという消極的な試合を展開。なぜこれほどまでに重要な試合でこのような試合をしたのか、いまでも謎だ。



3戦連続ファイト・オブ・ザ・ナイトを獲得している秋山でさえ「連敗」という結果にはデリケートになっており、「星」の重要度は高いが……。

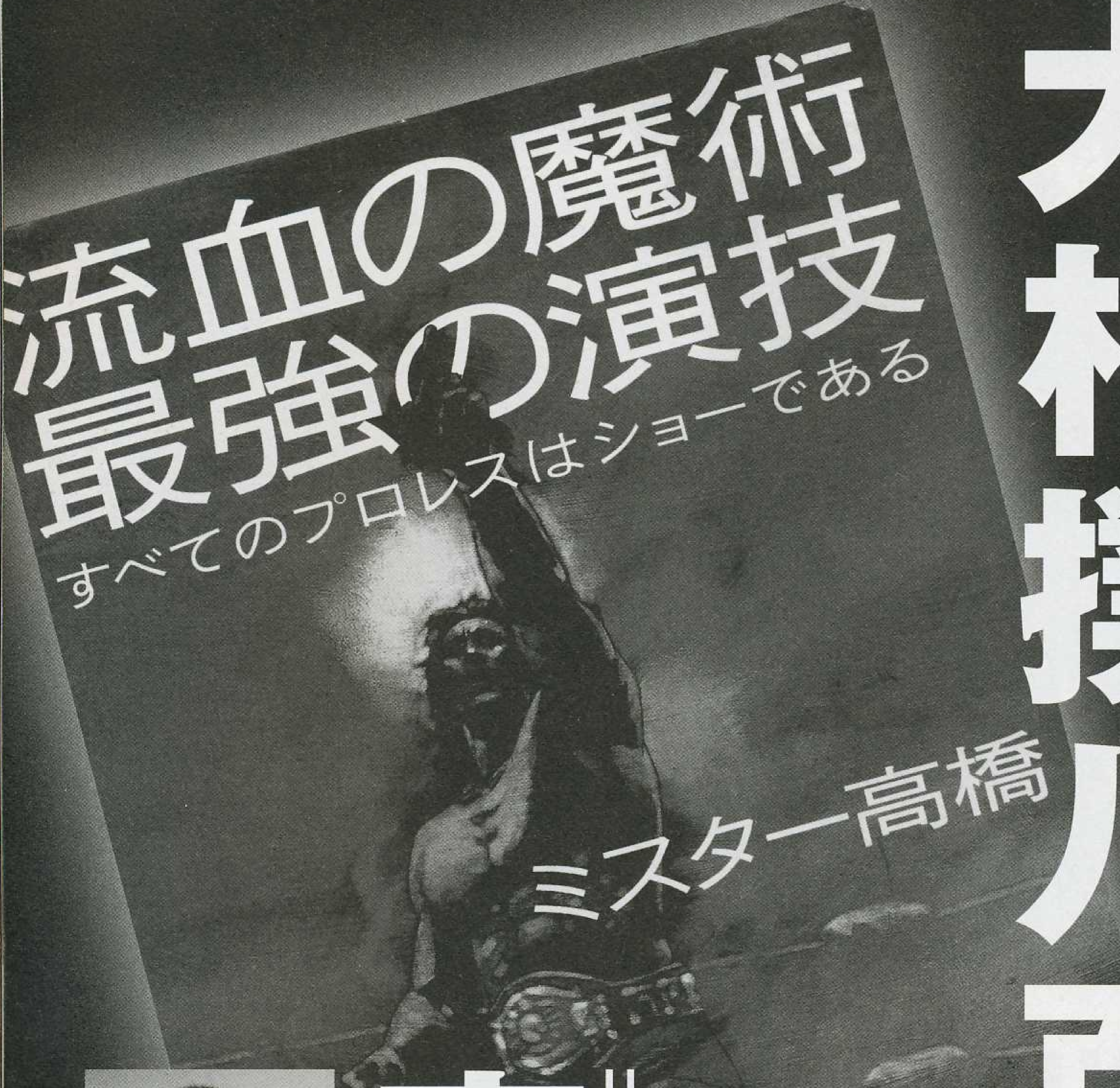
またリッチ・フランクリン対vsケン・シャムロックもいまもなお語り継がれる疑惑の一戦だ。この試合ではシャムロックがフランクリンの打撃が当たる前に倒れ込むシーンが、試合直後から話題となっていた。

ほかにも疑惑のかかる戦いは枚挙にいとまがない。しかしUFCはアスレチック・コミッションが管轄するスポーツではあるが、あくまでもズッファ社という一企業が手がけるイベントだ。「八百長の証拠がなければ……」という理屈は通用しない。試合を見る目にかけては天下随一のダナ・ホワイトとジョー・シルバが目を光らせているのだ。消極的な試合や、少しでもワークが疑われる試合をした選手は、即座に解雇リストのトップに躍り出ることになるであろう。

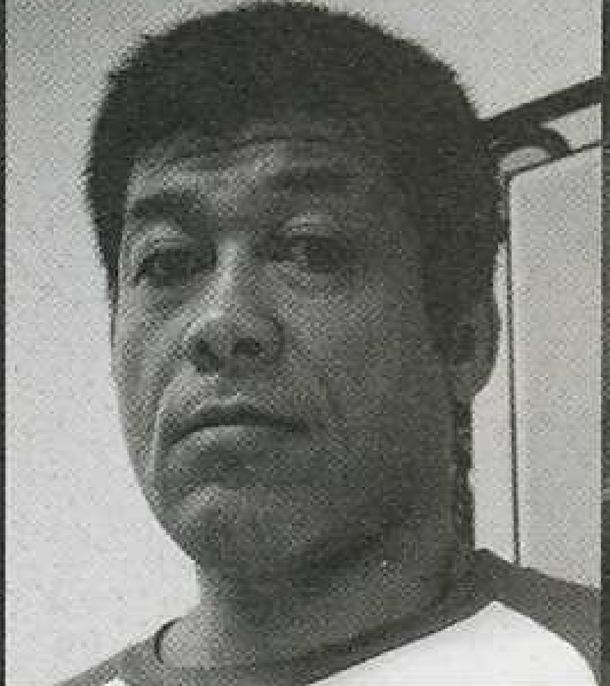
もしMMAというガチンコが売りのスポーツで八百長がバレた場合、その選手はその後MMAで生活することは不可能であろう。そんなことをしなくてもいまの北米MMAシーンは、UFC選手というブランドだけで充分食っていけるほど充実しているのだ。最強を目指さない選手は、UFCに出場するという目的さえはたせば、リスクの大きいUFCに固執する必要性はないと思われる。

もちろん主催者側としては、八百長で勝たせてまで選手をプッシュする必要などない。UFCにとって特定選手がスターである必要はなく、あくまでもUFCという最強を決める場のブランド力を維持するためにガチンコ至上主義を貫くはずだし、その障害となるものは全力で排除しようとしているだろう。いまの北米MMAは、八百長を必要としない場となっており、逆に八百長ほどリスキーな行為を行なうメリットはないと言える。

ミスター高橋本と大相撲八百長問題



UWFスネークピットジャパン 宮戸優光



過剰とも思える報道で、テレビ、新聞、週刊誌等のメディアを騒がせた大相撲の八百長問題。一部では「大相撲＝八百長＝プロレス」というような、あまりに短絡的な語られ方をしたが、「プロレス」という四文字にあくなきこだわりを持つIGFの宮戸優光ゼネラルマネージャーは、今回の八百長問題をどうとらえているのか。10年前、プロレス界に衝撃を与えた〝ミスター高橋本〟問題を交えて語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

──昨今、大相撲の八百長問題がメディアを騒がせていますけど、「八百長」といえばプロレス界も長らく、そのレッテルを張られていた苦い歴史があるので、宮戸さんにもぜひご意見をうかがいたいんですよ。

宮戸　なるほど。ただ、この問題を語るのは、ちょっと難しい部分もあるんですけどね。

──やはり難しいですか？

宮戸　いや難しいというか、今回の件は力士から八百長をほのめかすメールが見つかったわけですけど、現時点では「かぎりなく疑わしい」というだけで、実際どうだったのかがハッキリとはわかってないわけだから。わかってない段階でコメントすべきじゃないということが一つ。それに八百長うんぬんの前にね、いまは相撲が「スポーツ」という側面だけで語られてるフシがあるでしょ？　それは相撲そのもののあり方として話が違ってると思うんですよ。

──相撲はスポーツの論理だけでは語れない、と。

宮戸　そうなんです。確かに相撲というのは、見方によっては勝敗がつく「競技」ではあるけど、単純に「競技」じゃないんですよ。髷を結って、マワシを締めて、土俵だって単なる土の山じゃないですよね。中には神様へのいろんな供え物が埋められている。だからある種、神事というか、いわゆる普通のスポーツのフィールドとは違うでしょう。

八百長問題は「競技」という相撲を構成する一部分のさらにその一部分

──土俵というのは女性が上がってはいけなかったり、特殊なものですよね。

宮戸　ですから相撲というのは、古来からの文化であり、神事でもある。「競技」という側面は、その相撲を構成する一部の要素でしかない。単なるスポーツだったらマゲもいらないし塩をまく必要なんかない。力水だって単なる水じゃないからこそ、勝った力士しか力水をつけられないんでしょう。

──スポーツならペットボトルの水で済ませろ、みたいな（笑）。

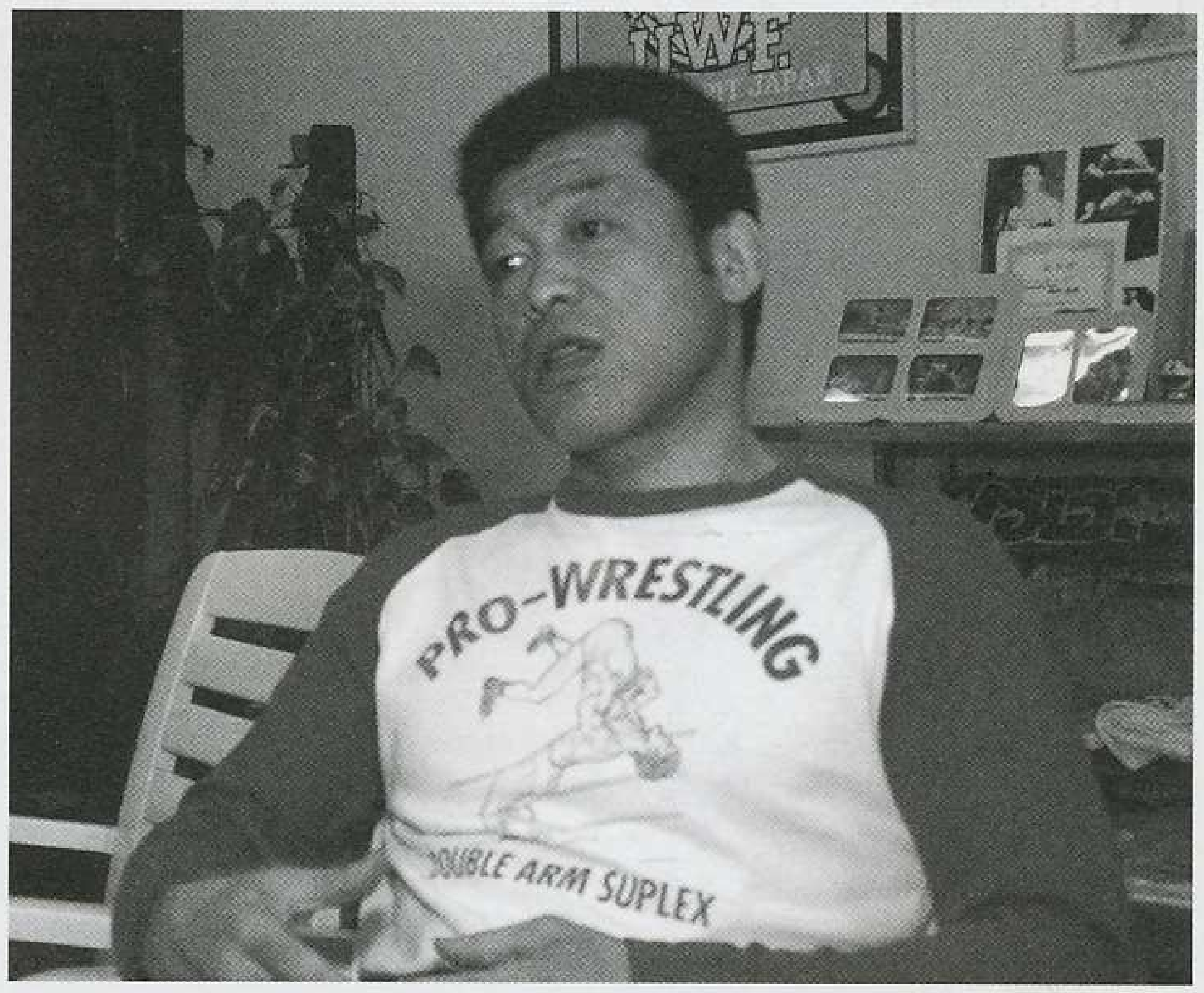
宮戸　「スポーツ」として見たら、そういった相撲を構成する要素はいったいなんなのかってことになるんですよ！　だから、いまの八百長報道というのは、相撲を構成するあくまで一部分である「競技」としての側面の、さらにまたその一部分を突っついてるようにしか思えない。そんなに競技がいいなら、競技にしちゃえよって！　マワシも外して、スパッツでも穿いて、髷も取って、塩もまかずに、マットでやる。競技に必要なもんだけ残せばいいんだから。でも、そうやって「スポーツ」にした瞬間、もはやそれは「相撲」じゃないわけですよ！　彼らは日常から本物の自分の髪の毛で髷を結ってるんですよ。

──そういった要素をすべてなくしたら、レスリングの亜流みたいな感じになりますよね。

宮戸　だから、本来相撲というものは、スポーツの概念だけではとてもじゃないけど語りつくせないものだと思う。それに、一般大衆は本場所が15日間で優勝を決めるという形式を、相撲という「スポーツ」の形式としてあたりまえのものだといまは思ってるけど、かつては15日じゃなかったはずですよ。じゃあ、なぜ15日間にしたのかっていったら、これはもう間違いなく興行のためでしょう。利益をあげるためであることは、明白だと思うんですよ。15日間のテレビ番組としての部分、そして興行としての実益を得るためでしょうね。

──そうでしょうね。

宮戸　そのなかで横綱、大関という番付、ランキングがあるわけ。そして、そのランキングをつける基準というのは、たとえば横綱は優勝が何回とか、12勝以上を何回しなければならないという基準がありますよね？　大関にも当然ある。



──「2場所連続優勝、もしくはそれに準ずる成績」という基準が正しいのかどうなのか、ときどき問題になります。

宮戸　「スポーツ」だけの側面で見るなら、その基準自体もだいぶ難しいものがあると思う。たとえば、横綱は負け越したら大関陥落ではなく、相撲自体を引退しなきゃいけないわけでしょ？

──ほかの格闘スポーツのように、「王座転落」というわけにはいかないんですよね。

宮戸　横綱なんていうのは、そういう特殊なポジションなんですよ。それはいわゆる「チャンピオン」とは意味合いが少し異なる。その陥落が許されないなかで、15日間の取組をして、すべての場所で一定の以上の星数を取らなきゃいけない。いいですよ、それで負け越して辞めてもいいなら。ただ、横綱や大関は少しでも成績が悪ければ、評論家や横綱審議委員からバッシングを受けるわけでしょ？　ファンや協会、テレビ局は文化として、興行・ビジネスとして横綱や大関を必要としているわけじゃないですか。

──そうですね。興行として必要不可欠な存在ですよね。

宮戸　そうでしょ？　そのことを含めて今回の問題の温床というか、そういったものを生み出しかねない要因にもなっていると思う。皆さんが言うような八百長がもしあるとするならね、当然起こるであろうことが起こるシステムがあるわけですよ。

──大相撲というシステム、パッケージ自体が八百長を生んでる部分があるわけですね。

宮戸　そう、個人というよりパッケージ



本場所中だけでなく、普段から髷を結い和服を着て歩く力士たち。相撲という文化を常に体現していることは間違いない。

宮戸優光

自体がそうなっちゃうと思うんですよ。今後、相撲を完全なスポーツとして見るならば、そこを突つくこと自体が、そういったものの温床にもなりかねないわけだから。たとえば12勝できる相撲取りがなかなか現われないことによって、横綱・大関不在の場所が1年2年と続いたとしても、評論家たちはその状況を黙って許さなきゃいけないでしょうね。

――いままでなら、別の意味で「相撲の危機」とか言ってたんでしょうけどね。

宮戸　一方でスポーツ化しろ、もう一方では横綱・大関はいなくてはならない。さらに横綱・大関、そして上位陣は勝ち続けろっていう、こういった要求には非常に難しさも出てくると思いますよ。

――スポーツ化して実力伯仲になったら、八勝七敗や七勝八敗だらけになるかもしれないですよね（笑）。

宮戸　相撲というのは手を着いたら負け、土俵から足の指一本出たら負けという、ちょっとしたミスも許されないルールなんですよ。そんななかで、ホントに東西両横綱が揃って、その地位を維持しながら15日間の興行を年6回やるっていうのは、たいへんなことだと思いますよ。だから、本来はこの問題は興行論を避けては通れない話ですよ。

――いま宮戸さんはIGFの現場部長をされてますけど、もし大相撲のマッチメイカーをやってくれって言われたら、これはたいへんですよね（笑）。

宮戸　アッハッハ！　それはたいへんですよ。ボクは大相撲における八百長の事実はわからないけど、ワイドショーのコメンテーターが言ったりするほど、簡単なことじゃない。番付というランキングシステムから、興行形態からすべてを維持しなければいけないなかで行なわれていることだから。

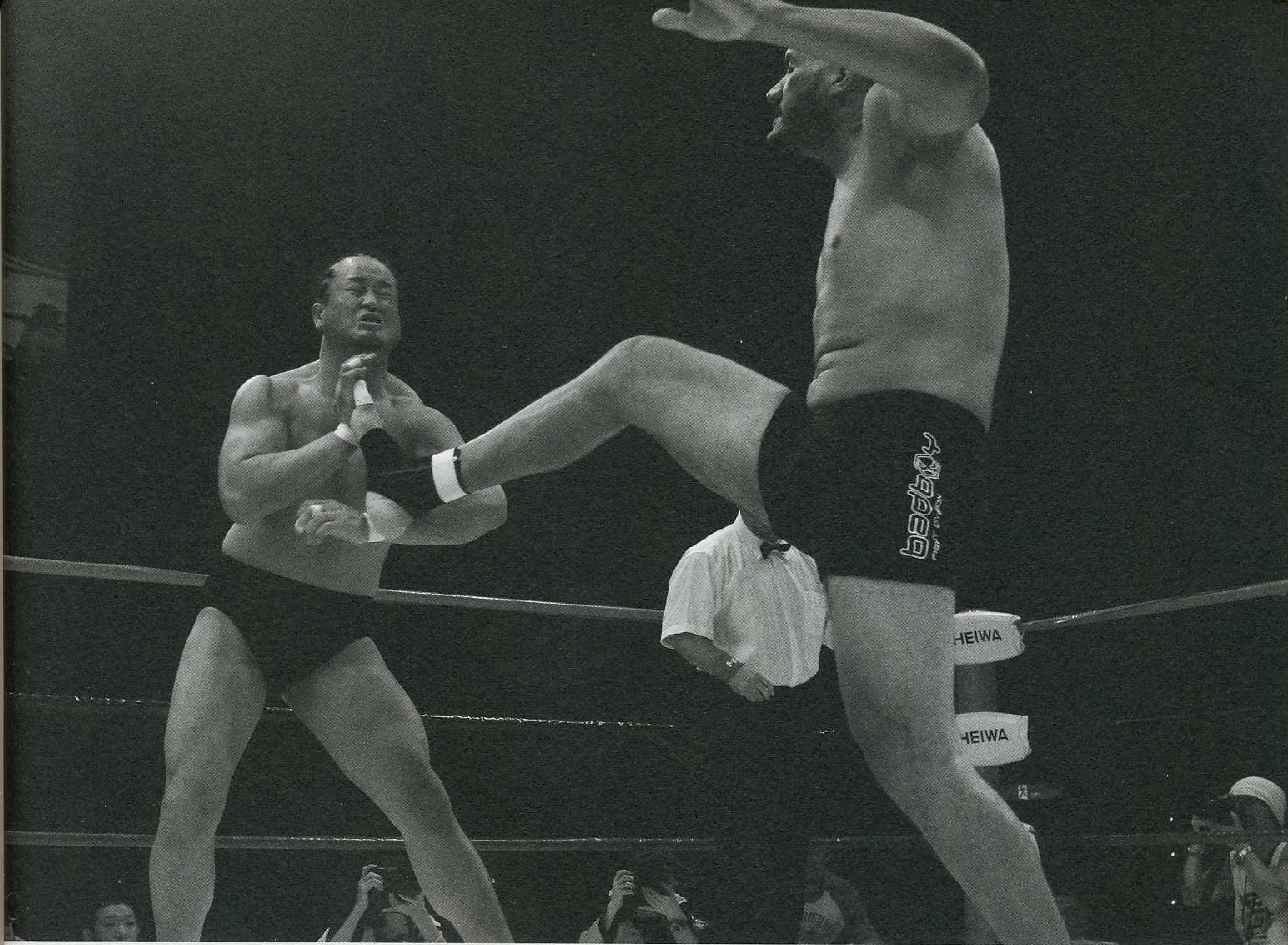
――「完全にスポーツ化しました。めでたしめでたし」で済むようなことじゃないわけですね。

宮戸　そんな簡単なことじゃない。お相撲さんというのは、日常生活でも髷を結って、どこへ行くにも和服姿という特殊な人たちですよ。それなのに、相撲のなかの競技、スポーツとしての一部分だけ一般の価値観どおりになれっていうのも、どうなのかなって思いますよ。だってよく考えてみてください。歌舞伎や能とかいろんな伝統芸能はありますけど、日常生活までその格好をしてるのは、お相撲さんだけですからね。

――「日本の伝統を守る歌舞伎役者です」と言いながら、普通の格好して夜の街で遊んでるのとはわけが違う、と。

宮戸　四六時中、髷がくっついてるわけだから。あれはお相撲さん一人一人が文化を背負ってるわけで、単なる競技とは違うんですよね。だから八百長があったとしても、これは野球やサッカーといったスポーツで八百長が起こったのとは話が違うと思いますよ。相撲のあの番狂わせも起こりやすいルールで、横綱・大関という番付設定を維持しながら、15日間連

横綱・大関という番付を維持しながら15日間連続行なうという興行論の問題



現代のプロレスが半ば失なってしまったような根源的な闘いぶりで注目を集める鈴川真一。相撲出身のこの男は八百長問題に何を感じているか。

高橋本の3割が事実だとしても それがプロレスのすべてじゃない！

続興行という興行論を織り交ぜ、そこに完全スポーツ化という競技論をも折り込む。これはもうムチャクチャで詰め込みすぎですよ！

―となると、いまの形態を維持しながらのスポーツ化というのは、半ば不可能ですよね。

宮戸　相当難しいと思いますよ。それに今回の問題は相撲を楽しみにしている人から改革案として出てきたというよりも、相撲潰しというか、マイナスなほうへ引っぱろうというワイドショー的、週刊誌的な話だと思いますから。だからそれを鵜呑みにしてどうこうはボクも言えないと思うし、話したくないですね。これはプロレス界も一緒なんです。

―あ、一緒ですか。

宮戸　ミスター高橋本（『流血の魔術・最強の演技』）が出たときにね、書かれた内容に事実もあったかもしれないけど、ボクからしてみりゃ「それはちょっと違うよ」という部分も半分あったわけだから。そして、あの本が100ページだとして、その30ページがホントだとしたら、そのたった30ページがプロレスのすべてにされちゃうんですよ！

―プロレスの「一部分」であるはずが、「すべて」にされてしまう、と。

宮戸　プロレスを構成する要素が100項目あるとしたら、そのなかでたった30項目が「プロレスのすべて」のように思われてしまった部分がある。それは今回の相撲の件もそうだと思うんですよ。八百長がたとえあったとしても、それはいろいろな要素があるなかでの一部の側面であってね、その一つの事実だけですべてが語られるべきじゃないと思う。そういったイメージ、決めつけ、烙印というもの



宮戸現場部長が心血を注いだ、かつてのUWFインター。ここからPRIDEが生まれたといっても過言ではなく、高橋本だけでは語りつくせぬ世界が確かにあった。

単なる「競技」なら髷もマワシも塩をまく必要もないわけですよ！

宮戸優光

の怖さは、ボクもプロレス界でよく知ってますからね。

―もし八百長があったとしても、「相撲=八百長」とは言えないということですね。一部であってイコールではない。

宮戸 だからね、高橋本に書かれてることの一部は事実だったとします。ただ、それはプロレスのせいぜい2割3割でしかない。それを「2割3割でもあるなら、正しいということじゃないか」と言われたらそれまでですよ。でも、ボクからしたら残りの7割8割がなかったら、「プロレス」じゃないんですよ！ プロレスとは呼べない！

―相撲にしてもプロレスにしても、一つの事実を盾にレッテルを貼るのは間違いだ、ということですよね。

宮戸 ただ、プロレス界の例でいえばね、肝心のレスラーや関係者がそのレッテルを鵜呑みにして、それがプロレスのすべてのように思っている“高橋本以降世代”が業界内に多くなっているのが問題ですよ！ ボクはUインターで95年まで現場にいて、スネークピットジャパンというジムを立ち上げて、IGFで15年ぶりくらいに現場に関わらせてもらうようになりましたけどね。現場に戻ってみて、「あれ!? なんでこんなに変わってしまったんだ」って驚きましたよ。要するに高橋本が出て10年くらい経って、レスラー、関係者の世代が全部変わっちゃってるんですよ。

―いわゆる“高橋本以降”の世代になっていた、と。

宮戸 その“高橋本の何割か”がプロレスのすべてだと、勝手に解釈している世代の人たちがプロレス界の中枢に関わったりしてるもんだから、「あれ!? この状態だとプロレスはホントに高橋本の言ってるような世界になってきてるな」って思いましたよ。

―高橋本がベースになった世界になってきてしまっている、と。

宮戸 そういう怖さを感じてます。だからいまのIGFでいえばね、第1試合の定アキラだとか、あるいは鈴川真一のような試合は、昔のプロレスではあたりまえなのに、何か特別なことが起こったような、事件が起こったような物言いがされるし、そういう目で見られたりするんですよ。

―「プロレスを逸脱した試合」に思われるわけですね。

宮戸 でも、ボクに言わせれば「これが“プロレス”なんじゃないの?」ってことなんですけどね。高橋本のなかのたかだか30ページだけで構成されたものが「プロレス」と呼ばれることこそが異常なんだから。それこそ書いた高橋さんがいまの業界を見たら、一番ビックリするんじゃないかっていうね（笑）。

―「こんなのはプロレスじゃない」って言うかもしれない（笑）。

宮戸 アッハッハッハ！ そうそう、高橋さんだって、プロレスというものは、あの本だけではとても言いつくせない世界だって知ってるはずだから。でも、大衆はそういう本や、あるいは報道が出ると、それをすべて丸飲みしてしまうところがありますからね。話を戻すと、正直、このままだとホントに相撲は潰れてしまうかもしれない。はたしてそれでいいのかなって。それはいまボクも外から見てて感じるところですけどね。

―昔は相撲を観てる大衆も「八百長があるかもしれない」ということを前提にして観ている部分がありましたよね。

宮戸 そうかもしれない。ちょっと話は違うけど、ボクが競輪を観に行ったとき、古くから競輪をよく知ってる人に解説してもらいながら観たんですよ。そしたら、ボクの感覚ではへんな意味じゃなく「それって八百長じゃないの?」と思うような話がけっこうあったんですよね。「誰と誰のラインがあるから」とか。でも、それは八百長じゃなくて、「そこも含めて読むのが競輪なんだ」言って言われたんですよ。それを聞いて、逆に競輪というものの深さを感じて、いっそうおもしろくなりましたけどね。

―競輪って、ヨーイ・ドンでただトラックを回ってるだけじゃないですもんね。

宮戸 そうなんです。そこにいろんな人間模様などが絡まって、勝ち負けがついていくという。それを「八百長」と言う人もいるんだろうけど、「そこも含めての勝負」だと言われると、ボクはより深く観れました。

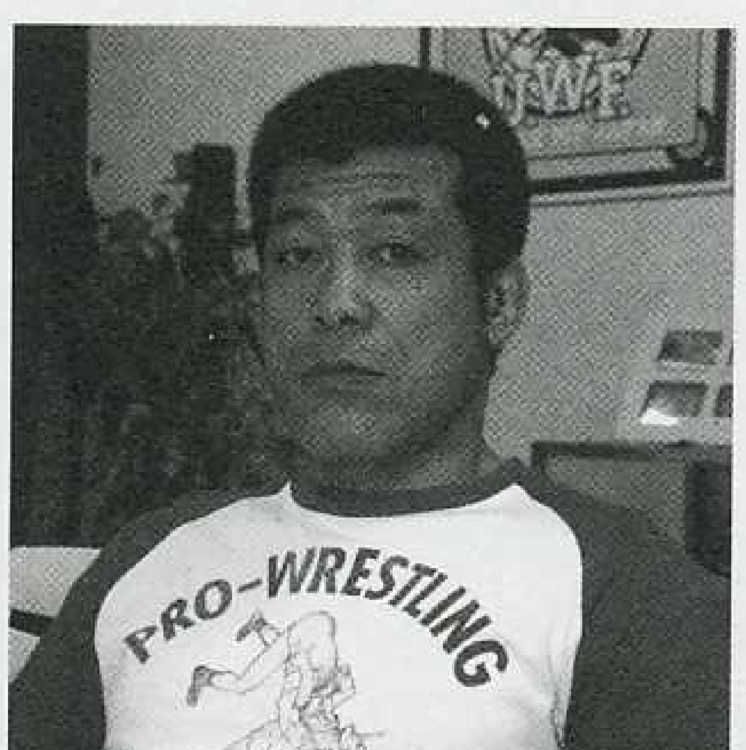
―相撲が好きな人も、きっと相撲のいろんな要素を含んだ深さがあるからこそ、ハマっていってるんでしょうね。

宮戸 単なるスポーツなら塩をまくような、あの長い時間なんて必要なんかないんだから。でも、そういう塩をまいたり、四股を踏んだりする時間に、観客は酒を飲んだりして楽しんでるわけでしょ。それが文化のなかに一緒にいるということじゃないですか。そういう部分もわからずに「競技」という発想しかないのなら「この文化がわかってないね」「相撲を楽しむ文化が日本人になくなってきたんだね」ってことじゃないですか。だから、今回の件については、相撲の競技という一部の側面のまた一部を突ついて、相撲全体を壊してしまいかねない報道っていうのは、違うんじゃないかなって思いますね。


【11年2月25日／都内・UWFスネークピットジャパンにて収録】



昨年、『流血の魔術 第2章』を出版したミスター高橋。しかし、1作目と違い、今回はマット界にほとんど影響を与えなかった。これはマット界が“高橋本をベースにした世界”になってしまったのか。それとも“高橋本を乗り越えた世界”になったのか。



みやと・ゆうこう■1963年6月4日、神奈川県出身。85年に第一次UWFでデビュー。第二次UWFを経て、UWFインターでは実質的なプロデューサー、現場監督として活躍し、“Uインターの頭脳”と呼ばれた。95年に新日本との業務提携路線に反対し、Uインターを退社。99年にプロレスリングジム「UWFスネークピットジャパン」を設立。08年からIGFのリングゼネラルマネージャーに就任した。



日米のプロレスを知りつくした男

東洋の神秘

ザ・グレート・カブキ

「プロレスラーは“八百長だ”なんて思わせない試合をしなきゃダメなんだよ」

昨今の大相撲八百長問題のなかで、相撲の八百長を「プロレス」という言葉で表現されることが何度かあったが、本来プロレスとはいったいどういうものなのか。アメリカでトップを張った日本人として、日米のプロレスを知りつくしたカブキに、あらためて「プロレスとは何か?」をうかがってみた。

聞き手／堀江ガンツ　本文構成／佐藤篤（THE PEHLWANS）　試合写真／ George Nopolitano

この商売は足一本折ったらおしまい。生活のために星を買う意味もわかるよ

――昨今の大相撲の八百長問題でプロレスが引き合いに出されていますが、それはちょっと違うのではないかと思うんですよ。そこで日本とアメリカ、両方のプロレスを知っているカブキさんにお話をうかがいに来ました！

カブキ はい、わかりました。

――まずカブキさんって、よく相撲出身と間違えられませんか？

カブキ そうなんだよ。それだけプロレスは相撲出身が多いんだろうけど、源ちゃん（天龍源一郎）や、横綱（輪島大士）と組んだりすることが多かったから、そう思われるんだろうね。

――そんなカブキさんからして、今回の一連の八百長報道というのは、どう思われましたか？

カブキ 本当はあってはいけないことなんだろうけど、お客さんを楽しませる意味での八百長というものがあったのかなとも思うんだよね。あとは、相撲は番付が一枚下がれば給料が全然違うっていう世界で、自分の生活が関わってるわけだから、そういう状況が星一つ買うという行動につながったのも、ある意味わかるし。

――自分の肉体だけでやってるプロフェッショナルだと考えると理解もできる、と。

カブキ この商売は足一本折ったらおしまいだもんね。

――大ケガ一つで、その後の人生が大きく変わる世界ですよね。

カブキ すべてが狂っちゃうからね。そういう身体を張っている世界なんですよ。

――広い意味でのエンターテインメントというか、お客さんのためのものなんですよね。で、プロレスもお客さんを盛り上げることが大事じゃないですか。

カブキ ただ、プロレスの場合は、ちょっと違うんだけどね。若いときに基礎練習だったり、それこそガチンコをやって、その強さから成り立ってるものだから。そして、そのうえでお客さんを楽しませてあげる試合を見せるっていうね。

――カブキさんがプロレスラーとして入門された日本プロレスはどうだったのでしょうか？

カブキ それこそ毎日、寝技でグッチャグチャにされてさ、口の中が血でネチャっとしてくる。それぐらいやられるんだよ。だから自分は15歳のときに新弟子で入ったんだけど、同期と呼べるようなヤツがほかにも40～50人くらいいたんだよ。



でも、誰一人として残らなかったからね。2～3日したら、もうかなりの人間が逃げちゃったんだよ（笑）。

――それは厳しすぎる世界ですね。ちなみに、当時はどんな練習を？

カブキ 曜日によって違うんだけど、例えば、月曜日はウェートをやって、その後にガチンコの練習だね。

――ガチンコの練習というのは、いわゆる「極めっこ」ですか？

カブキ そうそう。俺なんかはいつも下になってヒーヒー言ってさ（笑）。そのときにゲンコツで頬をガッとやられると口の中が切れるんだけど、そんなのはほったらかしだよ。それを2～3人に回されてガンガンやられてさ。それで動けなくなると、塩を持ってきてガバッとかまされてね。

――えっ、塩をかまされるって、どういうことですか？

カブキ もう身体が動かなくなってるわけよ。でも、口の中で血がネチャっとしてるから、呼吸をするために口を開けてると、先輩から「コラッ！」って塩を口の中に入れられるんだよ。そうすると、かまされたほうは口の中が痛くて暴れるでしょ。それを見た先輩が、「おまえ、まだ元気があるじゃねえか。この野郎！」って（笑）。

――傷口に塩をすり込むっていうことを本当にされてしまうわけですね（笑）。

カブキ そんな世界だよ（笑）。

――カブキさんは、とくに格闘技経験というのはなしに入門してきたわけですか？

カブキ 俺も柔道はやってたけど、そんな中学生の柔道なんかで敵いっこないからさ。もう新弟子の頃は毎日、グッチャグチャにされてたから。それで自分もようやくある程度は強くなって、後輩もできてきたと思ったら、2年後くらいに入ってきたのがマサ斎藤、サンダー杉山、ラッシャー木村だから。

――ヘビー級のオリンピックレスラー二人と幕内力士が入ってきちゃった（笑）。

カブキ こっちは先輩といっても歳は全然下で、身体だって向こうのほうがずっと大きいからね。

――そういった猛者たちが集まったなかで、カブキさんはどうやって生き残っていこうと思われていたんですか？

カブキ それはもう「負けちゃいけない」って思うだけでさ。なんとかやられない実力を身につけて、自分を守る。それしかないんだよ。

――自分の身は自分で守らなければならなかったわけですね。ところで力道山時代のプロレスは、観客に対して「これは真剣勝負だ」っていう打ち出し方だったわけじゃないですか。実際にカブキさんはそういう試合も前座でやられていて、そういう日本のプロレスで育って、数年後にアメリカ遠征に行ったときカルチャーショックみたいなものはありましたか？

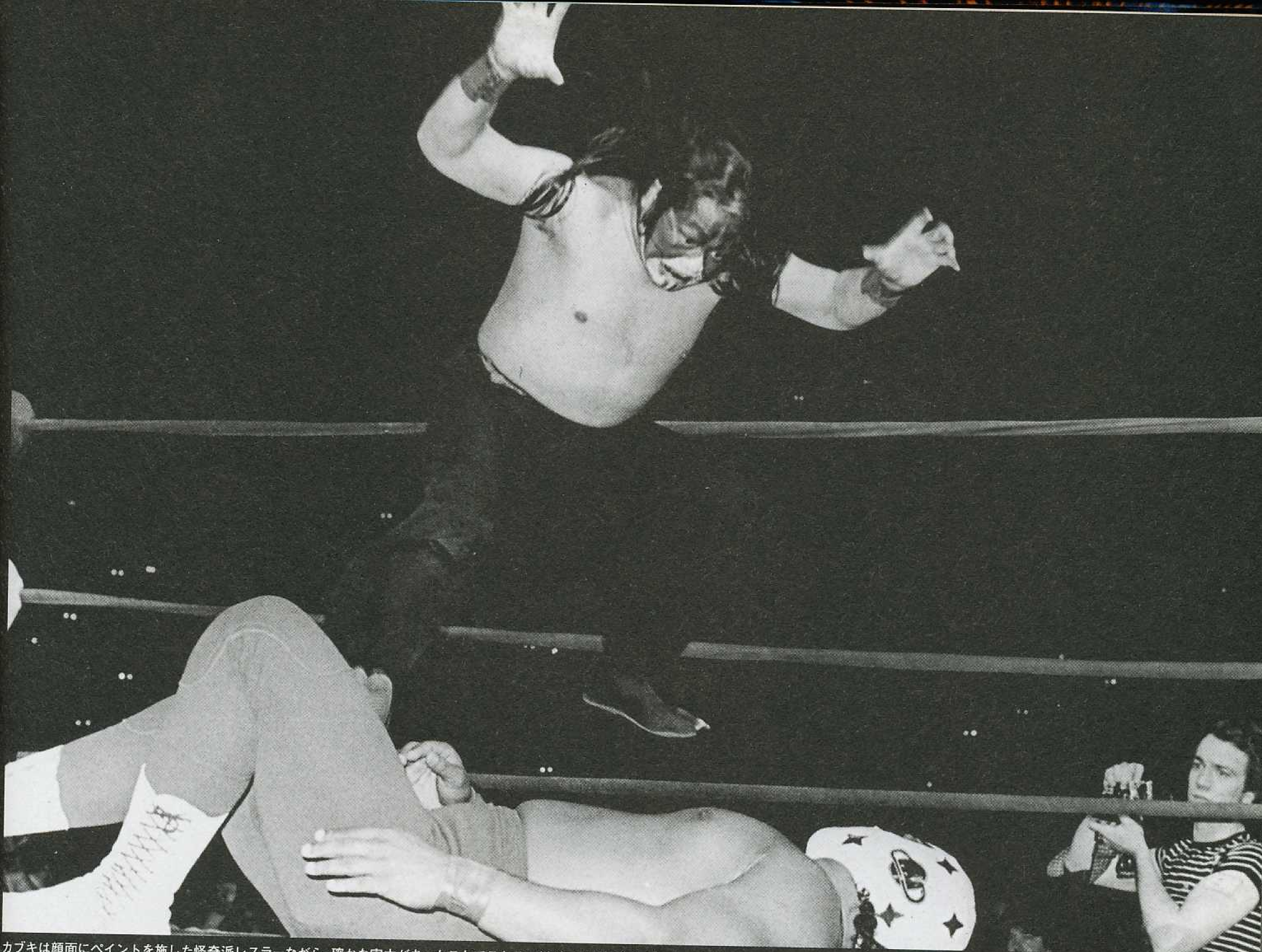
カブキ いや、アメリカはよけいにひどいよ。

――えっ、そうなんですか？

カブキ だって「おまえは日本から来たのか？」って聞かれて、「そうだ」って答えたら、試合中に突然ガチンコでくるんだよ（笑）。

――仕掛けられちゃうわけですか。

カブキ 出る杭は打つじゃないけどさ、出る前に打たれるわけよ。やられちゃったら、もうそこで序列ができちゃうから。でも、こっちがやり返していくと、向こうは「オッケー！　オッケー！　もう充分だ！」って言ってくるんだよ。つまり、来



カブキは顔面にペイントを施した怪奇派レスラーながら、確かな実力があったことでテキサス州ダラス地区を中心にトップに君臨した。

アメリカでガチンコができないとナメられてションベン飲まされるよ

るならこっちもいくよ、という姿勢を見せないとナメられるんだよ。

――ということは、仕掛けられたときに返すことできないと、もうそれ以降は向こうのやりたい放題ですか。

カブキ　そう。たとえば、ちょっと太った鍛え方が足りない日本人レスラーなんかはアメリカに行くと、向こうのレスラーたちに馬鹿にされてさ。それで、飲みかけのコーラをロッカーの上に置いて試合なんかにいったら、みんなでそのコーラの中にションベンを入れるんだよ。で、試合から戻ってきてガーッと飲んだら、オエッて吐いて、それをみんなに笑われてね（笑）。

――いわゆるイジメみたいなものですよね。

カブキ　もうそうなったらダメだね。絶対にそこでは上を取れないから。

――大相撲の番付じゃないですけど、プロレスも仕事ができる、実力がある、客が呼べるっていうことでランクがついてくるというか。

カブキ　それは自分で作り上げていくもので、誰も手助けしてくれないからね。だからニューヨークなんかは、お互いに足の引っぱり合いだよ。

――では、アメリカンプロレスの内側は、そういう熾烈な生存競争という"ガチンコ"があるわけですけど。観客に見せるエンターテインメントの世界としては、アメリカのプロレスはどういう打ち出し方だったんでしょうか？

カブキ　やっぱり当時は、日本よりもアメリカの方がシビアだからね。客は興奮するためにケンカを観に来てるわけだからさ、ヒールだったらよりヒートを買わなきゃいけない。またオフィスもビジネスに厳しいから、時間に遅れたり、しょっぱい試合をしたら、すぐにファイヤー（解雇）だよ。

――オフィスやマッチメイカーが常に目を光らせているわけですね。

カブキ　そうそう。そういう状況のなかで全部自分で考えて、サバイブしていかないとね。これが日本だと縦社会だから、先輩と後輩の関係で上がっていくかもしれないけど、アメリカの場合はそれがないから。

――それって相撲と同じ構造ですね。兄弟子より強くなって番付が上がれば、弟弟子のほうが上になるという。ギャラなんかの待遇面もトップと前座とではまったく違うんですよね？

カブキ　それこそ天と地だよ。1試合のギャラでもヘタしたらゼロが3つぐらい違うから（笑）。

――そんなにですか⁉　だけど、それぐらい違うと気合いも入りますよね。

カブキ　だから自分もトップになろうと努力するわけでしょ。

――カブキさんが日本に帰国されたあとから、アメリカのプロレスはもっとショーアップされ、WWEがエンターテインメント宣言をしたじゃないですか。それについてはどう思われましたか？

カブキ　ちょっと違うなって思ったよね。たとえば、俺なんかは入場してからリン

グ上でヌンチャクをやって毒霧を吹くっていう、それが一つのエンターテインメントでしょ。だけど、試合は別なんだよ。

――でも、いまはそれが一緒になっている、と。確かに、カブキさんの試合はオーソドックスでガッチリやられてましたよね。

カブキ だってお客さんはエンターテインメントを観に来てるんじゃなくて、四角いリングの中での男同士の闘いを観に来てるんだから。だけど、一番悪い例を作ったのは、（タイガー・ジェット・）シンと（アブドーラ・ザ・）ブッチャーなんだよ。あんなラクな試合をやってさ（笑）。

――ラクな試合を（笑）。

カブキ お客さんがいる客席でガチャガチャやって、お客さんが逃げ回っててね。あんなものはプロレスじゃないから。やっぱり四角いリングの中で勝負をつけるのがプロレスなんだよ。

――その一方で、プロレスの内幕を映した映画が公開されたり、ミスター高橋さんの本が出たりして、お客さんのプロレスに対する見方も変わってきたように思うのですが。それについてはどう思いますか？

カブキ ファンの考えも変わってきてるんだろうけどさ、根本的なものを変えちゃダメだよ。お客さんが、「あっ、次はこうなるだろうな」っていうのと逆の発想でいかないと。お客さんに読まれちゃうようではダメなんだよ。

――読まれるっていうことは、「筋書きどおりだ」みたいな感じで見切られてしまうわけですからね。

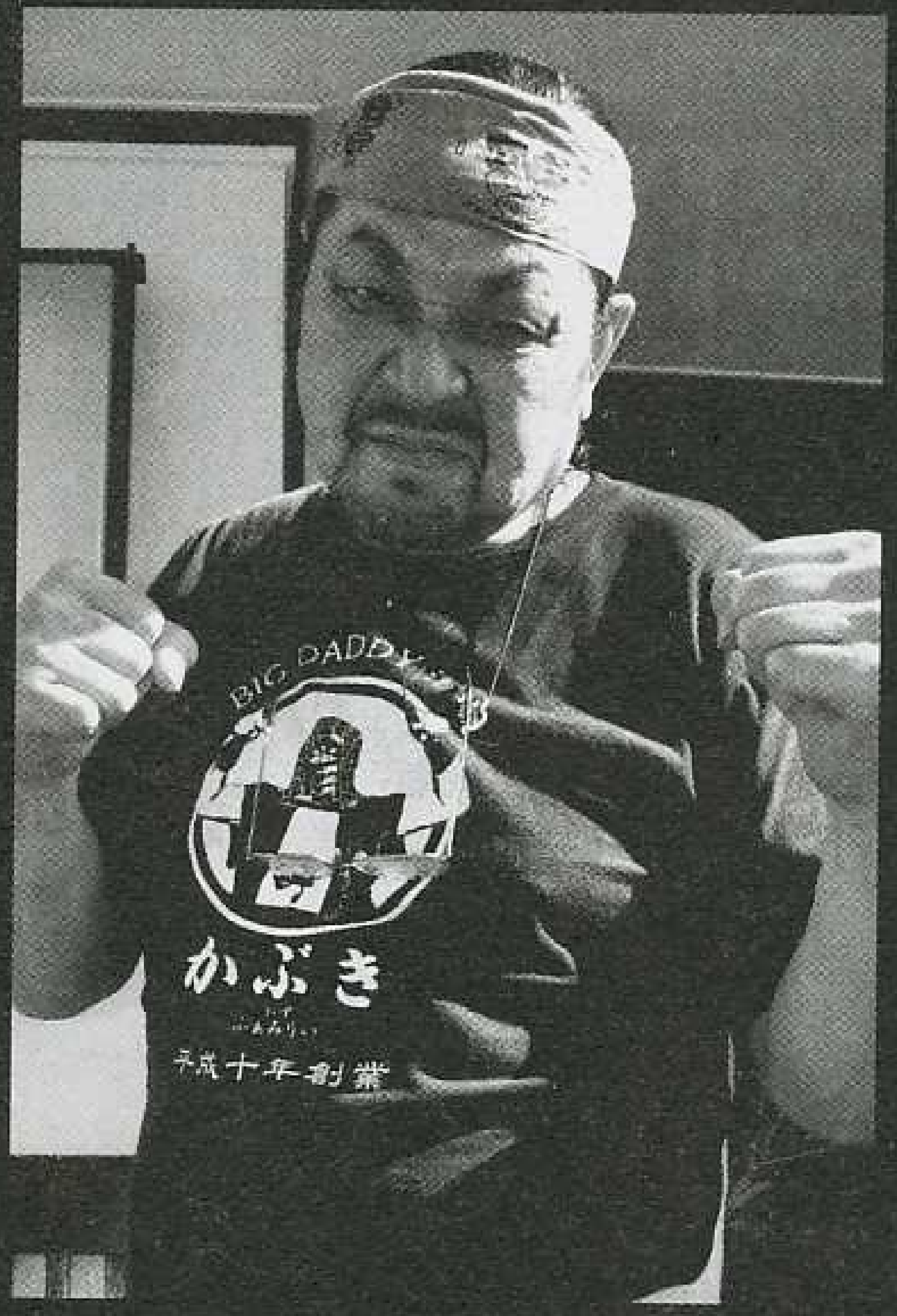
カブキ そう。やっぱりお客さんが何を考えているかっていうのは、リング上にいると肌に感じるよ。そこでお客さんと逆の発想でいったら、お客さんの背中もイスの背もたれから外れて前のめりになって見入ってくれるもん（笑）。

――カブキさんから見て、そういった面でうまいレスラーは誰になりますか？

カブキ マサ（斎藤）さんなんかはうまかったよ。いつもリングの中で相手から目を離さないんだよ。誰かみたいに「オーッ！」ってお客さんにアピールして、相手に背中を見せることはないからね（笑）。

――そういうアピールは緊張感がなくなりますか（笑）。

カブキ 常に相手を見て、「こい、この野郎！」っていうものを出していかないとね。それが本当のレスラーなんだよ。



ざ・ぐれーと・かぶき■1948年9月8日、宮崎県出身。本名、米良明久。64年に日本プロレス入団。81年にテキサス州ダラスでザ・グレート・カブキに変身し、大ブレイク。和風ペイントに毒霧というアメリカでの日本人レスラーのスタイルを作り上げる。98年に引退。現在は居酒屋を営んでいる。

ザ・グレート・カブキ

うちは飲み屋だから「プロレスは本気ですか？」なんてよく聞かれるよ

――80年代ぐらいまでプロレスの人気が高かったというのはそれもあるんでしょうね。そういう緊張感が観ているほうにも伝わってきたという部分で。

カブキ だから、俺らのときなんかは自分の前の試合をかならず観てるわけよ。同じようなことをしないために。たとえば、前の試合がヘッドロックで攻めているんだったら、次は腕だけを攻めにいくとかさ。だけど、いまはレスラーがお客さんに媚を売ってるんだよ。

――ベビーフェイスだけじゃなくて、ヒールもそうですよね。「私はヒールなのでブーイングしてください」って自分で言っちゃうのと一緒で（笑）。

カブキ それなんかも試合のなかで見せないとね。お客さんに「あいつ、汚ねえ野郎だな」って思わせないとダメなんだよ。だから、70～80年代の外国人選手はみんな個性があってさ。それぞれが凄かったじゃない。

――しかもうまかったですよね。そういう意味で、昔のプロレスにあった緊張感みたいなものが、ここ10年間ぐらいなくなっているような気がしませんか？

カブキ ないね。だから、昔なんかはレスラーがお客さんを教育してたんだけど、いまはレスラーがお客さんに媚を売ってる。それじゃダメだよ。そんなやつがプロレスをいくらやっても、観てるお客さんはまったく興奮しないから。

――なるほど。ちなみに、カブキさんは飲食店をやられていることもあって、お店に来たお客さんに「プロレスって本気でやってるんですか？」みたいなことを聞かれたりしませんか？

カブキ そんなのしょっちゅうだよ。たとえば、「ビル・ロビンソンの人間風車なんか、あんなに飛ばないでしょ」って言われたりとかね（笑）。

――それに対して、カブキさんはどう答えているんですか？

カブキ 俺なんかは、「飛ぶか、飛ばないかやってみるか？」って言って、ダブルアームスープレックスの投げる前の体勢のままキュッと極めちゃうんだよ。

――実践してみる、と（笑）。

カブキ すると、極められたほうは「ギャーッ！」ってなって。「すいません。飛びます！　飛びます！」なんて言ってね。「二郎さんじゃねえんだ、この野郎！」って（笑）。

――つまり、周りからそういうふうに思われても、プロレスラーがどう見せるかってことなんですよね。

カブキ そうそう。実際にやってわからせるしかないんだよ（笑）。俺たちの商売っていうのは、ナメられたら終わりなんだから。

――なんか、いまはそういう「八百長」と言われることに対する緊張感みたいなのが減ってるのかもしれませんね。

カブキ だからね。レスラーは「八百長だ」なんて言われるほうがダメ。そう思わせない試合をしなきゃダメなんだよ。

――わかりました。今日はありがとうございました！


【11年3月10日／都内・『かぶき・うぃず・ふぁみりぃ』にて収録】

――いま相撲界を震撼させている八百長

ちの銀行口座を調べればすぐにわかる、

分を取り除いて再生するしか方法はない

思いますね。テレビ中継もいまでは地上
波での放送が少なくなってきているじゃ



マッドネスなご意見番の
大相撲八百長騒動とプロレス論！

真剣勝負でもなければ、八百長でもない。

プロレスは、プロレスなんです。

現在、全日本プロレスで大暴れ中！

船木誠勝

大相撲八百長騒動を語るうえで、引き合いに出されがちなプロレスだが、新日本プロレスから真剣勝負へと向かい、いままた全日本プロレスに参戦している船木誠勝は今回の騒動をどう見ているのか。またプロレスからMMAへと移りゆくマット界の変遷を、船木自身の視点で語っていただいた。

聞き手／佐藤篤（THE PEHLWANS）

―いま相撲界を震撼させている八百長問題も含めまして、今回はプロレスと格闘技の両分野においていまもなお現役選手として活躍されている船木さんに、これまでのキャリアを振り返っていただきながら「八百長と真剣勝負」についておうかがいできればと思います。

船木　わかりました。まず、八百長に関してですが、自分の考えはあまり固くないんですよ。自分で言うのもへんですが、意外とかなり柔軟なほうというか（笑）。

―柔軟とはどういった部分で？

船木　今回の大相撲の問題に関しては、もう起きてしまったことは仕方がないと思うんですよね。だからこそ、日本国民にとって大相撲が必要なのか必要じゃないのか、これを考えることが大事ではないでしょうか。そこで、もし国民が大相撲が必要であるとするならば、この先大相撲はどうしていかなければいけないのかを真剣に考える必要があると思います。

―まずは、大相撲の必要性を問うべきである、と。あと、今回の八百長問題に関しては、携帯メールでのやり取りが話題になりました。

船木　携帯メールもそうですけど、それよりもお金の動きを見るのが一番手っ取り早いんじゃないですかね。そのお金がどこから流れていて、どれだけのお金が出入りしていたのかということで、おそらく相撲の仕組みというか、すべてがわかると思うんですよ。

―要は、関わっていると思われる人たちの銀行口座を調べればすぐにわかる、と。

僕はプロレスは100パーセント真剣勝負ではないと思っていました

船木　そうですね。結局はなんのために八百長をやっていたかが問題だと思うんですよ。たとえば、八百長をすることで莫大なお金を得ている人もいる、その可能性だってあるわけじゃないですか。歴史をさかのぼれば、相撲は300年前からあるんですよね。なので、おそらく昔から八百長は大なり小なりはあったと思うんですよ。それがいまは悪とされているわけじゃないですか。だったら相撲界が生き残るためには、その悪とされている部分を取り除いて再生するしか方法はないということですね。


新日本プロレスからUWF、パンクラス、総合格闘技を経て、船木は現在全日本プロレスに参戦中。どんなリングであろうと、魅せたいというファイターの気持ちは変わらないと語っている。

―悪とされている八百長を撲滅する、と。そういったなかで、今回の八百長問題のマスコミ報道ではプロレスが取り上げられがちだったじゃないですか。世間の認識のなかで、真剣勝負じゃないものに対してプロレスというものがよく持ち出されますけど、これについてはどう思いますか？

船木　べつに言いたい人が言っておけばいいことだと思いますよ。結局は周りが決めることだと思うので。プロレスを観に来てくれている人たちは昔と変わってきていると思うんですよ。だけど、凄く真剣にプロレスを観ているというのは、いつの時代も同じなんですよね。つまり、プロレスも一つの文化として戦後からずっとあるものなので、これは胸を張ってできる仕事だと思うんですよ。

―船木さんの場合、プロレスと格闘技というのは？

船木　すべて一緒です。プロレスも格闘技もスタンスとしては一緒です。人前でやる行為自体が一緒じゃないですか。基本は見世物だと思うので、お金を取って自分たちの闘いを見せるという、いわゆる人気商売ですよね。だから、そこが真剣勝負であろうがなかろうが、おそらく一緒だと思うんですよ。もう25年もやってると、だんだんそういう心境になってきますね（笑）。

―そのなかでプロレスは60年近い歴史があって、一つの文化を形成してきた、と。

船木　やるほうはひたすらやってるだけなんで、その文化がこれから先どういうかたちであれ残っていければ一番いいと思いますね。テレビ中継もいままでは地上波での放送が少なくなってきているじゃないですか。放送をされてもゴールデンではなく深夜帯ですよね。それでも全日本プロレスで地方巡業なんかに行くと、何百人というお客さんが第1試合からメインイベントまで観て、喜んで帰っていかれる姿がそこにはあるんですよ。そういうのは文化として凄くいいことだなと思いますね。

―船木さんはプロレスラーになる前、プロレスというものをどうとらえていましたか？

船木　僕はプロレスはプロレス、100パーセント真剣勝負ではないと思ってました。

―それはどういったところで？

船木　ある外国人選手が凶器でナタみたいな刃物を持っていたんですよね。だけど、それで対戦相手を斬るわけじゃないんですよ。斬るんじゃなくて刃物をつかむ柄の部分で相手を殴っているので、やっぱりギリギリのところで本気を出しちゃいけないっていうね。

―暗黙の了解みたいなものがある、と。

船木　そうですね。小学生の自分でもそれはわかりましたよ。やっぱり本当に相手が憎ければ、その刃物で斬って殺すと思うんですよね。だけど、相手がギリギリで耐えられるところでやってるという行為がプロレスのルールなんだな、と。そこは理解して観てました。

―それがわかって幻滅しませんでしたか？

船木　いや、それはなかったですね。逆に、本気を出せばプロレスラーは強いんだろうなっていう憧れを自分は持ってましたよ。

――その憧れを持って船木さんは中学卒業後に弱冠15歳で新日本プロレスに入門されたわけですよね。

船木　新日本に入って、まず最初にビックリしたのがいわゆるセメントの練習をするんですよ。そのときに「いったい、これはなんなんだ?」って思いましたね(笑)。

――あ、逆に「テレビで観てるのと違うぞ!」と(笑)。

船木　「あれ?」って思いました(笑)。それで自分の同期というのは、武藤さんや橋本真也だとか柔道経験者がいましたんで、あの人たちは入った時点である程度はできているんですよね。だけど、自分は格闘技経験がないから何もできなければ身体も小さいので、セメントでただ潰されてるだけなんですよ。それでもう「これはなんとかしなければデビューできない」と必死でしたね。

――セメントについてよく言われるのは、新人の場合は逃げることからまずは覚える、と。

船木　そうですね。そもそも技のかけ方はもちろん、逃げ方すら教えてくれるわけじゃないんですよ。だから、最初はやられっぱなしですよ。ひたすら痛い、苦しいの1～2時間ですね。そこから極められなくなるまでに1年半ぐらいかかりました。そして、後輩が入ってきて自分のほうが技を知ってるぶん攻めれるようになったんですよ。だから、この時点で真剣勝負だとか、見世物だとかが自分のなかでごっちゃごちゃになってるんですね。

――たとえば、プロレスの仕組みを誰かに教わることはあったんですか?

船木　ないですよ。まずは受け身の練習から始めて、そこで投げられ放題ですね。それがずっとあって、技とかは誰も教えてくれないんですよ。だからデビュー戦は、ほとんどセメントの延長とひたすら投げられるだけでしたね。

――お客さんの厳しい目というのもあると思うのですが、それと同時に当時は鬼軍曹と呼ばれる先輩の厳しい目もありましたよね。

船木　自分のときは星野(勘太郎)さんが毎日怒りにきてました。最初の1年は怒られっぱなしでしたね。星野さんにはデビュー戦でも怒られましたから。

――星野さんはどういう怒り方をされるんですか?

船木　ここがどうとかは一切言ってくれなくて、とにかく「ダメだ!」っていう、その一言だけでしたね。だけど、何がダメなのかわからないので、とにかく試合をして経験を積むしかないんですよ。だから、自分が怒られなくなったのは、藤原(善明)さんがUWFから新日本に帰ってきて、試合前とかに一緒にスパーリングをするようになってからなんですよ。あとはUWFからやってきた若手選手と試合をするようになってからですね。やっぱりデビューしてからの1年間というのは、いつもやられっぱなしで闘う感覚がなかったんでしょう。だから星野さんに怒られていたと思うんですよね。

――そこでUWFと接触したことが、船木さんのその後に大きな影響を与えたのでしょうか?

船木　やっぱりUWFには憧れてましたよ。だけど、自分は新日本プロレスのレスラーなので、新日本プロレスという看板を背負っているという気持ちも強かったですね。

――UWFへの憧れというのは、具体的にどういったところに?

船木　キック、投げ、関節技、やってることはシンプルなんですけど、当時はそれが凄く新鮮に見えたんですよ。新しいスタイルが生まれて、「俺もレガース履きたいな」とかそういう感じです。

自分がUWFに染まっていくことに対して周りは嫌がってましたね

――船木さん以外の新日本の選手で、その当時のUWFに対する反応というのはいかがでしたか?

船木　やっぱり上の選手は凄く嫌がってました。キックが受け身の範囲では難しいところに飛んでくるというか、「どうやって受けたらいいんだろう?」って、凄く手こずっていたような記憶があります。UWFが来たときっていうのは本当にギリギリでやってましたからね。リング上で起こったケンカが、試合が終わって控室まで続いてるっていうのもありましたし。もうお客さんのことを忘れて本気になっちゃってるんですよね。

――そんななかで船木さんはUWFにどんどん影響を受けていった、と。

船木　だから自分がUWFに染まっていくことに対して、周りは嫌がってましたね。シリーズ前に自分とライガーさんのレガースを隠されたこともありましたし。そのときは練習用のレガースで試合をしたんですけど(笑)。それで、シリーズが終わったらその隠されていたレガースが出てきたんですよ。風呂から出てきたら、ポンッと置いてありました。

――要するに、「そんなもの使うなよ」っていうメッセージだったんでしょうね。

船木　でもまあ、直接言われたとしても守らなかったでしょうけど(笑)。

――当時、UWFに影響を受けていくなかで、強さに対する憧れはあったのでしょうか?

船木　強さというよりは、自分たちが新しいこと、正しいことをやってるんだっていう意識のほうがその当時はあったと思うんですよ。派閥じゃないですけど、政治みたいな世界でしたね。

――その後、船木さんはヨーロッパ武者修行に行かれましたよね。



1989年、新日本プロレス側の説得を受けながらも、前田や高田らの誘いにより第二次UWFに移籍した船木。しかし、移籍後2戦目となったボブ・バックランド戦でドロップキックを放ったことが対スポンサー含めて問題に。プロレスから真剣勝負へと移り変わる際の混乱のようなものがうかがえるエピソードだ。

「格闘技を目指してるんだから何が悪いんだ」という開き直りですよ

船木　おそらく新日本としては、自分を海外に行かせることによって矯正されて戻ってくるという考えがあったと思うんですよ。

――UWFとつながりがないところに送り込めば大丈夫だと。

船木　でも、自分は海外に行く前にUWFからすでに誘われてたんですよね。そのときに、「1年間だけ海外に行って、そのあとは合流します」と約束してから海外へ出たので、自分のなかでは海外旅行に行くような気分だったんです。

――なるほど（笑）。では、ヨーロッパに行かれていたとき、格闘技との接点はなかったんですか？

船木　まったくなかったですね。ただ、向こうのプロレスにもシュートの部分はあって、あるとき、柔道の山下泰裕さんと世界選手権の決勝で闘った（ボイツェフ）レシェコっていうポーランドの柔道選手がいたんですけど、彼がプロレスをやりたいと言ってきたことがあったんですよ。それでプロモーターのオットー・ワンツがシュートをできる選手を集めるということで自分と、スティーブ・ライト、ミレ・ツルノが呼ばれたんですね。

――ライトとツルノ！　初代タイガー直撃世代にはたまらない二人ですね（笑）。

船木　それでレシェコを相手にみんなでセメントをやって、関節技をどんどんかけていったという記憶がありますね。でも、やっぱり柔道で世界のトップにいた選手なので覚えるのは本当に早かったですよ。レシェコは1ヵ月くらいでデビューしてましたから。

――ちなみに、スティーブ・ライト、ミレ・ツルノはセメントでも強かったんですか？

船木　二人はちゃんとできましたね。関節技なんかも、アームロックとアキレス腱固め、あとは肩固めなんかも使ってましたよ。だから、まさかヨーロッパでそういう練習ができるとは思ってもいなかったのでうれしかったですね。

――そして、日本に帰国してからUWFに合流、と。

船木　当時は、もっとプロレスチックな技を出したいなと思っていたんですよ。ドロップキックとか使えそうな技は試合のなかでどんどん使っていこうと。でも、周りはそういう思考じゃなくて、UWFはどんどん格闘技への方向性が強くなっていったんですね。

――いわゆるプロレス色を一切排したスタイルになっていってた、と。

船木　でも、自分のなかでは新しいプロレスをやりたかったんですよ。

――それが、UWF移籍直後の1989年5月、東京ベイNKホールでのボブ・バックランド戦で放ったミサイルキックですね。

船木　当時、UWFのスポンサー候補だった企業の方が会場に観に来ていたんですよ。それで自分の試合を観て、「いままでのプロレスと一緒じゃないか」と言って、結局はスポンサーにならなかったんですね。

――でも、船木さんの感覚としては、そう思われること自体が理解できなかったということですよね？

船木　その話を聞いて、最初は「えっ⁉」と思ったんですよ。だから、それ以降はもう完全に開き直りですよ。それだったらとことん格闘技スタイルでやってやろうと、そんな感じでしたね。

――つまり、反発のほうが強かったわけですね。

船木　その後、自分は腕を骨折して半年間休むんですけど、そのあいだにボクシングの試合映像をたくさん観て、知り合いもできたんでボクシングを習うようになったんですね。そして、復帰してからはまったく遊びのない試合をやってたんですよ。

――いわゆる掌底中心でダウンを奪っていくスタイルですか。

船木　そうしたら相手が目尻をカットしたりしてレフェリーストップとか、プロレスじゃない終わり方の試合がどんどん増えてきちゃったんですよ。これがプロレスだったら消化不良でお客さんも怒るんでしょうけど、当時のUWFファンには逆にそれが凄く新鮮に映ったんでしょうね。

――でもへんな話ですが、周りの選手からすれば当時の船木さんのスタイルというのは嫌だったでしょうね（笑）。

船木　凄く嫌だったと思いますよ（笑）。藤原さんにも注意されたことがありましたし。そういう意味で、当時の自分は凄く問題児だったと思います。

――問題児でしたか（笑）。でも、その当時の船木さんを抑えることはもう誰もできなかった？

船木　そうでしょうね。自分としては、「格闘技を目指してるんだから何が悪いんだ」っていう開き直りですから。これはもう自分の若さですよね。だから、いま思えばやっぱり悪いことをしたなとも思いますよ（笑）。

――たとえば、いまの全日本プロレスに当時の船木さんみたいな選手がいたらどうしますか？

船木　それはもう、ちゃんとした方向を見せるためにも叩き潰すしかないですよ。

――た、叩き潰しますか（笑）。あと、当時の話で、前田さんが「船木はUWFの天使にも悪魔にもなれる。鬼っ子」とおっしゃっていたんですけど、それもいまとなってはよくわかりますよね。

船木　あの頃の自分は暴走癖もありまし

船木誠勝



船木がDREAMに参戦した際に紹介された煽りVでは、気持ちが真剣勝負へとはやる船木誠勝に、「5年待て」と前田日明が言ったという事実が紹介された。興行を考える前田と、夢を追う船木のどちらにもうなずけるだけに、複雑な気持ちになる。

たからね。

——暴走癖が（笑）。

船木　自分はせっかちなので、「だったら早くやりましょうよ！」みたいな感じでどんどん進めていきたかったんですよ。だけど、前田さんのなかでは、いきなり始めたところで絵が崩れてしまうことを心配されていたと思うんですよね。それと同時にこのスタイルで食っていかなければいけないという部分も含めて。

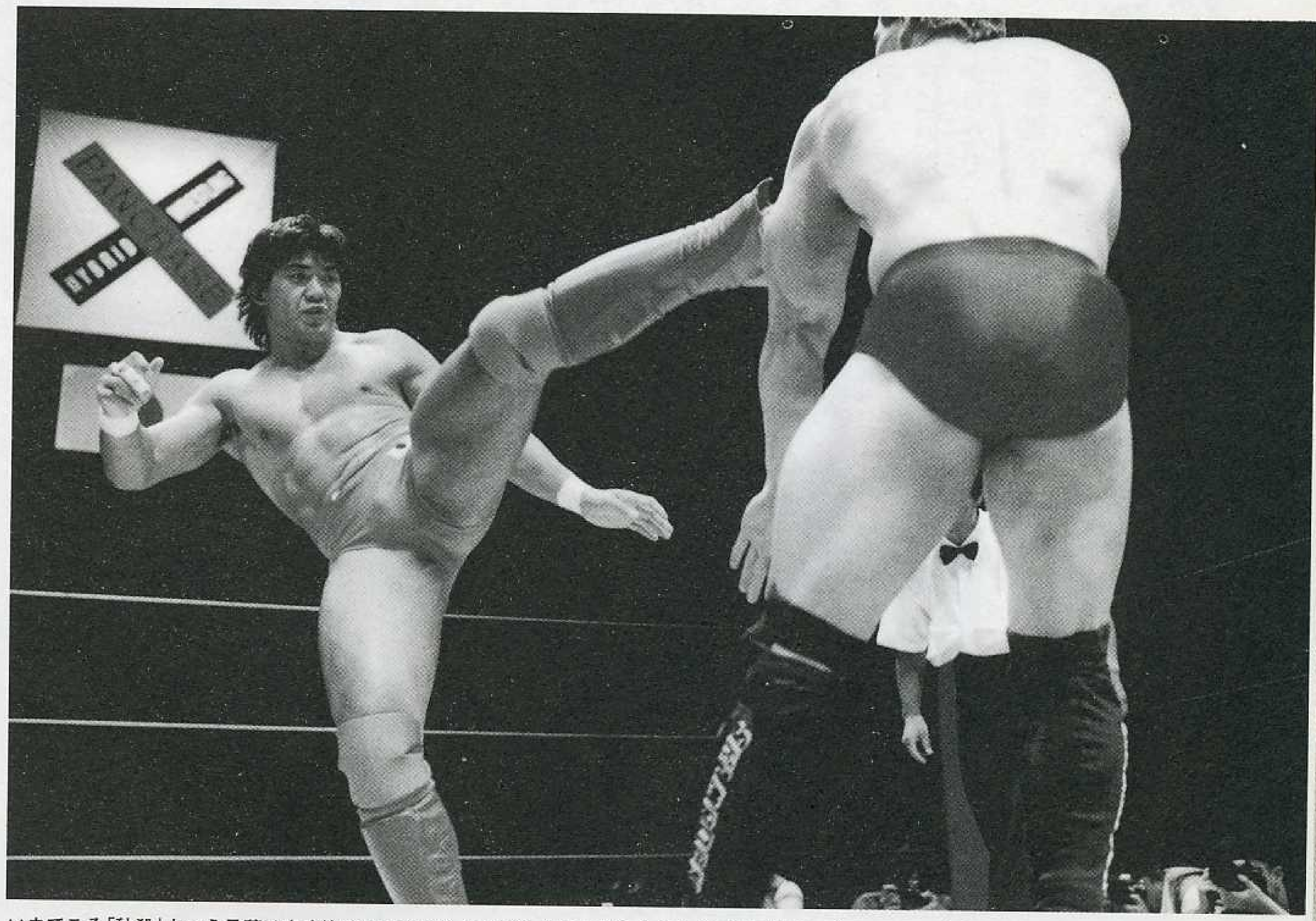
——つまり、格闘技色をますます強めていくと、シリーズ巡業や連戦は不可能になりますし、興行システムも変えないといけなくなりますよね。

船木　あとは、前田さんがトップじゃないとビジネスにならないという現実もあったんですね。やっぱりそれが一番ですよ。自分なんかが強がったところでスポンサーがつくわけじゃないですから。前田さんだからWOWOWがスポンサーになったわけで。だけど、当時の自分はそこを全然わかってなかったんですね。

——そのなかで、1990年4月、鈴木みのる選手と博多でやった試合があったじゃないですか。船木さんがレガースを着けずにひたすら二人が関節技や絞め技を狙いにいくという、いわゆるグラップリングルールに近いかたちで行なわれた。

船木　あの頃は何をやっても観客が沸いていたんですよ。ただ、そのあとに前田さんと日本武道館で闘ったんですけど、自分は凄く地味なグラウンドをやってしまったんですね。そうしたら、観客がまったく沸いてないんですよ。もうそれが凄くショックでしたね。「なんで沸かないんだろう？」っていう。

——それは会場の大きさも関係するでしょうし、客層なんかも大会場になるとビギナー層が多いので伝わりにくかったんでしょうね。



いまでこそ「秒殺」という言葉は広く使われているが、元はパンクラスから生まれた言葉であり、プロレスでは考えられないくらいのあっという間の決着を指して「秒殺」という言葉が使われた。

5年経ったら自分も25歳ですし早く成果を出したいって思って

船木　後楽園はコアなファンがほとんどなのでもの凄い熱があって、何をやっても沸くんですよ。でも、やっぱり武道館ぐらいの大会になると違うんですよね。それで、試合後にリング上で前田さんから「全然沸いてねえだろ」って言われたんですよ。それがまたショックで。

——ダメ出しですね（笑）。

船木　あのときは、自分のやってることが間違ってるんじゃないかって、完全に自信を失いましたね。試合後もコメントを出さずに、汗だくでコスチュームのまま車に乗って帰りましたから。

——まさに、「この場から一秒でも早く離れたい！」っていう心境ですね（笑）。

船木　そのあと、自分は前田さんとの試合について鈴木とああでもないこうでもないと電話で話をしてたんですけど、そこに前田さんからキャッチで電話があったんですよ。そこから2時間くらい前田さんと長電話しましたね。

——そのときの会話は覚えていますか？

船木　前田さんは酔っぱらっていたんですけど、「確かにあの試合はダメだったけども、リング上でおまえを説教したのは俺が悪かったから。次にもし試合があったらいい試合をしような」っていうやさしい言葉でしたね。

——つまり、前田さんはその当時の船木さんの気持ちを理解されていたんですね。

船木　そうですね。だけど、前田さんからは「ただ早い。あと5年はかかるよ」と言われてたんですよ。でも、自分のなかでは「なんで5年なの？」と。5年経ったら自分も25歳ですし、早いうちにやって成果を出したいっていう気持ちがあったんですよ。

——そういった方向性のズレが生じたなかでUWFが分裂し、船木さんは藤原組へ。藤原組では、船木さんがやりたいことは実現できそうだったんでしょうか？　たとえば、髙橋義生選手を相手にUWF時代の鈴木戦をさらに発展させた試合をやられてましたよね。

船木　ありましたね。あのときは、髙橋との対戦カードが決まって試合までの1ヵ月間、練習も時間をずらしてまったく別でやっていたんですよ。

——それは髙橋選手にそういう試合になると事前に伝えていたのですか？

船木　いや、一切伝えてないですね。

——髙橋選手にしてみれば、「いったい何があるんだ？」という不安もあったと思うのですが。

船木　どうなんでしょうね。まあ、もしかしたら嫌がってたかもしれませんね（笑）。でも、その頃になると藤原組もバラバラになっちゃって若い選手だけになってしまったので、決めごともなしで一つの興行を全部やってたんですよ。もうそれは瀬戸際の発想というか、本当にお客さんが入らなくなったら最後にそれをやって終わろうと腹はくくってましたね。

いくらだったら負けてもいいか？ 5億ですね。それくらいあれば……

船木誠勝

——そして、藤原組を離れ、1993年3月にパンクラス旗揚げとなるわけですが、この年は4月にK－1GP、そして11月にはUFCがスタートし、格闘技に対する時代のムーブメントが一気に起き始めました。

船木　旗揚げ戦からKOが多かったんで、最初はお客さんも「えっ⁉」っていう感じでみんな引いていたと思うんですよ。でも、それが口コミで徐々に広まっていって、「パンクラスってなんかヤバイよ」と。当時はテレビ中継もなかったですし、会場に行って観るしかないっていうことでお客さんが集まったと思うんですよね。

——そして、旗揚げ戦では「秒殺」という言葉も生まれました。

船木　あれなんかも計算外のことでしたよね。そもそも道場でスパーリングをしていてもそんな簡単に決まるものじゃないんですよ。だからあれだけ早く終わるっていうのも自分でもビックリしましたね。逆に、お客さんのことを考えると「大丈夫かな?」って不安にもなりましたよ。

——それが当時は斬新に映ったんですよね。ですが、逆にあれだけのムーブメントになると、どこかで落ちる時期っていうのがあるわけじゃないですか。その怖さはありましたか?

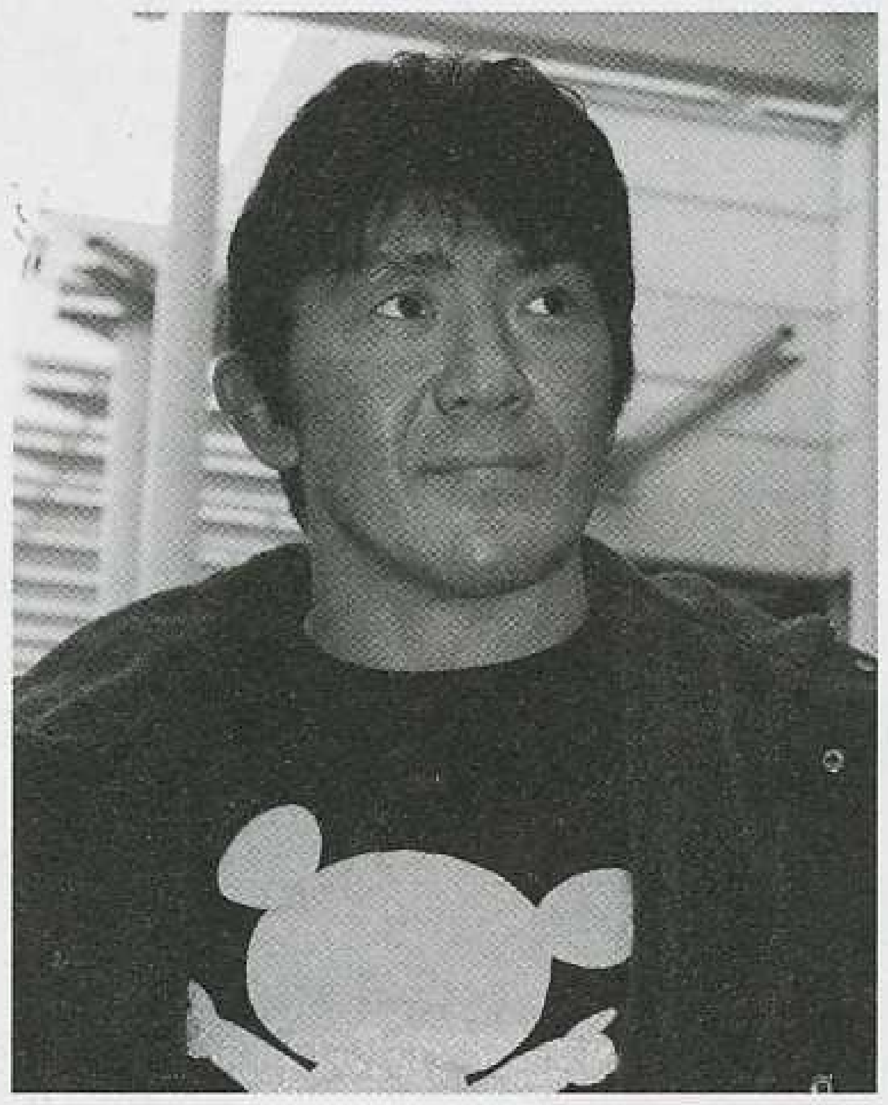
船木　だからPRIDEが出てきてくれてよかったと思いました。もっと凄いのが出てきたっていうことでホッとしましたよ。

——ホッとしましたか（笑）。

船木　あの頃になるとパンクラスもちょっと宗教的になったというか、その反面で自由が利かなくなってきたんですよね。たとえば、観客が試合中に声を出してはいけない、みたいな雰囲気があったじゃないですか。

——これもパンクラスから生まれた「シーン現象」ってやつですね。

船木　自分なんかはもっと声を出して応援したり、興奮して叫んだりとか盛り上がってほしかったんですよ。だから、大きい会場なのにシーンとしているあの空気は凄かったですね。



ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。15歳で新日本プロレスに入門し、その後UWFへ。93年にはパンクラスを旗揚げするも、00年ヒクソン・グレイシーに敗れ引退を宣言。07年桜庭和志戦で復帰し、空白期間は役者、映画監督など精力的に活動。現在は全日本プロレスに継続参戦しており、とくに昨年の諏訪魔戦では壮絶な闘いを繰り広げた。182cm、92kg。

——そして、リングスと緊張関係にあった時代もありましたよね。

船木　あれは前田さんと自分が直接話をしていなかったことが一番よくなかったんですよ。二人のあいだにいろんな人が入りすぎちゃったことで誤解が生じたんですよね。ただ、その頃のパンクラスは組織としてできあがっていたので、自分は試合だけに集中できていたんですよ。

——そういうゴタゴタはフロントに任せて、選手として試合に集中したい、と。

船木　そういうことです。だから前田さんには、そういう周りから入ってくる情報に耳を貸さないで、リングスはリングスでやってほしいっていう思いがありましたね。自分たちは自分たちでやっていくっていう思いもありましたし。

——そういう意味を込めてのリングスへの絶縁宣言。

船木　そうですね、はい。だから髙橋なんかも、「自分が出ていきますから」って言ってたんですけど、もし負けたら最終的には自分が出ていかなければいけないので、そういう争いが本当に嫌だったんですよ。自分のなかでは、「21世紀のプロレスはこうだ！」っていう思いでやってる自負もありましたし、「もうあと戻りできない」っていう覚悟を持ってやってましたからね。だから、PRIDEが出てきてホッとしたんですよ。

——呪縛から解放されたというか。

船木　あれだけの大きい興行でいろんな外国人選手が集まってきたら、いわゆる最終形態じゃないですか。それこそ自分がパンクラスでやりたかったことの全部ができあがってましたからね。あとは資金力も違いましたし。

——真剣勝負の興行を打つにはお金がかかりますよね（笑）。

船木　やっぱり規模が大きくなるとお金が必要になりますよ。

——唐突な質問なんですが、これまでのキャリアのなかで「このぐらい積むから負けてくれ」っていう話をいただいたことはありますか?

船木　それは、ないですね。

——たとえば、いくら積んだら船木さんは負けてくれますか?

船木　5億で（キッパリ）。

——5億！

船木　それくらいあれば違う人生が始められると思います（真剣に）。

——それがUWF時代のイケイケだったときに話がきたら、やっぱり額は違ってきますか?

船木　いや、あの当時だったら「絶対に負けたくない！」というのがあったんで、お金を積まれてもそこに関しては意地を張っていたと思いますよ。そういう誘いに乗らないのも正義だと思っていたはずなので。だから、プロレスに復帰するようになって再び思うんですよ。「これはスポーツなのか？　それとも見世物なのか?」って。

——プロレスのあり方についてですね。

船木　どちらにもなる要素はあると思うんですよ。だから極端な話で言えば、準備運動もなしに試合をすることも可能なんでしょうけど、それをやらないことによって大ケガをする可能性もあるわけですからね。なので、自分は試合前に「今日も大ケガすることなく無事に終われますように」って必ず気合を一回入れてますよ。そうじゃないと他人の技なんか受けれないですよ。

——昨年10月の諏訪魔戦なんかは、まさにそういう覚悟がないとできない試合でしたよね。

船木　あの試合が終わったあと、「生きててよかった」って本当に思いましたよ。だからプロレスに関して言えば、真剣勝負でもなければ、八百長でもないんですよ。プロレスは、プロレスなんです。それ以上でも以下でもないですね。


【11年3月2日／神奈川県・たまプラーザにて収録】

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

グレーなアイツから
八百長を考える

語ろう! ドン・フライ

ドン・フライを考えると八百長が見えてくる――!? “いつ何時よけいなことをする男”の試合は、ともすれば八百長と受け取られかねない内容だった。ここでは黒か白かを問うのではなく、なぜ彼はよけいなことをし続けたのかをしゃべりま～す!



語ろう！ドン・フライ

斉藤　今日はドン・フライを語ろう！ということで。

橋本　この件で突然電話がかかってきてさ、「ドン・フライについて座談会をやりたいんですけど」って言われて「は？」って驚いたよ（笑）。

斉藤　確かになぜドン・フライかというと、今号は八百長特集をやるんですよ。

橋本　はいはい。いま旬の八百長だね。

斉藤　相撲の八百長が語られてるときに「日本からはどんどんグレーなものが消えていく」みたいな話にもなってますよね。でも、今回の八百長ってあまりグレーな感じはしないというか、もちろん八百長込みで相撲が成り立ってるのはわかるんですけども、証拠となった携帯のメールっていかにも絵文字を使ってそうな感じだったじゃないですか（笑）。

橋本　「(^ω^)/ワーイ♪」って感じ？（笑）。

斉藤　そうそう（笑）。

高橋　今回の八百長って大学入試のYahoo！知恵袋騒動のレベルですよね。

橋本　今回の事件が八百長相撲の本質なのかどうかっていうのがわかんないよね。相撲の八百長は力士同士の互助会活動だけなのか、もしくは中盆（仲介者）がいて、たとえば誰かが何連勝するってことまで決めてるのか。

斉藤　なにしろ相撲協会って銀行からの借り入れなしで両国国技館を建てちゃうようなヤバイ組織じゃないですか。その史上最大の格闘技団体を成り立たせるために八百長があった……という幻想を抱かせる流れじゃないですよね、今回って（笑）。

橋本　グレーだからこその味わいみたいなものは感じないよねぇ。

斉藤　それで「グレー」とは何かって考えたときに、ドン・フライって人を語ると、それが見えてくるんじゃないかな、と。

橋本　ホントかよ（笑）。

斉藤　一言で言っちゃうとドン・フライってウサンくさいですよね（笑）。

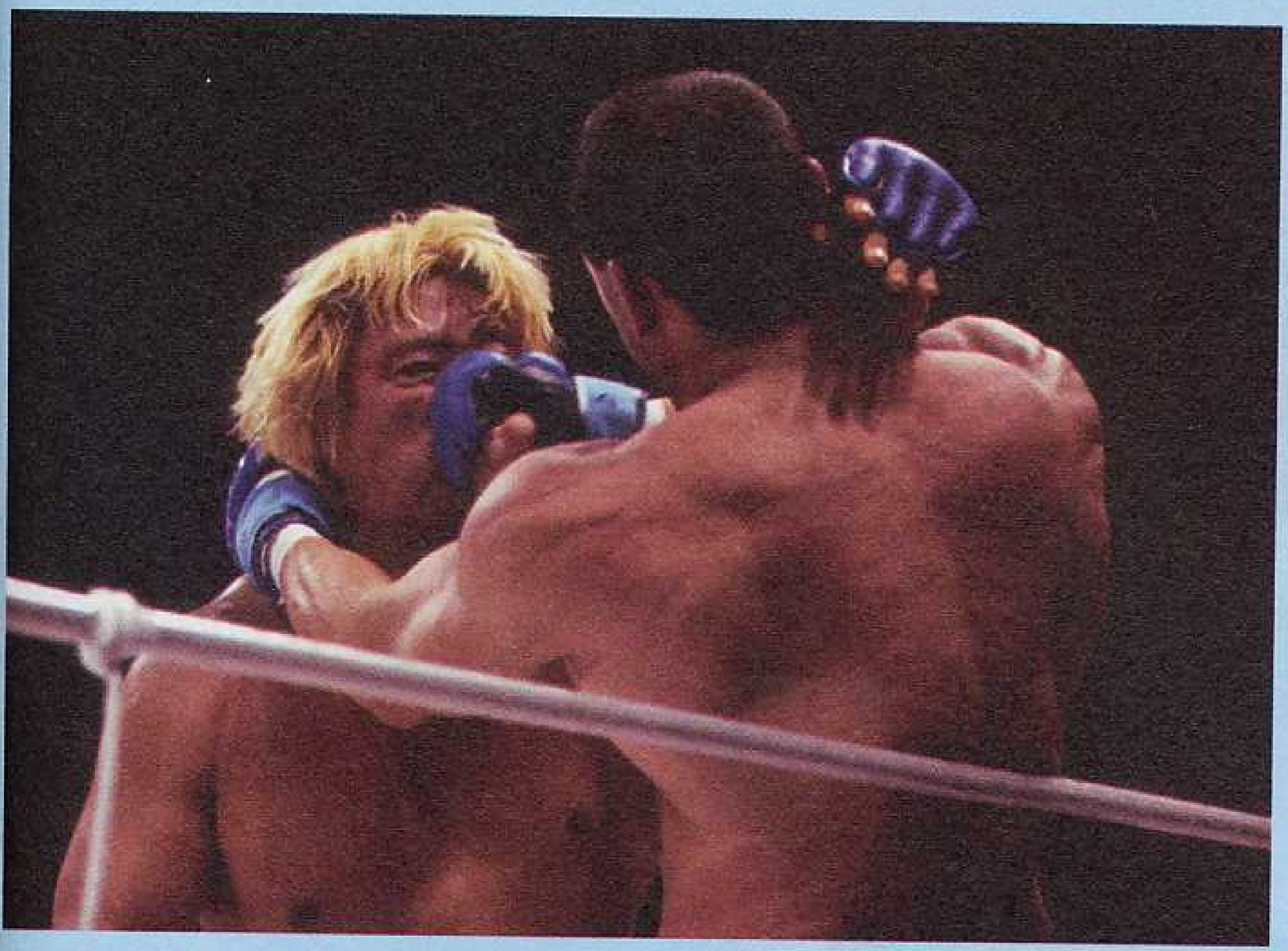
橋本　スポーツのある面を象徴する人ではあると思うね、凄く。いきなり答えみたいになっちゃうけど、スポーツにもいろんな段階があって、勝つためだけ以外のことをしたらすべて八百長になっちゃうんじゃないかっていう言い方もできるじゃない。KO勝ちしたいから隙だらけでもパンチをぶんぶん振り回す選手っているし、こないだのシュートボクシングでも、弘中邦佳がしゃがみこんでる相手を強引にぶっこ抜いてバックドロップしたしさ。それって、無駄なスタミナを使ってるわけだから「純粋に勝利だけを目指していない」、つまりある種の片八百長かもしれないよね。そういう色のグラデーションがあるわけだよね、闘い方には。で、ドン・フライはその一番濃いところの人だっていう。

斉藤　要は一番よけいなことをする人。まずはそのドン・フライの歴史を振り返ってみたいですけど、もともとは消防士だったんですよね。

高橋　アマレスとボクシングやって、消防士になった。

斉藤　で、ダン・スバーンからの紹介でUFCに出て、いきなりトーナメントに優勝して、そのまま常連ファイターになったわけですけど。そこで運命が変わったのは新日本プロレスと契約したこと。これって当時のUFCじゃ食えなかったということですか？

高橋　ま、そうでしょうね。いまと違って開催のスパンも長いし、当然、食えないでしょう。とくにドン・フライって、見た目からしてスターな感じはしないじゃないですか。たとえばコールマンと同世代なんですけど、ああいう華やかさは持ってなくて、もっさりしたスーパーマリオなおじさんが相手をボコボコに殴って勝つっていう。初期UFCでもそんなに重宝されてたっていう感じではないですよね。



ドン・フライと髙山善廣の名を一躍上げたPRIDEでの殴り合い。ドン・フライはその後『PRIDE男塾塾長』という設定と「（殴り合いを）やれんのか！」のコピーで人気を博す。

橋本　当時は圧倒的にマーク・コールマンの印象のほうが強いですからね。

高橋　コールマンはグラウンド&パウンド&頭突きですからね（笑）。「えげつないわ〜！」っていう。

橋本　そこで食っていけるプロレスに鞍替えするのは凄くよくわかる。

斉藤　確かに当時、MMAは文化としては流行してたし、その直後くらいからPRIDEが始まるんだけど、「プロのバーリ・トゥーダー」という存在はまだまだ成立しづらい環境でしたね。髙田延彦や桜庭和志は専業でしたけど、それは日本のプロレスからの流れじゃないですか。

橋本　あとブレイク以前のUFCって、やっぱりブラッドスポーツっていうか、バーでホワイトトラッシュが酒飲んでワーワー騒ぎながら観るものってイメージが強かったよね。出場してるのもそういう連中だろうっていう感じで。

高橋　タンク・アボットしかり。ストロングマンコンテストの延長みたいなもんですからね。

斉藤　当時のMMAスーパースターのケンシャムもWWF入りしてるくらいだから。で、ドン・フライがプロレス入りしたときの師匠がブラッド・レイガンスやマサ斎藤。一緒に合宿したのがアントニオ猪木と小川直也と藤田和之。このメンツ、ちょっとヤバイですよ！（笑）。

橋本　鳴り物入りというか、素晴らしい環境に恵まれて。まさしくプロ格。一瞬、勃興して、一瞬で絶滅したプロ格（笑）。

斉藤　で、ドン・フライが新日本と契約して、武藤や蝶野とタッグを組んだりしてたんですけど、一番の実績は猪木さんの引退試合の相手を務めたこと。引退相手を決める1DAYトーナメントで誰もが小川直也が優勝して猪木さんと闘うと思っていたら、猪木さんが土壇場でひっくり返した（笑）。

橋本　「そんなみんな予想できることをやってもしょうがねえ！」みたいな感じで、最後までサービス精神旺盛だよねぇ。

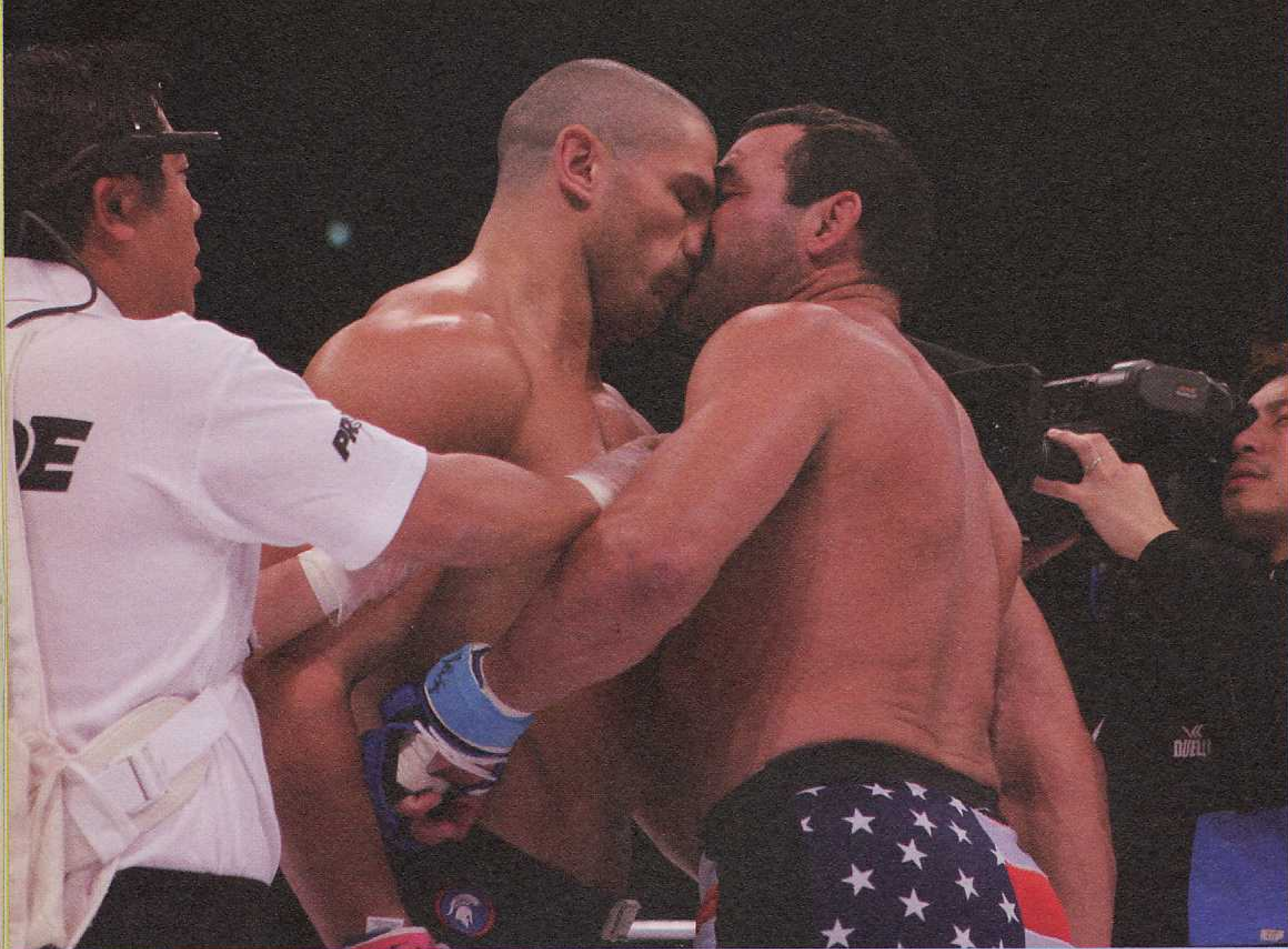
斉藤　ドン・フライはそこからプロレスをしばらくやったあと、01年のPRIDEに登場してMMA復帰をはたすんです。その年に何があった

座談会出席者

橋本宗洋
フリーライター。元『SRS−DX』編集部。格闘技のみならず映画やラグビーにも精通。飲み会が大好きで通称〝飲みオジ〟。『kamipro』携帯サイトで格闘技時事批評的コラムを連載中。

高橋ターヤン
映画ライター。格闘技は北米MMA専門の北米バカ。『kamipro』携帯サイトでアメリカMMAコラムを連載中。トークイベント『格闘秘宝館』主宰でもある。

ジャン斉藤
本誌編集長。雀鬼・桜井章一の元弟子。永久電機等に代表されるアントニオ猪木のトンデモ発明専門。薄毛ではあるがハゲではないと主張する35歳。



ドン・フライ芸は一代かぎり!? トンプソンやバローニなど後継者候補は何人かいたか、塾長魂の継承には至らず。難しい芸風なのだ。

かというと、大晦日に『猪木祭り』があってTBSで放送された。

橋本 『猪木祭り』格闘技版の一回目だね。

斉藤 PRIDEの爆発前夜でMMAがビジネスとして上向きになるような雰囲気が漂い始めてたんですね。そこに食いついてくるドン・フライの嗅覚ったら。

橋本 「今度はこっちだ！」っていう。

斉藤 UFCで食えないからプロレスに行って、プロレスやりながら日本に来たら「日本だったらMMAでも食えるかもしれない」となった。で、復帰してからの試合がメチャクチャおもしろいんですよね。まずギルバート・アイブル。2戦目が大晦日でシリル・アビディ。で、その次のケンシャム戦が素晴らしいんですよ！ みんな髙山戦ばかりに目が行きがちですけど。

橋本 後楽園ホールで煽りの会見をやったやつだ。

斉藤 乱闘寸前になったっていう。ボクは髙山戦より好きというか、なんていうんだろね、凄く怪しい試合なんだよね。この試合の設定って「犬猿の仲」の決着戦なんだけど、あまりにも試合内容が出来すぎというかさ。

橋本 判定2－1でドン・フライの勝ち。

斉藤 だってこの二人、00年の『猪木祭り』でタッグを組んでて髙田と武藤と闘ってるんだけど、そこで仲間割れしてるんだから（笑）。

橋本 そこから引っぱってんの？（笑）

斉藤 うん（笑）。で、差し合いでボディブローの打ち合い、足関の取り合いが続くという。

橋本 なんとなくわかるな。たとえばね、総合でブレイクになったとき、ほとんどの選手はその場で闘う体勢になるんだけども、柔道出身の選手には戦闘体勢をいったん切って、自分のコーナーのほうに戻ろうとしてから相手と向き合う場合があるんだよね。つまり柔道でいう開始線に戻る動きがある。そういう染みついたクセってあるじゃん。で、ケンシャムもドン・フライも「つい染みついたクセ」があるわけじゃない。

斉藤 プロレスのクセっていうこと？

橋本 わかんないけど（笑）、差し合いやってるときに、あうんの呼吸でクリーンブレイクしてしまう可能性とかもあるわけじゃない。二人の攻防があうんの呼吸に見える（笑）。

斉藤 で、シャムロック戦を観たあとに、ジェームス・トンプソン戦を観るとわかるんですけど、トンプソンがなんかね、プロとしてヘタクソに見えるんですよ。

高橋 トンプソンがロープ際でボコボコにして勝った試合ですよね。

斉藤 なんかね、あうんの呼吸が合ってない試合に見えて。スタイルの違いって言ってしまえばそれまでだけど、ケンシャムとはなんだか役者の違いを感じた。

橋本 でも、まったくケンシャム戦は覚えてないなあ。髙山戦とバンナ戦とかは覚えてるけどね。

斉藤 バンナ戦はわかりやすいんですよね。K－1ルールで真っ向勝負して玉砕するっていうか、髙山戦も自分の役割がわかったうえでの試合ですよね。

橋本 2002年6月っていう時期も大事だし。

斉藤 サッカーのワールドカップで盛り上がってる時期で、国立競技場の『Dynamite!』の直前だったんですよ。でもメインがコールマンvsドン・フライで。これからPRIDEブームが来るかもしれないってときに、はたしてこんなカードでいいのかってムードが凄くあったんですよ。

橋本 ヒョードル初参戦で、第1試合が田村潔司vsボブ・サップでそこそこのラインナップだったけど、外側に訴えるものはなかったよね。

ドン・フライvs髙山はいまでもアメリカのファンに大人気

斉藤 そしてコールマンがケガで急きょ欠場。髙山が緊急出場したんだけど、大会自体が低調だったっていうなかで二人が空気を読んだわけですよね。

高橋 ドン・フライvs髙山はいまでもアメリカのファンに大人気なんですよね。UFCでちょっとでも似たようなシーンになると「ドン・フライvs髙山の再来だ！」みたいな騒ぎになって。

斉藤 へえ、アメリカにも届いてるのかあ。

高橋 アメリカでやってるPRIDEのライブラリーを放送する番組で、あの試合は何回も何回も流れてんですよ。

斉藤 逆にケンシャムvsドン・フライはわかりづらいもんなあ。

橋本 二人の山っ気っていうかさ、「いっちょやっちゃう？」っていうか。

斉藤 でも、『HERO'S』のドン・フライは呼吸があってなかったというかさ、ヤマヨシ戦やキム・ミンス戦、曙戦はあんまり勝つ気がないように見えるんだよ。3人とも負けちゃうんだけど、それまで勝てるチャンスが10回ぐらい転がってる……ような気がする（笑）。

橋本 言いすぎだろ！（笑）。でも、あのときはもう男塾の補習レベルの

オレも引退していくヤツにわざとハイキックを食らって負けてみたいよ（笑）

話であって、本講義じゃないんだよね。つまり、「勝つため以外のよけいなことをする」っていうことの自家中毒。やらせる方もそれを求めるし、ドン・フライも「オレはあれをやればいいんだろ」っていう感じになっちゃった。「お約束」でしかないっていうかね。

斉藤　最後の本講義ってゲーリー・グッドリッジの引退試合でしょ。グッドリッジまさかのハイキックでKO負け。

橋本　あれはまさに〝人情バーリ・トゥード〟だよね。あのときは神戸ウイングスタジアムで『猪木祭り』を観てたんだけど、だいたいの試合内容を聞いて「ドン・フライ……やったな」と思ったよ。

斉藤　あれはたまたま入っちゃったのか、わざと受けたのか当時は騒がれたけど……。

橋本　わかんないし、掘り下げる気もないなあ。わざとだとしても「いいんじゃねえ?」っていう。裏でパラさんが「ギャラアップするから、ここは一発いい仕事してくれよ」って言ってたらダメだけどさ。

斉藤　そこは相撲の八百長問題と似てる話でさ、相撲協会は指示してないし、グッドリッジとドン・フライのあいだでお金のやりとりがあったとは思わないんだよね。

橋本　まったく思わないね。メールすら送ってないと思うよ。「ハイキック強めで、あとは流れでお願いします」とかやってないから、絶対に（笑）。

斉藤　そもそもあんなハイキック食らいたくないよ!（笑）。この試合が仮にワークだとしたら、もっと簡単な負け方ってあるよね。

橋本　サブミッションでいいわけだから。いわゆる世に言う片八百長、もしくはホントの八百長だったとしてフィニッシュにハイキックを選ぶってスゲエよなって思うよね（笑）。

高橋　これがワークだとしたら、ホントにグレーだなと思いますよね。黒にしちゃ、ちょっと激しすぎるだろっていう（笑）。

橋本　オレも引退してくヤツにわざとハイキックを食らって負けてみたいよ（笑）。

斉藤　しかもグッドリッジは始まる前に高山戦の殴り合いを想起させるポーズを取ってんだよね。でも最後はハイキック（笑）。これとケンシャム戦はドン・フライの深みを感じるんだよなあ……。

高橋　ドン・フライってKOで負けたのは三回しかないんですね。

斉藤　だからね、俺は常々思ってるんですけど、ドン・フライが本気でやったら一番強いですよぉぉぉぉ!!

橋本　やってるだろ（笑）。

斉藤　いまのUFCのゲームプランみたいを忠実に遂行したら一番強いんじゃないのかなと思いますけどね。猪木さんとかを経由しちゃったからプロとしての色気が出てるだけであって。

橋本　本人にとっては、あの「ドン・フライっぷり」がよけいなことじゃないんだよね。ファイトビジネスで生きていくためにはあれが正しいんだから。「これが必要なんだ、オレが食っていくためには」っていう。

高橋　少なくともみんながドン・フライにそこしか求めてないですからね。

橋本　だから高山とああいうふうに殴り合ったり、「K-1ルールでバンナとやれ!」って言われても、ちょこちょこ動き回ってたまにタックルいって逃げたりしないで「倒れるかもしれないけど打ち合うことがオレの仕事だ。オレはそれで金稼いでんだ」と。だからまったくよけいなことではないっていうか、マジメに仕事をしていたというか。

斉藤　自分自身で「ドン・フライとはこうあるべき!」っていうことを人一倍意識してたんだろうね。

橋本　後半はちょっとそれに中毒しちゃったところはあるけど。たとえば高山戦にしても「そこまでやれとは言ってないよ」っていうのがドン・フライの良さだったのに、そのうち需要と供給が完全に合致しちゃって。過不足がないから飛び抜けたものは生まれないよね。

高橋　そのへんが顕著になってきたのって、ちょうどドン・フライが映画に出始めた頃なんじゃないかっていう（笑）。04年ぐらいからだんだん映画に出演し始めて。『殴り者』で高山vsドン・フライを再現させられたり。

斉藤　『殴り者』なのにピストルで決着がつくDSE制作の映画!（笑）。

高橋　あのへんから橋本さんが言われたように自家中毒していったんじゃないかなって。

橋本　ドン・フライのモノマネをするドン・フライっていう（笑）。

高橋　『ゴジラ』のときは轟天号の艦長役だったんですけど、イスに座って指示を出すだけ。それでもドン・フライでしかないっていうね（笑）。

橋本　オレが唯一ドン・フライにインタビューしたのって、その『ゴジラ』の取材だったなぁ（笑）。北村龍平監督との対談で。北村監督はドン・フライがコールされるときにコーナーのところでパッと振り向く姿が好きだって言ってて。

斉藤　確かにあれは凄くカッコイイ!

高橋　振り向くと同時にカメラが寄るっていうね。いまそこにハマってるのがマイケル・マンですもんね。マイケル・マン監督作品に2作連続キャスティングされてて。それに09年だったかな。携帯電話ブラックベリーのコマーシャルに出てたらしいという。

橋本　大統領も使ってたことで話題になった携帯電話の!

高橋　あとは声優もやってて。

橋本　あの声はスゲエなあ。

高橋　『ジ・アントブリー』っていう絵本をもとにしたデジタルアニメでトム・ハンクスがプロデューサーで、ジュリア・ロバーツとニコラス・ケイジとメリル・ストリープも出てるっていう（笑）。

橋本　豪華な配役だあ。

高橋　存在感がやっぱ違いますよね。いま『マイアミ・バイス』と『パブリック・エネミーズ』の2本に出てるんですけど、2本ともセリフが一つもないんですよ（笑）。

斉藤　存在だけなんだ（笑）。

橋本　不思議なのが、いい役だけどセリフが一つもない一方で、声優としての出演もあるっていう。

高橋　『ようこそゾンビランドへ』ではゾンビ役をやってましたしね（笑）。



塾長の補習授業となった曙戦はうまく転がらず。相手とのあうんの呼吸は重要だが、角ちゃん並みに読みすぎるとそれはそれで……。

斉藤　最初の話でさ、当時のUFCでは華がないって言われてたドン・フライが、こんな存在になってるのは凄くおもしろいね。

橋本　自分の活かし方をどっかで覚えたんだね。負けたからって評価が下がらないっていう。評価っていうのは内容しだいでギャラとか試合の機会が減らないシステム。それが日本にはあったから、ドン・フライもそこに邁進できたと思うんだよね。二連敗でリリースされるUFCであんなこと絶対できねえよ（笑）。

斉藤　そう。だからボクはいまのUFCにドン・フライを送り込みたいわけですよ。本気になったときのドン・フライをホントみんなに見せてあげたいなあって。

橋本　だから本気ではやってるだろ（笑）。でも毎回、ファイト・オブ・ザ・ナイトを獲りそうだよね。

斉藤　だってドン・フライの進化版がヴァンダレイやミルコみたいなもんでしょ。そのときの日本に合わせたファイトスタイル、お客さんにどう見せていくかってことを考えたファイトスタイル。その一世代前がドン・フライなわけですからね。

橋本　あと、これは昔がダメでいまがいいとかいう話ではないんだけど、昔はドン・フライ的なプロの仕事っていうのは意図して、覚悟を決めて、もっと俗な言い方をすればわざとやるもんだったんだよね。

斉藤　よけいなことをね。

橋本　そのことがドン・フライには仕事としてお金にもなったし、チャンスにもなったし。でもUFCはわざとやるんじゃなく、全員が必死で勝とう勝とうとしてるのに、なんか自然に凄いことになってしまうっていう。

高橋　べつにイベントを盛り上げようとして打ち合ってるヤツはいないですよね。

橋本　勝とうと必死になってるのに、たまに凄くおもしろい打ち合いが出てきちゃうっていうところもまたおもしろかったりするんだよね。ドン・フライのやってきたことと、いまの格闘技のなかでの凄い打ち合いとかおもしろい攻防みたいなのは、表面上は同じなんだけど質は違うんだよ。どっちがいい悪いじゃなくてね。

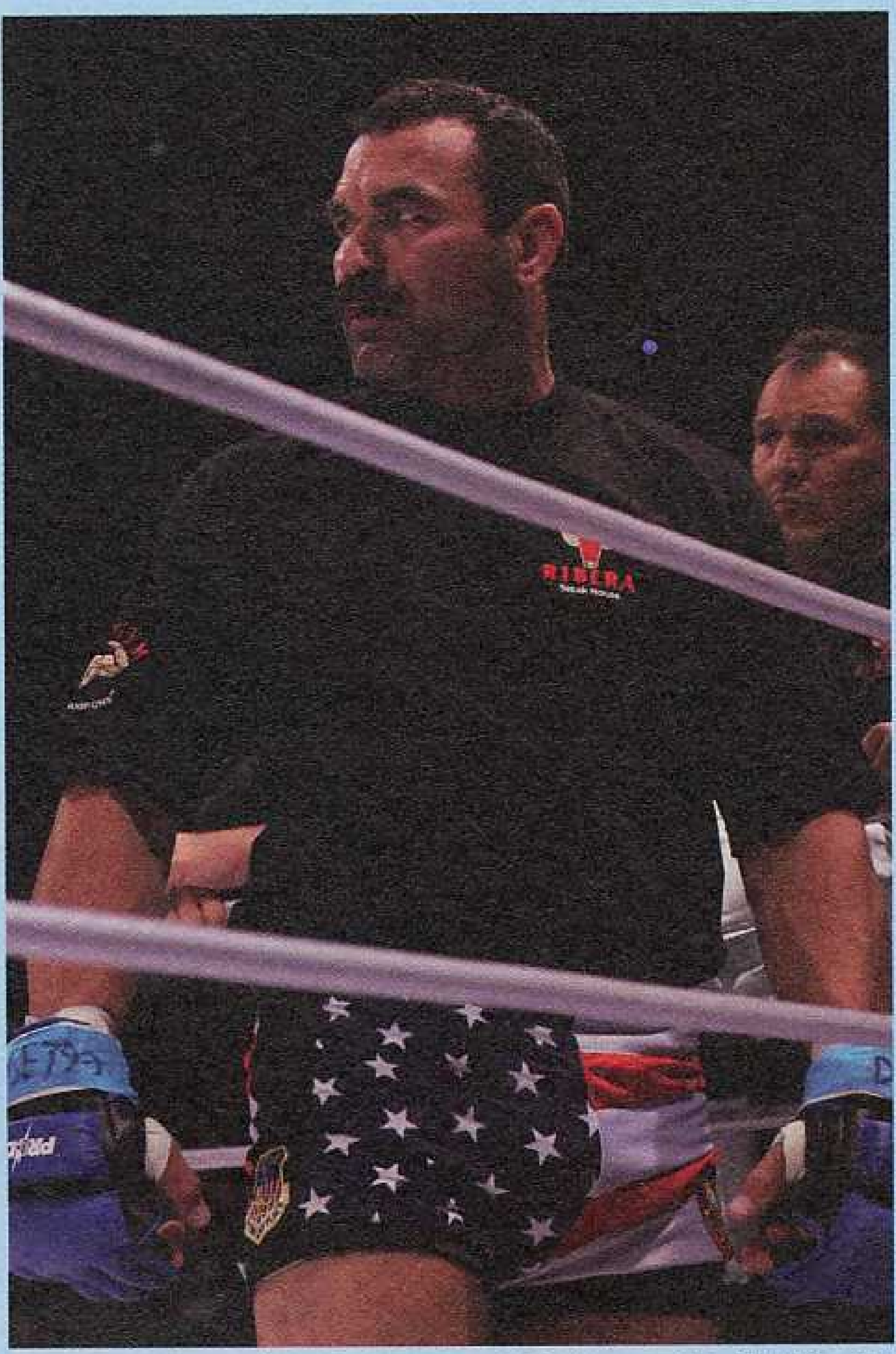
斉藤　まあ、みんながドン・フライみたいだったらドン・フライがいる意味がないんだから。ドン・フライは一人でいいんですよ。

橋本　っていうか、みんなドン・フライみたいになると、ついついメールで「立ち合い強めで……」ってどうしてもなるんだよ。

斉藤　それが角（田信朗）ちゃんだよね（笑）。

橋本　俺は何も言ってないぞ（笑）。でも実際、みんながあうんの呼吸で覚悟を決めてできるわけじゃないし、やる必要もない。そうなったら、それこそ八百長の温床ですよ。盛り上げれば評価されるんだ、ギャラが上がるんだ、負けても試合の機会は失なわれないんだ、だったら「あとは流れでお願いします」ってついついメールしちゃうよ。

斉藤　ドン・フライはそんなメールをやらねえもんな。やんないでハイキックを食らう（笑）。



DON FRYE■1965年11月23日、アメリカ出身。レスリング、柔道、ボクシングをバックボーンに持つ。UFCの1DAYトーナメントに二度制覇。吉田秀彦のMMAデビュー戦の相手を務め、プロレスではアントニオ猪木の引退試合の相手を務めた。日清食品のコマーシャルにも出演。

橋本　そういえば、ドン・フライとブライアン・ジョンソンが新日本のセレクションに受かったときに落ちたのがコールマンだって聞いたことがある。実績はどう考えてもコールマンのほうが上なのに。

斉藤　でもわかるわ、ブライアン・ジョンストンとドン・フライが残るのは。で、もしドン・フライとジョンストンだったら、鈴川（真一）にやれてないと思う。

高橋　まあ間違いないですね。

斉藤　コールマンはプロレスをナメてんじゃなくて、プロレスとバーリ・トゥードを違うものだとしてやってたんだけど、ドン・フライとジョンストンは一緒でしょ。

橋本　だと思う。「プロレスって本気で殴っちゃダメなんだろ」って思いながら殴るコールマンと、「殴ってもいいんだったら殴りますよ、全然」っていうドン・フライの違いだよね。だからプロレスでキレることができ、バーリ・トゥードで仕事をすることができるっていう。で、はたしてそれを八百長とか出来レースと糾弾できるのかっていう問題があるんだよね。

斉藤　まあ、いまの世間の価値観からすれば、立派な八百長だね（笑）。

橋本　でも、何が八百長なんだろうっていうね。メールとか誰かの指令とか、二人でも示し合わせてとか、そもそも業界自体がそういう仕組みだからっていうのなら八百長って言葉でいいんだと思うんだけど、ドン・フライとケンシャムがあうんの呼吸で勝手にやったものははたして八百長なのか。単なるファイトスタイルが偏った選手の試合は八百長なのか。

高橋　どの選手も「こういった試合をやっていこう」ってイメージはあるわけですよね。で、それがたまたまあいうかたちだったっていう。

斉藤　いま誰ができますかね、そんなの。

橋本　まあオレはとくにやらなくてもいいと思うんだけどね（笑）。強いて挙げればレスナーだろうね。

斉藤　レイガンス道場の同門対決じゃん（笑）。でも、ドン・フライってじつは客のことなんか考えなかったらおもしろくない？

橋本　「みんなやたらウケてるけど、オレは負けて悔しいんだよ」「よけいなダメージを負っちまった」とか言って（笑）。だからどこからが八百長なのかわからないよ。

斉藤　でも我々が求める八百長はそこですからね。八百長って言葉がネガティブになっちゃってるから使いづらいですけども。あ、そういえばお詫びしなきゃいけないのは、ドン・フライとホーク・ウォリアーが高校時代に同級生だった話、あれ、スコット・ノートンの間違いでした。

橋本　おかしいと思ったんだよ。ホークはスラム街の育ちなんだからさ（笑）。

斉藤　ごめんね。でも、ホークとは親友なんだよね。

橋本　ミネアポリスとかあのへんグループだよね。

斉藤　いわゆるAWAですよ。だからドン・フライはUFCじゃなかったらAWAに上がってましたよ、きっと（笑）。

橋本　AWAっぽいな、うん。WWFでもNWAでもない。

斉藤　もうちょっと早かったらジャン鶴といい勝負してたかもしんないね。

橋本　ニック・ボックウィンクルからベルトを奪うのはドン・フライだったかもしれない（笑）。

斉藤　プロレスラーでもおかしくないもんね。

橋本　ま、実際に一流のプロレスラーだったんだけどさ（笑）。

【11年3月某日／都内・某所にて収録】

大相撲八百長問題を受けて、プロレ

がりだから、読者が求めているものはわ

小島　プロレスの記事を書くというのは

っちゃいますね。

プロレス報道と八百長問題

元『週刊プロレス』記者 小島和宏



そのジャンルと専門誌というのは、どこかでかならず〝共犯関係〟があるもの。今回の大相撲八百長問題についても、相撲を報道する記者たちはその存在を知りながら、表に出さなかったとも言われている。では、我がプロレス界はいったいどうなのか。ターザン山本率いる『週刊プロレス』の全盛期にFMWや全日本女子プロレスの記者として活躍したフリーライター小島和宏氏に、プロレス報道と八百長問題について語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ

プロレスの記事を書くということは〝共犯者〟にならなきゃいけないということ

――大相撲八百長問題を受けて、プロレス専門誌と八百長というテーマで、小島さんにいろいろとうかがいたいんですよ。

小島　なんと『ｋａｍｉｐｒｏ』らしい切り口（苦笑）。

――いまプロレス界は、「スポーツエンターテインメントである」ということで、ある程度、「八百長」の呪縛から解き放たれた部分がありますけど、小島さんが『週プロ』の記者をされていた90年代前半ぐらいまでは、まだまだ相当硬かったわけですよね？

小島　そうですね。だから記事を書くときは、あくまで「真剣勝負ですよ」ということを前提にしてましたから。それは、いまでもそうだと思いますけど、当時といまが違うのは、読んでる側で「真剣勝負じゃないよね」って思ってる人が圧倒的に多いってことですよね。だから、いまの記者は難しいだろうなっていうのはあります。

――読者が真剣勝負だと思ってないのに、真剣勝負を前提に書かなきゃいけないわけですからね。

小島　当時はどんなにリングでバカげたことをやっててもそれは団体が生き残るためにクソマジメにやっていたことで、『週プロ』もクソマジメに書いて、読者もクソマジメに読むっていう図式が生きていたので、そのまま書けばよかったんですけどね。

――『週プロ』の記者っていうのは「真剣勝負という前提に書いてくれ」って最初に言われるんですか？

小島　言われないですよ。みんな読者あがりだから、読者が求めているものはわかるし、あとは現場の空気を読むだけですね。ただ、ボクらは専門誌だからそれでいいですけど、スポーツ新聞の記者はたいへんだったかもしれないですね。純粋なスポーツじゃないものをほかの純粋なスポーツと同じように書かなきゃいけないわけだから。

――「〇〇が金メダル獲得！」と同じように「大仁田が王座奪回！」と書かなきゃいけない（笑）。


『週プロ』黄金期の始まりといえる89年11月29日、ＵＷＦ東京ドーム大会取材時のターザン山本率いる『週プロ』軍団。なお、このとき小島記者は新日本の金沢大会に行っていたとのこと。

小島　プロレスの記事を書くというのは〝共犯者〟にならなきゃいけないってことなんですよね。

――当時の小島さん世代の記者の方って、ある意味、いまの相撲記者の人たちと共通するところもあったと思うんですよ。あらゆることを知ってるけども、書く必要はないっていう。

小島　逆に、知ってないと書けないよね。全部わかったうえでことを書く。相撲メディアと相撲業界がどこまであうんの呼吸でやってたのかボクはわからないけども。ボクらは誰かに指示をされなくても、「ここまでは書いていいけど、ここはダメ」っていうラインを自分のなかで個々が持っていて。それをはみ出した記事っていうのは見たことがないので。

――先日、『ｋａｍｉｐｒｏ』でやくみつるさんにインタビューしたんですけど、やくさんのところにスポーツ新聞などから、山のようにコメント取材が来たらしいんですよ。でも「スポーツ新聞は全紙、あなたの会社の相撲記者が意見を述べてくださいよ」って言ってたんですよ。

小島　そうですよね。ＮＨＫで解説してた人とか「おまえ、知ってたんだろ」って言われちゃいますよね。でも、相撲界は一気に八百長問題に襲われたんで、たいへんだと思いますよ。プロレス界はミスター高橋の本があったにせよ、日本中にバーッと広まったわけじゃない。昔から「そうなんだろうなあ」「そうかもわかんない」と思われてて、総合格闘技が出てきたことで、じんわりわかってきて。それでも好きな人は観ればいいジャンルですけど。相撲界はずっと八百長を頑なに否定してて、裁判までやってたのに明るみに出ちゃって。みんな立場がないよなあって思っちゃいますね。

――親方も記者もコメントの出しようがないですよね。

小島　そうですよ。「もちろん八百長があるのは知ってましたけど、黙ってました」って言うわけにもいかないし。

――それを言わないのが〝業界の掟〟だったわけですからね。小島さんが書かれた『ぼくの週プロ青春記』には、かつてあった〝業界の掟〟を超えたことも書かれていますけど、それに対してプロレス界から負の反響ってありましたか？

小島　そんなになかったんですよ。ボクはこの本を書くとき、いままでいろんなところで明かされてきたこと以上のことは書かないと決めてたんで。「新しい暴露はなしにしようね」っていうことが基本でしたから。

――「ここまで書いていい」という基準を、「これまですでに明かされてきたものはＯＫ」というところに設置した、と。

小島　版元の編集者にも「暴露本として売らないという条件なら書きます」っていう約束だったんで。昔は書けなかった真実を書いてますけど、あらたな火種を起こすことには意味がないと思ってまし



小島記者が3年前に上梓した『ぼくの週プロ青春期　90年代プロレス全盛期と、その真実』（白夜書房）。まさに平成プロレスが花開いた90年代前半のプロレス黄金期、生の姿が描かれたノンフィクション作品だ。

プロレス報道と八百長問題

たからね。

――だから、やたら読後感がいいんですよね。それに対して、ターザン山本さんの本は、おもいっきり暴露本で読後感最悪でしたけど（笑）。

小島 あれはねえ（苦笑）。ボクも読みましたけど、気持ち悪くて最後まで読めなかったですね。「うわ～、知らないほうがよかった」みたいな。なんか自分たちが生きてきた日々を全否定されてるような感じがして。あの人と大仁田厚はケンカしちゃ仲直りの連続だったんですけど、その謎だけはようやく解けましたけど。

――ケンカしては、ターザンが大仁田を表紙にすることで仲直りしたり、逆にFMWからターザンに裏金を渡したり（笑）。

小島 そのあいだに俺は挟まれて……バカバカしい！

――ダハハハ！ 大仁田さんに控室に呼び出されて、怒鳴られて。

小島 真鍋アナの〝大仁田劇場〟みたいに、胸ぐらつかまれてね。カメラも回ってない控室でやられてるんだから。ホンットにバカバカしい。まあ、そのへんは〝兵隊〟としてはしょうがないですけどね。

――では、ターザンの暴露本は、小島さんにとっても初耳の〝新たな暴露〟が多かった、と。

小島 でも、あきらかに「これは違う」っていうこともありましたよ。まったく知らない部分に関しては「そうなのか」って思うしかないですけど。「これはオレも知ってたけど、こういうことじゃないよね」っていう。まあ、あの人は気持ちよくしゃべらせれば、3割増、5割増でしゃべる人ですからね。

――口述筆記だし、そのへんの信憑性は危ういわけですね（笑）。小島さんは当時、「これは書けないけど、『週プロ』読者だったらわかってくれるはずだ」って思いで書いてる部分はありましたか？

小島 いや、そこまでは意識してないかな。裏事情を書かなければいいんであって。「あらかじめ決まってるんですよ」ってことと、「何かハプニングがあっても、最初から決まってたことなんですよ」ってことを知らんぷりすることだけだよね。極端な話、後楽園ホールって客席から記者席が見えるじゃないですか。

――南側からリングを見ると、嫌でも記者席が目に入りますよね。

小島 だから、誰かが乱入してきたりすると、もちろん乱入することは知ってるのに、わざと驚いた顔を作ったりしてました。

――ダハハハ！ 記者がそんな〝セール〟までしてましたか（笑）。

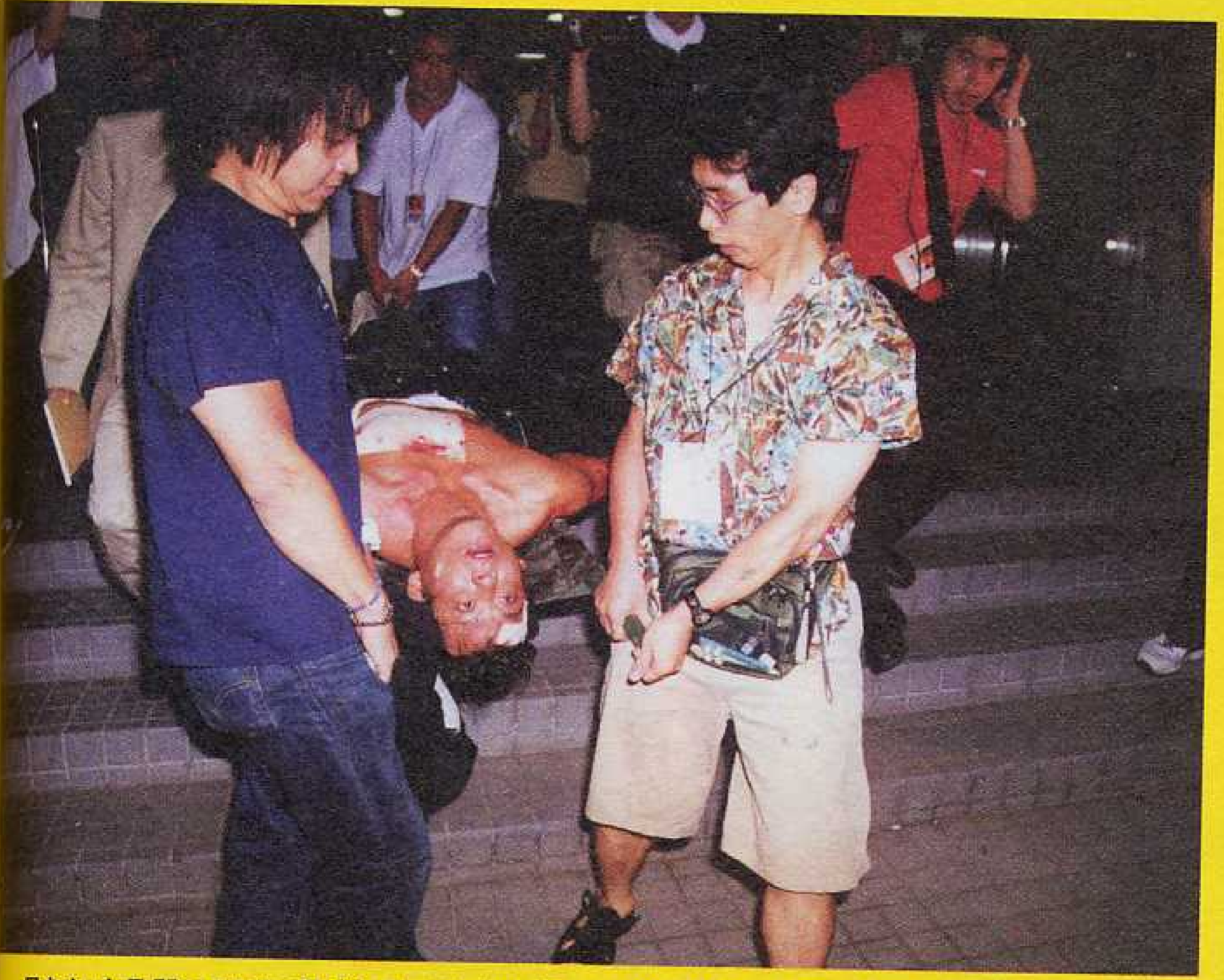
小島 目の前で〝大事件〟が突然起こったことになってるのに、冷静だったら不自然ですからね。その姿をお客さんに見られたら、自分が「真剣勝負ですよ」ということを前提に書いてる記事も意味がなくなっちゃうわけだから。

――ある意味、プロレス記者もプロレスを構成する〝登場人物〟の一人ですもんね。

小島 だから一度、ザ・シークが記者席まで来て襲われたことがあるんですけど、もうあの頃のシークはおじいちゃんだったから、走れば簡単に逃げられるんだけど、わざと逃げ遅れてヒザを五寸釘でつつかれたりしましたけどね（笑）。あれは我ながら間抜けだと思ってましたけど、みんな少なからずそういうことをしてたんじゃないかな、リングアナの人とかも。

――確かに、そういったものの積み重ねでリアリティを生んでた部分はありますよね。

後楽園で誰かが乱入してきたらわざと記者席で驚いた顔を作っていた


目をカッと見開いたまま、運ばれていく大仁田厚。FMW全盛期、大仁田は自ら身体を張って、数々のアングルを展開。虚と実の狭間のなかで、プロレス専門誌とともに“涙のカリスマ”像を作り上げていった。

小島 だからケロさん（田中秀和リングアナ）も、レスラーがフォールの体勢に入ったり、関節技を極めたりすると、かならずゴングを叩く準備をしますよね。

――あれも真剣勝負に見せるためには必要なことですよね。どこで試合が終わるかわからないっていうのを見せるという。

小島 ケロさんはだいたい新しい記者が来ると、1試合目が始まってからちょっとだけ席を離れるんですよ。そのとき、記者にゴングを叩く木槌を持たせて「俺が戻ってくる前に試合が決まったらお願い」って言うんです。で、2～3分経ったら戻ってきて「あ、終わってなかったね」って。

――へぇ！ そんなカマシがあったんですか。

小島 うん。だから記者に対しても、いつ試合が終わるかわからない緊張感をもって第1試合からちゃんと観てくださいよっていうことでもあると思うんですよ。

――当時はプロレス界の人たちがみんなで、リアリティを作るための行動をとっていたってことですね。

小島 とくに新日本、全日本はそれを守る意識が強かったと思います。インディーにはそれが欠けていたんだろうね。ボクら内側の人間に対してはなあなあな感じだった。それが外に伝わっちゃいけないから、逆にボクらがそれを守ろうとしてましたね。

――メジャーの掟をくぐり抜けてないと、そういう意識が欠けちゃうわけですね。

小島 インディーのなかでも大仁田厚は違ったっていうのは、やっぱりそういうのをくぐり抜けてきてる人だから。大仁田厚とターザン後藤はとにかくそういうことに対して厳しかったから。

――だから大仁田さんはFMW初期なんかとくに、「いかにプロレスが八百長じゃないか」ってことを叫んでましたよね。

小島 そればっかり叫んでました。「この血は本物じゃあ！」って。大仁田厚は流血すると、記者にもわざと血の匂いを嗅がそうとするんですよ。それぐらい記者にも「ホントだよ」ってことを意識させようとしてたんでしょうね。

――内側を知ってる記者にも緊張感を持

暴露ではない相撲の真実を書けば逆にイメージアップになると思う

たせるというか、「本物なんだ」っていう意識を持たせていたわけですね。

小島　FMWの場合は試合をスポーツとして書くというよりも、WWEと一緒で毎週毎週続いていくストーリーを追うことが大事だったんで、そのへんはほかの団体のリポートを書くのとは違ってましたけどね。試合内容については、だいたいいつも同じなんだから。

――いつも同じ（笑）。

小島　でも、カウントスリーが入ったあと誰が乱入したとか、試合後のコメントが重要になってくる。そういう意味では、かならず書くネタがあったわけで、逆に新日本や全日本を担当していた人のほうがたいへんだったと思いますよ。

――ストーリーラインではなく、試合内容と試合結果をクソマジメに書かなきゃいけないわけですもんね。

小島　だからね、ボクがたまに全日本の取材なんか行くと「うわ〜、スゲーッ！」しか言葉が出てこないんですよ。それを全日本担当の市瀬（英俊）さんなんかは、毎週書いてるわけでしょ。だから言いましたからね。「俺、もうこの試合を観て、『凄い』しか言葉が出ませんよ」って話で。でも、「いい試合だった」で終わっちゃうようなところを、普段との細かい違いを見つけ出して、『週プロ』独自の視点のリポートを書くんだから、感心しますよね。

――スポーツとしてはありえない凄いことをやってる人たちを、スポーツとして凄いって書くわけですもんね。

小島　全日本や新日本は、その厳しい掟をもとにやっていたわけだから。インディーも含めて、そこを守らなきゃいけないっていうのは、プロレスマスコミとしてあたりまえのことであって。そのなかでも団体がちょっと脇が甘いことをやったらボクらが守るっていう意識は『ゴング』も含めて専門誌のあいだでは異様に強かった。相撲と同じなんだろうね、そういう意味では。

――プロレス記者がインディーレスラーに対して、プロレス界の掟を刷り込んでいくっていうのもおもしろいですね。

小島　刷り込むというかフォローですよね。相撲だってそうじゃないですか。テレビで観てると、素人目にも八百長に見える取組があったりしますけど、解説者が「踏んばりが足りませんでしたね」とか言ったり。



こじま・かずひろ■1968年、茨城県出身。中学時代からプロレス誌に多数投稿し、89年に大学進学と同時に『週刊プロレス』記者となる。『週プロ』全盛期にＦＭＷやＷ★ＩＮＧ、全日本女子プロレスの記者として活躍。８年間の記者生活後、スカイパーフェクＴＶの立ち上げに参画。その後、現在はフリーライター&エディターとして、さまざまな媒体に寄稿。

――『ワールドプロレスリング』の解説で、山本小鉄さんがやってた役割と一緒なんですね。

小島　だからね、みんな共犯者意識みたいなことで業界を守らなくちゃいけなくて。プロレスはファンもたぶんそういう気持ちだったと思いますけどね。

――相撲界もホントはそうだったんでしょうね。親方から何から、あらゆる人がみんな相撲業界で生きていくために守ろうとして。八百長も必要悪だというか。

小島　だからね、今回の過剰報道っていうのは、これまでは「八百長」を知ってても書いちゃいけなかったのが、その呪縛が外れたんで書いてるんでしょうけどね。

――世間の関心というより、「掘れば掘るほど出てくる大ネタが解禁になった！」みたいな。

小島　そうだと思うんですよ。これまで大相撲の八百長について記事にして、相撲協会と裁判やって負けて、何千万円も持っていかれてる出版社もあるわけで。世間様の関心というより、そっちなんだろうなとは思いますね。

――いま相撲については、八百長暴き一辺倒ですけど、これが一回りすると「そういう世界だからこそ相撲が凄い」みたいな感じも出てくる気がするんですよ。プロレスも暴露本や内情を描いたドキュメンタリー映画なんかで、いろいろ暴かれましたけど、内側を知ることで、凄い世界だって知ることになりましたからね。

小島　へんな話、八百長が1割あったとしたら「じゃあ、9割はガチンコだったんだ」みたいな驚きも出てきますよね。半分がガチンコだとしても凄い。だから今回の騒動、プロレスファンはとても落ち着いて見てると思う。

――一度通った道みたいな感じで。

小島　うん、先輩ですからね。ボクらプロレスファンは子どもの頃から、なんとなくわかったうえで、自分なりの理論武装もしたうえでプロレスを観てきたから、ビクともしないんだろうけど。

――昔は世間の声に対して、プロレスファンがプロレスを守ってましたもんね。

小島　そう、「オレたちが守らなきゃ」っていう意識が凄く強かった。たとえ親や先生が相手でもその一線だけは譲れないみたいな。だから読者もプロレスに対してマイナスなことなんて書いたら「テメエわかってるだろうな」ぐらいの感じがあったと思うけどな。


――小島さんたち記者が守るのと一緒にファンも守るっていう。今度は逆にホントに相撲の内幕を知ってる人が、悪意なしに相撲の真実を書くことも必要なんじゃないかと思います。

小島　ドロドロしたものじゃなくて。ＮＨＫのディレクターとかが書けば凄くおもしろいし、逆に相撲のイメージアップにもなると思いますよね。

――ここまで八百長の証拠が出ちゃったら、もうシラを切ることはできないわけですからね。だったら本当のことを書いて、八百長はあるけど、相撲は凄いってことを出す時期かも知れない。

小島　誰かにさわやかに書いてほしいですよ。それによって、バッシングよりも「相撲は凄いね」って声が上回れば、ずいぶん違ってくると思いますからね。プロレスだってそうだったように、相撲もそこから再出発してほしいですね。

【11年2月24日／都内・『ルノアール』新宿西口駅前店にて収録】



格闘競技の王様はテレビに飲み込まれているのか？

ボクシングに八百長はあるのか？

ノンフィクションライター

織田淳太郎

K-1や総合格闘技の競技論が語られるときに必ず引き合いに出されるのがボクシングである。しかし、ここ数年、TBSがプロデュースする亀田兄弟の存在によってボクシングが持つグレーさを感じる方も多いだろう。あらためてボクシングのグレーゾーンを考えてみたい。

聞き手／ジャン斉藤

ボクシングに八百長はない。……いや、アレは完璧にやってますよねぇ

――今日は「ボクシングにも八百長はあるのか？」をテーマに、ボクシング関係では大場政夫さんの生涯を追った著作で知られる織田さんにお話をうかがいたんですが、ボクシングも世間からはウサンくさい目で見られがちですよね。

織田　そうですねぇ。でも、いまはクリーンイメージを作ってて、たとえばヤ○ザとの関係を切ってるんですよね。

――へえ、そうなんですか。

織田　ダフ屋も3年ぐらい前からいなくなってますね。それは大橋（秀行）さんが東日本協会の会長になってから、ヤ○ザ体質を排除しようという動きが盛んになってるんですよ。

――そういうニュースを耳にしてましたけど、単なる世間に向けてのパフォーマンスじゃなかったんですね。

織田　いや、実際に排除しています。でも、大橋さんの方針には一部のジムの会長からは批判が出てますけどね（笑）。要するに昔からの付き合いがあるじゃないですか。

――興行という世界は持ちつ持たれつだったりしますもんねぇ。でも、健全化への批判があるっていうのもなんだかおもしろいですね（笑）。

織田　完璧に派閥が分かれちゃってます。旧派閥というか保守派が、いまの体制を潰そうとする動きもあるんですよ。

――なるほど。そんな感じで今日はいろいろと聞かせてください！

織田　でもまあ最初に結論を言っちゃうと、ボクシングに八百長はないんですけど。

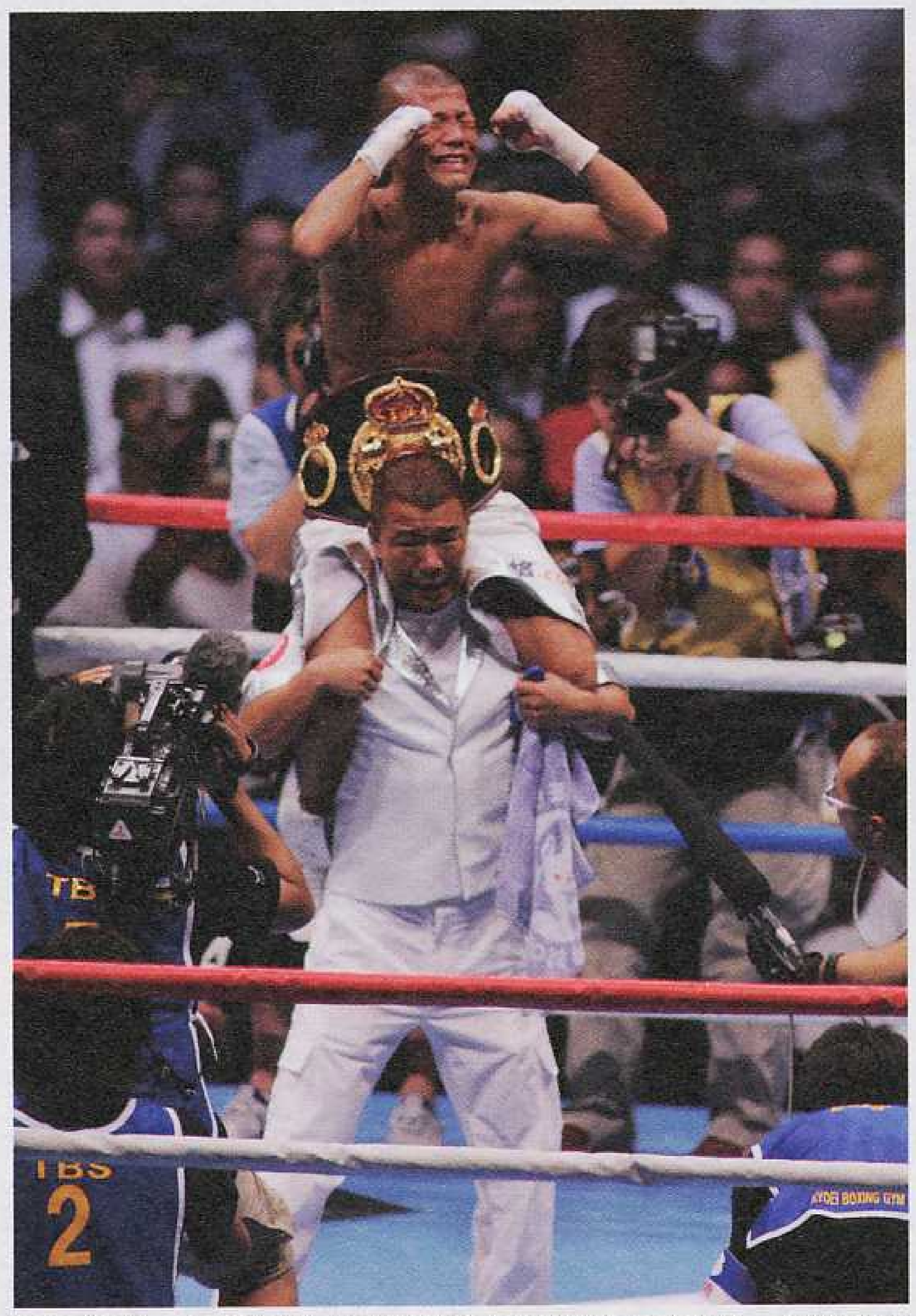
――あ、もう結論ですか（笑）。

織田　……いや、ミッキー・ロークは完璧にやってますよねぇ（笑）。

――ワハハハハ！　あれは八百長ですか？（笑）。

織田　少なくとも〝片八百長〟ですよ。あれだけは間違いないですけど（笑）。それは例外としても、ボクシングの場合、あきらかに勝てる相手を選んでるケースはありますよね。世界戦をやるまでのPR、実戦経験というか。けど、用意した噛ませ犬に食われるときもあるわけですよ、赤井英和みたいに。

――赤井英和は世界前哨戦でKO負けしてボクサー生命を絶たれたという。そういうマッチメイクは政治力がある大手ジムが組むもんなんですか？



TBSプロデュースで台頭した亀田兄弟の存在がボクシングのグレーを際立たせたが、それは「毒入りオレンジ」の頃から内包されていたものである。

織田　業界というよりはテレビ局が先導するんですよ。勝たせるためのマッチメイクをして、とにかく世界戦まで持っていく。昔はそうじゃなくて、たとえばファイティング原田と海老原博幸と青木勝利は〝フライ級三羽烏〟と呼ばれていたけど、この3人が競って勝った者が世界挑戦っていう図式だったんですよ。でも、いまはそういう危ない橋を渡らせないでしょ。

――つまり〝日本予選〟を通過しないで世界に挑む感じなんですか。

織田　それもそうだし、昔みたいに場数は踏まないですよね。小林弘さん（元WBC・WBAスーパーフェザー級世界チャンピオン）なんて59戦目で世界戦に初挑戦したんですよ。

――59戦目にして！（笑）。

織田　だから小林さんは本当に強いんですよね。逆に亀田兄弟なんか、どう考えても噛ませ犬としか思えないタイ人とばっかりやってたでしょ。ある日本人選手が亀田兄弟に対戦を打診したら、「日本人とはやらないから」という一言で断ってきたくらいですから。

――ほかの国のボクシング事情はどうなってるんですか？

織田　たとえばアメリカはプロモーターとマネージャーがそれぞれ独立してるんです。日本の場合、プロモーターとマネージャーとジムが同じだから、いろいろと都合のいいマッチメイクを組めちゃうんだけど。

――ウチは何度か亀田兄弟の取材をしてるんですけど、彼らって「なんでオレたちばっかり文句を言われるんだろう。判定にしても対戦相手にしても、ほかのボクサーだって似たようなことやってんじゃん」みたいな意識をもしかして持ってるんじゃないのかなって。

織田　あれはもうテレビ局の犠牲者ですよ。しかも放送局はTBSじゃないですか。TBSはそういうやり方が好きだから。スポーツ選手を芸人扱いするの。

――総合格闘技でも似たような傾向があります（笑）。では、ボクシング界には昔から八百長は存在しないけども、そういうふうに見えてしまう風景はあるということか。

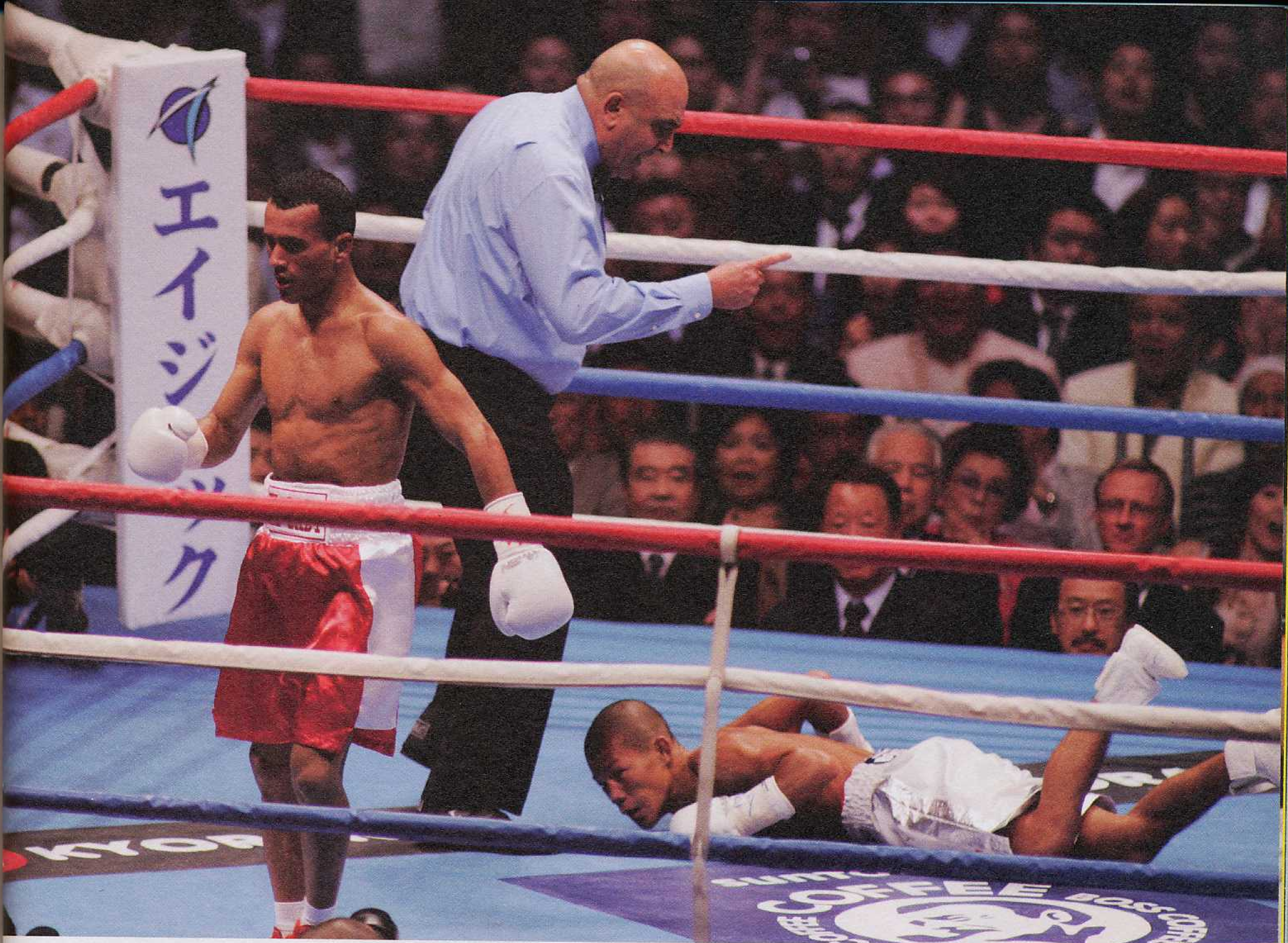
織田　八百長ではないんですけど、「気持ち的に八百長」ってのはあるかもね。

――気持ち的に（笑）。

織田　そういえば辰吉（丈一郎）がアマチュアのときにオリンピックに行きたくないから消極的な試合をして負けたことがあったけど。

――なるほど（笑）。

織田　それは例外として、ボクシングで八百長をやる理由がないというか、選手は金目当てでボクシングやってないですもん。仕事を持ちながら、心に開いた穴を埋め合わせないと自分を維持できない人間がボクシングンをやっている。金は二の次、三の次だと思う。



日本中から「八百長ではないか」と物議を醸した亀田vsランダエタ戦の判定。亀田興毅の個性、TBSの演出等への悪感情が加わり大騒動になった。

選手同士は真剣だけど、周囲が意図的すぎて八百長に見えてしまう場合はある

——いまは世界チャンピオンになってもそんなに稼げないんですか？

織田　まあ帝拳（の所属選手）とかはそれなりにもらえますけど、世界タイトルだと最低1000万はいくかな。

——世界タイトル挑戦で1000万。

織田　帝拳はそれなりには保証するんですよ。だけどひどいジムになると、ファイトマネーが50万だったりとか。

——え、世界タイトルなのに？

織田　はい。内藤（大助）が挑戦したときは100万のファイトマネーだったんですけど、興行権がないジムだと持ち出しのときもありますからね。

——興行権がないと世界戦の旨味がないんですよね。

織田　ないですねぇ。世界戦の興行をやったら赤字になっちゃって、会長がそのままトンズラしちゃったケースもありますからね。

——せっかく晴れ舞台が……。

織田　挑戦した選手もファイトマネーもらってないじゃないですか。会長がトンズラする前にファイトマネーの代わりに小切手を渡されたけど、銀行に行ったら不渡りになっちゃったという。

——あたりまえですけど、興行も勝負なわけですね……。

織田　でも、選手はお金が目的じゃないし、選手同士が顔見知りになる機会もないから、そういった談合が起きる土壌ではないですよね。

——たとえば判定があきらかにおかしい場合ってありますよね。

織田　ありますね。たとえば、あるジムが興行をやったとする。そうするとそのジムの選手が試合に出るわけだけど、興行側の選手があきらかに内容で押されてるのに判定で勝ったり……。

——それはジャッジが空気を読んでるということなんですかね。事前にプロモーターに何か言われたわけでもなく。

織田　わかんないですねぇ……。

——わかりませんか（笑）。まあ口を割るわけにはいきませんし。

織田　だから選手同士は真剣なんだけど、周囲が意図的すぎて八百長に見えてしまう場合はあるってことだよね。

——やる気のないタイ人を読んでも八百長ではない。でも、そう見えてしまう。

織田　無気力相撲ならぬ無気力ボクシングというか……。やっぱり東南アジアからは出稼ぎ感覚で来日するボクサーが多いんですよね。亀田の対戦相手って、急きょ決まったっていうケースがけっこう多いですよ。あるときなんかは「試合は10日ぐらい前に聞きました」って言ってましたよ。

——10日前！　DREAMどころじゃない（笑）。

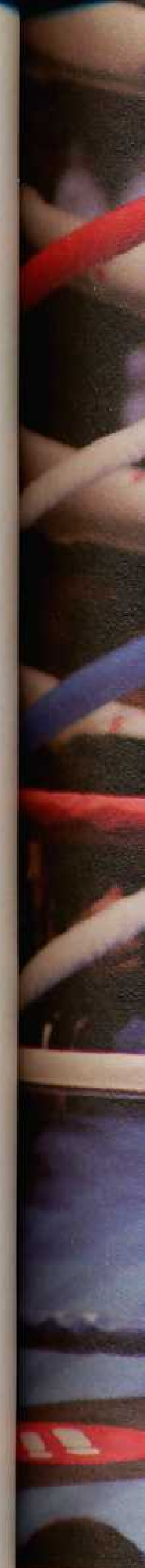
織田　その選手は一日12時間ぐらい働いててボクシングの練習なんかほとんどしてなかったんですよ。で、「試合は10日ぐらい前に聞きました。練習しないでもうほとんど減量だけです。いいお金になったから、また行きたいです」って（笑）。も

うその時点で完璧に八百長に見えるじゃ

織田　いま不思議なのはランキングで、

認定団体に承認料が入るから、ジム側に

クシングジムだってあんまり金ないし、



ボクシングに八百長はあるのか？

ランキングはたいがいプロモーターがかけ合って決めてるんですよ

うその時点で完璧に八百長に見えるじゃないですか。

――真剣勝負の装いではないですねぇ。

織田　まあ、負けるためには闘ってはないと思うんですけど、負けることを前提に日本に来てるわけです。あえて負けてはいないのかもしれないけど、どう考えても噛ませ犬という役割は自分でもわかってるわけですよ。

――選手同士で勝敗を決めてなくても、そこは周囲の思惑が……。

織田　角界と一緒ですね。興行側がちゃんとレールを敷いといて。もちろん踏み外すやつもいるんですよ、そのレールから（笑）。

――噛ませ犬として呼ばれた選手が図らずも勝っちゃうケースもあるわけですもんね。

織田　でも、だいたいはレールに沿って進むパターンが多いですね。プロモーターの演出どおりに進んでいく選手、けっこう多いですよ。多いですけど、1990年代かなんかに日本人の世界挑戦21連敗という不名誉な記録が作られてしまったんですよ。レールに乗っけて持っていったけど、全部負けてしまったっていうね。日本タイトルを獲ったことないヤツがいきなり世界に挑戦したりとか。そういうふうな過剰な持っていき方をして、それで21連敗という結果を生んでしまったんですよ。

――それでも挑戦できてしまうシステムは不思議というか……。

織田　いま不思議なのはランキングで、亀田（興毅）もフライ級の4位だったのに、ライトフライのチャンピオンが王座を返上して亀田がランダエタと王座決定戦をやるとなったら、フライ級4位の亀田がいきなりライトフライの2位か3位にランクされたんですよ。

――ああ、ランキングのマジックはよく指摘されますね。

織田　ライトフライ級の実績は一戦もないわけじゃないですか。で、ランダエタはミニマム級の2位か3位ですよね。それがいきなりライトフライの1位になるんですけど、このカラクリっていうか、なんでその階級の実績もないのに上位にランクされるのかっていう。やっぱりそれは世界戦をマッチメイクするために手を回さなきゃダメなんですよ。

――それはWBCとか認定団体側がランキングを決めてるんですか？

織田　あれはたいがいプロモーターがかけ合って決めてるんですよ。「こいつとこいつをやらせたいから、こっちのランクを上げてくれ」って。

――それはジム側が申請するんですか？

織田　まあ、申請もするんでしょうけど、どちらかというと、まずマッチメイクありきでそこからランキングを操作してくる。入れたり崩したり（笑）。

――けっこう簡単に操作できるもんなんですね。

織田　だからそこは政治力ですよ。

――有力なプロモーターが興行を打てば認定団体に承認料が入るから、ジム側にも自由にさせてるところはあるわけですか。

織田　ええ。ありますね。

――じゃあ、あまりビックビジネスを手がけられないジムの言うことはあまり聞かないとか。

織田　聞かないですねぇ。だからほかの大手ジムに頼んだりしなきゃならない。ホントの意味でフェアじゃないですよ。けど、選手はそのへんのことは全然、無頓着ですもん。「決められた試合を頑張ります」っていうぐらいで。あんまりそこまで頭を回す選手はいないし。リングに上がってスポットライトを浴びて主役になりたいっていう欲求のほうが強いから。格闘家だってそうでしょうけど。

――では、最初から世界チャンピオンになりたいとか思ってるような選手は、最初から大手ジムを目指したりとかするんですか。小さなジムにも「世界チャンピオンになりたい」っていう選手はいたりするんですか？

織田　いますね。でも、一度でも弱小ジムに入っちゃうとね、ジムの移籍ってなかなかできないんで。簡単に移籍させてくれるところもあるんだけど、「いままで育てたんだから」ってことでけっこう面倒なんです。たとえば「いくら金を置いてけ」とか言われる。ある世界チャンピオンなんてほかのジムに移籍するときに1000万払ってきた、と。自分で仕事してそのお金を貯めて、あとは借りたりして。チャンピオンになる前だけど。

――やっぱりジム側としても〝商品〟としての意識は高いんでしょうね。

織田　ある意味、ドロドロしてますけどね。ボクサー時代は純粋なんですけど、ボクシングジムだってあんまり金ないし、ボクシングをやって裕福になってるところがあんまりないですよね。まあ、内藤のところの宮田ジムぐらいかな。

――プロレス界もそうですね。プロレスビジネスに関わって、お金持ちになった人は力道山とジャイアント馬場さんぐらいで。

織田　ボクシングの場合はアツい気持ちが先に出てるんで、金が二の次なんですよ。だからそのへんの土壌もあって八百長が成立しにくいっていうか。

――パッキャオとかはビックリするくらい稼いでますよね。カウボーイズ・スタジアムが超満員になって。なんか日本のボクシングとは違う競技に見えますね。

織田　そうですね。アメリカとはシステムが全然、違うから。繰り返すけど、向こうはちゃんとプロモーター、ジム、マネージャーとそれぞれ役割が分けられてますから、日本のようにゴッチャになってない。日本もちゃんと実力拮抗同士の試合をやらせて、段階を追って世界に挑戦させていくみたいなことをやらないとね。スターが出るのばっかり待ってたら、またこうなっちゃう。

――神風が吹くのを待っても吹かないから自分たちで吹かせようとしてるわけですね。

織田　そうなんですよ。なんとか神風を吹かせようとしてる姿が〝八百長〟のように見えるのかもしれませんね……。

――格闘技界にも通じるところですねぇ。今日はありがとうございました！

おだ・じゅんたろう■1957年2月11日、北海道出身のノンフィクションライター。大学時代はボクシングに熱中。『大場政夫の生涯』『巨人軍に葬られた男たち』等、スポーツ関連の著作多数。

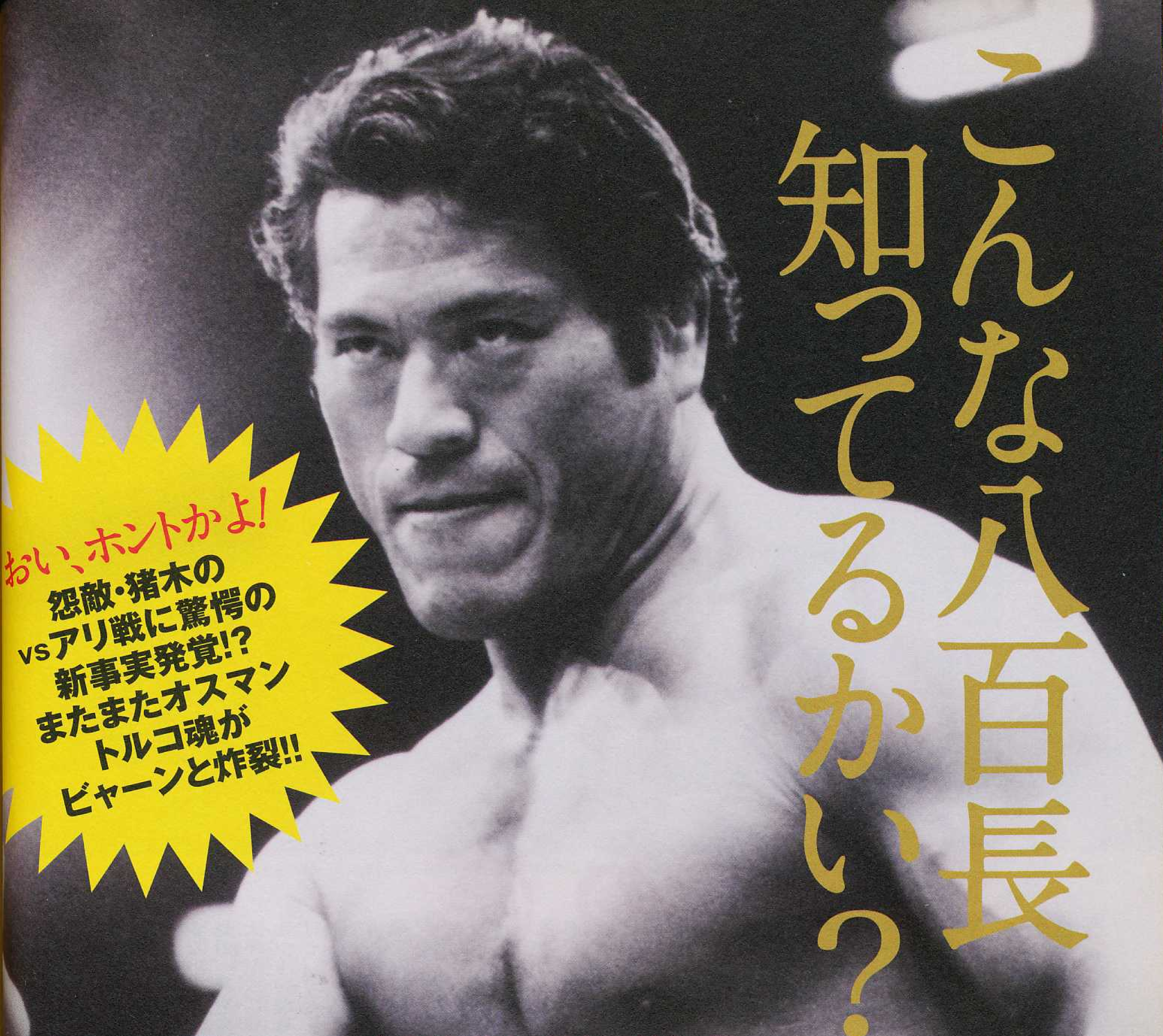
だよ。

トルコ　力道山の弟子の田中米太

じめ、相撲出身の人が多かったです

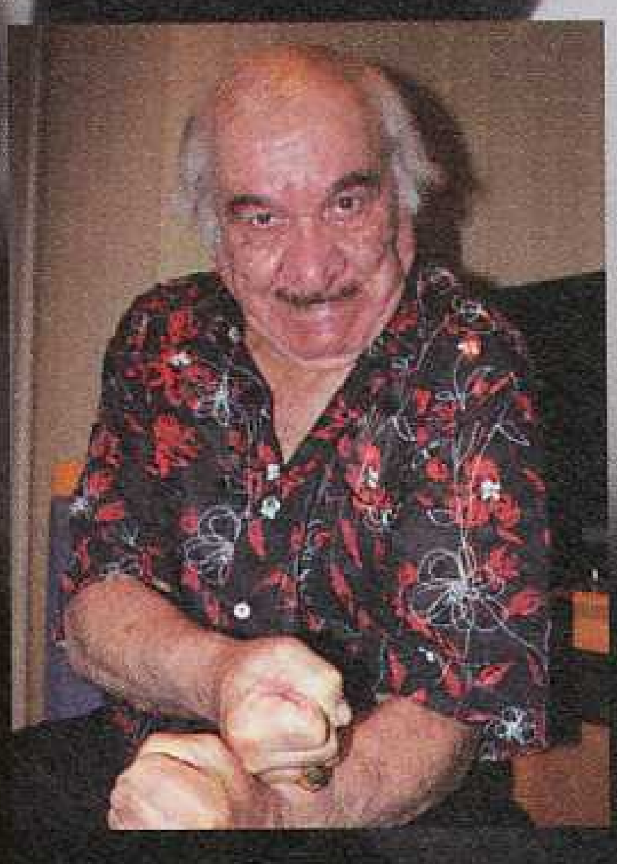
——猪木さんが悪い、と。

ね。



こんな八百長知ってるかい？

おい、ホントかよ！
怨敵・猪木のvsアリ戦に驚愕の新事実発覚!?
またまたオスマントルコ魂がビャーンと炸裂!!



当年とって80歳、おヘソの下は40歳

ユセフ・トルコ

「俺は相撲の八百長も何もみんな知ってるんだよ！」
燃え盛るオスマントルコ魂のままに、トルちゃんが編集部に緊急電話！
日本マット界の生き証人が"八百長"についてべらんめえ口調で一方的に語り倒す！

聞き手／鈴木佑

——トルコさん、先日電話をいただいた際に開口一番、「俺がタイガーマスクを作ったんだよ！」って、おっしゃってましたよね。

トルコ　そうだよ！　タイガーマスクの募金が話題になったろ？　でも、俺がいなけりゃタイガーも何もないんだよ！　わかる？

——で、次の日も電話をいただいて、まったく同じ内容のことをまたおっしゃったんでビックリしました(笑)。

トルコ　うん？　ああ、いろんなとこに電話したから間違えたんだな、フッフッフッ。

——手当たり次第に人に伝えたかった、と(笑)。そもそも、トルコさんが『タイガーマスク』を夢中になって読んでるのを見て、梶原一騎先生がタイガーのデビュー話を持ちかけたんですよね。

トルコ　そうそう。「トルちゃん、どう？　これ、なれるヤツいないか？」ってさ。もともと俺は『のらくろ』以外のマンガはバカにしてたのに、夢中になって読んでたもんだから、梶原もビックリしてピンときたんだろうな。で、俺が「日本にはいないよ」って返したら、「じゃあお金払うから、ちょっとアメリカ回ってきてくれ」って言うもんだから、とりあえず猪木のところに行ったんだよ。

——巷では新聞さんが仕掛けたって言われてますけど。

トルコ　新聞じゃないよ！　何言ってんだよ、とんでもねえよ。新聞のクソッタレは出てこないんだよ。猪木だよ、猪木。アイツが「一人いいのが海外行ってるんで、ちょっとそれを見てください」って言ってきたん

『こんなプロレス知ってるかい』を書いたのは猪木が原因なんだよ！

だよ。

——そこで佐山（聡）さんが抜擢された、と。

トルコ　そうそう。俺は佐山に「いいか、おまえはマスク取ったら15分一本勝負の男なんだぞ。頑張れよ」って言ったんだよ。そこから佐山は努力して、タイガーマスクとして花開いた、と。だから、もともとのきっかけは俺なんだよ。それがなかったら、佐山はいまもロンドンにいて、ロンドンの女と結婚してたんだから。

——じゃあ、佐山さんもトルコさんには感謝してるでしょうね。

トルコ　感謝してるんだったら猪木なんかの誕生日に出るがはずないだろ！　ホント、アイツの武道精神はインチキだよ。武道は武道でも山梨のブドウな、甘いもんばっかりでブクブク太って。

——今日も名調子ですね（笑）。で、トルコさんがその電話の際に、「俺は相撲の八百長も何もみんな知ってんだよ！」とおっしゃってたので、今回は八百長についてお聞きしたいんですよ。

トルコ　まあ、相撲は八百長どうこうよりも、金で星を売買してるっていうことが許せないよな。たとえば、人情で負けてやるっていう相撲は、俺もこれまでに何回か観たよ。俺だってプロレスでやったことあるしな。

——ほう、トルコさんも人情で負けたことがありましたか。

トルコ　力道山の弟子の田中米太郎、アイツの出身地の高知でな。ホントは俺が本気出せばあんなヤツに負けるはずないんだから。でも、負けてやったのは八百長とは違うんだよ。俺はプロなんだから、相手を殺すつもりでリングに上がるわけじゃないからな。

——殺すつもりだったのはグレート東郷くらいですか？

トルコ　そう！　まさにそのとおり、まさにそのとおりです。さすが『紙の新聞』だ、ほら、ユー、寿司食いねえ。

——ですからミーは『紙のプロレス』です（笑）。

トルコ　だから、相撲は結局、星の売買をやったのが間違い。昔は十両なんて金がなかったから、そんなことできなかったんだよ。いまは相撲協会自体が金を方々からもらいすぎてるからな。それでいまみたいにアッパッパーになっちゃったんだから。



トルちゃんはミスター高橋本からさかのぼること16年前、1984年に『こんなプロレス知ってるかい』という、いわゆる暴露本を上梓している。

——日本プロレス時代は力道山をはじめ、相撲出身の人が多かったですけど、その頃に八百長については聞いてました？

トルコ　うん？　そんなのもちろん知ってたよ。まあ、でもそれは「情がこもったことはあるよ」と。それは一概に八百長とは言えないからな。

——八百長といえば、かつてトルコさんは『こんなプロレス知ってるかい』という暴露本を書かれましたよね。

トルコ　あのな、結局それはな、猪木が原因なんだよ！

——え、トルコさんが常日頃「あいつを殺すまで死ねない」と公言してる猪木さんですか？

トルコ　そうだよ！　それと頭にきたのが豊登と芳の里な。この二人のワルに、俺はなんだかんだとかき回されたから頭にきちゃったんだよ。それで、あることないことムチャクチャに書いちゃったんだよな。

——あることないこと（笑）。

トルコ　だから俺にとってあれは最大の恥だったよな。いまは後悔してるよ。そういえば、ミスター高橋も書いただろ？　あのあと、アイツは俺にすぐ電話かけてきたんだよ。

——どんな電話がかかってきたんですか？

トルコ　謝ってたよな。だから「わかる、おまえの気持ちも」と。それで「おまえをふいにしたのは猪木だろ？」って。だから、結局はみんな猪木なんだよ。

——猪木さんが悪い、と。

トルコ　全部そう！　全部アイツ！（キッパリ）。猪木というのは最低な人間なんだよな。

——この本のなかにはその猪木さんとウィリー・ウィリアムスの一戦について、「あれは試合前日に新日の道場でリハーサルが行なわれてた」って書いてあるんですよね。でも、02年にトルコさんが出した『プロレスへの遺言状』には、「リハーサルがあったという噂もあるがそれは嘘だ」って、まったく逆のことが書いてあったんですけど……？

トルコ　ああ、それは嘘！　リハーサルなんてないない。

——なるほど（笑）。

トルコ　だけど、当時は猪木に怒ってそう書いたんだよ。あと、当時は俺の子どもの具合が悪かったんだよ。幼稚園の頃に脳腫瘍になってさ。でも手術して11歳まではもったんだよな。あのときは医者が「こんなにもちこたえるなんて医学的に考えてもありえない、これは親子の愛情が深いからだ」って驚いてたんだから。

——そんなことがあったんですね……。

トルコ　だから、その本を書いたときは俺の人生がバターンと、もう何がなんだかわかんなくなっちゃってたんだよな。で、猪木も自分勝手なことして、世話になってる人間にうしろ砂かけるようなことばっかりしてるから、それで俺は頭にきちゃった、と。アイツはレスリングをわかったようなカッコして、周りに新聞とか詐欺師みたいなのを集めてさ。

——人として許せなかったわけですね。

トルコ　そういうことです！

——で、そのウィリー戦でトルコさんは、梶原先生に頼まれてレフェリーをされるわけですけど、家を出るときにトルコさんが奥さんに、「今日は生きて帰れるかわからない」って言ったというのはホントですか？

トルコ　フッフッフッ（ニヤリ）。

——あの試合は結果的に両者リングアウトでしたよね。

トルコ　でも、それも最後は俺が決めることだもんな。

——トルコさんのサジ加減だ、と。

トルコ　だから、たとえそれで食ってかかってこられても、俺は袋叩きになる覚悟で行ったんだから。プロレスもメンツがあるけど、空手にもメンツがあるしな。まあ、でも俺はイスラム教で、イスラムはお互いを信じるんだよ。アルカイダじゃないけど。

——あ、ウィリーはイスラム教徒だったんですか？

トルコ　あれはイスラム、アラブだろ？　あれ、アフリカだったか？

——いや、アメリカじゃないかと。

トルコ　なんだアメリカか、ヒャッヒャッヒャッ！

——は、はあ（汗）。で、同じ本のなかでトルコさんは、いまやいろんな証言や取材で猪木さんのリアルファイトの一つだったと言われているモハメド・アリ戦についても、「真剣勝負だと聞いてあきれる」って書かれてたんですけど、これもあることないこと……。

トルコ　（さえぎるように）あのな、一つね、俺がここで言えるのは、こ

れを猪木が「そうじゃない」と言うのなら、ユーのところで猪木とトルコを対談させてごらんなさい、と。これで猪木が出てこなければ、完全にアイツが八百長だって認めたってことだよ！（キッパリ）。

——え〜と、断固としてアリ戦は真剣勝負じゃない、と。

トルコ そのとおり！ ……ところでこれはどんな試合だったんだ？

——へ？ 15ラウンド引き分けですけど……？

トルコ もう、そこまで試合を持っていったらたいへんなもんだよ。それは俺の力じゃないかよ、なあ？

——え、持っていったというのは？

トルコ 俺が15回やっただろ、あれは。

——いえ、あの試合のレフェリーはトルコさんじゃなかったですけど。

トルコ ？（キョトンとして）。

——あの、ボクシングの世界チャンピオンのモハメド・アリとの一戦のことですよ？

トルコ あっ！ アリ戦か！ はいはい、もう、あれは完全なる100パーセント、あれがホントの八百長!!

——あ、どっちにしろ八百長なんですね（笑）。

トルコ あれで猪木はプロレスを壊したんだから。アリ戦で10何億って使ってるんだよ。そもそも世界チャンプに勝てっこないだろ。アッパー一発でブシャーンだよ。あの長いアゴを狙えばユーでもビャーンと勝てるよ！

——ミーでもビャーンと勝てちゃいますか（笑）。

トルコ とにかくあのときは100パーセント八百長（キッパリ）。あれは佐川急便がいたから助かったんだよ。金出して、金、金、金を積んでさ。

——八百長だというのは誰に聞いたんですか？

トルコ そんなのわかってるよ。俺にいつも情報が入ってくるんだから。アメリカのほうのことも全部知ってるよ。アメリカに友だちがいっぱいいるんだもん。佐川急便のこともわかってるんだから。

——あの、それで具体的にはいったい誰に……？

トルコ （無視して）完全、100パーセント八百長！ 柔拳みたいなケンカみたいな試合で、勝てもしない人間をさ、世界チャンピオンをリングに上げたということが間違ってたよな。猪木が八百長やってプロレスを壊したんだよ！

——とにかく八百長だ、と（笑）。あと八百長といえば、トルコさんも間近で目撃した力道山vs木村政彦の試合についてもお聞きしたいんですよ。



ゆせふ・とるこ■1930年5月23日、樺太出身。本名ユセフ・オマー。日本プロレス旗揚げ前から柔拳などで活躍したプロレス創成記の数少ない生き証人。日プロを裏切って国際プロレスのブッカーになったグレート東郷を、鉄拳制裁するなど武闘派でもある。マット界は言わずもがな、政界財界問わず幅広い広く人脈を持つ。現在は『よろずなんでも屋だよ！』（トルコ談）。

ユセフ・トルコ

トルコ あれはね、アイツが悪いんだよ、工藤雷介。

——『柔道新聞』の主幹ですね。

トルコ そう。アイツが自分とこの新聞の売り上げを伸ばそうとして、二人のあいだを行ったり来たりして対決を煽ったんだよな。ホントはリキさんもやりたくなかったわけだよ。木村さんはプロレスでコンビも組んだ仲間だったから。

——あの試合でよく言われるのが、木村さんの前蹴りが力道山の股間に入って、それでカーッとなって、いわゆる筋書きを無視して暴走してしまったということなんですけど。

トルコ それはホントだよな。まぁ、でもプロだからな、八百長って言葉ではなく、そこは持ちつ持たれつでね。でも、これは猪木のアレと違っておかしな金は動いてないからな。だから、力さんと木村さんの試合は俺に言わせればハプニングなんだよ、ハプニング。リキさんも言ってたよ、「ああなるはずじゃなかった」って。

——あの試合で一番ショックを受けたのがトルコさんだったって言われてますよね。

もう、猪木の人生自体が八百長みたいなもんなんだから！

トルコ そうそう。俺なんか、木村さんとは柔拳時代にずっと一緒だったし、尊敬してたからな。俺が唯一寝技で勝てなかった男よ。力道山より寝技の強かった俺が勝てなかった男。だからあのときは力道山が勝ってプロレスが助かったといううれしさと、尊敬する木村さんが惨めに負けた悲しさがあったよな……（しみじみと）。

——あの試合のあとに、木村さんとお話する機会はあったんですか？

トルコ 何回もあったよ。でもあっさりしてたというか、俺と木村さんのあいだであの試合について話すことはなかったな。まああれだ、俺はあの試合に関しては、八百長とかそういう言葉では語れないものがあるんだよ。

——なるほど。あの、いまさらですけど、トルコさんはプロレスには筋書きがあるとカミングアウトすべきだと思います？

トルコ いまか。いまはもう、そういうのはな……フッフッフッ、コラッ！（笑いながらゲンコツを落とすフリ）。まあ、俺もミスター高橋には「そういうこと書くのはもうやめろ」って言ったんだよ。でも、ああいう本を書かせるようにしたのは猪木だからな。もう、あいつの人生自体が八百長みたいなもんなんだから！

——人生自体が八百長！（笑）。

トルコ そうそう。アイツがプロレスを全部壊したんだから。ジャイアント馬場なんか、なんにも出てこないじゃないか。猪木から火山噴火が起きてるんだから。だからアイツに怒るんだよ、俺は。猪木こそ八百長なんだよ。

——猪木さんは真剣勝負をやったことはない、と？

トルコ ないよ！ 全部俺が作ったんだよ。猪木も俺が作ったようなもんだよ！

——タイガーマスクだけじゃなく猪木さんも作ってましたか（笑）。

トルコ まあ、でも言いたくはないけども、猪木が頭を下げてくれば、こっちだって「俺のでまかせだった、嫌がらせでやってた」って言うけどな。

——あ、そういうカミングアウトはするわけですね（笑）。

トルコ だから『紙の新聞』はいまがチャンスなんだよ。俺と猪木を会わせたら、これはプロレス界が一つに向けて動きだすよ、絶対に！（キッパリ）。

——動きだしますか！

トルコ 俺も猪木が「トルコさん、プロレス界のためにやりましょう」と言ってくれば、俺は素直に引く男なんだから。俺の血液はB型だよ、マイウェイだよ。田中角栄と同じだよ、俺は！ だから次は猪木、猪木と会わせてくれよ！

【11年2月26日／都内・某所にて収録】



女子プロレス特集


最狂団体から
ゆずポンまで
独占!
女の38ページ
徹底特集!!

よっしゃいくぞ〜ッ!!(豊田調)。

——僕は全女流押さえ込みの話に非常に
興味があるんですよ。押さえ込みがリン

——そうか、袈裟固めの状態から首をギュ
ーッと押し曲げてしまうとか。

1993年の女子プロレス



「私の時代は実力で勝たなきゃいけなかった。だから八百長って言われると腹が立つ」

——僕は全女流押さえ込みの話に非常に興味があるんですよ。押さえ込みがリング上で行なわれるようになったのはジャガーさんの頃からでしょう？

ジャガー　そう。「実力で上がっていけ」って時代だった。

——ジャガーさんはデビュー戦から全日本ジュニア、全日本王座と全部押さえ込みルールの真剣勝負で勝ってきた。たとえば上の世代、ビクトリア富士美さんとかナンシー久美さんとかがリング上で押さえ込みルールでやったことはあるんですか？

ジャガー　いや、私たちのデビュー戦のときからだと思う。

——ジャガーさんがジャッキー佐藤さんを押さえ込んで勝ったWWWAシングルの試合（80年2月25日）があるじゃないですか。ジャッキーさんは道場でだけ押さえ込みルールのスパーリングをやっていたってことですか？

ジャガー　組み合って倒してギブアップをとるという実戦の練習は、私の前からやってたので。

——道場で？

ジャガー　うん。プロレスルールとは違う。

——関節技もあった？

ジャガー　あったけど、いまみたいな腕十字とかではなく、袈裟固めとって腕を逆にとるとか。

——ジャガーさんたち新人がやったのは押さえ込みだけで、関節技はないルールですよね。

ジャガー　ないない。ギブアップはあるけどね。

——ギブアップですか？

ジャガー　袈裟固めとか。

——そうか、袈裟固めの状態から首をギューッと押し曲げてしまうとか。

ジャガー　練習のときはね。

——リング上では押さえ込みだけ？

ジャガー　うん。受けなきゃなんないというルールがある。

——全日本女子プロレスの凄さは、根本に押さえ込みがあるからだと思います。

ジャガー　だから八百長だって言われると腹が立つ。「どんなに嫌な思いしてきてるんだよ、私は」って。（事前に勝敗が）決まってるほうが楽だよね。

——ジャガーさんは実力でチャンピオンになった。だからこそ「全女イズムの根本はジャガーさんが作ったものだ」とライオネス飛鳥さんは言うんでしょうね。長与さんも「〝ストロング・オブ・全女〟はジャガーさんだ」と。長与さんは、「ジャガーさんはジャッキーさんをカウント6秒も7秒も押さえ込んでいたのに、なかなかカウントを取ってもらえなかった」って言ってました。

ジャガー　その私の前の試合で、肩が上がったかもしれないっていうフォールをとったの。

——池下ユミさんとミミ萩原さんがやったオールパシフィックの試合ですよね。ミミさんの押さえ込みは、どう見てもツーカウントだったでしょう。

ジャガー　だったんだよね。あのおかげでレフェリーが私のフォールをなかなか取ってくれなかったんだ。（ジャッキーとは）身体の差があるからさ、完璧なワン、ツー、スリーなんて取れない。最後は、「肩甲骨が空いてないから取ってしまえ」って、スリーカウントを取ったみたいだけど、やっぱりそれでも隙間は空いてるし。

——アマレスのルールで肩といえば本来

最狂団体の最強女帝が語る

“押さえ込み”の方程式



第29代、31代WWWA世界シングル王者

ジャガー横田

WWWA王者時代は小さい身体ながらも誰も寄せつけない最強女帝として君臨したジャガーが、満を持してついに『1993年の女子プロレス』に登場！ おそらく世界で唯一、ガチの実力で頂上に登り詰めたジャガーが、最狂団体の押さえ込み神話を語る！

聞き手／柳澤健　構成／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

肩甲骨のことですものね。でもプロレスの場合は肩甲骨がついていても、いわゆる肩の部分がちょっとでも上がってるとダメなんでしょ？

ジャガー　そうそう、背中が丸い人って簡単にはつかないから。気絶でもしてないと（笑）。

――ジャッキーさんとやったとき、押さえ込みルールでやれば絶対に自分が勝つと思ってました？

ジャガー　それはない。ジャッキーさんの技は威力が違うから。ホントに効くのよ。あんな高いところからガンガン落っことすんだから。

――じゃあ必死で受け身をとるんですね？

ジャガー　すっごい必死で受け身をとる。私、ジャッキーさんの十六文が胃袋に当たって、3分くらいリングに上がってこられないときあったんだから。力入れてるつもりなのに、みぞおちのちょうどいいところに入っちゃって。吐き気して息ができない。技効いて死ぬってのは気絶したとき以外ないけど、アレは苦しかったね。いまでも覚えてるけど。私は凄い数の腹筋をやっていたから、バキバキに腹が割れてる時代なんだけどね。私が一番何にも怖くない時代。バリバリ一日8時間練習してたときだからね。

――バリバリ一日8時間！　それは凄いですね。全女の中継アナウンサーだった志生野温夫さんに話をうかがったことがあるんですが、志生野さんは「押さえ込みを持ち込んだのはたぶんレフェリーをしていた清見川梅之（大相撲出身のプロレスラー）さんだろう」っておっしゃるんです。マッハ文朱さんとかジャッキー佐藤さんの時代に。もちろん道場での話ですけど。

ジャガー　清見川さんは私が入ってすぐに辞められてるので、記憶が薄いんです。レフェリーもしてもらってないし。

――すれ違ってるんですね。

ジャガー　そうそう、会ってるんだけどね。新人なので向こうは目もくれないし話もしないんだけど。あのね、松永（兄弟＝全女の経営者）はみんな柔道やってるの。


ビューティ・ペア解散後、低迷期の全女を支えたのがジャガー、デビル雅美、ミミ萩原の三傑。クラッシュギャルズによる女子プロレスブームに至る礎を築き上げた。

――柔拳（柔道とボクシングの異種格闘技戦）の選手ですものね。

ジャガー　有段者だし、まだみんな若いから自分の身体を使ってバンバン練習を教えてる時代が、マッハさんくらいの時代からあったんじゃないかな。「受け身の練習だけじゃなくて実戦を」ってことで、柔道のスパーリングをやらせ始めたんじゃないかな。途中とかはボクシングあがりの松永もいるので。

――健司さんや俊国さん、国松さんですね。

ジャガー　ボクシングのスパーリングをやったり、異種格闘技をやり始めたのも松永の考えだと思うし。

――異種格闘技戦って伊藤薫さんとかがやったああいう。

ジャガー　そうそう、昔ね。だからボクシングルールを取り入れて。「レスラーにボクシングやらせたって無理に決まってるだろ」と思ったけど。デビルなんかもやったことあると思うよ。ボクサーと。

――ありましたね。80年1月に横田利美さんが全日本ジュニア初代王者になるわけですけど、これがリング上で行なわれた初めての押さえ込みルールによるトーナメントですか？

ジャガー　違うよ！　新人王で正式にやってるじゃん。

――そうでした。でもジャガーさんは新人王を獲れませんでしたよね。

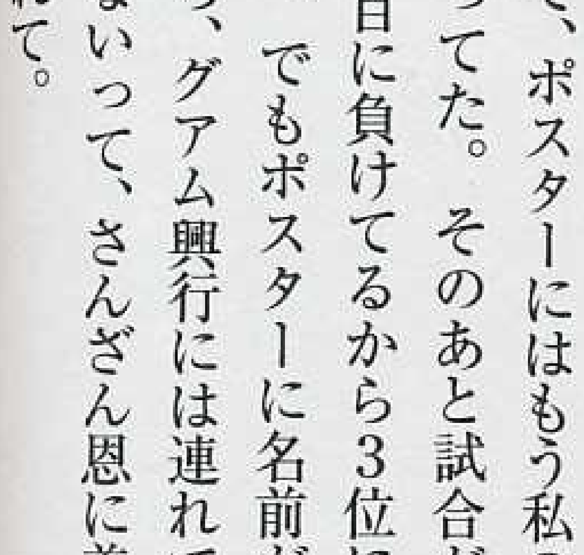
ジャガー　獲れなかったよ（笑）。

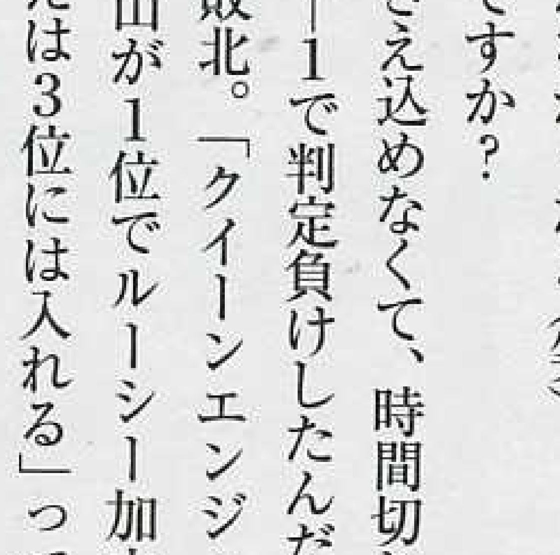
――どうしてですか？

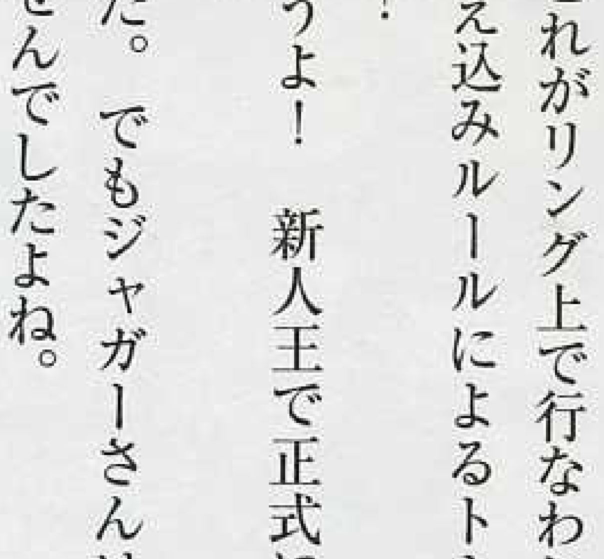
ジャガー　押さえ込めなくて、時間切れ引き分け。で、2−1で判定負けしたんだよ。あれは一番の敗北。「クイーンエンジェルスのトミー青山が1位でルーシー加山が2位で、おまえは3位には入れる」って期待されて。3位までグアムに連れていくと言われていて、ポスターにはもう私の名前が入っちゃってた。そのあと試合があった。1回戦目に負けてるから3位には絶対なれない。でもポスターに名前が出ちゃってるから、グアム興行には連れていかないといけないって、さんざん恩に着せられて着せられて。

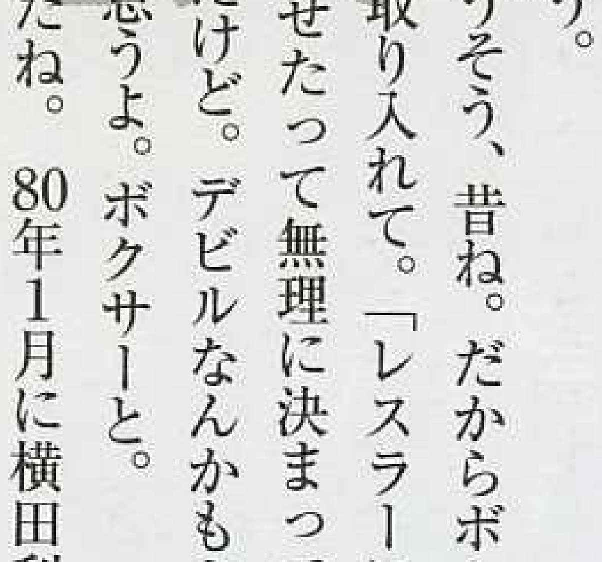
ジャガー横田

最狂団体の凄みを味わえ!
1993年の女子プロレス 一覧


豊田真奈美
（『kamipro』No.137収録）
難易度の高いオリジナルホールドや、ゾンビのような打たれ強さで90年代の全女マットで活躍した豊田。孤高の飛翔天女が語る最狂団体とは？


井上京子
（『kamipro』No.135収録）
天才レスラー・京子は、「不満だらけだった」という対抗戦時代から松永兄弟との意外な確執まで、驚愕エピソードをあっけからかんと告白！


ライオネス飛鳥
（『kamipro Special 2009 SPRING』収録）
14ページブチ抜き3万字インタビューとなった飛鳥は、盟友・長与千種との出会い、クラッシュ時代の複雑な心の揺れ動きを赤裸々に語ってくれた。


アジャ・コング
（『kamipro Special 2009 APRIL』収録）
記念すべき第1回に登場したのはアジャ様。自身の転機となったユニバ参戦や伝説の90年11月14日のブル中野との金網マッチなどについて激白！

昔は負けたら終わる時代だよ 後輩に負けた人は全員辞めていってるよ

——ハハハ。

ジャガー　リングアナウンサーだった氏家（清春）くんの前の、相沢（建一）さんに。こっちも「頼んでねえよ」と思って。そのプレッシャーで、1週間前から下痢が始まって、体力がなくってダメだったんだと思う。負けはしなかったんだけど、勝たなきゃと思ったから。

——ジャガーさんはプレッシャーに強いタイプと思ってましたけど、そうでもないんですね。

ジャガー　毎回毎回、1週間前になると食べられなくなるから。あたりまえだよ、昔は負けたら終わる時代だよ。いまは復帰とかあるけど、そういう時代じゃないんだから、負けた人、王座から落ちた人は辞めるんだよ。後輩に負けた人は全員辞めていってるよ。

——後輩に負けたら。

ジャガー　次ないと思ってるから。代謝も速いし。新人王ぐらいだから辞める気にはならなかったけど、もし全日本ジュニアの王座決定戦で佐藤ちのに負けていたら、辞めなきゃいけなかったかもしれない。

——えー！　そうですか！

ジャガー　だってそうじゃん、いっぱいいるじゃん。全日本ジュニア王座決定戦で飛鳥に負けた先輩も辞めてるから。川上法子ね。後輩に負けた人は全員辞めていったよ。

——はあ……（ため息）。81年2月25日、19歳の横田利美がジャッキー佐藤を破ったＷＷＷＡ王座の試合のルールが押さえ込み、つまり真剣勝負ということは、いつどこで言われたんですか？

ジャガー　それはあたりまえだったから。当時、私が育った環境は。タイトルは全部そういうもの。実力で勝っていかなきゃいけなかった。

——でも、ジャッキーさんは違うでしょう。

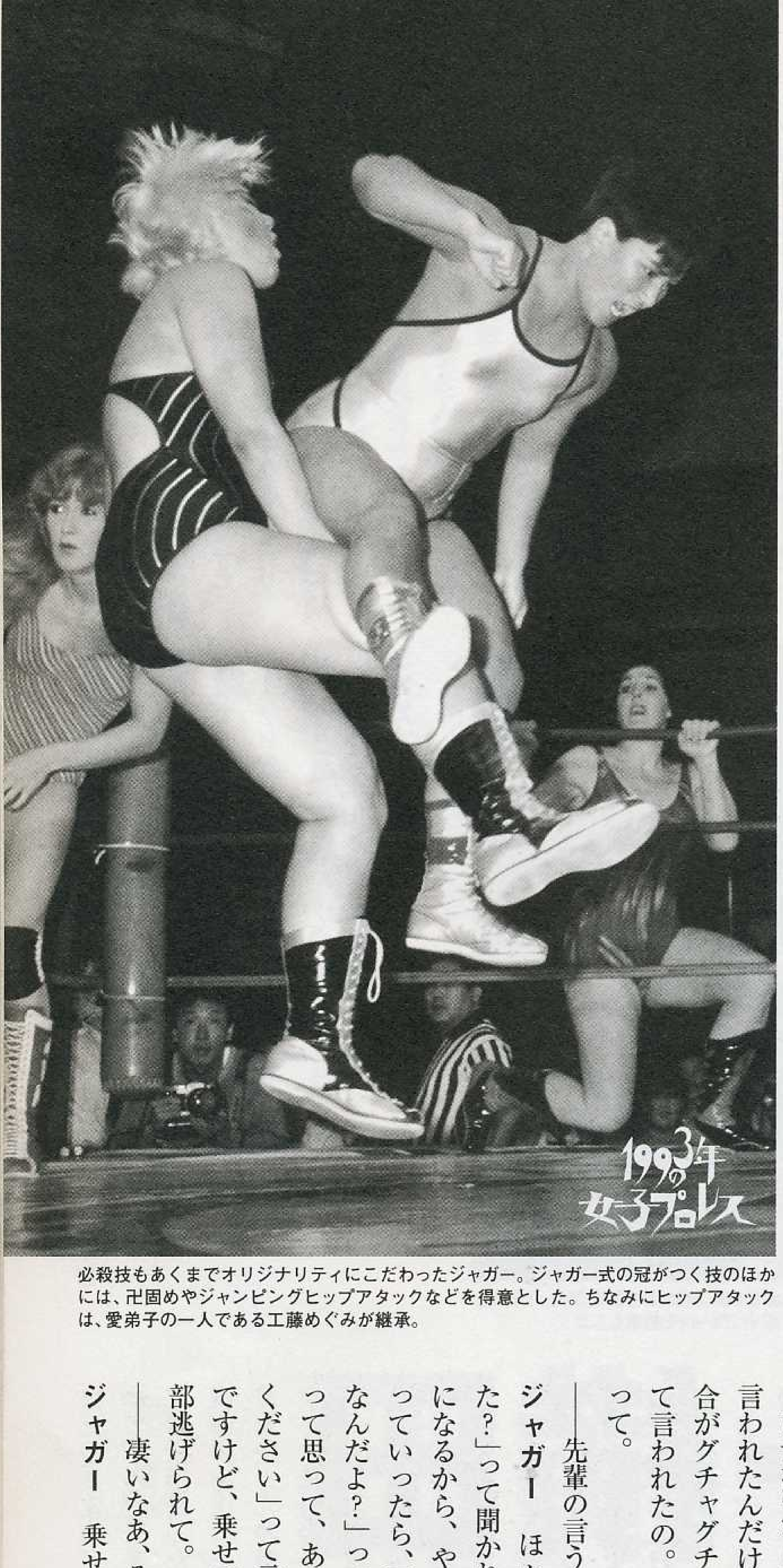
ジャガー　だから先輩たちは文句あったでしょうね。でもそれが全女の考え方だから、文句を言える選手はいない。陰では言ってたと思うけど。もっとさかのぼれば、新人王から始まって、全日本ジュニア、全日本、オールパシフィック、ハワイアンパシフィックっていう時代に、私はジャッキーさんの前に、ハワイアンパシフィックに挑戦してる。そのときに60分引き分けた理由は、最後のほうしか押さえ込みができないルールにしちゃったから。会社からは「途中から押さえ込みルールで」って言われたんだけど、対戦相手の先輩に「試合がグチャグチャになるからやめよう」って言われたの。後輩なので「そうですか」って。

——先輩の言うことを聞いた、と。

ジャガー　ほかの先輩から「どうなった？」って聞かれて、「試合がグチャグチャになるから、やめようって言われました」っていったら、「あんた、自分のチャンスなんだよ？」って言われて、「ああそうか」って思って、あとから「少しだけチャンスください」って言って。それでもらったんですけど、乗せてもらえませんでした。全部逃げられて。

——凄いなあ、その話！

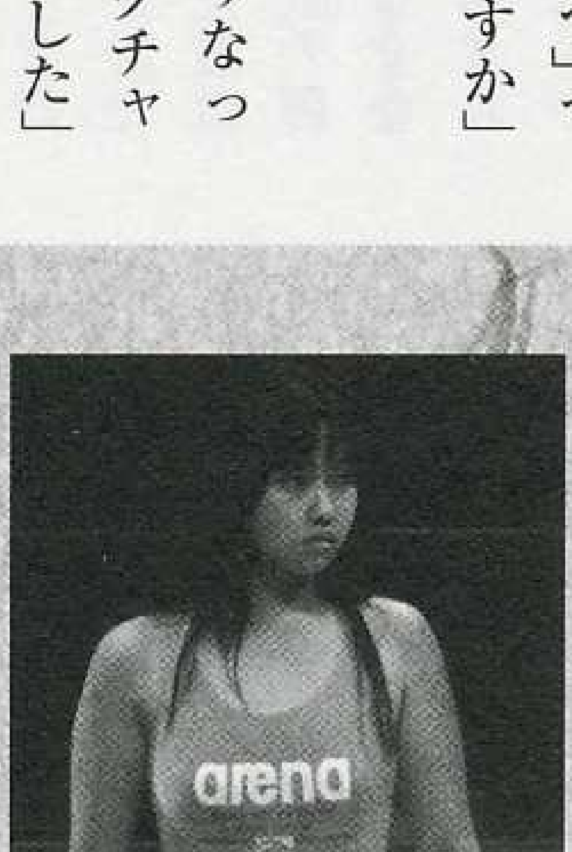
ジャガー　乗せなきゃいけないというル



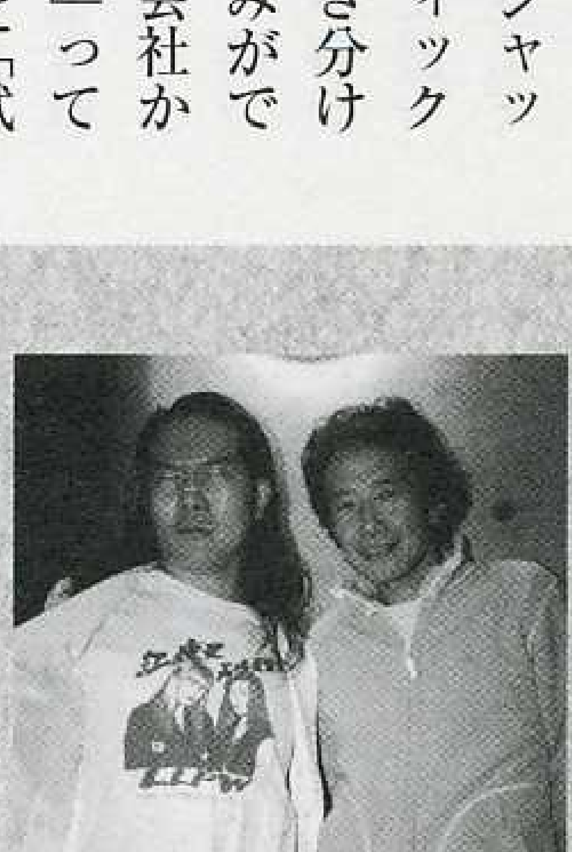
必殺技もあくまでオリジナリティにこだわったジャガー。ジャガー式の冠がつく技のほかには、卍固めやジャンピングヒップアタックなどを得意とした。ちなみにヒップアタックは、愛弟子の一人である工藤めぐみが継承。



北斗晶
（『kamipro』No.146収録）
そして真打ち登場! 対抗戦時代の主役であり、いまや国民的主婦タレントである北斗が、デンジャラスクイーンと呼ばれた時代を振り返った。



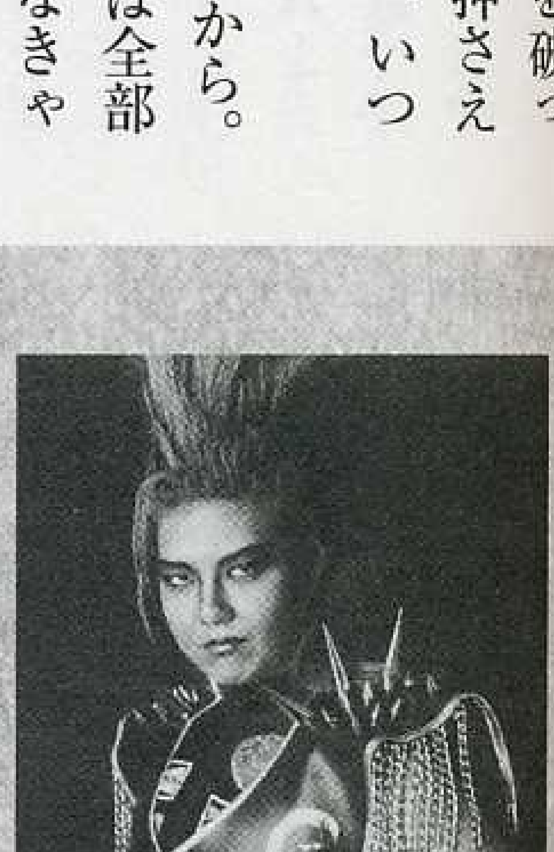
広田さくら
（『kamipro』No.143収録）
柳澤健の最愛のレスラーも当コーナーに登場！「本音と打算のプロレス論」と題して、現役復帰直後の"異能の人"が好き放題にぶっちゃけた!



女子プロレス対抗戦変態座談会
（『kamipro』No.142収録）
こちらは特別企画として、『変態座談会』と『1993年の女子プロレス』&『萌え萌え女々苑』がまさかのコラボ! 女子対抗戦を語りつくす!



長与千種
（『kamipro』No.141収録）
クラッシュブームを巻き起こした希代のヒロイン・長与が語ったのは最狂団体内の派閥闘争について。神取忍との秘話も明かしてくれた。



ブル中野
（『kamipro』No.140収録）
ここ数年はマスコミはもちろん、一部関係者としか連絡をとっていなかったブル様がご降臨! 沈黙を破り、「女子プロの変質」について語った。

ールがあるので。逃げはいけない。
——相手が触るまでは仰向けになってなきゃいけないんですね。
ジャガー　だけど相当どっぷり乗せて「しっかり押さえてください」ってなるとスリーのあいだに返せないので、だから、ちょっとでも触ったら動く。早逃げしたら先輩にえらいめたくそ文句言われるんで。観てる人がね。闘ってる人は言えないけど。
——ジャッキーさんとの試合は映像で観ましたけど、ジャッキーさんは自分の手で耳をふさぐような体勢になって防御してましたね。
ジャガー　そういう逃げ方を誰かに教わったんだと思う。寝てるとき、首に手が入らないから首を固められないだろうっていうやり方なんですよ。
——相手を乗せるときは、「気をつけ！」の姿勢が基本じゃないんですか？
ジャガー　いや、乗せればどんな乗せ方してもいい。
——手の位置はどこでもいい、と。
ジャガー　ジャッキーさんは誰かに教わってましたね。内部の人間じゃなくて、特別コーチというか。あんまり実戦に慣れてないので。
——この試合が押さえ込みルールになることは、ずいぶん前から決まっていたんですね。
ジャガー　私が挑戦するのが決まった段階で言われてたんじゃないですかね。たぶん反対したと思いますけど。
——そうでしょうね。ジャガーさんは最初から押さえ込みで闘うつもりだった？
ジャガー　あたりまえの時代だから。
——全女凄すぎる！
ジャガー　松永に言われたら絶対なので。「俺たちに逆らうのなら辞めていけ」と。どんなスターでも簡単に辞めさせちゃうから。強気なんですよ。ビューティ・ペアもまだまだ現役でいられたのに、平気でビューティ対決やらせちゃうし（79年2月27日）。
——マキ（上田）さんが芸能界行きたくて辞めたんじゃないんですか？

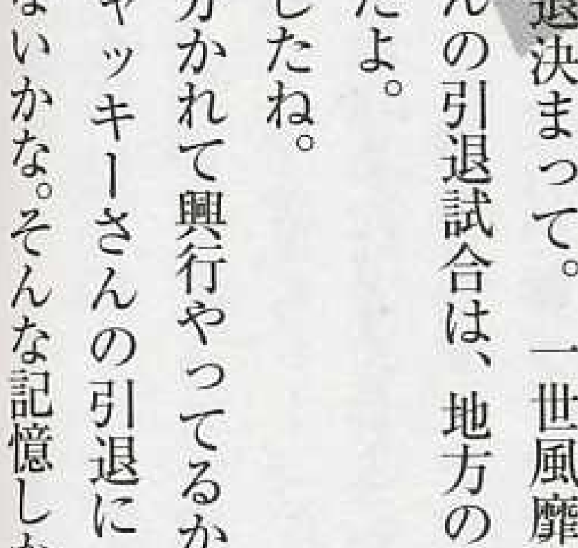


86年に現役引退したジャガーは、94年11月の『憧夢超女大戦』のエキシビションマッチで限定復帰。その後、本格復帰をはたし、バイソン木村、ライオネス飛鳥と雷神隊(ライディーン・アレイ)を結成した。

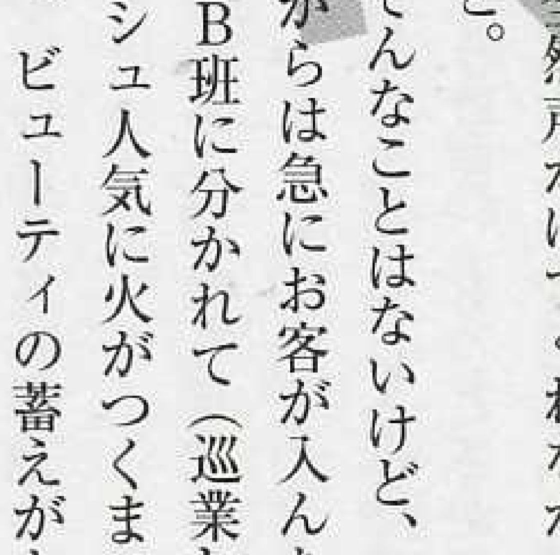
ジャガー　全然全然！　あとでマキさんから聞いた話によると、「そろそろ引退したい」っていうようなことを会社に言ったら、「引退を賭けてタイトルに挑戦されたらいいんじゃないか」と言われたみたい。
——ビューティ対決も押さえ込みだったんですか⁉
ジャガー　そうだってば！　へんな勝ち

ジャガー横田

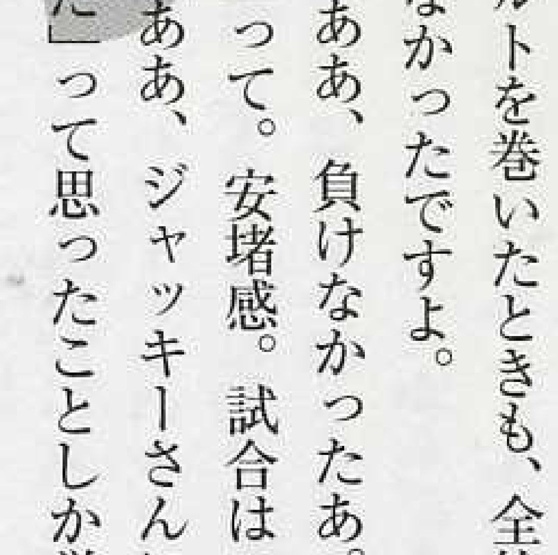
方だったよね。マキさんはここ（腰）を痛めて、上のほうまでビッシリさらしを巻いてる状態だった。いまでも覚えてるけど、ジャッキーさんは逆エビをかけようとしてマキさんをひっくり返そうとしたけど、マキさんはジャッキーさんの脚にしがみついて入れさせないようにしたわけよ、そうしたらジャッキーさんはそのまま前に回って（エビ固めに）固めたね。「そこまでしてジャッキーさんは負けたくなかったんだな」っていう話にウチらのあいだではなってる。もし私がマキさんだったら、脚をつかんだ手を全部離して、前に来させないようにするけどね。「マキさんもあきらめてたのかな」と思う。
——ジャガーさんがジャッキーさんに勝って赤いベルトを巻いたときも、全然うれしそうじゃなかったですよ。
ジャガー　「ああ、負けなかったあ。勝っちゃったよ」って。安堵感。試合はつらかったので。「ああ、ジャッキーさんに勝っちゃったんだ」って思ったことしか覚えてない。
——先輩が全然声かけてくれなかったって話ですけど。
ジャガー　そんなことはないけど、マキさんが辞めてからは急にお客が入んなくなって、A班B班に分かれて（巡業していた）。クラッシュ人気に火がつくまでの1年間くらい。ビューティの蓄えがあったから全然平気で。そのあいだにジャッキーさんも引退決まって。一世風靡したジャッキーさんの引退試合は、地方の青果市場かどこかだよ。
——そうでしたね。
ジャガー　分かれて興行やってるから、半分の人はジャッキーさんの引退にいなかったんじゃないかな。そんな記憶しかない。



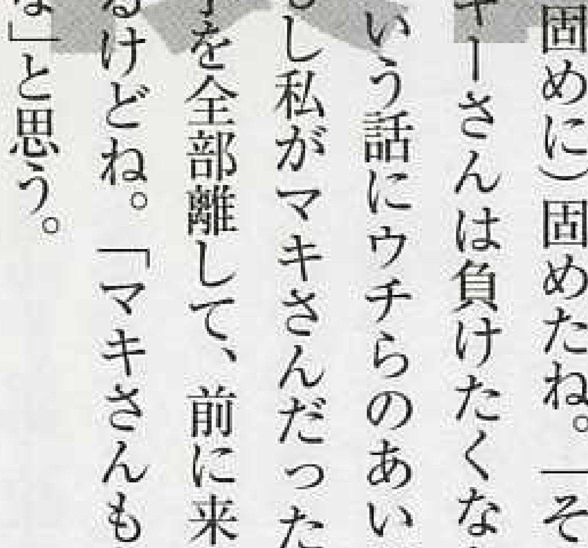
里村明衣子
（『kamipro』No.156収録）
“長与千種の後継者”としてガイアジャパンで一時代を築き、現在はセンダイガールズを率いる里村は、師に対する複雑な胸中を激白！



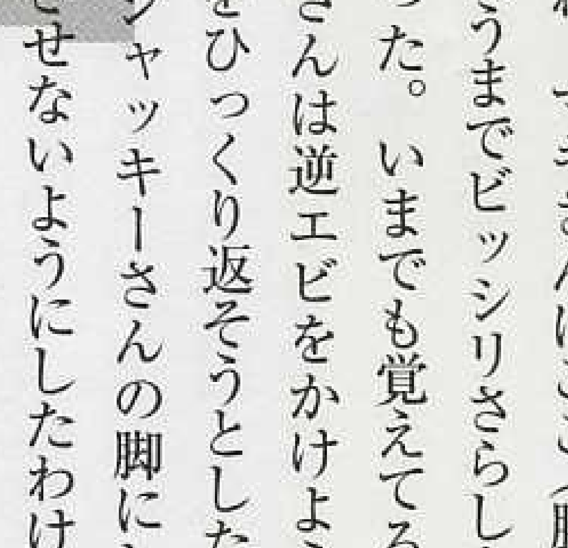
伊藤薫
（『kamipro』No.155収録）
平成元年組からは唯一の登場。対抗戦時代を若手として眺めてきた伊藤が、知られざる北斗や京子た先輩レスラーたちの横顔を語ってくれた。



尾崎魔弓
（『kamipro』No.152収録）
“ピュアハート”JWPからは現OZアカデミーの尾崎が登場。小さな身体で全女の牙城に果敢に挑んだ美人ヒールが見た、最狂団体の風景とは？



ロッシー小川
（『kamipro』No.146収録）
レスラー以外で初の登場となったのは、全女の企画広報部長だったロッシー。最狂団体の頭脳だった男が、90年代プロレス黄金期を回想する。



デビル雅美
（『kamipro』No.146収録）
日本の女子レスラーで最長の活動歴を誇るデビルを北九州でキャッチ！1978年のデビューから約30年間のレスラー人生をたっぷりとお届け！



——ジャッキーさんの引退試合は覚えて
ね。現にそういう人がみんな辞めていっ
ジャガー　体力は問題なかったけど、いつ

—ジャッキーさんの引退試合は覚えてない？

ジャガー 全然覚えてない。「誰とやったの？」って感じ。

—ジャッキーさんが引退して、いきなり19歳の横田利美の時代になったわけですよね。全女の最高峰の赤いベルトを巻いたわけですから。

ジャガー リングに上がるとそう思われちゃうだけで、中の人間関係ではトップではない。まだナンシーさんもビクトリア富士美さんも池下ユミさんもいたし。一番怖かったのは、WWWA王座を獲ったあと、ジャッキーさんと組んだときに、私のほうがあとからコールされたこと。「ジャッキー佐藤！」ってコールされて「ワー‼」って紙テープが飛んで、そのあと横田利美がWWWA王者としてコールされる。そのときベルトの重さを感じたね。「ああ、やっぱりベルト返そうかなー。また力ついてから挑戦させてもらっても」って。私はWWWA王者なんて呼ばれるにはまだまだ、って思うでしょ？ 19歳なんだし。だからそんなことでくよくよしていた。同期にも先輩にも誰にも相談できないじゃん。もうちょっとで会社に「ベルト返上させてください」って言おうと思ったの。「贅沢な悩みだよな……」ってくよくよしてたら、2回目の防衛戦まで半年あったんだけど、10キロ痩せちゃったんだよね。60キロあったのに、50キロ切っちゃったの。精神的なもので。49・5キロだよ。

クラッシュに人気が負けたって寂しくもなかったし、妬みもなかった

—それは「私の顔で客が呼べんのか」ってことですか？

ジャガー 客だけじゃなくて、試合で満足させられるかっていうこと。実力だけじゃないじゃん。魅せられるかどうかっていうのはプロとしては（重要になる）。受ける美学があるプロレスではね。

—俊国さんやミミさんにも相談できない？

ジャガー 「自分で消化させなきゃ」と思ったんで。自分の問題だからね。絶対みんな一匹狼だよ。みんな仲良しこよしで団体行動しかできないやつはとくにだめだね。現にそういう人がみんな辞めていってるからね。自分が苦しんで自分で頑張ったぶんだけ結果が出るので、一匹狼の人しかトップに立てない。人に嫌われようが何しようが自分の実力だけを信じるしかないので。お膳立てだけで上がる時代じゃなかったんで。私、世界チャンピオンじゃなかったら何もチャンスもらえなかったと思う。人気のある選手じゃなかったので。実力で、なりゆきで知名度がついただけだということは、人が思ってる以上に自分がわかってる。だからクラッシュに人気が負けたって寂しくもなかったし、妬みもなかった。なぜなら「実力はあなたたちに負けない」って自負してたから。引退を決めたときも体力に自信がなくなったわけでもなく、私が引かないとクラッシュは受けないと、私を抜けないと思った。



98年11月の全女30周年大会では歴代のスターたちが集結。この日、ジャガーはデビル雅美、ライオネス飛鳥と組み、アジャ・コング&ダイナマイト関西&堀田祐美子組と対戦。赤いベルトの歴代王者による6人タッグに出場した。

—引退勧告されてたわけじゃなかった？

ジャガー 全然！ 私が引退決めたのは飛鳥とタイトルやる（85年8月22日）ずっと前なので。会社に持ってったのは。松永に「私、引退そろそろ考えてますけどいつ頃なんでしょうね」って言いにいったら、「貯金あるのか？」って聞かれて「ありません」って言ったら「ばかやろう！ チャンピオン何年やってるんだ。犬小屋も建たないで恥ずかしくて辞めさせられるか。最低300万円貯めろ」って言われて、次の月から30万ずつ貯金して10カ月後に引退したの。

—それは会長？

ジャガー 俊国。そのあいだに飛鳥との防衛戦があった（85年8月22日、日本武道館）。

—やろうと思えばまだいくらでもやれたでしょ？

ジャガー 体力は問題なかったけど、いつかは辞めなきゃいけない世界だから。こんだけ強さをアピールしてきたジャガー横田だから、強いまま辞めることが美学だと思ってたの。「ああ、あのときは強かったね」って言われたくなかった。「負け」の文字はないのでね、私には。

—デビルさんの試合の前にケガしましたよね？（85年12月12日）。

ジャガー あれはガチンコのはずだったからね。だけど前の日に完全脱臼しちゃったの。こんな状態でガチンコやってもしょうがないでしょ？

—試合もケガもガチ！

ジャガー みんなには言ってないだけで、2月の引退は前から決まってたの。だからデビルとの試合で防衛しても引退するし、しなくても引退する。それでタイトルを返上して王座決定戦になった（デビル雅美とダンプ松本が闘い、デビルの勝利）。

—「こんな会社辞めてやる！」ってデビルさんが叫んだ試合もありましたよね（83年9月7日）。

ジャガー 納得いかなかったんでしょう。私にスリーカウント取られたのが。

—ガチだったんですか。

ジャガー そう。そうじゃなきゃ言わないよ。結局ああいうのだって選手たちはえこひいきだと思ったかもしれないしね。たとえば「レフェリーの俊国さんはジャガー派だから」みたいに。私の耳には入ってこないけど。でも、私はデビルがいたから生き延びられた。あの子に負けたくなくて。デビルは後輩だから、ライバル意識を燃やしてるのは私だけで、「自分はそこまで躍起になってない」って言ってるけど、あれだけの引退騒ぎを起こしたってことは、本当はライバル意識があったんだろう

な、と。それなのに「私は普通なのに、躍起になってるのは利美ちゃんだけ」みたいな感じのポーズをとってたから腹立ったこともあったけど。

――ライバル意識というのは、押さえ込みルールでは負けないということ？ それともレスラーの存在感ですか？

ジャガー すべての点で。「押さえ込みが強いからってなんぼのもんなの？」っていう考え方の人もいると思うし。私には実力で勝ち抜いてきたんだという自負があるけど、プロレスはそれだけではない。ショーマンシップで凄い力のある人はプロとして最高だと思うけど、ガチンコは凄い弱くてって人はいっぱいいるので。千種はその一人かもしれない。飛鳥には実力はあるけど、ショーマンとしてはどうか。クラッシュだからよかった。

――補い合えたということですね。クラッシュが出てくるまではお客さんが少なくて、トップとして悩んだ時期もありましたか？

ジャガー 一日一日いい試合をして、今日100人しかいないけど、次は200人にしようという気持ちで毎日試合してました。「試合の内容で客を呼ぼう」と。私はコーチではないから、うしろ姿を見せれば後輩はわかるはずだと思う。全員とは言わなくても。それプラス、クラッシュギャルズというスターができたのが1年後。私だけでもクラッシュだけでもダメだった。プロレスは一人では成り立ってないので、一人で生きてると思うのはそれは間違いかもしれない。そんなふうに思ってる人はどんなスターになった人でもいない。そこまで横柄な選手はいないと思う。

――WWWAのタッグ王者のジャンボ堀と大森ゆかりにクラッシュが挑戦するあたりから、女子プロレスが危ないものになっていったのではないか、という気がするんです。

ジャガー 「男子と女子ではプロレスの魅せ方が違う」と私は思っていて、当時は男子にジュニアはなくて、飛んだり跳ねたりは少なかった。パワーでいった。女子の場合、パワーではどうしても男子に負けるから、女子ならではの柔軟さと美しさ、芸術的美しさを出すべきだと思うんですね。だから、男子のマネをすることはないと思ってたんだけど、私のあとの時代の人間が、男子から取り入れたものを出すようになって、そこから技が増え始めていって、危ないものになった。でも、危ないプロレスになったのは、クラッシュが引退したあとの話ですよ。



自身も格闘技の素養があった松永兄弟。徹底した去る者は追わずの論理や、険悪関係にある選手同士を対戦させるなど、その破天荒な方法で最狂団体を繁栄に導き、そして滅亡に至らしめた。

私はトップとしてのプライドがあったから男子の二番になるのがイヤだった

――クラッシュは危なくなかったんですか？

ジャガー 飛鳥は器用だから、危ないことしない。みんな危ないことしちゃいけないとわかってる。受け身をとらせるようにして落とすのがプロレスの最低限のルールなので、受け身を失敗するのは自分のせいだけど、受け身をできないように落とすというのは落としたほうの失敗。鍛えられるところはいくら強く蹴ってもいいと思う。でもサイドは絶対狙っちゃいけないんだよ、首から上はダメなんだよってルールは私たちの時代はあった。

――ラ・ギャラクティカとの再戦でジャガーさんがジャーマンを使って勝ったじゃないですか。

ジャガー UWAだね（WWWAとのダブルタイトルマッチ）。

――男子プロレスを観ないジャガーさんがジャーマンっていうのは意外だったんですけど。

ジャガー 男子はガイジンはやってたかもしれないけど、日本では私よりあとだよ。身体固いのにジャーマンできるわけないじゃん。まだ頻繁に男子プロレスでやってない時代だもん。私より先ってことは天龍さんとか猪木さんとか藤波さんとか長州さんとかが使わないかぎりは、私より先に使うなんてありえない。

――ジャガーさんのジャーマンを受けた選手はラ・ギャラクティカが初めてだったんですか？

ジャガー 練習してないから。誰も受けてくれないからね（笑）。お互いのタイトルを賭けた試合でジャガー式ジャーマン（フィンガーロックの体勢から相手のうしろに回り、両腕をクロスして投げ、そのままブリッジして固める）をやって。あれなんかヤだよね、もっと受け身とれないから。

――ギャラクティカは受けられるんだから凄いですね。

ジャガー 信頼関係があったので。私より大先輩なんだけど、とても信頼してくれてて。私が引退したあと、千種がどんどん（スープレックスを）取り入れた。まだ私がいるときは謙虚にしてたので。

――ハハハ！ そうなんですか。

ジャガー 私が解説に入るようになってからだよ、だんだんプロレスが変わってきたのは。やっぱ、そこにいない人間は言えないので。私は女子としてトップとしてのプライドがあったので、男子の二番になるのがイヤだったの。女子プロレスが男子に負けてるという意識が世間にも放送にも雑誌にもあった。それが気に入らなかった。私は自分で考えてタイガースープレックスを使ったんですけど「タイガーマスクの技ですね」と言われて以来使わなかったもん。観てないからわからなかっただけで、マネすることはありえないので。

――なるほど。凄いなあ。

ジャガー そういう意識があったから、千種が男子の技を取り入れるのはイヤだったけど、でもいまは私の時代じゃないから、それは文句を言うことはできないな、

千種のよさは他人の技を自分が百年前から使ってるかのように出せること

と。だけど、千種のよさは、たとえ他人の技を使っても、自分なりのオリジナリティをもって出せる子だったの。それが彼女の素晴らしさなのよ。人の使ってたものを百年前から使ってるかのように出せる。

――よくわかります。

ジャガー　たとえば同じことを飛鳥がやったら、借りてきたものをやってるようになっちゃう。それっていうのは本人のセンスだし、プロとしていいことでもある。だからこそ上がっていった部分もあるから、結果的には納得してる。

――なるほど。長与さんは、ガチでは強いレスラーではなかったと本人も認めてますけど、ジャガーさんから見て、長与の天才というのはどこにありましたか？

ジャガー　うーん、自分をアピールするのが上手なんじゃないかな。それは芸能人でもそうだけど、天性のものでしょ。

――天性の表現力。

ジャガー　凄くいい笑顔するので、あれは宝でしょ。みんなあの人の笑顔、リング上との落差の笑顔に魅了されているんだと思う。そういう魅力は私にはないもの。私から見たら中途半端に強い奴は中途半端になるわけ。私にない魅力を持ってる人は認める。

――長与選手は飛鳥選手が光り輝くエリートだったのに対して、いってみればコネ入社の落ちこぼれだったそうですけど。

ジャガー　私は落ちこぼれとは思ってないですよ。空手の練習で汗をかいてるときに、彼女に光を感じたけどね。だからなるべくしてなったスターだと私は思ってるけど。

――長与さんは「みんなに嫌われてた」って言ってましたけど、そうじゃないんですか！

ジャガー　妙に明るくて、それが鼻についた先輩もいたのかもしれないね。私にはそういう意識はなかった。器用じゃないからいつも一生懸命だった。ケガもしたし。なんとか性湿疹とかで肌がボロボロになって、うつる病気じゃないんだけど、肌を見せる仕事だから「プロレス休め」って言われて休まされたりとかしても、一生懸命に薬とか、漢方薬とか取り入れて頑張ってた。そういうことをギャグでからかった先輩がいたから、いじめられたっていう印象があるのかもしれないけど。あと、元気すぎるから「なんだあいつ」って鼻についた人もなかにはいたかもしれない。あとは千種のなかでそう思ってるんじゃないかな。



じゃがー・よこた■1961年7月25日、東京都出身。77年6月、高橋真由美戦でデビュー。81年2月にジャッキー佐藤を下し、第29第WWWA世界シングル王座を戴冠。女子プロ界一のストロングスタイルと呼ばれたファイトで、数々の名勝負を残す。現在はタレントとしてもさまざまなメディアで活躍中。

ジャガー横田

――飛鳥選手は身体的に恵まれてますけど、神経質とも聞きます。

ジャガー　神経が細かいので、痒いところに手が届くから、いい言い方すれば気ぃ使いしぃだからね。「疲れんだろ、そこまで気ぃ使ったら」って。なんでもソツなくこなすね。いやな気分を与えることがない。

――まったくです。

ジャガー　マスコミであの人を嫌ってる人はいないでしょ。若いときから礼儀も応対もちゃんとしてるからね。「チッキショー」と思ってても口に出さないのが利口なんだよね。

――ジャガーさんは飛鳥さんのことをかわいがってらっしゃいましたが、誰に聞いても「クラッシュ以前のライオネス飛鳥は強いけどつまらないレスラーだった」って言います。ジャガーさんから見た飛鳥さんはどんなレスラーですか？

ジャガー　つまらないレスラーというより、器用でなんでもそつなくこなして体力もある、恵まれた身体を持っている。完璧すぎるからおもしろくないんだと思う。

――ジャッキーさんも同じタイプですか？

ジャガー　ジャッキーさんはもっと不器用。受けがうまくないです、いまから思えば。だからアザだらけだったと思う。新人のときは。

――受けるのも飛鳥は器用なんですね。

ジャガー　受けもしっかりしてたし、攻撃も力もあるし。器用だから、技も完璧。だけど機械がやってるようでおもしろくない、と。ちょっと違うタイプだけど、KAORUにもそういう部分があった。だけど、自分ではどうすることもできない。あとは性格が試合に出るので。完璧なものが、おもしろみがないと見えちゃうのかな、きれいすぎて。不器用な人から見ればうらやましいかぎりなんだよ。きれいにやろうと全員が思ってるんだから。だけど彼女たちは器用すぎてつまらないと言われる。二人とも悪役になって初めて、自分の良さを発揮したと思う。

――広田さくらが書いてたんですけど、ジャガーさんが首をかしげて相手を見るのは、じつはモノが二重に見えない角度のためだったそうじゃないですか。

ジャガー　首が曲がってるわけじゃなくて、曲げないと見えないからね。

――それって、さんざん頭を打ったからじゃないですか。試合中に亡くなったレスラーもいます。ご家族もいらっしゃるし、怖くないんですか？

ジャガー　辞めちゃったほうが老いが早くなるような気がする。私は今年50歳だけど、一日2回の柔軟は欠かしてない。まだ観てくれる人が多少でもいてくれることが自分の元気になるので。あとは私の年代の人々に、「やる気さえあればなんでもできるんだよ」ってところを見せたい。私には画面に映るチャンスがあるので、ついでと言ったら申し訳ないんだけど、女子プロレスをちょっとでも出してもらえれば、それをきっかけに興味を持ってもらえればいいなって。そういう部分でしか貢献ができない。

――そういう意識なんですね。

ジャガー　女子プロがゼロになってしまったら、私たちの過去はすべてなくなってしまう。だからこそ、つなぎとめないといけない。だから「私にはいま名前しかないけれど、いまもプロレスがあるんだよ」ということをアピールしているつもりなんです。

【11年2月24日／都内・某所にて収録】

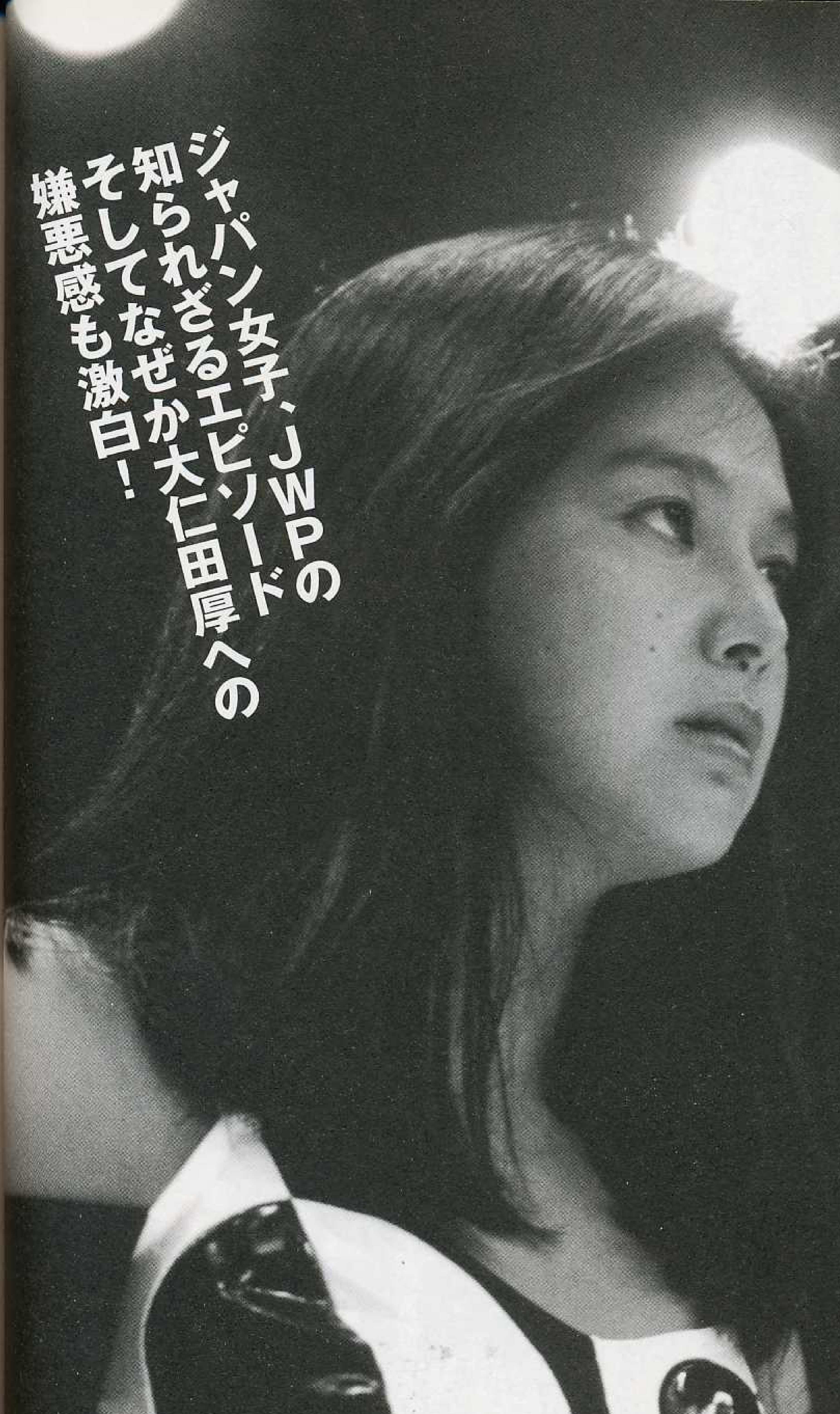
——今日は非常に懐かしいといいま

ど、まだクラッシュギャルズの人気

キューティー その後、親は「高校だ

ました（笑）。

た友だちも受かっちゃったんです。



アイドルレスラーの栄光と苦悩

ジャパン女子、JWPの知られざるエピソード そしてなぜか大仁田厚への嫌悪感も激白！

キューティー鈴木

女子プロ特集、続いては、ご本人も「ほとんど語ったことがないかも」というほど貴重なキューティー鈴木のプロレスラー時代のインタビューだ。ジャパン女子一期生として入門し、アイドルレスラーとしても人気を博したキューティーが送ってきたレスラー人生とは？　表面からではわからない栄光と苦悩を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

身長が伸びる薬だとかを信じて お年玉で買ったりしてました

―今日は非常に懐かしいといいますか、ジャパン女子時代のことからじっくりとお話をおうかがいしたいと思います。

キューティー　ジャパン女子かあ……。ホント、懐かしいですね。

―さっそくですが、キューティーさんはもともとプロレスはお好きだったんですか？

キューティー　ええ、女子プロファンでした。それこそビューティ・ペアの時代から女子プロは好きだったんですけど、本格的に好きになったのは大森ゆかりさんからですね。

―大森ゆかりさん！

キューティー　私、大森さんの大ファンだったんです。それで、よくありましたよね。近くの駐車場に女子プロが来るみたいな。そんな感じで家の近所で試合があったので友だちと観に行って、そこで女子プロを初めて生で観たんですけど、もう「これしかない！」って。

―早いですね！

キューティー　当時はちょうど中学3年生だったので、「高校行かないでプロレスラーになりたい!!」って親に言ったんですよね。

―中学生らしい思い込みの激しさ。

キューティー　バカですよねえ。やっぱりバカしかなれない、みたいな（笑）。でも迷いはなかったんです。ただ、私が試合会場に行ってたときはお客さんはそこそこ入ってましたけど、まだクラッシュギャルズの人気がワーッとなる時期ではなかったんですね。歌もジャガーさんとかデビルさんが歌ってた時代というか。

―ジャガーさんが『愛のジャガー』を歌ったり、デビルさんが演歌を歌ってた時代（笑）。

キューティー　でも、その1ヵ月半後とか2ヵ月後はもう凄かったんですよ。だからホントにクラッシュがタッグを結成して爆発するちょっと前にのめり込んだんだと思います。

―となると、タイミングがよかったということになるんですか？

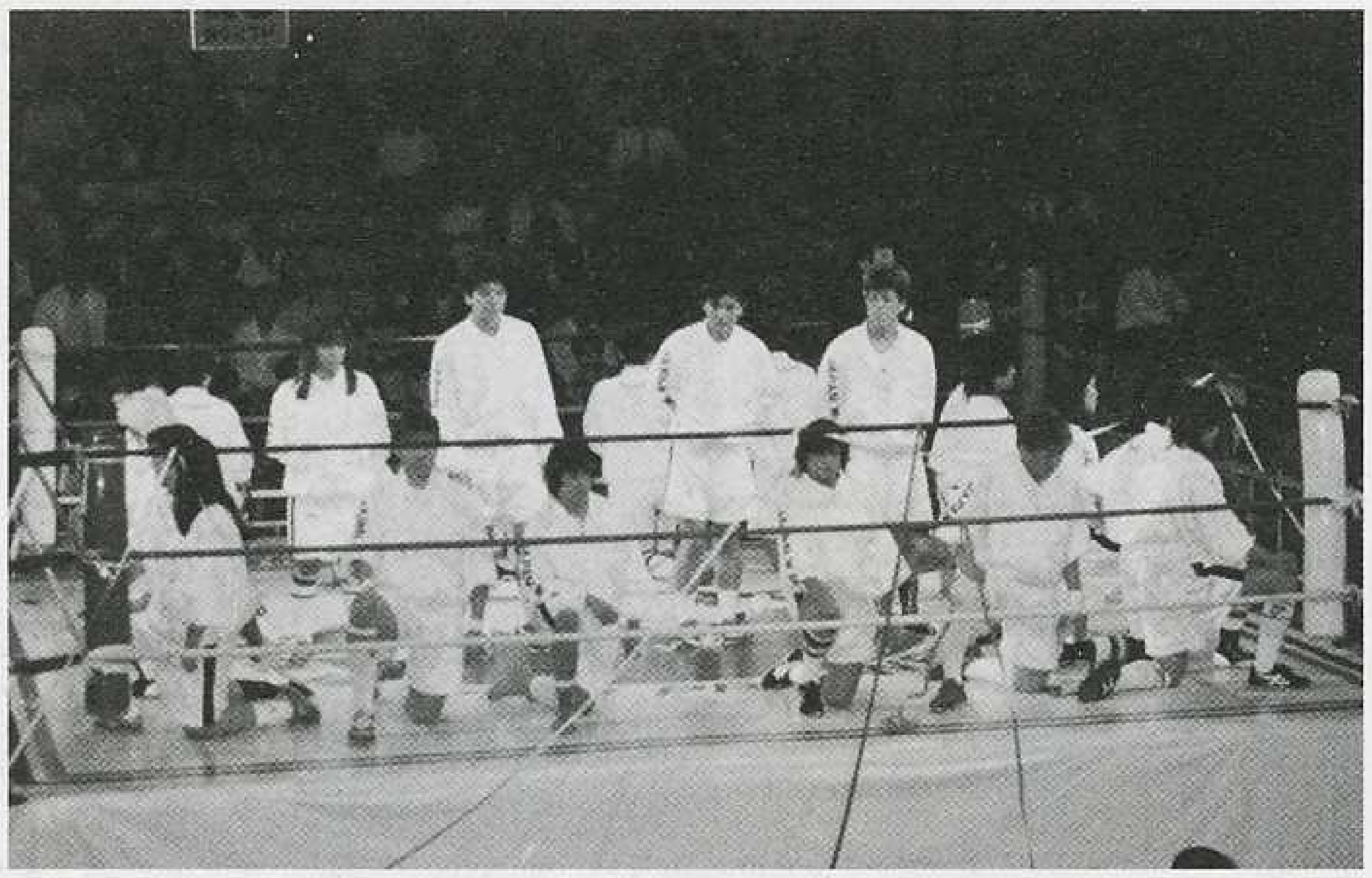
キューティー　いやー、よかったのか悪かったのか。私、中3のときに全女のオーディションを受けたんですよ。でもそのときは凄く少なくて「あ、こんなもんか。もしかしたら合格するかも」と思ったんです。で、そのとき落ちたんで1年後にまた受けようと思ってたら、今度はもう何千人っているから凄いビックリしちゃって。「こんなはずじゃなかったのに……」みたいな。

―その年代の女子はみんな魔法をかけられてたようなもんですよね。

キューティー　その後、親は「高校だけは行け」というので普通に高校を受験して。

―高校ではプロレスラーになるためのスポーツは何かやってたんですか？

キューティー　それでいうと、同じクラスにたまたま全女のオーディションを受けてた人がいたんですよ。だからその子と「どうやったらプロレスラーになれるか考えよう」って話し合ってるうちに、やっぱり女子プロは受け身だ、と。それで柔道を習おうということで二人で柔道を習いに行きましたね。あとはやっぱり通信販売とかで身長が伸びる薬だとかいろいろ売ってたじゃないですか。それを信じて、お年玉で買ったりしてました（笑）。



1986年に後楽園ホールで旗揚げしたジャパン女子プロレス。ジャッキー佐藤やナンシー久美、神取忍らをトップに据え、あとは全員新人という図式で旗揚げされた。キューティーを含め、ジャパン女子を代表するダイナマイト関西や尾崎魔弓らも86年デビューの一期生である。

―当時、よく載ってたインチキ広告にひっかかりましたか（笑）。それで結局、全女のオーディションって何回ぐらい受けたんですか？

キューティー　中3のときに受けて、高1のときは書類で落ちちゃったので、とりあえず1年に1回しかないからまた来年受けるしかないなあと思ってたんですけど、そしたら友だちが「新しく女子プロレス団体ができるらしいよ」って本を見せてくれて、それがジャパンのことだったんです。で、全女のオーディションは1月ぐらいだったんですけど、ジャパンのオーディションは2月か3月だったので「そっちを受けよう」ってことで。

―ちゃんと滑り止めがあった、と。

キューティー　そしらたまたま受かったのですぐ高校を辞めました（アッサリ）。

―また決断が早い（笑）。

キューティー　だって、いま受かったんだったらいま行かないと、来年は取ってもらえないんじゃないかと思ってましたから。でも、親はまさか受かると思ってなかったみたいでおどおどしちゃってて。ただ、なぜか校長先生は凄く応援してるっぽい感じだったんですよ。

―なぜ、校長先生が（笑）。

キューティー　それが、同じ高校の高3の人もジャパンに受かってたんですよ。だから「べつに怪しいところじゃないんだな」って勝手に思ったのかなって。それで、その半年後に練習生のオーディションがあったんですけど、私が高校のときに仲良くしてた友だちも受かっちゃったんです。だから、私の周りでは「けっこう簡単になれるんだ」って思ってたと思うんですよね（苦笑）。

―では、プロレスラーになれるんだったら全女じゃなくてもよかったんですね。

キューティー　基本はやっぱり全女に行きたかったと思うんですけど、とにかくプロレスラーになりたいって頭しかなかったので。

―入ってみていかがでしたか？

キューティー　いやー……とりあえず夢はなくなりましたねえ（笑）。

―ダハハハ！　いきなりですか。

キューティー　練習もきついし、勝手に想像してた練習生のイメージとは……。私は「練習はつらいけど、みんなで頑張ろう！」みたいに明るい感じを想像してたんですけど、やっぱり全国あちこちから歳も違う人が集まってるから何が普通かもわからなくなってくるし、練習でみんなストレス溜まってきてるからギスギスしてるし。

―友情に支えられたスポ根的な感じとは違ったんですね。

キューティー　全然です。やっぱりそこは個人の種目ですし。それに先輩のジャッキー（佐藤）さんとかナンシー（久美）さんとか神取（忍）さんとかもやっぱりイライラしてくるだろうから、そういうのにもビクビクしながらやってて。だから凄く息苦しかったんですよね。

―皆さん、ずっと合宿所生活だったんですよね？

キューティー　はい。夢見てたのは本当に楽しい修学旅行みたいな感じ

だったんですけど、お風呂は誰が一番に入るとか、そういう小さいことから揉めるし、私、料理なんかしたことがなかったんですけど、当番制だからやらないといけなくて。でも何もできないから怒られるし……。そういう感じでとにかく毎日毎日練習行って、ごはん食べて寝るという生活だったので、辞めたいという気持ちを起こす間もない感じでした。そんななかでもどんどん人が辞めていくのを見て「私もいつか辞めていくのかなあ……」みたいに思ってましたけど。

——「自分には女子プロしかない」という強い思いでオーディションをくぐり抜けた人なのに、辞めていくわけですからね。

キューティー　やっぱりみんなが抱いてた夢とはかけ離れたものになりますからね。本当に夢と現実は違うんだなあって。だからケンカとかもあったし、気が強い人の集まりだから。ホントに「ああ、早く明日になればいいなあ」と思ってましたね。よく「何歳ぐらいに戻りたい？」とかって聞かれることがありますけど、年齢的には18歳ぐらいかなあと思っても、よく考えると「あ、やっぱりつらかったからダメダメダメ」みたいな（笑）。

——一番の暗黒時代（笑）。新人時代、誰が怖かったですか？

キューティー　怖かったというのは神取さんがやっぱり怖かったですよね。あとジャッキーさんもやっぱり怖かったです。やさしいときは凄くやさしいんですけど、もう存在が怖いというか。いるだけで怖いんですよ。それにイライラしているときなんかも雰囲気でわかるから、そういうときは近づかないようにしてましたね。

——でも端から見ると、新しい資本が入り、芸能界へのパイプもあるというらやましい環境にあったと思うんですけど。

キューティー　そんな実感はなかったです。とくに私は落ちこぼれだったので、デビューも旗揚げ戦にしてないですし、問題外というか。しょっちゅう「辞めちまえ！」とか「帰れ！」とか言われてましたし、会社からすれば「できれば辞めてほしいな」って感じだったと思うんですよ。でもクビにする理由もとくにないし。だからそういう華やかな部分というのは私とはいっさい関係のないところで行なわれているような感じで、デビューする人たちを見ては「いいなあ〜」という感じでしたね。

キューティー鈴木


キューティー鈴木といえば、そのかわいらしいルックスから一般週刊誌にも多く取り上げられたが、載っているのは写真のような苦悶の表情がほとんど。しかし、本人も割りきって必死に闘っていたというからプロである。

——たしか、キューティーさんってあの後楽園の旗揚げ戦に間に合ってなかったんですね。

キューティー　そうなんですよ。だから、みんな一期生で同期なんですけど、旗揚げ戦に出るような人たちは同じ同期でもジャッキーさんたちは同じように扱ってないというか。「おまえたちはできないんだから食事でも作っとけ」じゃないですけど、できる人から教えていくというような感じだったんですよ。だからもう当時は雑用ばっかりでしたね。子どもながらに「やっぱりできないとダメなんだ」って思いました。できる子を先に教えていこうという世界を見て、「あ、これは大人の世界なんだなあ」って思いましたね。

——そういう状況で夜逃げを試みたことはなかったですか？

キューティー　いまさら家には帰れないって思ってましたから。だからとりあえずデビューしてプロレスラーとして闘ったというかたちだけはなんとか残したいなって。でも、一度だけ練習がつらくて実家に電話したことはあったんですよね。

——お母さんも心配でしょうね。娘からそんな電話がかかってきたら。

キューティー　私、寮に入って電話とかほとんどしなかったんです。いまみたいにケータイもないし、寮の電話って公衆電話だったんですけど、何かあったら会社からその公衆電話にかかってくるようになってて、長電話してると「いま誰が電話使ってたんだ！」って怒られるからあまり使えないんですよね。それに、外の公衆電話はけっこうみんなが使ってるからどこもいっぱいだったので。だからホントに困ったときしか電話しなかったんで、親はビックリしたんじゃないかなと思います。

——ほぼ、収容されてた状態ですね。

キューティー　ええ。遠くてなかなか帰れない人もいるからってことで、実家に帰るのも禁止されてましたし。だから寮にいても息苦しいんですけど、お金があるわけじゃないから遊びに行けるわけでもないし、「どうしようか……」みたいな感じだった記憶がありますね。

——そういうふうにして精神的にプロレスラーに改造されていくんですねぇ。

キューティー　やっぱり精神的にどっかで強くなっていったのかなあって思います。だから最後は意地で寮にいたような気がしますね。

——ちなみにプロレスラーになってからもやっぱり大森ゆかりさんを目指してたんですか？　かなりタイプが違いますけど……（笑）。

キューティー　それを知ったのはプロレスラーになってからだったんですよ（笑）。それまでは勝手に「大森さんみたいになるんだ！」って思ってたんですよね。でも、練習してスパーリングをするようになってから「あれ？」って。気づくのが遅すぎたんだみたいな感じなんですけどねえ。

——キューティーさんと〝女・力道山〟じゃ、イメージが違いすぎますよ（笑）。それで〝キューティー〟というリングネームはいつついたんですか？

キューティー　デビューするちょっと前だったと思うんですけど、最初

小鉄さんにはプロレスのことも人間的なことも凄く教わりました

「キューティー鈴木」って聞いたときに「えー！」と思ったんです。でもその次に「アップル鈴木」って言われて、もっと「えー‼」と思って。

―まだ「キューティー」のほうがいい（笑）。

キューティー　というか、呼ばれていくうちに「もうどっちでもいいや」って思いましたけど。

―あれは秋元康さんが名づけ親なんですよね。いま思うと、けっこう適当なつけ方だったのかと思ってしまうというか。

キューティー　適当ではないんでしょうけど、写真を持っていったら全部を5分ぐらいで名づけたみたいで、ポンポンポンポンみたいな。だから本人もどうやってつけたのか覚えてないと思いますよ。でもどんな名前でも「いやだ」とかそういうことを言える立場ではないので、いただいたものを素直にありがたくという感じでした。

―ところで、全女では新人の頃は試合も押さえ込み方式のシュートでやらせる伝統がありましたけど、ジャパンはどうだったんですか？

キューティー　試合はいまと変わらないです。全女とは全然違いますね。

―方針としては、全女出身のジャッキーさんがトップでも違ったんですね。

キューティー　コーチ役としてジャッキーさんからも教わりましたけど、あと（山本）小鉄さんからも教えてもらうようになったので、組み方一つ全女と逆なんですよ。

―全女は男子プロレスとは、基本的に違うんですよね。

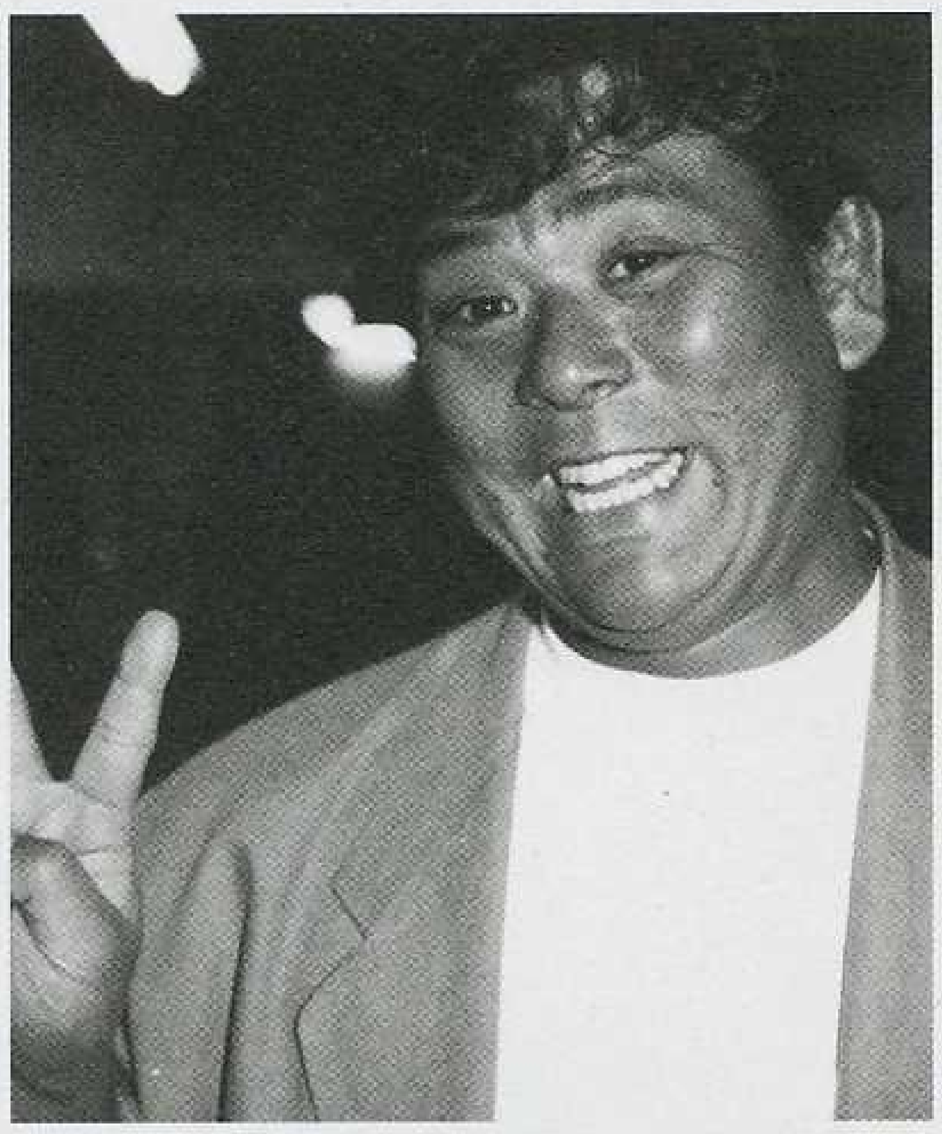
キューティー　だから全女との対抗戦のときは気持ち悪い感じでしたね。それにデビル（雅美）さんが途中でジャパンに来たときに、「ボディスラムの上げ方がおかしいよ」って言うんですけど、私たちにとっては「デビルさんがおかしいのに……」って思ったり。もちろんそんなことは言えないですけど。

―指導してくれた小鉄さんはいかがでした？

キューティー　小鉄さんは凄くハッキリしてました。練習が始まるといきなり怖くなって、練習が終わるといきなりやさしくなるというか。でもこっちは怒られたまんまで機嫌が悪いから、練習が終わっても「むかついてるんですけど、私！」みたいな（笑）。ある程度年を取ってから練習中の怖さも受け止められるようになったんですけど、若い頃はやっぱり怖かったです。

―伝説の鬼軍曹ですからね。

キューティー　お誕生会とかやると小鉄さんはニコニコなんだけど、私たちは練習での厳しいイメージがあるから、どう接していいのかわからないみたいな。でも、女子を教えるということに対して小鉄さんも戸惑ったと思います。どのくらいの力で技を出していいのかもわからなかったと思うし。ただ小鉄さんからはプロレスのことも教わりましたけど、人間的なことを凄く教わったなと思いました。練習が終わるとみんなで手を握って「思いやりを持つ人になれよ」とか言ってくださってましたから。



今回のインタビューで、ジャパン女子の多くのレスラーに煙たく思われていたことが発覚した大仁田さん。キューティーのインタビューを読むと、このピースサインの写真が悲しく映る。

―仲間内で殴り合いをする世界ですからね。そうしないと成り立たないというのが小鉄さんのなかにあったんでしょうね。

キューティー　きっとそうですね。あまりいい雰囲気じゃないときもありましたけど、そういうときは小鉄さんがあいだに入って仲をとりもとうとしてくれてたんだなあというのはよくありました。

―ちなみに、ジャパンってもともとプロレスラーだったのはジャッキーさんとナンシーさんだけだったんですか？

キューティー　そうです。だから神取さんを除くと、あとは全員新人で。そういう方々からすると「なんでできないんだよ！」って思ってたと思いますね。旗揚げの日が決まってたから、最初の頃は皆さんやさしく教えてくれてましたけど、旗揚げが近づいてくると「間に合わない」というのが頭にあるから、すっごいイライラしてたと思いますよ。で、へんな話、リングインの仕方の練習もしてたし、コールされたときにどうするかとかも練習してましたから。

―ああ、そうだったんですね。

キューティー　新人だったら名前を呼ばれても礼をしておけばいいけど、全員が新人なんで全員が礼するわけにもいかないですし。だから、上の人は凄く焦ってたと思います。

―でも、そうやって苦労して旗揚げしたのに、1年でもう神取さんとジャッキーさんに決定的な亀裂が入って、〝あんな試合〟になって……。

キューティー　1年後ぐらいでしたっけ？　なんか試合の前ぐらいからちょっとギスギスしてるなあというのはあったんですけど、特別な理由を知るわけでもないですし、聞くわけにもいかないですし……。でもあの試合はいまでもよく覚えてますよ。セコンドについて試合を観てましたから。なんだか悲しくなってきましたよね……。

―……。

キューティー　何があってこうなっちゃったんだろうって。ホントによくわからないし、ひたすら「なんで？」って。それからかな、神取さんがリングに上がらなくなってしまって。で、ジャッキーさんは凄い顔を腫らしてマスクをして試合会場に来て欠場の挨拶だけをしてたんですよね。その姿を見ていいのかも戸惑いながら。

―ジャッキーさんって、あのあとちゃんと会場で欠場の挨拶をされたんですね。

キューティー　してました。だけど、私たちは挨拶していいのかもちょっと戸惑いながら、とにかく悲しくて涙が止まらなかったですね。でもレフェリーがたしか（グラン）浜田さんだったと思うんですけど、止めることもなく進めるので「こういうものなのかな……」と思ったりもして。

―浜田さんはそういう予兆というのはわかってたんですかね。

キューティー　ああいう試合になるかどうかはわからなかったですけど、なんとなくぎこちないなというのはわかってたんじゃないですか？　でも、試合を観ているときはそうでもなかったんですけど、ジャッキーさんの腫れてる顔とかみると凄く痛々しいというか。見ちゃいけないものを見たというような感じになってましたね。

―旗揚げ1年ですでにたいへんなことになってたんですね。

キューティー　なんか凄くめちゃめちゃでしたよ。巡業に行っても泊まるホテルがないとかもあったし。

―えー！　そうなんですか⁉

キューティー　売店のものを売らないと食事代も出ないってときも多々あって、「買ってください！」ってほぼ押し売り状態で必死に売ってましたよ。もう売りに売りまくって「食事

代だけ確保しました！」みたいな。

――日々、食べることも困難な生活ですか。

キューティー　巡業もいまより試合数が多かったじゃないですか。だけど全然お客さんが入らない。そうなると現金がない、現金を作るには売店のものを売るしかないってことで。買う人からすると「かわいそうだなあ、この子たち」って目で見られてたでしょうね。

――でも、いきなりそこまでの金欠状態だったんですね。

キューティー　私もよくわからないから、そのときは「そういうもんなんだ」って思ってたんですよね。だから、このままで大丈夫なのかなあというのがあったし、しょちゅう「潰れる、潰れる」とは言われてましたからね。

――「潰れる、潰れる」というのはいつぐらいからですか？

キューティー　う〜ん、2年目ぐらいからずっと噂はありましたし、次々に社長さんが替わってましたから。いま思えばおかしいけど、そのときは「こういうもんなんだ。大変だなあ」と思いながら「お金持ってる方が来てくださったらいいな」とか思ってた感じなんで。だから当時はただ単に自分の好きなプロレスをやってる、団体があるからまた明日もプロレスができるって、そういう感じでした。

――それでジャパンのお客は増えないけど、キューティーさん自身は芸能活動がどんどん増えたじゃないですか。

キューティー　それも急に増えたので、何がなんだかわからないというか。それも社長が新しくなっていきなり「ビデオを撮りに行くぞ」みたいな感じだったんですよね。で、場所がフィリピンだったので、「私、大丈夫かなあ」って一瞬思ったんですけど。

――「大丈夫かなあ」というのは？

キューティー　売られちゃうんじゃないかなって（笑）。

――ダハハハハ！　たしか『ジャンピング in エルニド』ってビデオですよね？

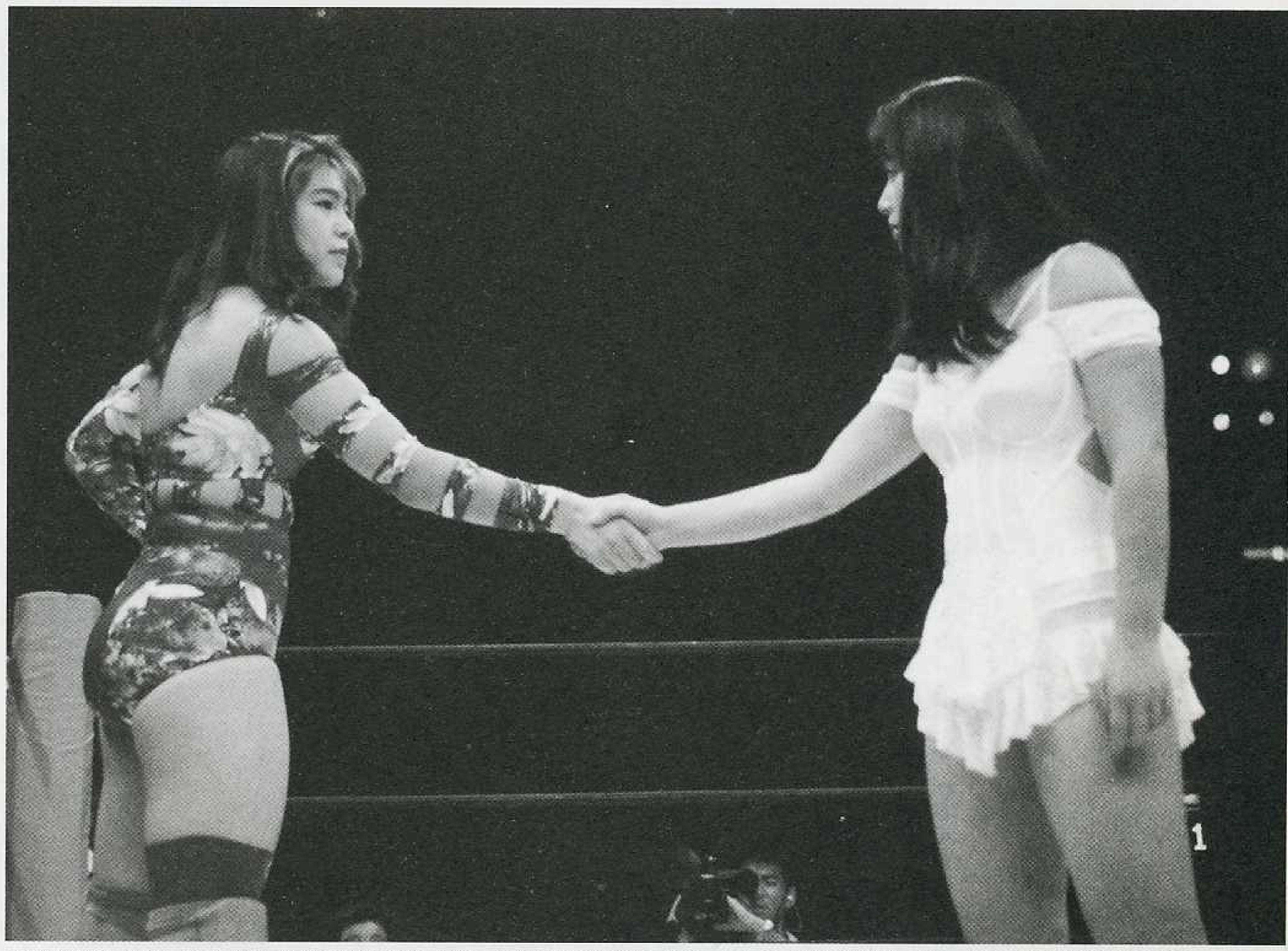
キューティー　そうです。フィリピンのエルニド島って、凄くきれいな島なんですけど、私、フィリピンにそんなところがあるって知らなくて。

――たしか、コーチをやってた大仁田さんと一緒に行ったんですよね？

キューティー　も〜、そうなんですよお!!　あの人が来るなんて言うからよけいに怪しいなと思っちゃって。私、あの人に犯されるんじゃないかと思いましたから。

――ダハハハハ！

キューティー　そもそもなんであの人がジャパンにいるかもわからなかったんですよね。たぶん会社からも説明がなかったと思うんですけど、いきなり道場に来て威張りチラしてるし、男子プロレスが好きな人が少なかったので、みんなぶっちゃけ誰なのかもわかってなかったんですよ。



対抗戦時代に実現した全女所属の井上貴子との一戦は、お互いにアイドルレスラーとして、また純粋にレスラーとしての意地と意地がぶつかり合う壮絶な試合に。キューティーによると「当時の貴さんはどんどんきれいになっていった」というから、井上貴子のプロ魂も素晴らしい。

――FMW旗揚げ前ですからね（笑）。

キューティー　でも浜田さんとはしゃべってるし、身体もデカイから「たぶんプロレスラーなんだろうな」という感じはしたんですけど。だから大仁田さんはジャパンに来たことを後悔してると思いますよ。たぶん誰も言うこと聞いてなかったんじゃないのかなあ。

――しかも、いままで小鉄さんに習ってたのは新日本プロレスの流儀ですけど、大仁田さんは全日本プロレスですもんね。

キューティー　そっか。それに小鉄さんは教えるときは自分の身体を張って教えてくれてたんですよね。でも、大仁田さんは腰が悪かったからかもしれないですけど、口だけだったから「何この人、ちゃんこ食べに来たのかな」って、もう大キライでした。

――ダハハハハ！

キューティー　だって、フィリピンに一緒に行ったときも一人だけ浮かれてるんですよお！　監督さんも「大仁田さんも出ますか？」なんか言ってるから、「誰のビデオによ！」って思ってましたけど。

――自分のビデオに大仁田が出るなんて許せない（笑）。たしか、ビーチで大仁田さんに特訓を受ける映像があるんですよね。

キューティー　も〜、ホント。で、これが女の怖いところだなと思ったのが、本当に言うこと聞かないんですよね。大仁田さんも手をあげたかっただろうけど女の子だから手をあげられないし、ホントにいい思い出はないと思いますよ。

――それこそフィリピンに行ったことぐらいかもしれないですね（笑）。

キューティー　決定的にキライになったのは、九州でのことだったと思うんですけど、あれは大仁田さんのお父さんがプロモーターだったときのことなんですけど、あんまりお客さんの入りがよくなかったんですね。で、試合後、リングを片づけてたら、お父さんと大仁田さんがケンカしだして、「テメエ、このやろう」みたいな感じでやってるんですよ。

――それは非常に大仁田さんらしいエピソードです（笑）。

キューティー　もう、お客さんも選手もいっぱいいるなかでやってるから凄く恥ずかしいし、そのときに「ホントやだな、この団体」って思いました。

――そう考えると、ジャパンってよくあれだけ続きましたよね。

キューティー　やっぱり景気がよかったんでしょうね。私、バブルは経験してないつもりだったんですけど、あれだけメチャクチャで、お客さんも入らなかったのに続けられたってことは景気がよかったからだなあって思います。

――社長がよく替わってたってのは、要はそうやってお金を持ってる人が次から次へと現われたってことですもんね。

キューティー　みんな儲かるんじゃないかと思って首を突っ込んでたん

「やっかみなんか、ない」って当時の人たちは言うでしょうけど

キューティー鈴木

でしょうねえ。

――キューティーさんも凄く有名でしたもんね。でも女の世界ですから、一人だけ有名になると、やっかみもあったんじゃないですか？

キューティー　当時の人たちに聞いたら「やっかみなんか、ない」って言うでしょうけど、私は一番心から辞めたいなと思ったのはそのときでしたね。練習に行ってもなんか……違うというか。試合会場に行っても「コソコソコソ」みたいな。でもまあしょうがないですよね。いいのか悪いのか、ちょうど忙しかったので私も試合ギリギリに入って、試合が終わったらすぐに次の仕事に行ってたりしてほかの選手と話をする機会もなかったんですよ。まあ、やっかみと言っていいかはわからないですけど、私自身はそう思ってました。でも、逆でもそうなっただろうなと思います。誰かほかの人が一人飛び抜けても自分はそうしたかもしれないし。

――試合中に嫌がらせがあったりもしたんですか？

キューティー　それが微妙にわからないようにというんですか（笑）。髪の毛を引っぱられてても、やたらと「痛いなあ」みたいな。まあでも、そうされればお客さんも喜ぶし、私が我慢すればいいんだって思ってました。

――そういう意味では、当時はオヤジ系の週刊誌とかにバンバン出てたのが、キューティーのやられっぷりとか痛がる表情とかで、わざとクローズアップされてましたよね。

キューティー　自分では意識したことはなかったんですけどねえ。でもそういうのがいいと言われると、会社側もそういう相手と組ませたりするんですよね。後楽園とかのカードになると「今日もか……」って。

――キューティーさんがいたぶられる姿を見せるためのカードというか。

キューティー　対戦相手もおもしろくないと思うんですよ。なんで引き立て役で対戦しなくちゃいけないんだと思うだろうし。ただ、それでも芸能活動よりそっちのほうがプロレスラーだなって感じはしましたね。やっぱり『週プロ』や『ゴング』で自分のプロレスの記事を取り上げてもらえるのがうれしかったですし、表紙になるのはもう夢じゃないですけど、やっぱり別格でしたから。

――でも、一般紙だとグラビアでカラーでバーンと載せてもらえたんじゃないですか？

キューティー　ぶっちゃけグラビアだとお金ももらえるんですけど、それでも『週プロ』で2ページ載ったりすると自分で買っちゃったりとかもしましたし。

――それだけ〝プロレスラー〟という意識が強かったんですね。そんななか、紆余曲折ありながらもジャパンがついに終わるじゃないですか。

キューティー　そのときは……というか、そのときも「この日が終わりだ」って言われてたんですよ。だから半分「またか」というのと、半分「今度は本当らしいよ」ってのがあったんですけど、あまりピントこなくて。ただ一度試合が終わったあとにテレビ局で仕事があったんですけど、その仕事が終わって帰ろうとしたら記者5～6人ぐらいに囲まれて「これからどうするんですか？」みたいなのがあったんですね。そのときに自分がプロレスをする団体をなくしたんだなって凄く実感しましたね。

――ついにきたか、と。

キューティー　でも、まだ芸能の仕事がいくつかあったので、会社の人からはその仕事が終わるまではプロレスをやるともやらないとも言わないでくれってことだったんですけど。でも不安は不安でした。ただ、私のなかでは「もういいかな」と思ってた部分もあったんですよね。

――いい区切りだな、と？

キューティー　学校にでも行き直して普通の生活をするのにいまからでも遅くないって。まだ歳も若かったですからね。それに、学生時代の友だちの話を聞いてても「彼氏と旅行に行った」「みんなで海に行った」とかじゃないですか。ホントにうらやましいなと思ってたので、そういうのもいいなあって。

――キューティーさんは、そういう青春をまったく送ってないわけですもんね。でも、もう一回プロレスを続けようと思ったのは？

キューティー　その何日後に選手全員事務所に呼ばれたんです。それで「新しく団体を起こそうと思うけど、やる人？　やらない人？」って。結果的に、やる人と言ったのがJWPに行って、やらない人がLLPWを立ち上げることになったんですけど。

――そうだったんですか。

キューティー　そのときは、残った人数を見て「これだけで本当にやれるのかなあ」とは思いましたよ。またイチからああいうつらい思いをするのかなあって。で、そのとき私だけボーッとしてたんですけど、その「やらない」人たちが急に立ち上がって出ていったんです。何が起こってるかわからなくて、尾崎（魔弓）に「何？」って聞いたら「おまえは座ってればいいんだよ」って言われたんですけど、そのときになんとなく「あ、あの人たちは新しく団体を立ち上げるんだなあ」って思ったんです。確信もなかったんですけど、みんな自分の人生だし、そこで運命が分かれたというか。

――そのLLPWを立ち上げた風間（ルミ）さんは、「やらない」んじゃなくて、先に自分の一派みたいな人に声をかけていたらしいですね。

キューティー　だけど誰も本当のところはわからないし。風間さんに今度聞いてみようかな。フフフ……。でも前々からそうやって風間さんが動いてるのはなんとなく感じてたんですよ。でも私には声がかからなかったから「あ、私は関係ないんだな」と思って。

――商売で考えたら一番ビッグネームのキューティーさんを誘うのが当然なんでしょうけど、そこが女の違う部分なんですかね。

キューティー　なんで誘われなかったのかなあ、ショックだなあ（苦笑）。

――風間さんも元祖アイドルレスラーとしてライバル心を燃やしてたのかもしれない（笑）。

キューティー　でも、そこで別れたときに寂しいという気持ちはなかったですね。やるんだったら今度はおもいっきりやりたいと思ったし、今度は会社に意見を言えるぐらい大人になったので、下の子たちもどんどん伸ばして、LLにも全女にも絶対に負けたくないって思ってました。

――そういう意味ではJWPって対抗戦が始まる前もお客さんがちゃんとついてましたよね。

キューティー　それにJWPになってからの合宿なんかは、前と同じようにキツい練習してたんですけど、目標があるというか負けたくないと思ってたので一致団結してました。泊まり込みで話し合いとかも凄くしたし、あれはよかったなって。

――初めてそういう前向きな雰囲気になった、と。

キューティー　人数が少ないぶん、みんな「私が頑張らなきゃ団体がダメになる」って思ってたんで、私も「やれればいいや」じゃなくて「やんなきゃいけないんだ」みたいになってました。

――それで全女との対抗戦ってJWPが動き始めて1年ぐらいでしたっけ？

キューティー　そうですね。セコンドについててもこんなに心から応援したことないなってぐらい凄いムキになっちゃって！　全女の人たちはやっぱり「ジャパンあがりのJWPなんて……」って頭があったと思うから。でも尾崎と（ダイナマイト）関西がやってくれたのでホントにうれ

キューティー鈴木

全女の人たちを見てたら私たちがのほほんとしてたのかと思うくらい

しくて。やれば絶対に負けないなとは思ってましたけど。身体の大きさでは負けてても、尾崎は気の強さがありますからね。

――ご自身が全女とやるとなったときにどう思いました？

キューティー　私自身はそんなに対抗戦に興味がなかったんですけど、やり始めたら「次はあの選手とやってみたいな」という思いが湧いてきたというか。本当は私はまだJWPのなかで揉まれたかったんですけどね。

――でも、対抗戦が始まってからキューティーさんのプロレスラーとしての評価は凄く上がりました。

キューティー　あ、ホントですか？（うれしそうに）。

――イメージ的には「キューティー鈴木はみんな知ってるけど、試合は観たことない」というか。知ってることと言えば「苦悶の表情を浮かべるレスラー」ぐらいで、きっと「弱い人なんだろうな」という感じだったと思うんですけど、でも実際キューティーさんってむちゃくちゃ打たれ強いですよね。

キューティー　いやー、打たれ強いかどうかはわからないですけど、私、ケガしなかったんですよね。私自身はちっちゃいから、同じぐらいの体格の人とやるほうがやりやすいと思うんですけど、それでもデビルさんとか関西とかプラム（麻里子）とかにも凄く揉まれたような気がします。ホント、怖くなるぐらいガツンガツンやられてたので、そのおかげで成長できたのかなあとは。

――全女との対抗戦って、それこそキューティー鈴木のアイドル人気が凄く出てきたときだったので、それこそガツガツきすぎだろというのはなかったですか？

キューティー　でも、絶対に私を狙って痛いことしてくるだろうなって。だからまあ、受け止められる範囲だったらやってくださいという感じですよね。

――凄いですねえ。デビュー当時からそういうのを受け続けてるわけですからね。

キューティー　悲しいですけどね。



きゅーてぃー・すずき■1969年10月22日、埼玉県出身。大森ゆかりに憧れ、ジャパン女子プロレスに入門。1986年にデビューし、アイドルレスラーとしてテレビ出演や写真集を出版するなど多方面で活躍。ジャパン解散後はJWPへ。1999年に現役を引退し、その後タレントとして活動。一児の母でもある。

そういう運命じゃないですけど、技というよりも、髪の毛をグイグイやられたりとか、いやらしい攻撃が多かったような気がします。

――井上貴子とか……。

キューティー　……フフフフフ。

――井上貴子vsキューティー鈴木も、お互いに後頭部にヒザを入れ合うという試合で、この人たちはいったい何をしてるんだろうという感じでしたよね（笑）。

キューティー　貴さんとは、プロレスラーになって初めて他団体の知り合いだったんですよ。対抗戦をする前から何度かごはんとか食べに行ってたんで、ただ対抗戦をするようになって急にきれいになったなあと思って、凄くプロ意識が強いなあと思いましたね。

――野心があったんでしょうね。

キューティー　もうね、全女の人たちは、私たちがのほほんとしてたのかなと思うぐらい、仲間をそこまで蹴落とすかっていうくらいやってて、やっぱりそこまでやらなくちゃいけないんだなあって思いましたね。私たちって試合以外ではお互いに相談しあったりとかしてたんですけど、なさそうですもんね。「悩んでざまあみろ」ぐらいの感じで。

――試合にもリアルな対立を持ち込んでるわけですからね。

キューティー　先輩を先輩と思ってなさそうなところも怖いし。でも全女でやっていくにはそうじゃないといけないんだなって勉強させられました。

――それが行きすぎると、その決着をリングでやれってなりましたからね。負けたほうが引退という（笑）。

キューティー　こわ～い。ある意味全女に受からず、LLにも呼ばれず、残りものでよかったかもしれないですね。

――ダハハハ！　そうやってビッグマッチも経験して、ようやくプロレス界に何か残せたなあという感じはありました？

キューティー　やっぱり後輩とかも伸びてきてJWPも一つの団体っぽくなってきたときに、「ここまで頑張ってきてよかったな」と思ったし、いい仲間にも出会えたし。そういう感情が急に出てきたときに「あ、もう引退してもいいのかな」って。やっぱり引退って自分が思ってできるもんじゃなくて、周りの状況を考えないといけないって私は思ってたので、引退したいなと思ったときに会社にその意思を伝えたんですけど、あとは会社が日にちを決めてくださいという感じでした。

――なるほど。

キューティー　それから1年ぐらいしてから、これぐらいなら引退してもいいよという約束をしてくれたんですよね。でも、急にプロレスがキューって小さくなっていったので、最近はもうビックリしてるというか。私も、1年に1回か2回ぐらい尾崎の試合を観に行ったりするんですけど、試合自体は凄くよくなってるのに本当にお客さんだけが入りが悪いというか。

――一時期は東京ドームでやってたんですけどねえ。

キューティー　ねえ！　でもあの苦しい状況なのに、そういう環境で闘えたことに感謝してますね。同期の仲間にも後輩にも、もちろん会社にも凄く感謝しているというか。

――では、苦しかったあの頃もいまとなってはいい思い出ですか？

キューティー　そうですねえ。いまはもう笑えますけど、現役のときはジャパン女子の話もそんなに笑えはしなかったですね。なんか口に出していいものかもわからないし（笑）。

――ハハハ！　でも、やっぱり女子プロレスラーって凄いですよね。10代の女の子がそういう荒波に揉まれるという。

キューティー　いや10代だったからできたのかもしれないです。二十歳すぎてたりしてたら「これはおかしい」って思いますよ。だからいま主人にも「おまえ、ホントいいかげんだよなあ」って言われるんですけど、でもいいかげんじゃなかったらやっていけなかっただろうから。

――図太く、鈍感でいないと。

キューティー　なんかあっても「ま、いっか」みたいな。どうにかなるかって。実際、どうにかなって生きてきたしね。フフフ。

――いや、たくましいです。今日は貴重なお話をありがとうございました！

【11年3月1日／都内・池袋の喫茶店にて収録】

ブル中野



2012年1月8日JCBホール
引退プロデュース興行決定！



女子プロレス史上最高の
レスラーが語る
プロフェッショナル論を聞け！

「引退試合はやらない。でも、ブル中野として出るなら体重100キロの身体を作る！」

女子プロレス史上最高のレスラーの名をほしいままにする“女帝”ブル中野。98年に引退後は表舞台から完全に姿を消したが、昨年、東京・中野に『中野のぶるちゃん』をオープンしてから「ブル中野」名義での活動を再開。そして、来年1月8日にはJCBホールで引退記念興行も決定! リビング・レジェンドのプロフェッショナル論を聞け!

聞き手&撮影／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

――まずは『中野のぶるちゃん』再オープンおめでとうございます！

中野 ありがとうございます。やっと再オープンできました。

――去年の年末に突然閉店になったんで、多くの人が「何があったんだろう」って心配してましたよ。

中野 私たちも突然のことでビックリしたまま閉店になってしまったんですよ。どこまで話していいかわからないんですけど、私は以前、アメリカへたった一人でゴルフ修行に行っていたとき「絶対にアメリカ人には騙されないぞ」って警戒してたんですね。それでも、いろんな危ない目にも遭って。だから日本に帰ってきて凄く安心したんですよ。でも、まさか日本でこんなことが起こるなんて……、凄く勉強にはなりましたね。

――要はトラブルがあって、あの場所を出ていかざるをえなくなってしまったということですか。

中野 そうですね。しかも、私のなかでは一番心を許せる人のなかでそういうことが起きたっていうことが、凄くつらかったですね。これが私一人のことだったら、もうつらすぎて辞めていたかもしれないですけど。いま従業員として働いてくれているバット吉永、三田英津子にしても、ほかの仕事を辞めてまで私についてきてくれたんですね。これは中野恵子についてきたんじゃなく、ブル中野についてきてくれたと思ってるんで。そこで自分だけが辞めるなんてことは絶対にできないことだから。後輩二人がいなかったら、再オープンはできなかったと思います。

――では、現役時代同様に「ついてきてくれた後輩のためにも頑張る」という。新たな獄門党のような感じなんですね。

中野 気持ち的にはホントにそうですね。私の残りの人生をあげる、みたいな気持ちです。

――現役時代はそれこそ、女子プロレスに人生を捧げていたと思いますけど、正式な引退表明もせずに〝消えた〟のはなぜだったんですか？

中野 私は日本で赤いベルト（WWWA世界シングル）を獲って、メキシコCMLLのベルトも獲ってるし、WWE世界女子も獲った。あとはWCWだけだったんですよ。世界のメジャータイトルすべてを制覇してブル中野は完全に終われると思ったんですけど、WCWでのタイトルマッチ直前に、ヒザのじん帯を切っちゃったんですね。そこですべての力が抜けてしまったんです。

――もう二度とタイトルマッチができないようなケガだったんですか？

中野 いえ、何カ月か休めば大丈夫だったんでしょうけど、WCWは初代チャンピオンの座がかかってたんですね。ケガで休むと誰かが獲ったベルトに挑戦して二番手になってしまうんです。あのときのブル中野にはそれが許せなかった。初代チャンピオンじゃなかったら獲る意味はないと思ったので、そこですべてを終わらせたんだと思う。

――ブル中野を第2代王者にさせないために、自ら封印しましたか……。

中野 初代王座を獲っての完全制覇ができないのなら、もう存在させたくなかった。だから自分自身の存在も消したかったんで、プロレスを辞めた時点で、死にたかったんですね。

――し、死にたかった!?

中野 プロレスをやらない自分は生きていたくなかった。プロレスをやらない自分は「ブル中野」の名前を落とすだけだと思ってたので。

――中野さんのなかで「ブル中野」というのは、そこまで大きな存在なわけですか。

中野 一番の存在だし、そのブル中野をどう輝かすか、どう上に登らせるかということに、すべてを使っていたので。もう、それをやらなくてよくなったら、自分は存在しなくてよくなったんですよね。

――……（絶句）。そこまでして封印した「ブル中野」をもう一度名乗ろうと思ったのは、どういった考えの変化があったんですか？

中野 まず結婚したのが一つのきっかけだったんですけど、それでも「ブル中野」は名乗りたくなかったし、元プロレスラーであることも、恥ずかしくて明かしたくなかった。それはもちろん、プロレスが恥ずかしいのではなく、私自身に「プロレスラー」や「ブル中野」を名乗る自信がなかったんですよね。

――中野恵子ではあるけど、ブル中野ではない、と。

中野 でも、結婚してからいろいろ考えが変わってきて。そもそも私がプロレスラーになったときから決めていた「WWWAのベルトを獲られた時点で引退」という形式をとらずに、現役を続行したというのは、ファンの人に「ブル中野のすべてを見せたいな」と思ったからなんですよ。

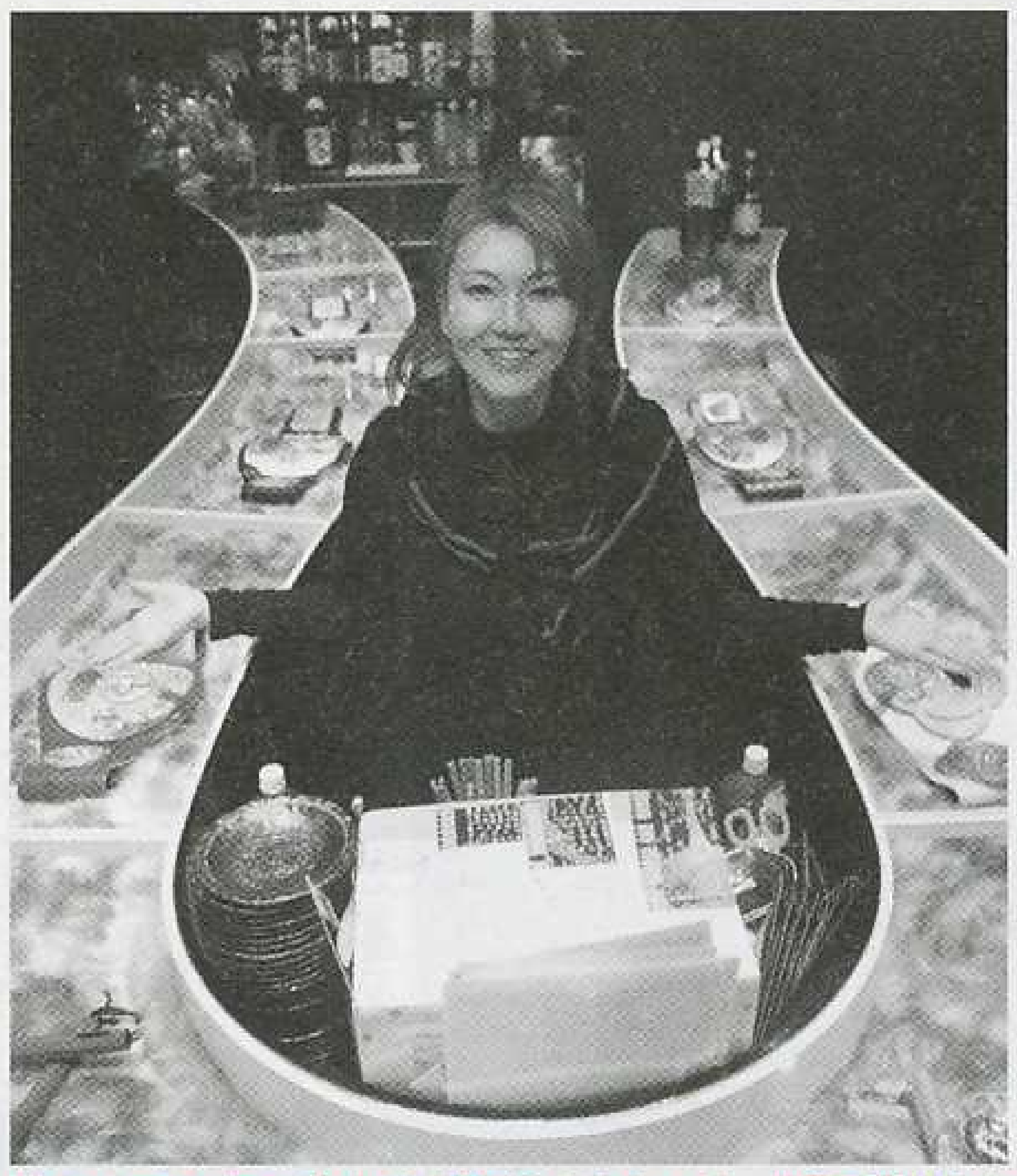
――〝女帝〟であるブル中野以外の姿も見せたい、と。

中野 そうです。歳を取って、下の子に負けていく姿を観るのは、ファンはつらいかもしれない。でも、そうやって老いていくのも人間なんだから、その姿を見せていきたいなって思ったんですね。それは、アメリカのWWEとWCWという新たな目標が見つかったことで変わっていったんですけど。結婚したあと、そのときの気持ちを思い出したんですね。

――それで、自分のいまの姿を見せてもいいかなと思い始めたわけですか。

中野 はい。もし私が悪いことやうしろめたいことをしているなら人前に出られないけど、そうじゃなくて、いま私は幸せで自信がついたんで。いまの私の姿をお見せするのも悪いことじゃないと思ったんです。それからですね、お店を持とうと思ったのは。

――でも、お店に来る人はびっくりするんじゃないですか？ あのブル中野が、沈黙



リニューアルオープンした『中野のぶるちゃん』。ガラス張りのカウンターの下には、ブル様がこれまで腰に巻いたベルトのレプリカがディスプレイされている。ブル様はもちろん毎日出勤中。これは行くしかない！

「ブル中野」を封印して、プロレスをやらない自分自身の存在も消したかった

を破って人前に現われたら、こんなに気さくで。

中野　「はい、生で～す！」とか言ってますからね（笑）。初めて入ってきたお客さんはわからなかったりしますよ。「ブルさんはお店に来るんですか？」「はい、私です」とか言って。

――いまの中野さんは、あらゆることに前向きですよね。

中野　はい。10年分、取り戻さなきゃいけないくらいの勢いで（笑）。だからこうしてお店も再オープンできたので、次の大きなことにも取りかかろうと思ってるんですよ。

――次は何をやろうとしてるんですか？

中野　結婚して、お店も始めて、新しい人生を歩み始めたことで、区切りをつけたいなって思ったんです。まだブル中野の引退セレモニーをやってなかったので、それをちゃんとやって、ゆっくり寝かせてあげたいというか。ホントの意味で「プロレスラー・ブル中野」を封印して、上にあげさせてあげようと思ってます。

――みんなの前で、ちゃんとブル中野の引退を見せたい、と。

中野　そうですね。来年1月8日にJCBホールで引退記念興行をやろうと思ってます。

――おお～、引退記念興行ですか！　でも、このご時世で自主興行とはおもいきりましたね。

中野　そうなんですよ。松永（高司）会長がいたら「お願いします」って言いたいところですけど（笑）。自分のことは自分でやろうかな、と。今回、引退記念興行をやろうと思ったのは、昔、後楽園で負けたあと、お客さんの前で「おまえたちが結婚して、子どもを作っても、ブル中野のプロレスを見せてやる！」って言ったんですよ。でも、そのままアメリカに行くことになって、それっきりになっていたんですね。でも、いまだったら、あの頃のお客さんで結婚して子どもがいる人もいるんじゃないかと思うし、その約束が守れるかなって。ただ、プロレスの試合は見せてあげられないんですけど。

――あ、その興行で引退試合はやらないんですか？

中野　はい。試合はやらずにセレモニーだけです。

――どうせなら、一日かぎりの復活でもファンは喜ぶし、話題にもなると思うんですけど。

中野　アジャ（・コング）とやっていた頃の、一番強い自分が見せられるのならやりたいですけど、それは絶対に無理だと思うんで。それだったら、試合はできないですね。

――「ブル中野の試合ができないんだったら試合はやれない」ということですか。

中野　そうですね。

――タッグマッチだったら大丈夫とか、そういう問題じゃないわけですよね？

中野　もし試合をするとしても、絶対にタッグマッチなんて嫌ですよ！　4分の1に見られるのなんて嫌だもん。私は一番になりたい！

――そうですか（笑）。じゃあ、中野さんの出番は引退セレモニーだけになるわけですか？

中野　それでも入場シーンと引退セレモニーだけで、絶対にお客さんを満足させるつもりです。それだけで「ブル中野を観た！」って思ってもらえるようなものにしたい。そのためにも、長い花道と高い天井がほしかったから、JCBホールという会場を選んだんです。

――なるほど。

中野　いままで、いろんな選手が引退セレモニーってやってきたと思いますけど、いままでになかったものをやりたいと思ってます。私は全女だけじゃなくて、WWEも行ってたんで、演出も考えて。それでいて、ダンプ（松本）さんと組んでいた頃や、アジャとの金網デスマッチなど、ブル中野の歴史を振り返られるものにしたいですね。

――当日、試合は観れなくても「ブル中野の歴史を目撃した」と思えるようなものですね。

中野　だから私自身がまず「ブル中野」にならなきゃいけないんで、引退興行当日までに100キロの身体を作りたいと思ってるんです。

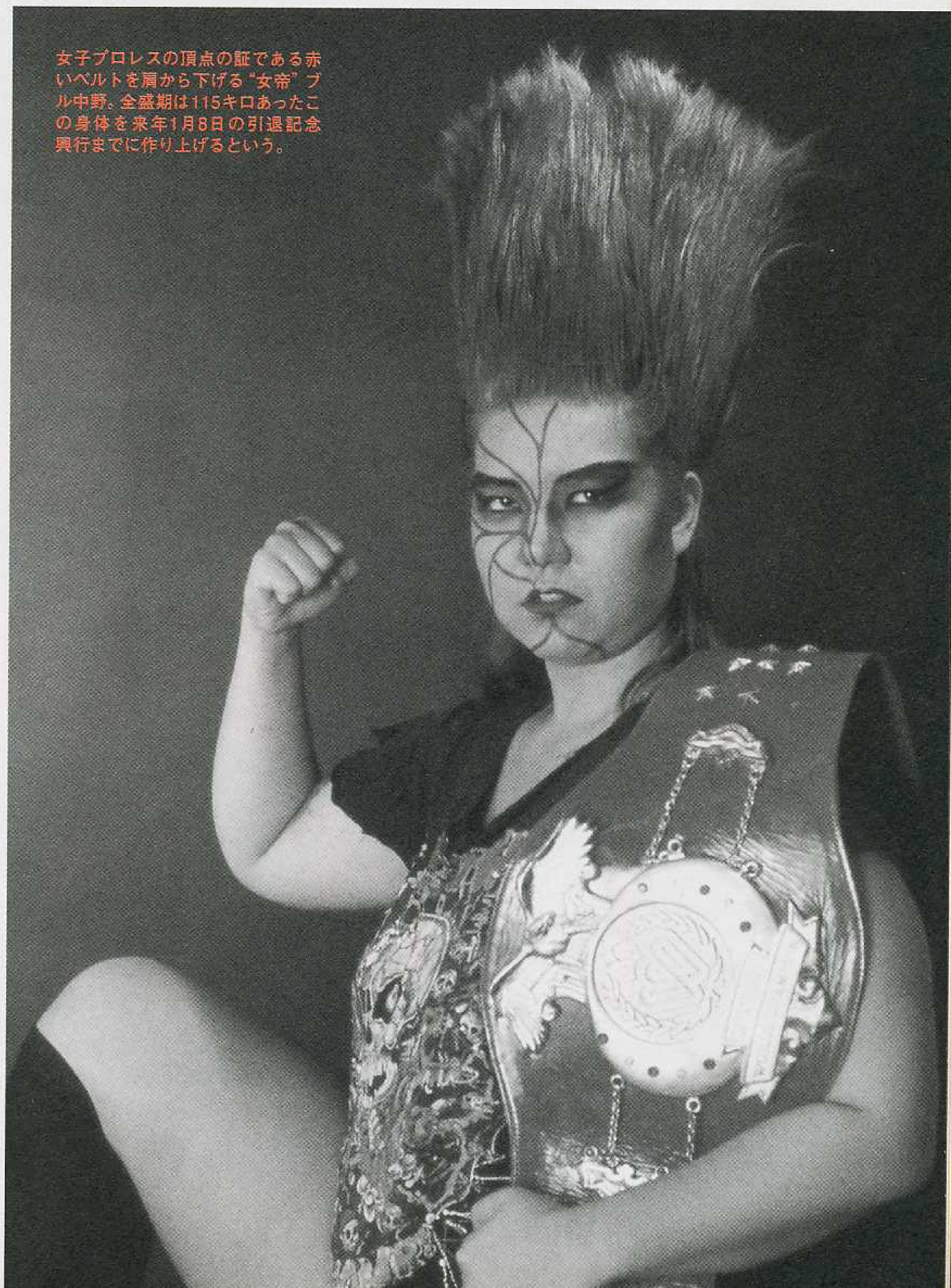
――引退後、せっかく50キロの大減量をしたのに、また100キロにしますか！

中野　だって、それじゃなきゃ「ブル中野」じゃないですもん。だからすでにトレーニングもしっかりやってますから。

――えっ!?　試合はしないのにトレーニングはするんですか？

中野　そりゃそうですよ。ただ100キロにしても、それはただの肥満じゃないですか。「ブル中野」として出るなら、しっかり筋肉をつけて増やして、当時と同じ太り方をしたいんですよ。ふとももを太くして、お尻も大きくして。

――うわぁ……そこまでやりますか。引退セレモニーでそれだけやるっていうの



女子プロレスの頂点の証である赤いベルトを肩から下げる"女帝"ブル中野。全盛期は115キロあったこの身体を来年1月8日の引退記念興行までに作り上げるという。

私は世界で一番プロレスのことを考えていたから、世界一になれたんだと思う

ブル中野

は、確かに前代未聞だと思いますよ。それどころか、50キロ減量した女性が、リバウンドじゃなくて、わざわざ100キロにするのも史上初だと思います!（笑）。

中野　逆ダイエット、流行んないですかね?

——絶対に流行んないと思います（笑）。それ、『逆ダイエット』って本を出しても売れません!

中野　体重100キロで引退セレモニーが終わったあとは、お店のメニューも半分くらいライトメニューに変えて、「みんなで一緒に痩せていこう」っていうのをやっていこうと思ってるんですけどね。プロレスを辞めたのは30歳のときだったんで、当時は代謝も落ちてなかったんですけど、44歳で50キロ落とすっていうのは、かなりしんどいと思うんですよ。

——そりゃ、たいへんですよ!

中野　あの頃の3倍はつらいと思うんですけど、だからこそ実践したいというか。「40歳をすぎても痩せられるよ」っていうのを証明したいですね。

——引退記念興行で中野さん自身は試合をしないということですけど、試合については誰に出てもらおうと考えていますか?

中野　これは団体関係なく、厳選した人に出てもらいたいと思ってます。私の引退記念興行ですけど「ブル中野を食ってやる」「これをきっかけにのし上がってやる」と思ってる人に出てもらいたい。

——では、ブル中野引退興行であり、ブル中野プロデュース興行でもある、と。

中野　だから、まだ10カ月弱あるんで、いまの女子プロレス全団体を観に行って、この目で見て出場選手を選んでいきたいと思ってるんです。

——日本に帰ってきてから、すでに何回かは会場で観てるんですよね?

中野　はい。記念試合とか引退試合に呼ばれて、3回行ってます。

——率直に言って、どう思いましたか?

中野　う〜ん……やっぱり変わりましたね。会場が静かで。

——なるほど。確かに試合うんぬんより、会場の熱が違いますよね。

中野　選手がただリングの中で試合してるだけで、誰もお客さんと試合をしてないのが一番の原因だと思う。

——「お客さんと試合をしてない」ですか。

中野　やっぱりお客さんを沸かせる人っていうのは、お客さんと闘ってるから沸かせられると思うんですよ。でも、私が3回観たかぎりは、そういう選手はほぼいなかった。リングで闘う相手って、ホントは誰でもいいんですよ。もちろん、私にはアジャ・コングという最高の相手がいたんですけど、私はアジャの身体を通してお客さんと闘ってたんです。

——「お客さんと闘う」というのは、具体的にはどんなことですか?

中野　たとえば、どれだけいい意味でお客さんを裏切れるか。私だったら「たぶん、ブルとアジャの試合はこうなるよな」っていう予想をどれだけ裏切れるか、ですよね。そこを考えてる人がいない。そこを考えないからお客さんが増えないんだと思う。

——中野さんは現役時代、そうやってお客さんを増やしていったわけですか。

中野　そうですね。クラッシュギャルズとダンプ（松本）さんが引退したあとは、ホントにもうお客さんが50人なんていうのはザラだったんですよ。ひどいときは8人とか5人とか、選手より全然少ないときもあって、一度、お客さんが3人しか来なくて興行が中止になったこともありましたから。

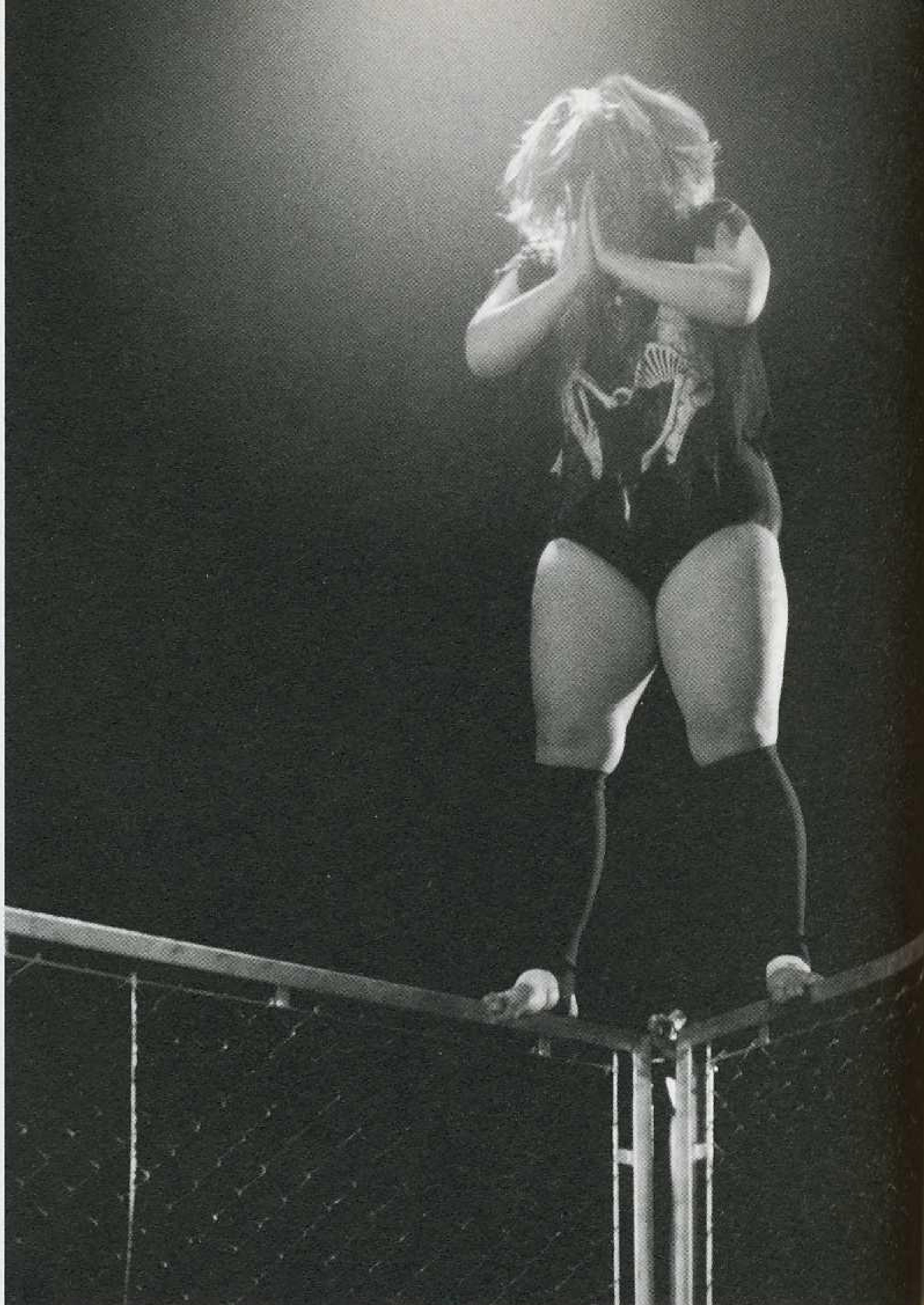
——観衆3人!　それは凄まじいですね……。

中野　でも、そのとき私たちは「今日は5人しかいなかったね。でも、今日のお客さんたちが『女子プロレスおもしろかったから次に来たらまた行こう』って、友だちを一人連れてきてくれたら次は倍だから。それをずっとくり返していけば、かならずお客さんがいっぱいになるから」って、いっつも話してたんですよ。

——そして最後はホントに東京ドームまで到達したわけですもんね。

中野　それも誰かの歌が売れたりとか、クラッシュのような凄いスターがいたわけじゃなく、私やアジャ、北斗（晶）、（井上）京子たちの試合でお客さんが入るようになって。会社の意向とはまったく違う選手がスターになっていったんです。

——ビューティ・ペア、クラッシュギャルズのような、これまでの全女のスター製造法とはまったく違うかたちで人気が出た



女子プロレスの歴史に残る名シーンである、アジャ・コングとの金網デスマッチでの、金網頂上からのギロチンドロップ。観客の想像を超えることを常に考え、自らの身体が壊れるのもいとわないブルだからこそ、できた技だ。

わけですね。
中野　だから当時は、お客さんが何を求めてるのかをいつも考えて、いつも試行錯誤してましたね。毎日がお客さんとの闘いでした。でも、いまの子たちの試合を観たら、みんな水着も色が違うだけで同じような感じで個性が見えなかったし。「私は何がしたくて、最終的なゴールはこうなんだ」っていう明確なビジョンを持ってる人がいないんじゃないかな。
――そうかもしれませんね。
中野　私とか京子、北斗なんかは、ごはんを食べに行っても、家に帰っても、ず～っとプロレスの話だったんですよ。もうそれ以外ないんですよね。寝ていてもプロレスの夢を見てたし。ホントに寝ても覚めてもプロレスのことを考えてました。
――そこまで考えてましたか！
中野　アジャも京子もみんなそうですよ。食事に行っても、プロレスの話ばかりだし、それが一番楽しかった。だから、たぶん私はプロレスのことを世界で一番考えてたと思うんですよ。だから私は世界一になれたんだと思います。
――そうハッキリと言いきれるのが素晴らしいですね。
中野　いまは昔と状況が違うからたいへんなんだと思うんですけど、せめて「自分はこうなりたい」っていう夢を持って、「なんでできないんだろう」って、いつも自問自答してないとダメだと思う。そうしないと成長はないし、お客さんも増えないでしょうね。


引退記念興行では試合を行なわないというブル様。あの威風堂々とした入場シーンとその存在感だけで、観客を満足させるというから、これは楽しみだ。

――いまは「お客さんが入らない」って言いますけど、「観衆3人」に比べたら、よっぽど多いわけですからね。
中野　そうですよ。100人くらいいるんだから、3桁なんて凄いじゃないですか。でも、100人くらいはせめて沸かせてくれよって思いますけどね。100人だったら、その一人一人にアピールしたっていいんだから。
――そのくらい力技でもいいから、観客を盛り上げろ、と。
中野　それぐらいやらなきゃダメですよ。昔の私も「このままじゃ、全女はダメになる」と思ったから、ずっとプロレスのことを考えてましたからね。
――もう常にお客さんを入れることを考えるっていう意識が植えつけられてるんですかね。
中野　私がそれを考える一番の理由になったのは、ダンプさんにもクラッシュギャルズにも勝てないまま引退されちゃったってことで、自分に自信がないまま一番になっちゃったんですよ。
――一時代を築いたあの3人に勝ち逃げされてしまった、と。
中野　そうなんです。私は後輩（西脇充子）に勝ってWWWA世界シングルのチャンピオンになってるから。でも、クラッシュがいた時代から「このままじゃ全女はダメになる。私が一番にならなかったらダメだ」っていうふうに思ったんですよ。
――「このままじゃダメだ」って、どういう部分ですか？
中野　やっぱり、あの頃はダンプさんが凶器を持てば悲鳴が上がり、クラッシュギャルズが手を挙げただけでお客さんが沸いてしまう状況があったんですよ。その時点から「これは絶対に続かない」って思っ

ブル中野引退記念興行をきっかけにして女子プロレスをもう一度アピールしたい

ブル中野

たんです。

——ティーンのファンがアイドルに熱を上げた状態だから、いつか冷めるときがくる、と。

中野　もちろんチコさん（長与千種）も凄く研究されたいい試合をしていたと思うんですけど、自分たち悪役が凶器を使ったり、派手なものばかりに走っていたあの時代は、絶対に長くは続かないと思ってたんです。だから私は悪役でもスープレックスを使えばベビーフェイスにも負けないものにしようと思ってましたし、技で闘える凶器を使わない悪役というのを目指してたんですね。唯一、ヌンチャクは使ってましたけど。あれは凶器じゃないから。

——ブル中野の身体の一部ですよね（笑）。

中野　だからそのとき、クラッシュがいなくなったあと、自分は何をするべきなのか。どうしたらお客さんが来てくれるのか。地方に行ったら、おじいさん、おばあさんたちは、どんな試合が観たいのか。東京・後楽園ホールのお客さんは何を望んでいるのかって、いつも考えてましたね。

——いやあ、やっぱりブル中野は凄いですよ！

中野　そしてあの頃、プロレスで頭がいっぱいだったように、いまはこのお店のことをいつも考えてるんですよ（笑）。どうしたらお客さんが喜んでくれるだろうって、いろいろ考えるのが楽しくてしょうがないですね。やりたいことが多すぎて困るくらいで。

——『中野のぶるちゃん』が、いまの中野さんにとっての〃リング〃なんですね。

中野　ホントにそうなんですよ。いい仲間にも恵まれてるし、毎日が充実してますね。

——いまの選手たちは、そこまで女子プロレスというものに没頭してないんでしょうね。

中野　もちろん京子みたいにいろいろ考えて、新しい団体を作ってすべて自分でやるような選手もいますけど、大多数の選手がそうじゃないんだと思う。ホントにすべてを懸けてる人が注目されるようになってほしいし、そういう選手に出てきてほしいですね。

——そういう〃レスラー魂〃みたいなものが、あまり伝承されてないんでしょうかね。

中野　いまは旅（巡業）で一緒に回ってるわけじゃないので、難しいとは思うんですよ。私だってほめたり叱ったりするだけじゃなく、自分がリング上でその姿勢を示せなかったら、下の子は絶対についてこなかったと思うし。

——それはあるでしょうね。

中野　いまはみんな、普段はそれぞれ別の生活をしてて、試合の日だけ一緒になる感じですよね。それだとホントの意味で師弟関係もできないし、上の人も本気で叱る必要もないんですよ。嫌われる必要がない。

——叱るっていうのは、ホントにエネルギーがいることですもんね。

中野　だから私は、1月8日の試合に出る選手が決まったら、それに向けて一緒に合宿がしたいんですよね。

——合宿までしますか！

中野　そうやって気持ちを一つにしたいし、自分の身体で教えたい。そうしないと、ホントに伝えたいことは伝わらないと思うんで。その代わり、若い子をどん底に落とすくらいキツいことをすると思いますよ。そこから這い上がれる人がいればいいなって。

——そうやって、ブル中野の経験を身体で叩き込んでいく、と。

中野　そうですね。私も女子プロレスはいろんな経験を積んでますから。ミミ（萩原）さんが半ケツ出してるときからやってますからね（笑）。

——ダハハハハ！　でも、ホントにクラッシュギャルズ時代以前から、対抗戦時代。さらにWWE、WCWを経験してる人って中野さんだけですからね。それは、ぜひ若い選手に伝えていってほしいですよ。

中野　引退興行では、そういう私の知らない若い子とは別に、私がかつて一緒に闘ってきた仲間たちにも声をかけて、出てほしいと思ってるんです。それも凄く厳選するつもりですけどね。その人たちともう一度、夢を与える人間の意識のあり方っていうのを一緒に勉強したいなって思うんですよ。

——それは非常に楽しみですね。

中野　私自身、1月8日を凄く楽しみにしてるんですよ。自分の引退セレモニーは、絶対にお客さんに満足してもらえるものにするし、この興行に出てくれる選手は「ブル中野を食ってやる」っていう気持ちで出てほしい。そしてお客さんも、ひさしぶりに女子プロレスを観るっていう人がたくさん来ると思うから、若い子には、そういう人たちにインパクトを与える試合をしてもらいたいですね。この大会をきっかけに、何か突破口じゃないですけど、女子プロレスというものを、もう一度アピールできたらと思ってます。

——なるほど。自分の引退興行をきっかけに、もう一度、女子プロレス自体もアピールしたい、と。

中野　そうやって、新しい人が出てきたら、ブル中野も安心して引退できると思いますからね。

——わかりました。では、来年1月8日のJCBホール大会、おおいに期待してます！

【11年3月8日／都内・『中野のぶるちゃん』にて収録】



ぶる・なかの■1968年1月8日、埼玉県出身。本名・青木恵子。83年にデビュー。極悪同盟に加わりダンプ松本のパートナーとしてブレイク。ダンプ引退後、獄門党を結成し、女子プロレスの頂点であるWWA世界シングル王者に悪役として始めて君臨。アジャ・コングと抗争し、金網デスマッチは歴史に残る壮絶な一戦となる。その後、WWE世界女子王者にもなり、98年に事実上の引退。昨年『中野のぶるちゃん』をオープンした。

全女61年組とFMW女子の真実!!



掟ポルシェの

突撃! 俺の晩ごはん

8杯目

コンバット豊田

『炭火焼肉 吉四六』

SUMIBI-YAKINIKU KITCHOM

元プロレスラーのお店に行ってさんざん飲み食いし、食い終わった瞬間に本誌を差し出し、
「『Kamipro』は聖家族!　だから大好き!」とわけのわからないアピールをしてお勘定をチャラにしてもらおうとしている
本気で食欲満たし連載『掟ポルシェの 突撃! 俺の晩ごはん』。今回のゲストはFMW女子を作ったといえばこの人! コンバット豊田さん!!
元アウトブレーカーズが、ストリートファイト用の袖切ったGジャン衣装をエプロンに替えて、とびきり人のいい笑顔で接客する!!
上カルビ2人前!? オッケー!(とびきり甲高い声で)。

構成 & 撮影／堀江ガンツ

掟　豊田さんというと「コンバットラーメン」のイメージがあるんですけど。焼肉屋さんをやられて、長いんですか？

豊田　もう、まる10年ですね。ラーメン屋は3年ぐらいしかやってなかったんですよ。

掟　屋台だったんですよね？

豊田　はい。私は引退してから1年間、大仁田（厚）さんの事務所にいたんですけど、何か飲食の仕事をしたくて。でも、資金もそんなになかったんで、屋台のラーメンをやってたんですね。ただ、やれる場所がなくなっちゃって。そんなときここのオーナーから「焼肉屋をやってみないか」って声をかけていただいたんです。

掟　食べるのも好きだし、飲食業は向いてるだろうな、と。

豊田　食べるのは好きなんですけど、あんまり社交的でもないし、接客はあまり向いてなかったと思うんですけど（笑）。

掟　全女には86年から88年の2年間しかいなかったんですよね。

豊田　最後は中野さんの獄門党に入って、私は覆面を被っていたんですね。

掟　ダイナマイト軍団のダイナマイト・ベアーですよね。もともとベアーのマスクを被っていたグリズリー岩本さんのあとを受けてということで。

豊田　そうそう。あれで行き詰まっちゃったんですよ。

掟　ヒールにはなりたくなかったんですか？

豊田　いや、そこにこだわりはなかったんですけど、覆面を被ってやっていくことで、自分の方向性が見えなくなって。「このまま続けても……」っていう気持ちになっちゃったんですよね。

掟　プロレスを続けること自体に行き詰まりを感じた、と。でも、新人の頃は新人賞も獲られてて。全女って、新人の頃はアマレス的な押さえ込みで試合が決まるガチな形式でしたけど、体力的な自信はあったんですよね？

豊田　そうですね。でも、自分のカラーがなくて。また覆面を被ったことで、タッグなんかでは、上の人たちとやることが多くなって、ついていけなくなった部分もありました。



いかにも人のよさそうな笑顔で話してくれたコンバット豊田。この人が悪のかぎりをつくす、FMW女子のトップヒールだったのだから、やはりプロレスはわからない。

掟　押さえ込みとボディスラムで試合が決まる世界から、急に高度なプロレス技術を必要とされるようになってキツくなったと。で、全女退団後、ブランクが2年間あるわけですけど、その間はプロレスから離れた仕事をされていたんですか？

豊田　そうです。ジムのインストラクターになりたくて、和歌山の地元に帰ったんですけど、まずバイトしなくちゃお金がないでしょ？　だからバイト漬けの生活になってズルズルやってるうちに、FMWが旗揚げされることになって。工藤（めぐみ）と天田（麗文）が行くことになって「じゃあ、私もやってみようかな」って。まあ、流れですね。

対抗戦で全女の先輩（ブル＆北斗）と対戦したときは、もう死ぬかと思いました

掟　豊田さん自身は、そんなに復帰したいわけじゃなかったんですか？

豊田　復帰したというより、プロレスに流れたんですよね。朝晩バイトして「私、ずっとこのままなのかな」ってなってたんで。

掟　バイト漬けよりは、リングに上がっていたほうがいい、という。

豊田　そう。しかも凄く魅力的な話だったんですよ。自由にできるっていうし。

掟　全女と違って上の選手もいないし。イチから作れるってことですね。

豊田　私自身も基礎しかわからないけど、FMW女子って最初はボロクソだったでしょ？　それで「じゃあ、やりましょうか」ってことになったんですよね。

掟　全女と比べてレベル的にどれくらいだったんですか？

豊田　「受け身だけでも取れれば」と思ってたんですけど、受け身もまだ取れてませんでした。

掟　リングに上がっちゃダメなレベルですね。昨日たまたま古本屋で買った『週刊プロレス』で、シャーク土屋＆クラッシャー前泊と仲違いして、工藤さんと電撃合体した記事があったんですよ。

豊田　ああ、そんなこともありましたね。二人が伸びてきたんで、ヒールとベビーの上同士が合体して対抗していこうってなったんですよ。

掟　ちょうど全女との対抗戦が始まる直前で、対抗戦への出場権を懸けて対決したんでしたよね。

豊田　この子たち（土屋＆前泊）が先に全女に挑戦表明しに乗り込んだんですけど、ウチらが横取りしたんですよね（笑）。

掟　そして92年9月の横浜スタジアムで、ブル中野＆北斗晶組と対戦。

豊田　もう死ぬかと思いました。

掟　素直すぎる感想ですね（笑）。やっぱり元・全女ということでvs全女要員にされたけど、もう全女の選手とは当たりたくなかったわけですよね？

豊田　そうですよねえ。べつに仲違いして辞めたわけでもなかったんですけど……嫌でしたよね。ウチらもFMWでそこそこ地位があったんで、負けられないプライドがあるじゃないですか。でも、気持ち的には負けてるんですよ（笑）。

掟　相手は昔の先輩ですもんね。

豊田　まあ、それじゃダメなんですけど。

掟　プロレスラー、とくにヒールは、いかにリング上で悪くなれるか、という部分が重要ですよね。

豊田　そこなんですよねぇ。

掟　それなのに、どうしても人のよさがにじみ出てしまうのが豊田さんですよね（笑）。

豊田　よくそう言われました（苦笑）。

掟　いまの表情を見てても、ホントに〝のんちゃん〟ですもんね（笑）。

豊田　いま思えばホントにそうで。ただしょうがなかったとも思います。

掟　その横浜スタジアムの翌月、土屋＆前泊組が全女の「タッグリーグ・ザ・ベスト」に出て、初戦で渡辺智子＆バット吉永組を潰すような試合をして、それ以降のリーグ戦には一切出ず、「勝ち逃げ」みたいなことをしたじゃないですか。

豊田　ああ、ありましたね。

掟　あれって、横浜スタジアムで、FMW側からの指示を破って勝手にブル&北斗にマイクアピールされたり、全女にメンツを潰された報復として、豊田さんと工藤さんより下の選手が全女の選手を潰すことで、イメージを回復しようとしたんじゃないかと思うんですよ。

豊田　うん、なんとなく覚えてるんですけども。そんなに詳しくは記憶がないんですが。

掟　そんなに記憶がないですか（笑）。

豊田　でもたぶん、そんな感じだったと思います。

掟　これは推測ですけど、たぶん最初から1試合しかやる気はなかったんじゃないですかね。バットさんと渡辺さんは全女の出場チームランクでは一番下だったから、あのままいけば初戦以外はずっとFMWチームが負けさせられたと思うんですよね。それもあって、1試合だけ強いイメージを植えつけて勝ち逃げするという。

豊田　たぶん、あのときは大仁田さんが「メチャクチャにしてこい」って言ったんじゃなかったかなあ。

掟　そして、その指令が出たのは、豊田さんと工藤さんだけでなくFMW全体がいいようにしてやられた横浜スタジアムの試合があったからこそだって気がして。そう考えると、対抗戦の一番重要な部分をじつは豊田さんが握っていたりするんですよ。

豊田　ああ～、そうだったんですね（笑）。

掟　あ、そんなぼんやりした感じで（笑）。そして93年4月2日、横浜アリーナのオールスター戦では、メインだったにもかかわらず、あまりにも進行が押して、0時のカウントダウンをしたりして、お客さんが試合を観てないという。

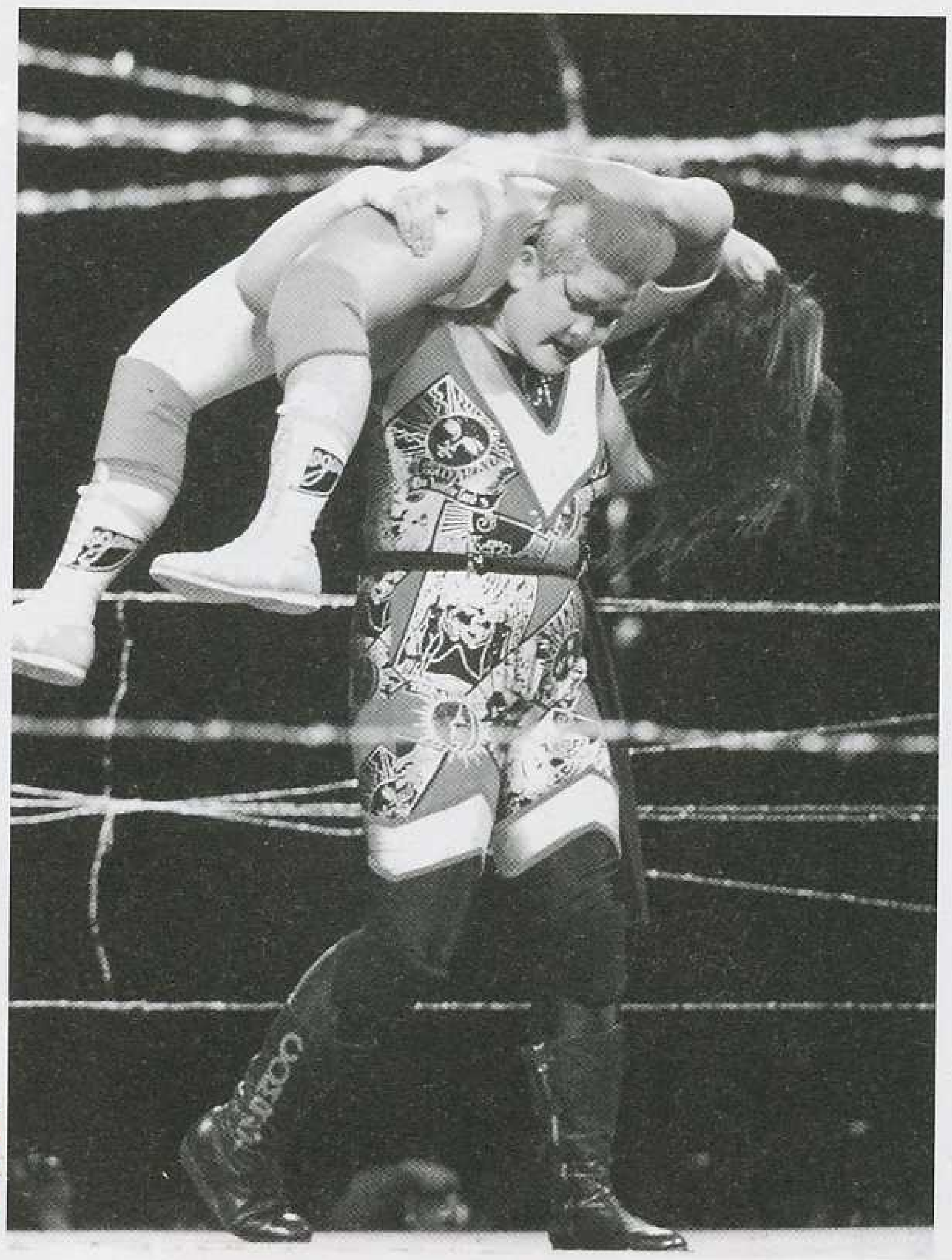
豊田　あれほど嫌な試合もなかったですよ～。

掟　対戦相手の山田敏代&豊田真奈美は試合が終わったあと泣いてたっていいますし。豊田さんはあのとき着ていた青い水着をそれ以降まったく着なかったとか。嫌な思い出でしょうね。

豊田　ホントですよね。かわいそうな4人でした（笑）。

掟　しかも、北斗さんと神取さんのあまりに凄惨な試合の直後でしたからね。

豊田　北斗さんと神取さんの試合は、ウチらだって注目してましたからね。ホントのケンカっていうか、裏で凄かったですもん。ホントに仲悪かったみたいだから。どうなっちゃうんだろう？って思って。そんな試合、怖いですよね。



1996年5月5日、川崎球場で女子としては史上初のノーロープ有刺鉄線・電流爆破デスマッチで工藤めぐみと対戦。コンバットはこの試合を最後に引退した。

掟　とてもレスラーの意見とは思えないですけど（笑）。あの当時、ボクはよく「コンバット豊田のモノマネ」というのをやってまして。「スリーカウント入っただろ」ってアピールするときに「オッケーェ!!」って甲高い声を出してから次の技に移るっていう。

豊田　ハハハハハ！

掟　こんな透き通った高い声を出してる人は、きっといい人に違いないって（笑）。

豊田　興奮すると声が高くなるんですよ（笑）。

掟　人が良くて、ちゃんとした社会常識があるからこそ、商売がうまく続いていく理由がわかるという。やっぱりプロレスラーってワガママな人が多いじゃないですか。でも、そういう人ほどレスラーには向いてて。

豊田　そう、上にあがるんですよ。ホントうらやましかったですもん。だからFMWでトップでできたっていうのも、私の実力じゃなくてタイミングがよかったんだと思いますよ。もし工藤がいなかったら……って思うし。だから工藤より先に辞められてよかったです。

掟　そして引退試合で工藤さんと女子初の電流爆破デスマッチをやるわけですけど。やっぱり大仁田さんが現役時代は、女子が電流爆破をやるわけにいかなかったわけですよね。本人たちはずっとやりたかった？

豊田　やりたいというか、「最後はやらなきゃいけないんだ」っていう気持ちになったんですよね。やっぱり集大成じゃないですけど、自分が辞めるっていうときに「やれるものならやりたい」というか。使命感ですよね。

掟　引退試合が終わったあとはどんな気持ちでした？

豊田　「終わった」って感じでしたね。当時のインタビューとかでもよく聞かれてたんですけど、なんも考えてなかったです。ただただ痛かったんですよ、ホントに。電流爆破より（タイガードライバーで）首から落とされて、あれが痛くて痛くて……。やられたときは「たぶん、死んだ」と思いましたから。

掟　爆破の痛みよりも首から落とされた痛みのほうが上？

豊田　全然、上です（キッパリ）。首が詰まって、胸骨が折れてると思いましたから。試合後に水をかけられるでしょ？「いやあ、もう勘弁して」と思いましたね。

掟　これまでで一番の痛みですか？

豊田　そうかもしれないですね。あとシンプルなところでは、新人と試合をしたとき、逆エビを受けたんですよ。新人は加減を知らないわけじゃないですか。もう、あれは腰の骨が折れるかと思いました。

掟　かといって、新人相手にギブアップもできないし（笑）。

豊田　そうそう。あとは有刺鉄線を巻いた竹刀があったんですよ。有刺鉄線って先端を叩いて刺さらないようにするんですけど、作りたては刺さるんですよ。私、（ナース）中村にその有刺鉄線竹刀でおもいきり殴られたんですよ！

掟　それはずいぶんなバッドナースですね（笑）。

豊田　も～う、ホントに皆さん、加減ってもんを覚えなさいよって思います（笑）。

工藤（めぐみ）とは仲が良かったんですよ
本音で話せる同期は二人しかいないから

あれは痛かった。リングに張られた有刺鉄線に身体ごと当たるくらいなら全然痛くないんですけどね。

掟 自分の加減でできますもんね。でも、他人が殴りかかってくるとそうもいかない、と。

豊田 凶器はちゃんと使い方がわかる人間が使わないと……死にます。

掟 豊田さんはタッパがあったんで、大きい選手やガイジン選手が来たときも対戦したりとかしてますよね。ロシアの（グンダレンコ・）テレチコワとか。

豊田 たいへんでした。あの大きさですから、持ち上がりませんし。プロレス知りませんし、言葉通じませんし、あれほどたいへんなものはなかったですよ。

掟 普段の会話ってどうしてたんですか？

豊田 身振り手振りですよ。

掟 それでよく試合になりますね。

豊田 （グレゴリー・）ベリチェフがあいだに入って少し通訳してくれたからなんとかなったけど。「ここをこうして、こうして」ってね。でも、ほとんど試合になってませんでしたよ。最後のとこだけはなんとかして。あれは試合って言わないですよ。

掟 何も見せ場が作れないっていうか。よく一流の選手はホウキと試合しても……なんて言いますけど、タンスや冷蔵庫と試合をしてるようなもんですよね。

豊田 ホント、よくやってたと思います。

掟 あとはマグニフィセント・ミミとか。

豊田 FMの初期にやってます。彼女もけっこう激情型だったんですよね。やっぱり外国の方っていうのは、ちょっとキレたりすると恐ろしいですよ。

掟 キレるとどうなるんですか？

豊田 まず奇声を発するでしょ。で、試合中に流れにないとことかガーッと来ますからね。

掟 入れちゃいけないところにパンチが入るとか。

豊田 入ります、入ります。ま、しょうがないですけどね。そういうのはプロレスのなかでもあることですから。ただ、彼女は顔を触れられるのが一番嫌なんですよ。



こんぱっと・とよだ■1967年10月26日、和歌山県出身。本名・豊田記代。86年に全日本女子プロレスでデビュー。88年に退団後、90年に同期の工藤めぐみとともにFMWで現役復帰。FMW女子のトップヒールとして活躍し、96年に工藤との電流爆破デスマッチで引退した。

掟 「顔はぶたないで。私、女優だから」みたいな。

豊田 そうそう、そんなもんです。

掟 それだけ顔に打撃を受けるのを嫌がったって、もしかしたら整形でもしてたんですかね。

豊田 それはあるかもしれないですよ。あの人は最初は里（美和）なんかとやってたんですよね。私がそこまで覚えてるって記憶があるほうだと思いますよ。

掟 だいたいのことは記憶にないほうですか？

豊田 ほとんどないです。

掟 言いきられちゃいましたね（笑）。

豊田 この前、全女の頃にお世話になってた人がお店に来たんですけど、誰かわかんないんですよ。顔は知ってるんだけど、名前が出てこない。

掟 それはマズいです（笑）。96年に現役引退されたときは、何が原因だったんですか？

豊田 何っていうほどの理由はないんですよ。大きなケガもなかったし……。引退会見のときになんて言ったのかも忘れちゃいましたけど、たぶん「いいときに辞めたい」とか「華があるうちに辞めたい」とか、それくらいの理由なんですよね。あとは、「もうやることはない」とか言ったんじゃなかったかな。

掟 FM女子のなかでの役割が終わった、と。新生FMWの居心地が悪かったとかではないんですか？

豊田 それは全然ないです。私と工藤は（ターザン）後藤さんが一切ダメだったから、後藤さんがいなくなってホントに楽しかったくらいで。

掟 力がこもってますね（笑）。後藤さんは女子の試合にも相当口を出してたっていう話は聞いてますけど。

豊田 もう何回ぶち当たったかわからないですよ。ホントに小さいことまで口うるさくて、「女か！」っていうくらいでしたから。

掟 しかし後藤さんは、あちこちで評判悪いですね。

豊田 だって「自由にできる」って言われてFMWに来たのに、あの人にどれだけ縛られたかわからないですからね。

掟 マッチメイク的なことも後藤さんがやってたし。ほかの選手たちも差別用語的に「鬼」と呼んでたらしいですね。

豊田 ホントに鬼ですよ。

掟 人の良さそうな豊田さんが、珍しく苦々しい顔になってますよね（笑）。工藤さんとは仲が悪かったわけじゃないんですか？

豊田 仲良かったです（即答）。ケンカもしましたけど、仲は良かったんですよ。だって同期で、本音で話せるのは二人しかいないから。

掟 ずっと工藤さんと一緒のプロレス人生ですもんね。

豊田 なんか全女のときからウチら二人って浮いてましたからね。あんまり人に関与しないし、みんなと仲良く社交的って感じじゃなかったから。

掟 社交的じゃない二人が引き合ったってことなんですね。

豊田 まあ、いまはお店をやってるから、いくらか社交的にはなりましたけどね。（お客さんが来て）あ、いらっしゃーい。じゃあ、ちょっとこのへんで。うちの焼肉、おいしいんで食べに来てくださいね。

【11年3月9日／千葉県浦安市・『吉四夢』にて収録】

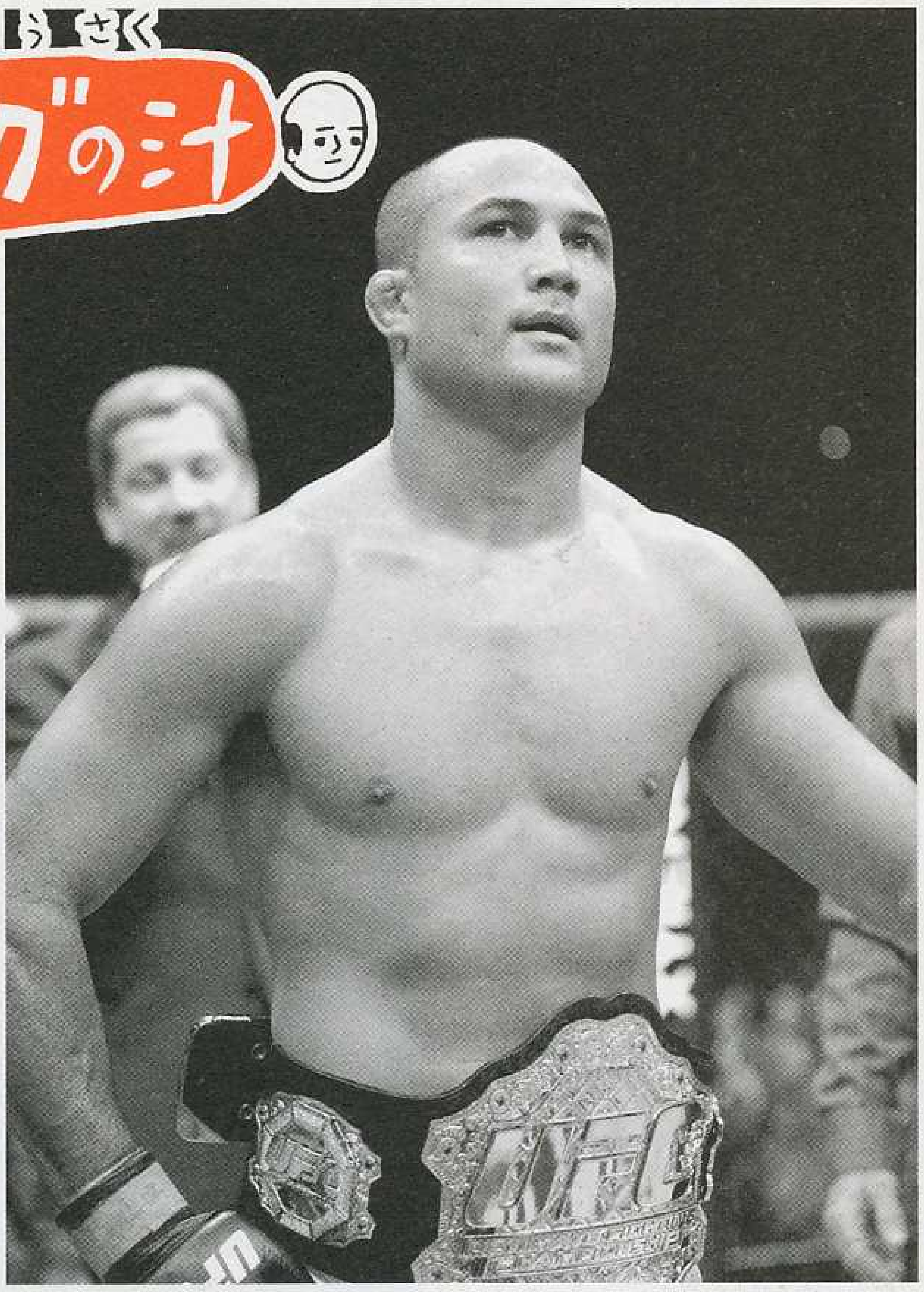


第64回

オスの強さ

花くまゆうさく

豆リングの汁



前回の『TUF』で注目したコディ・マッケンジーが、そのあともおもしろくてたまらない。合宿所入りしてからの1回戦、レスリング系で自信満々のアスリート体型の相手を、白くてだらしない体型（マヨネーズ容器型）のコディが必殺技マッケンジーギロチンで秒殺してしまった。

その展開もじつに見事で、試合開始すぐに突っ込んでいき軽く蹴りを出し、その足捕まえさせてタックル誘い、まんまと釣れてタックルにきた相手にすかさずマッケンジーギロチン！　おまけに絞め落としてしまった。

「イケイケの体育会系をボンクラが飄々と倒す」、これぞ学園生活での夢の光景を見せてくれました。素であぜんとするコスチェックの表情まで引き出し、コディ最高です。

福田力が不思議な判定食らった『UFC127』では、たぶん初めて観る中国人チャン・ティエチェンに目が釘づけになった。

いい感じの味あるハゲ顔&ジャッカルのような身体つきがエネルギッシュに動き、ギロチンチョークを全身で絞め上げる姿が印象に残った。

〝生〟も〝性〟も強そうでギラギラしてるではないか。「精力系の広告モデルにピッタリだ！」なんて考えてるうちに、メインのBJペン観ると、こっちもだ!!　BJとチャン、二人のツーショット画面想像すると凄いよ。ギラギラみなぎってる！　オスの強さビンビン。大衆週刊誌の後半の広告にハマりすぎるよ！

UFC挑戦する日本人選手に足りないのは、こういうギラギラした男性力じゃないかと思えてきました。

Hanakuma Yusaku
◎最近『悪魔を見た』がおもしろかったです。

金ちゃんのどこまでやるの？

●第56回●プロレスの凄さの巻

コラムを始める前に、まず今回地震の被害に遭われた方に、心よりお見舞い申し上げると同時に、犠牲になられた方々とご遺族の皆様に、お悔やみ申し上げます。

俺は今回、地震があったとき練習に向かうためにバイクに乗ってたんで、あんまり気づかなかったんだよね。それで普通に練習して、帰るときやたらと道路が渋滞してたからおかしいな、と思ってたんだけど、帰宅してテレビを観てあまりに被害の大きさに驚いたよ。それと同時に胸を痛めたよね。被災地の一日も早い復興を願ってます。いまは自分に何ができるかを考え、やるべきことをやろうと思ってます。

では、あらためてコラムを書かせてもらいます。今年、俺はデビュー20周年ということもあって、なるべくたくさん試合をしたいなと思ってるんだけど、原点に帰ってプロレスの試合にも出たいと思ってるんだよね。

それで髙山（善廣）くんに相談したら、「じゃあ、まずはいまのプロレスを知るために、ボクのセコンドについてください」って言うんで、3・6ZERO1両国大会で、髙山くんのセコンドにつかせてもらったんだよ。

まず会場入りして、髙山くんと同じ控室に入ってたんだけど、プロレスラーはみんな身体がボロボロのなかで試合をしていることに驚いたね。

蝶野さんや武藤さんなんか、普通に歩いてるだけでもヒザや腰の悪さがわかるのに、蝶野さんはリングに上がったら、デビュー戦の橋本大地を相手に素晴らしい試合をしてたもんね。武藤さんは試合してないけど、歩きづらそうにしながら、テーマ曲が鳴ったらそんなふうには見せないで入場して、バッチリとポーズを決めてたから、思わず「カッコいい～」って思っちゃったよ。

実際にセコンドとして間近で観た髙山くんと大谷（晋二郎）さんの試合にも驚いたよ。大谷さんの強烈なチョップで、髙山くんの胸の皮膚が裂けるし、おもいきり頭突きを入れて額が割れたりしてたからね。大谷さんも髙山くんの蹴りをモロに食ってたし、ジャーマンで頭から落とされてたしね。

間近で観て、「こんな過激な試合は俺にはできない。これなら総合のほうがよっぽど身体的には楽だ」って思ったよ。総合は強ければ、ほぼ無傷で試合を終えることもできるけど、プロレスの熱戦は二人ともボロボロになるまで闘うからね。

しかも、こんな試合をやったあと、また明日も試合があるんでしょ？　超人だよね。田中将斗選手と凄い試合をやった永田（裕志）さんと試合後にちょっとしゃべったんだけど、「試合中、ちょっと意識が飛んだ」って言ってたんだよ。永田さんって、そんな試合をやったあと後楽園ホールに移動して、新日本でも試合をしたんでしょ？　信じられないよ～。

今回、あらためてプロレスの凄さを実感したね。試合を観ながら、UWFインター時代に新日本と対抗戦をやったことを思い出したよ。木村（健悟）さんにパワーボム食らって、もの凄く効いたこととか、長州さんのリキラリアット食らって、おもいきり後頭部をマットに叩きつけられたこととかさ。ホントにプロレスの技って痛いからね。

生のプロレスは凄くて、自分にこれができるのか？　って思っちゃったよね。俺はこの先、どうしたらいいんだろう？

プロレスのリングに上がるなら、生半可な気持ちじゃできないなって思ったよね。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中！
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

椎名基樹のサムライ三昧

第59回

『男色ディーノは美しい』

この八百長ヤロー！　と北尾が叫んだ相手は、アースクエイクこと琴天山であったが、それにしても地震怖かったね。

さて、野球賭博事件の捜査を皮切りに、ついに明るみに出てしまった相撲の八百長であるが、その発端がメールっていうのがいいよな、浮気がバレたんじゃないだから。

それにしても、突然深刻面して、八百長を糾弾するワイドショーの面々には、相撲ファンなら「何をいまさら」な違和感を覚えただろう。俺たち相撲ファンはそんなの承知で楽しんでいるんだから、興味もないのに突然横から出てきて、楽しみ奪わないでほしいよな。自分が正義の味方ヅラしたいだけのクセに。

だが、相撲ファン格闘技ファンは、ワイドショー司会者よりずっと阿呆で暇人なのだ。相撲ファンが八百長の存在を知りつつ取組を楽しんでいるということは、その裏側を読み、自分の想像を楽しんでいるといえる。それはある種の野次馬的陰謀論者である。となると今回の八百長騒動、さらにもう何年も続いている、相撲バッシング自体が八百長なのではないかと勘ぐりだすのだ。

そもそも法律を犯しているわけではない八百長メールを、なぜ警察が公表しなければならないのか？　そして、貴乃花親方の造反、そのあとすぐに野球賭博が発覚して相撲界から追放された、親方の右腕の元貴闘力。誰がリークしたのか、朝青龍のモンゴルサッカー映像。考えればへんなことだらけだ。

きっといま、相撲界やその周辺では、陰で激しい権力争いが行われているに違いない。それは、日本、モンゴル、ロシアを跨いだ、国際的な展開に発展しているはずだ。

もしかしたら、民主党政権になったことによって、相撲界の力が弱まり、パワーバランスが崩れたのかもしれない。これは、大変だ。忙しくなってきたぞ〜！　オレ、髷結って相撲部屋に潜入取材してくるよ。だが、そのためには、来年の正月まで待って、佐渡ヶ嶽部屋の「ちゃんこが食べられる相撲部屋見学券」がついた福袋が発売されるまで待たねばならない。それで相撲部屋見学に行って、何食わぬ顔で、部屋に居座るよ、オレ。

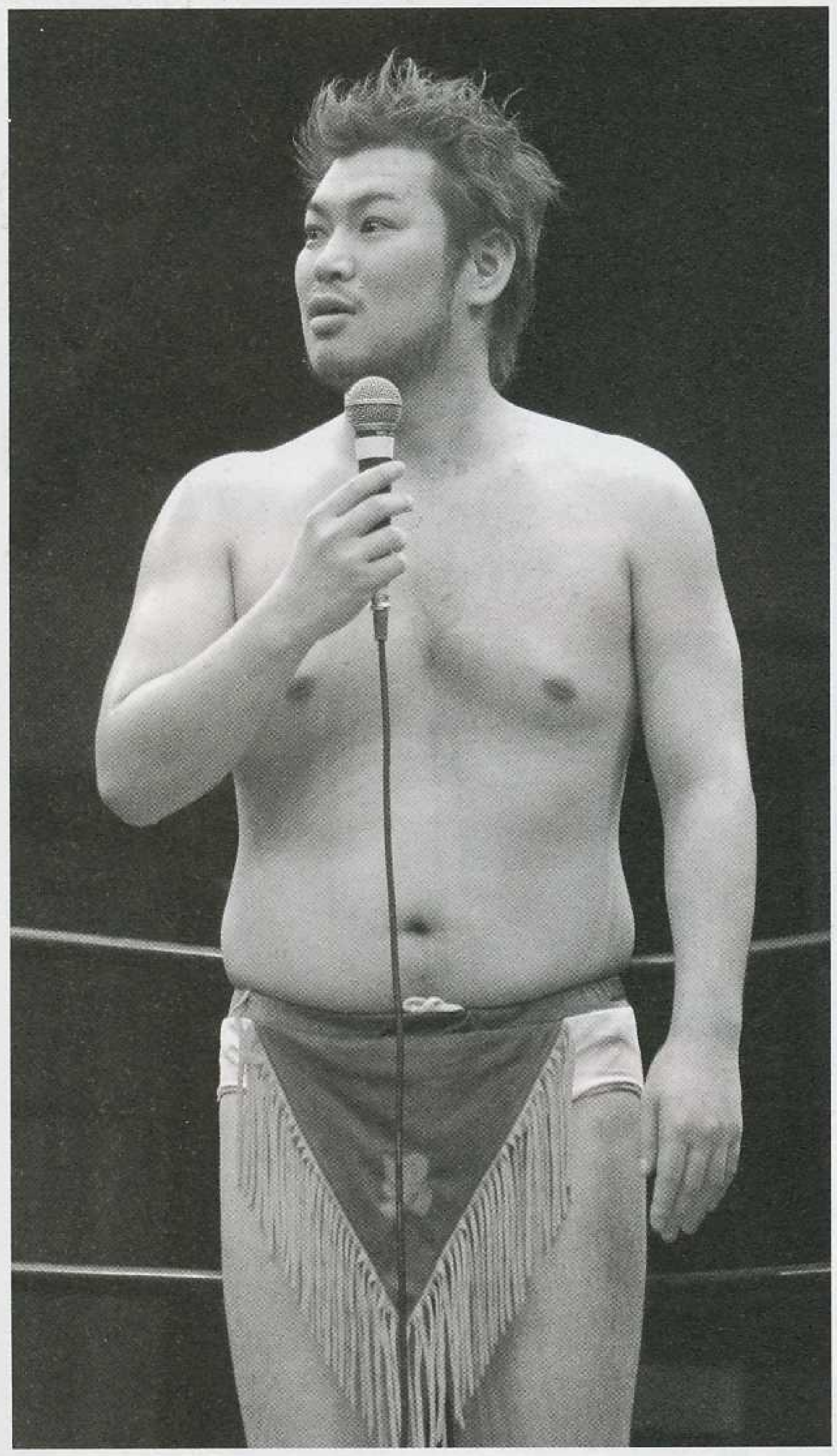
そのレポートは来年まで待っていただくとして、今回は、プロレスファンにとって、相撲と言えばこの人、「武藤敬司は美しい」でお馴染み、ＪＪモデルの髪型をした土俵の鬼・内館牧子先生の、「東スポ・プロレス大賞」での、２０１０年度のプロレス界総括が、本当に素晴らしかったので、ここにレポートしたい。

２０１０年プロレス大賞を受賞したみなさまにまず心から祝福を申し上げます。ＭＶＰはノアの杉浦貴史の圧勝でした。他にはフリーの小島聡、新日本の真壁刀義ら５人がノミネートされていましたが、杉浦は2位にトリプルスコアの差をつけました。（略）私個人といたしましては、杉浦が三沢を失ったリング上でマイクアピールしたんですね。「三沢さん小橋さんがいないノアはダメですか〜！」って言ったんです。私はこの一言に杉浦の自信とプライドが溢れている気がして大変に感激いたしました。昨年、杉浦は覚えているかわかりませんが、私はこの壇上で、殊勲賞の杉浦と敢闘賞の真壁に苦言を呈しました。「あなたたちはＭＶＰを取る人であり、三賞で満足してちゃ困るでしょ」と偉そうに言ったんですね。今年二人がノミネートされ、杉浦が受賞したということで、私は偉そうに叱ったかいがあったなと誇っております。（略）最優秀タッグチームは、中西、そしてストロングマンが選ばれました。私は中西とストロングマンの類い希な力を評価しており、今回かなり強行に選考委員長に申し上げましたんです。（略）まさに二人の力そして身体は金剛夜叉明王であると感じます。これはプロレスラーにしか持ち得ない身体であり力だと思っています。（略）。そして、賞にはいたりませんでしたが、私個人としましては、男色ディーノを強く推しました。というのは彼がなぜＤＤＴの総選挙でぶっちぎりの1位を取ったのか、これをよくお考えいただきたいのです。（略）単なる色物でしたらとっくに消えていると思うのです。（略）賞には至りませんでしたが、私はディーノの力というか思いをここであらためて評価させていただきます（後略）」

どーでしょう。いま、ここまでプロレスを熱く、しかも詳しく見ている人間がいるでしょーか？　男色ディーノは、そのパイルドライバーのフォームを見て、筆者もそーとーなプロレス通だと睨んでいたが、内館先生もわざわざ壇上からエールを送るほど評価していたなんて、先生、マニアックすぎます！

この授賞式、長い先生の総括を、そのうしろの金屏風の前で、中西を筆頭におもしろい顔の受賞者がずらりと並んで、神妙な顔で聴いていて、総括が終わったと思ったら、司会者の呼び込みコールの後、『炎のファイター』が流れて、猪木が入場。「元気ですか〜！」とブチ上げて、猪木の挨拶。

馬場からの挑戦状が来たが、三途の川で待っていると書いてある、でもあの人はケチだったから片道キップしかついてない。海老蔵の問題なんて小さえーことだ、そこに坂口征二さんがいるけど、旅館一つぶっ壊したよな。と、ゆーよーな内容をまったく支離滅裂、脈絡なく語って、筆者を「この人は、本当に大丈夫か？」と不安にさせたあと、いつもの、1、2、3、ダァーー！　で締めたのであった。なんてシュールな世界だろう。『東スポ』さん、懐が深すぎます！



いまやＤＤＴ系にとどまらず、新日本プロレスでも存在感を見せている男色ディーノ。内館先生には、佐藤ちゃんが編集長の『週プロ』で「男色ディーノは美しい」という原稿を書いてほしい。

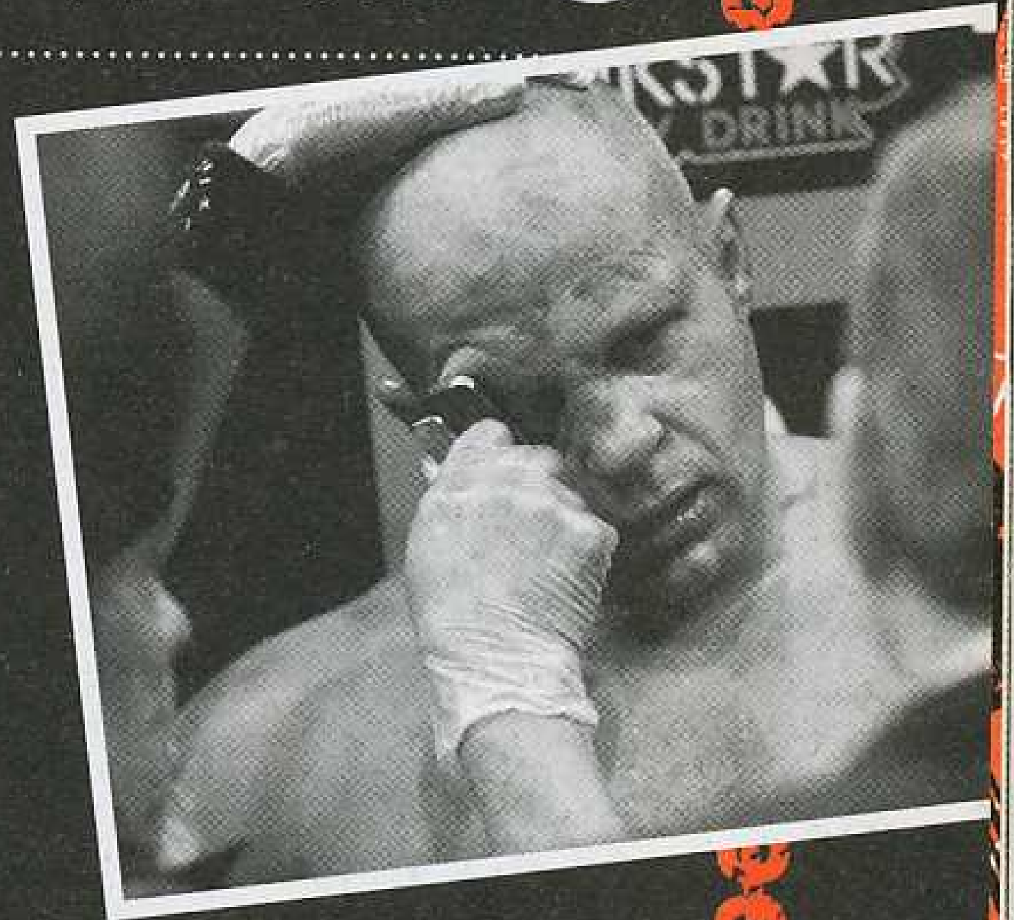
156号へのお便り紹介

ヒョードル引退の話は、同年代なので「おもしろい記事」というより、来たか！と。さみしい思いよりも、すっかりお疲れさまという気持ちです。
【埼玉県・稲葉耕三さん・会社員・35歳】

D お疲れさま、か……。ユーたちはオレがどれだけヒョードルの兄貴を好きか知ってるかい？兄貴はまだまだ闘いたいと言ってるそうだが、オレは兄貴がこの先どんなに無様な負け方をしても、それを讃えるだろうよ(しみじみと)。ユーたちにもそう思える選手の一人や二人はいるだろう？

「ありがとう！ヒョードル座談会」がよかった。まず、表紙のヒョードルの痛々しい顔に絶句……。とうとうその時が来たかという感じでした。ヒョードルvs藤田和之が自分内ベストバウトでした!!
【埼玉県・古道栄太郎さん・自営業（兼アルバイト）・39歳】

D おいおい、ユーはヒョードルの兄貴のベストバウトを勝手に決めちまってるのかい？ちょっとそれにはオレの意見も聞いてくれよな。そうだなあ、ま、ノゲイラ戦というのはオーソドックスかもしれないし、チェ・ホンマン戦というのも大穴すぎるかい？



ギルバート・メレンデスのインタビューがよかった。ますます川尻との試合が観たくなった！K－1ルールでも魔裟斗を黙らせてくれ！
【石川県・浅井清治さん・会社員・38歳】

D これでタツヤが勝てば、おいしいとこは総取りって感じじゃないか。ついにタツヤにもこのときが来たな。アッハッハッハ！寂しい思いをしている日本のファンのために、ぜひ一発かましてやってくれよな。

高森篤子さんのインタビューがおもしろかった。壮絶すぎて何も言えません。
【大阪府・佐藤直大さん・会社員・36歳】

D いったいイッキ・カジワラというミスターは何者なんだい？え？『あしたのジョー』の原作者だって？そんなキーパーソンのワイフというのは、こんなにも壮絶でなくちゃいけないもんなのかい？まったく偉人というのはオレのようなただの凡人にとっては、想像を絶するワールドで生きてるんだな……。

ダナ・ホワイトインタビューがおもしろかった。日本格闘技界のシットな部分をハッキリと批判するダナに好感が持てたし、UFC日本大会が楽しみすぎるから。
【埼玉県・星喜幸さん・会社員・24歳】

D どうやらダナは本当にジャパン大会を開催しようとしているらしいじゃないか。もし日本のことでわからないことがあれば、オレが通訳兼アドバイザーになってやってもいいんだぜ。クックックック。え？オマエはじつは英語がしゃべれないんじゃないかって？ま、そういうことは言わぬがフラワーってヤツだ……。



宮下トモヤの記事がよかった。所英男が『Dynamite!!』で言ってた人で気になってたので、『kamipro』で知ることができてよかったです。闘病って凄くキツイと思うけど、前向きな言葉が多くて私が元気をもらいました！リングでの宮下トモヤを早く応援したいです!!
【大分県・酒見真由さん・中学2年生・14歳】

D そういえば、トモヤ・ミヤシタというボーイはオペが大成功だったらしいじゃないか。ホントによかったなあ。何はなくとも人間は命が一番大事だからな。これからどんどん回復して、またリングに復活してくれよな！え？オマエにしてはコメントがマジメすぎる？たまには許してくれよお。



聞 くところによると、タツヤ・カワジリがついにアメリカに上陸するそうじゃないか。ヒャホー！やったなタツヤ。これで勝ってもらわないとオレの人生お先真っ暗だからホンキで頼むぜ！え？子どもが産まれたから出産祝い寄こせ!?おいおい、それとこれとはまた話が違うっていうかさ……。

kamipro156号 おもしろかった記事 RANKING

- NO.1 ジョージ高野×ドン荒川
- NO.2 寺西勇[後編]
- NO.3 宮下トモヤ
- NO.4 ヒョードル座談会
- NO.5 RENA×今田耕司

今号はプロレスも格闘技もいい感じでランクインしているな。もちろんイッキ・カジワラの特集も大評判だったみたいだが、これは票が割れちまったみたいだな。ま、そんななかでもオレは断然RENAの記事だぜ。やっぱりガールズの記事というのは、オレの渇いたハートを刺激してくれるからな。クックックック。



東京都・サカモトカズヤさん／カ、カズヤ……。ユーはひさしぶりすぎるじゃないか。なぜ近頃はご無沙汰だったんだい？まったく心配させやがって。

おいおい、マット界の春はいつやってくるんだい？



衝撃ショット!!



S波氏から再び秘蔵写真到着！今度はベニー・ユキーデ!!

ユーたちは前号のもくじのベニー・ユキーデを見たかい？S波氏はこの写真を見て「懐かしいなあ」と思いながらまたまた写真を投稿してくれたんだぜ。まったく、あいかわらずヒャッホーだぜ！ちなみにこの写真は「1977年8月に、アントニオ猪木がモンスターマンと異種格闘技戦をやったときに（ユキーデが）一緒にトレーニングパートナーとして来日していて、ロードワーク後の新宿・京プラ前で撮ったもの」とのことだ。S波氏はなんと高2！2Lに引き伸ばした写真に、11月に再来日したときにサインをもらったそうだ。まったく熱心すぎやしないかい？

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

“読者ペイジ”ジャクソン

寺西勇の後編インタビューがおもしろかった。生き様をプロレスラーとしての誇りに感じた。とくに溝の中に落ちて無傷だったというエピソードで、「さすがプロレスラーですね！」と感心された話は本当にうれしいです。
【神奈川県・佐々木学さん・会社員・45歳】

D マナブは毎号のようにハガキを送ってくれるが、こういうエピソードにシビれるってことはプロレスラーが好きなんだなあ。しかし、ジャイアント・ババというミスターの幻想もこのテラニシってミスターのインタビューによって高まったってヤツだぜ。

今回はなんといっても堀辺先生のお話ですね。これだけ合理的な話を聞いたのは初めてです。堀辺先生のお話で最も刺激的だったのは、張り手が主流になり、そのことによって興行形態が変わる可能性が高いということです。ただ、堀辺先生が書いていらしたように、そういう相撲が見たいかと言われると、見たくないような気がしてしまいます（以下略）。
【東京都・荒井弘和さん】

D 確かにホリベ・ティーチャーの話には目から鱗だったぜ。だってよお、スモウが打撃系の格闘技になるって、誰が考えたことがあるかっていう話だぜ。まったく、最近はアイヘンシュウチョウのような雰囲気すら感じるよな。



今回の梶原一騎特集はおもしろかった。とくに真樹先生のコンプレックスの話がよかった。梶原一騎がどんなに荒れた時期でも、ほとんど二人の仲がかなりよかったというところに、凄くホッとする。それにしても、10代にしてほぼ100人斬りって……。
【千葉県・あしたのキョーさん・33歳】

D おいおい、マキ・ティーチャーってヤツはとんでもない人物だぜ。10代にして100人斬り……。オレにとってはこの世のものとは思えない事件だな。

ジョージ高野とドン荒川の対談がおもしろかった。荒川さんがいい味出しているのと、高野兄弟の近況がわかっただけでもトクした気になりました！
【福島県・長谷川隆さん・会社員・47歳】

D 前号のなかではこれが一番人気のインタビューだったみたいだな。それにしても、アラカワってオヤジの写真の表情がとんでもなくおもしろいじゃないか。この顔を見ただけでもサクセスプロジェクトだったという感じだよな。

RENAと今田耕司の対談がおもしろかったです。お笑いの方と格闘家の対談は相性いいですよね。またお願いします！
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・46歳】

D 聞くところによると、RENAは大物お笑い芸人との対談でとっても緊張していたそうじゃないか。まったくどこまでボーイズのハートをくすぐるんだい？ しかも、今回の写真もなかなかナイスじゃないか。すでに大物の貫禄だぜ。



斎藤貴男インタビューがおもしろかった。どうして『kamipro』に斎藤貴男？ そこが『kamipro』のおもしろさであるわけですが、『週刊金曜日』も愛読している私にとって、まさか斎藤貴男を通して『kamipro』とリンクするとは驚きを超えて奇跡としか思えず、『金曜日』で社会意識を、そして『kamipro』で非社会意識を育み、梶原一騎のように子ども心を失わない大人になりたいと思うよい記事連発でした。
【東京都・渡辺信祥さん・会社員・38歳】

D おいおい、『kamipro』で非社会意識を育んだってどういうことだい？ まったくユーたちは油断も隙もないヤツらだぜ。ユーは社会性を育むより、イッキ・カジワラと『kamipro』でファンタジーを学んだほうがいいんじゃないかい？

『プロレススーパースター列伝』の原田久仁信先生の話がおもしろかった。梶原一騎の思惑で、あの川島なお美と結婚させられそうになっていたとは……。そうだったらいま頃川島なお美も、あんなワインキャラ（いい意味で）にはなっていなかったんだろうなあ。
【石川県・河島なお子さん・会社員・36歳】

D ミスター・ハラダがあのナオミ・カワシマと結婚するはずだったんだってえ!? おいおい、オレになんの断りもなくナオミ・カワシマに近づこうとするなんて、オレがどんだけナオミのファンなのか知ってて言ってるのかい？ まったく冗談じゃないぜ（怒）。

ブラックアイさんのインタビューが興味深かった。関本大介なのか……。ボクもほとんどプロレスについて行けなくなっているので、今度は関本大介の試合から学習し直そうと思う。
【匿名希望さん】

D オ、オレも一緒に勉強させてくれ！

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「失踪」
係まで。

携帯サイト『kamipro Move』
からの投稿もできます。



兵庫県・ハワイアン・グレイシーさん／おお、リン・ナカイのイラストが載るのははじめてなんじゃないかい? やったなナカイ！ カンチョウにもよろしく伝えてくれ！



鹿児島県・吉永努さん／ミスター・ムサシのアナゴを紹介したのはたしか年末あたりだが、ユーはいまだに引きずっているんだな。その気持ち、わかるぜ！

団体オフィシャルおよび関係者のツイッターアカウント

※オフィシャルや代表者のアカウントを集めたんだが、載ってないものがあったらぜひ教えてくれよな!

谷川貞治 FEG代表「K1_Tany」
FEG宣伝熊「K1_Kuma」
DREAM「dreamPR」
笹原圭一 DREAM EP「sasaharakeiichi」
SRC「SRC_mobile」
DEEP「deep_official」
佐伯繁 DEEP代表「sigeru_saeki」
ダナ・ホワイト「danawhite」

WWE「WWE」
新日本プロレス「njpw1972」
菅林直樹 新日本プロレス代表「NJPWSUGABAYASHI」
武藤敬司「muto_keiji」
DDT「ddtpro」
高木三四郎「t346fire」
天龍プロジェクト「tenryuproject」
ゼロワン「Zero1_Fos」

山口日昇「noboru_yama」
SMASH「SMASH_2010」
酒井正和 SMASH代表「SMASH_Sakai」
アイスリボン「ice_ribbon」
さくらえみ「sakuraemi」
19時女子プロレス「19pro」
アントニオ猪木「Inoki_Kanji」

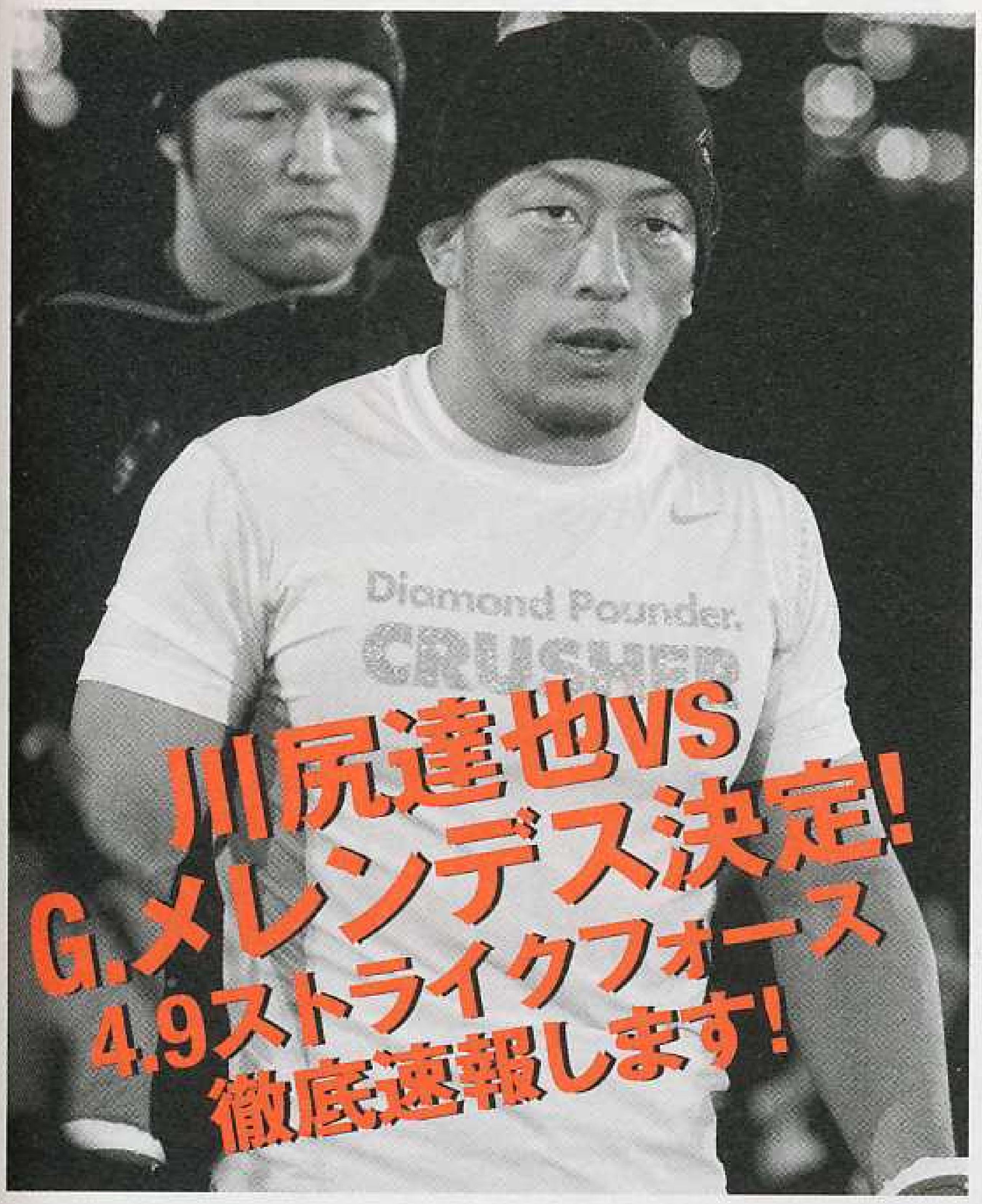
kamipro Move カミプロムーブ

サービス利用料 月額315円(税込)

アクセス方法

iモード	iメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
EZweb	EZトップメニュー	スポーツ・レジャー	格闘技	
Yahoo!ケータイ	メニューリスト	スポーツ	格闘技	

主要3キャリア全端末対応(※端末により一部非対応コンテンツあり)



©SHOOT BOXING

週刊コラム絶賛配信中!!

月 音声コンテンツ『mimipro』
コラム枠に大好評企画『mimipro』が登場! マット界の気になる話題を編集部やときには大物ゲストを招いて斬りまくります。

火 金沢"GK"克彦の『こちらプロレス村役場』
『kamiproドットコム』大人気連載が携帯サイトに帰ってきた!! その週のプロレス界を元『週刊ゴング』編集長が斬る!!

水 橋本宗洋の『格闘裏グルメ』
ツイッターでも絶賛つぶやき中の重量級ライター・橋本宗洋がその週の格闘技界の見どころを鋭くえぐってズバリ解説!!

木 高橋ターヤンの『This Week MMA』
最先端と言われる北米MMAを中心に、日本の目線で読み解きます!! 海の向こうの気になる話題を掘り下げてます!!

金 kamipro Move Special Interview
とっておきの発言がここから飛び出す!? 旬のファイターや関係者を直撃するインタビューコーナー!!

土 清野茂樹の『実況ワンダーランド』
プロレス&格闘技の実況を担当しているキヨアナが、放送席から見た"至近距離の真実"を書きつくす!!

日 ニュース特選『kamiの一週間』
その週に起こった出来事をヨタ話で振り返るいろんな意味で反響が大きい爆弾企画。これを読まずにマット界は語れない!?



不定期コラム
『週刊!? ワオ木真也』
昨年の『Dynamite!!』しかり、何かと話題豊富な青木真也が最低でも週1回、勝手気ままに書きまくる不定期更新コラム。常に反響がデカいです!!



ツヨカワ女子の毎日ブログ!
『RENAのSB ダイアリー』
『kamiproムーブ』でおなじみ、選手の毎日ブログ連載は、SBで活躍する19歳のツヨカワガールRENA! 女子格ファイターの日常を要チェック!!



北米MMAの最新情報を毎日お届け!
『日刊ワールド MMA』
世界は常に動いている! というわけで、北米MMAの最新情報を、大人気ブロガー・ジーニアスさんに毎日届けてもらってます!

eb! enterbrain

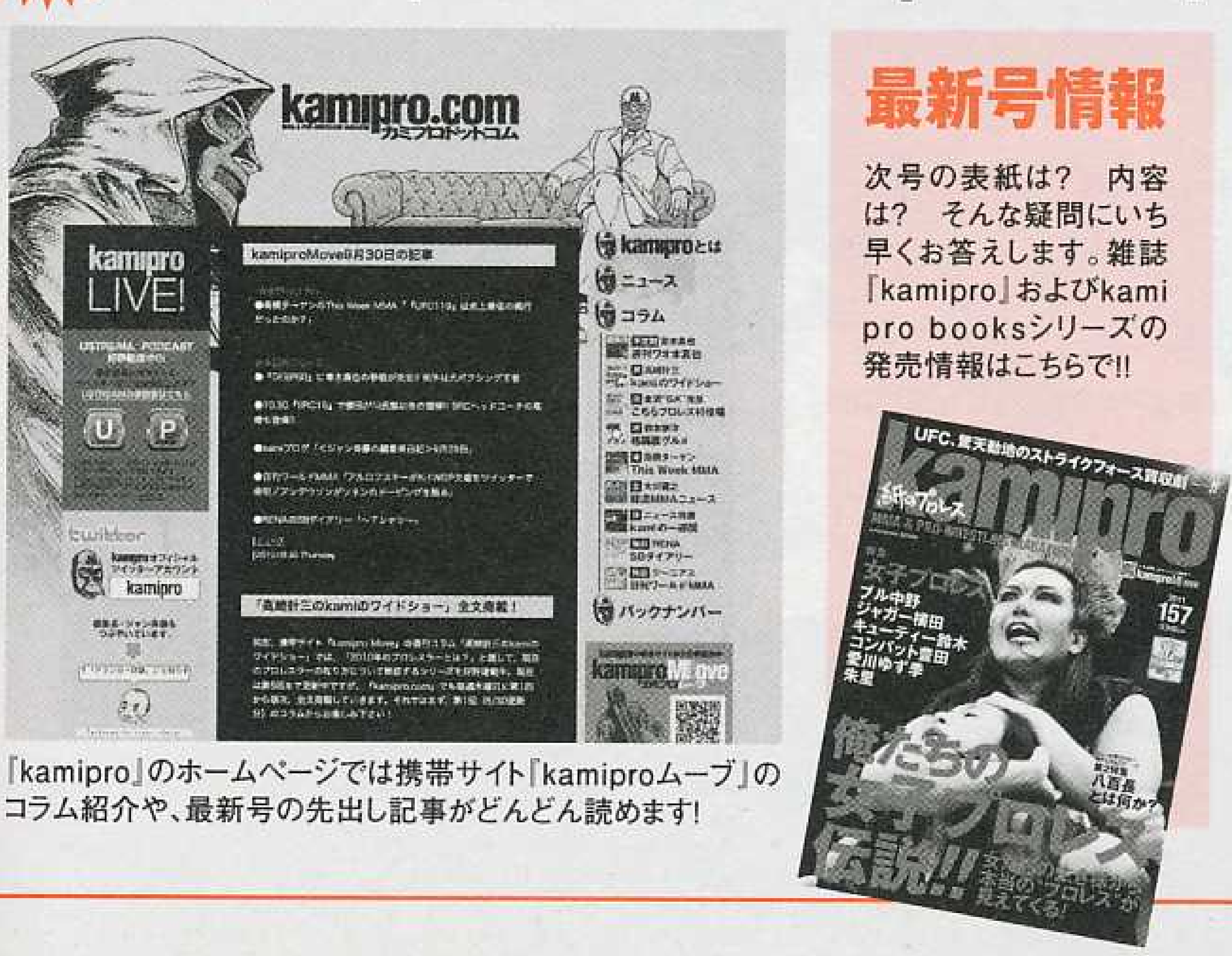
おかげさまで10周年 エンターブレイン ANNIVERSARY 10th

株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

プロレス&MMAの総合WEBサイト
kamipro.com
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE カミプロドットコム

無料です!

レッツ毎日アクセス!!
http://www.kamipro.com/

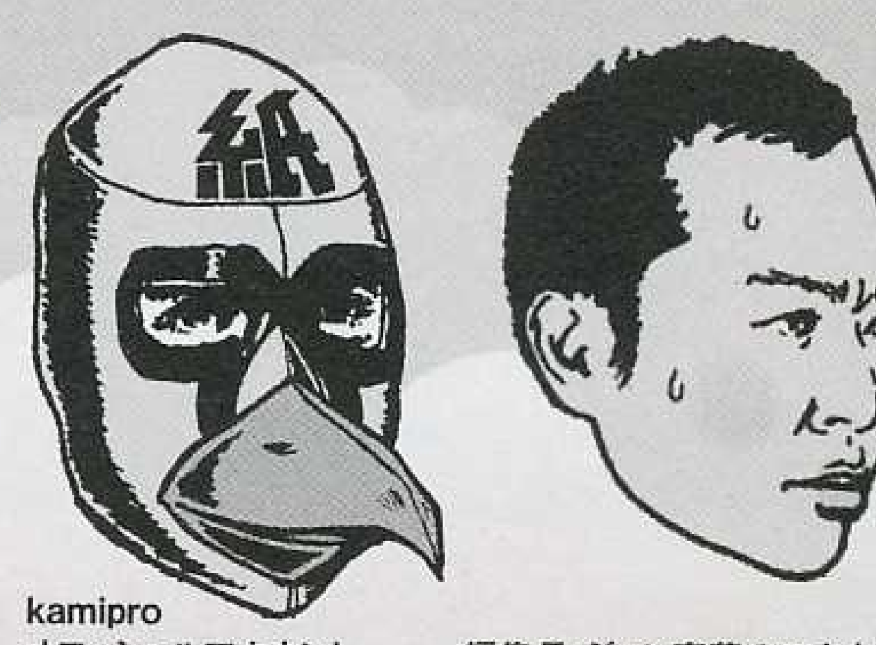


最新号情報
次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします。雑誌『kamipro』およびkami pro booksシリーズの発売情報はこちらで!!

『kamipro』のホームページでは携帯サイト『kamiproムーブ』のコラム紹介や、最新号の先出し記事がどんどん読めます!

ツイッター、USTREAMもやってます!

twitter
ツイッターをやってる人もやってない人も必見の『kamipro』アカウント。編集部のくだらないネタや、マット界を読み解くヒントがここに隠されているかも!?



kamipro オフィシャルアカウント
kamipro

編集長・ジャン斉藤のアカウント
kamipro_saitou

Follow us on Twitter

USTREAM LIVE!
選手や関係者、ライターを招いて無料でUSTREAMを配信中! リアルタイムな話題が動画で楽しめます。検索方法はUSTREAMのトップページから「kamipro」で検索し、「kamipro_saitou」をクリック。



女子プロ界の乳ヒロイン・ゆずポンが100センチの胸を揺らして激語り!?

『スターダム』所属

愛川ゆず季

職業・グラレスラー

パイパイパパイパイ、パ〜イレンジャ〜♪
「夜のお供からリングのお供へ」を合い言葉に、
昨年10月にグラビアの世界からリングへと活躍の場を広げた
愛川ゆず季。今回はデビュー戦を各方面で絶賛された
ゆずポンのプロレス観を探るべく、急接近しちゃいましたよ!

聞き手／鈴木佑、高橋洋平　撮影／平工幸雄、金山フヒト

――先日は『アメトーーク！』（『テレビ朝日』系列）の女子プロレス芸人に出演されたそうですね（取材は番組放送前に収録）。

愛川　はい！　グラビアとかタレント活動もしながらプロレスをやってる、〝グラレスラー〟として取り上げていただきました。ずっと私の練習とか試合当日にも密着してもらって。

――番組には同じスターダム所属の美闘陽子選手と、栗原あゆみ選手も出演したとか？

愛川　そうですね。内容的にはいままでの女子プロの歴史や名珍場面を振り返りながら、最後に私たちがいまの女子プロレスラーとして紹介されて。ホントに女子プロが好きな芸人さんたちとご一緒させてもらったので、収録現場は凄く盛り上がっておもしろかったですね（ニッコリ）。

――もちろん、ゆずポンキックのお披露目も？

愛川　はい、ちゃんとケンドーコバヤシさんに浴びせてきました（笑）。もともと、プロレスをやる前から面識もあって。

――グラビアアイドルだと、バラエティ番組なんかでいろいろ芸人さんとの接点も多そうですね。でも、まさかそのバラエティに〝女子プロレスラー〟として自分が出演する日が来るとは思わなかったんじゃないですか？

愛川　そうですね〜。きっと普通のアイドルのときだったら『アメトーーク！』に出ることもなかったと思うので、今回は「プロレスやっててよかったな」って思いましたね（笑）。

――巷で大評判だったデビュー戦の高橋奈苗戦から少し経ちましたけど、プロレスになじんできた実感はありますか？

愛川　いえいえ、全然ないですねえ。いまだと月2回くらいの試合ペースなんですけど、大会が終わってホッとしてもすぐに、「あ〜、またあと何日後に試合だ」って感じですね。やっぱり試合前はつらいですよ、恐怖心とか緊張とか。





デビュー戦でゆずポンはグラドルにあるまじきボロボロ状態になりながら、トップレスラーである高橋奈苗と熱戦を展開！　試合後に高橋から「おまえ、ホントにデビュー戦かよ！」という声を引き出してみせた。

――あ、緊張しますか？

愛川　ハンパないんですよ、それが！　私、いままで緊張とかしたためしがなかったんですけど、プロレスだけはホントに緊張しますね。

――ほ〜、芸能のお仕事とは何が一番違いますか？

愛川　ライブ感という部分では、私も舞台とかやったことあるんでアレなんですけど、やっぱりプロレスはケガがつきものなので。あと、プロレスを始めてからは「お金を払って観に来てくれてるお客さんに満足してもらわないと」って凄く思うようになりましたね。いままでは何をやるにしろ、そういうことをあんまり考えたことがなかったんですけど。

――痛みには慣れてきました？

愛川　いや、全然！　試合が終わった次の日はボロボロになってます。たぶん一生懸命というか必死すぎて、自分の持ってる以上のものを試合で出しちゃうからだと思うんですけど。

――それはプロ向きというか、本番に強いタイプってことだと思いますよ。プロレスをやってて楽しいのはどんなときですか？

愛川　え〜と、試合後ですかね（笑）。

――試合後（笑）。

愛川　試合が終わったあと、売店に行くのがホントに幸せなんですよ。「終わったー！」っていう解放感と、ファンの人の「感動したよ」って言葉で安堵感に満たされるっていうか。

――なるほど〜。じゃあ、逆にプロレスに難しさを感じるのはどんなところですか？

愛川　同じキャリアの子とシングルで闘ったときに、「プロレスってホント難しいな」って思いましたね。そのときは私が引っぱんなきゃいけないっていうか、「どういうふうに試合を運べばいいのかな」っていろいろ考えましたね〜（しみじみと）。私ってキックが主体じゃないですか？　「ゆずポンキック」は、おもいっきり蹴らないとダメっていうか、説得力がないんですけど、相手が細い子だったから「凄いダメージで試合が途中でできなくなったらどうしよう」とか心配になっちゃって。

――なんか、強者の悩みみたいですね（笑）。

愛川　いやいや、そんなことないです（苦笑）。あとは、やっぱり試合が自分の思い描いてるようにいかなかったりもしますし。まだ、私はお客さんの反応を考えながらするプロレスができてないので、そういう部分は「ホント、難しい！」って思いますね。

――ちなみにいま、愛川さんの仕事のなかでプロレスが占める割合ってどれくらいなんですか？

愛川　いまはほとんどプロレスですね。

――へ〜！　じゃあ「職業は？」と聞かれたら？

愛川　「グラレスラー」って答えます！（キッパリ）。「グラビアやりながらプロレスもやりますよ」ってことで。両方やってこそ、私の価値があると思ってるんです。

――プロレスをやることで、自分のなかで変わったことってありますか？

愛川　う〜ん……さっきも言いましたけど、いままでは緊張することがなかったので、自分のなかでその沸点が高くなったと思うんですよ。だからちょっとしたことでは動じないようになったんじゃないかなって。



この取材の段階で、実戦経験はまだわずか5試合のゆずポン。試合前には背筋を伸ばし、緊張の面持ちで出番を待っていたのが印象的であった。

プロレスをやってて楽しいときですか？　え〜と、試合後です（笑）

愛川ゆず季

——勝負度胸がついた、と。いまは練習って週にどれくらいやられてるんですか？

愛川　行けるときはなるべく行くようにしてます。それ以外だと、自宅でずっと試合の映像を観てますね。

——どういう映像ですか？

愛川　自分の映像を（笑）。いままでの試合とか、けっこう自分を観るのが好きなので。ナルシストっぽいですけど（笑）。

——いえいえ、芸能人はそうじゃないと。

愛川　あ、でもほかの女子プロの試合も観ますよ。小川さん（ロッシー＝『スターダム』代表）から借りたアルシオンのＤＶＤとか、あとは高木社長（三四郎）からもらった『マッスル』も観ました。

——『マッスル』ですか！　どうでしたか、プロレスの向こう側は？（笑）。

愛川　いろんな意味で勉強になりましたね。（笑）「プロレスって幅広いんだなあ」って。

——そういえば、愛川さんは高木さん率いる国民的ユニット、ＴＫＧ48にも加入してるんですよね。

愛川　はい、高木社長のトークショーに出演したときに、勧誘していただいて。

——高木さんは愛川さんがデビューした前後から、いち早くゆずポンキックを使ってますからね（笑）。

愛川　アハハハ、私も高木さんにスタナーを教えてもらいました。そういえば、高木さんがユニオンプロレスでゆずポンキックを繰り出すと、会場で大声援が起こるらしいんですよ。私はまだまだ全然起こらないのに（苦笑）。なので、どれだけ私を上回ってるのか、実際に会場で観てみたいですね。私も「ゆずポ〜ンキック！」って声援を送ってみたいです（笑）。

——本家なのに（笑）。ＴＫＧつながりでいうと、よゐこの有野晋哉さんがアイドル雑誌の『ＢＯＭＢ』のコラムで「愛川はヒールに転向して、ダンプ松本みたいなメイクでＡＫＢ劇場に乱入してほしい」って書いてましたね。

愛川　そうなんですよ〜。でも、そもそも私はＡＫＢの人たちと共演したことないんで、なんで乱入するのかなって（苦笑）。

——愛川さんはヒール願望とかってあるんですか？

愛川　それは考えてないですけど、リング上では普段の自分と違う自分を出せてる、リング上の私と普段の私は全然別物だと思ってます。なんか「新しい自分発見」みたいな、フフフ。

——いまはプロレスをやることになって、ケガも絶えないと思うんですけど、ほかの仕事に支障とかは？

愛川　だから、大会前後はそういうお仕事は入れないようにしてるんですよ。「おもいっきり試合に臨めるように」っていう環境を作ってもらってるというか。

——最近の試合だと、愛川さんのセールスポイントである巨乳を、元ヤンレスラーの世Ⅳ虎選手に攻められてましたよね。あの、凄く頭の悪い質問ですけど、巨乳ってケガしたりするもんなんですか？（笑）。

愛川　アハハハ！　私の胸は本物なので大丈夫です（笑）。もしかして、シリコンだと痛かったりするのかもしれないですけど。

——あと、試合中に苦痛の表情だったり、けっこう顔を歪めたりするじゃないですか？　あれはアイドル的にＯＫなのかなって。

愛川　ホンッット、試合中の顔の写真がヒドいのが多いんですよ！　変顔のオンパレードというか、凄い顔しちゃってて。最初はそれを見てけっこうショックだったんですけど、もはやすっかり世に出回ってしまったので、もうあきらめました（笑）。

——観念しましたか（笑）。愛川さんのプロレス活動について、事務所の反応はどうなんですか？

愛川　全面的にバックアップしてくれてますね。2月の『ゆずポン祭り』にも事務所の人たちが観に来てくれて。でも、堀田（祐美子）さんに私が場外でボコボコやられてるときに、やたらに爆笑してる男の人がいたんで、「誰だ？」と思ってパッと見たら、私のマネージャーだったんですよ（笑）。あとで厳重抗議しましたけど。

——身内が爆笑してましたか（笑）。しかし、自分がこんなにスッポリとプロレスにハマると思ってましたか？

愛川　正直、始めたときは「すぐにできるようになるだろうな」って甘く考えてた部分もあったんですよ。だけど、練習をしていくなかで「これは無理だ」ってすぐに思って。だから、いまも試合しながら自分が凄いとは全然思ってないので、周りの人がほめてくれるのが信じられないくらいなんです。試合中もお客さんの声が耳に入らないぐらい、余裕がないですし。

——そんなふうには見えないですけどね〜。そういえば、ズバリ胸元がセクシーなコスチュームは自分でデザインしてるって聞いたんですけど？

愛川　そうなんですよ。いままでのグラビアとかでは用意された衣装を着て、言われるがままってばっかりだったんですけど、プロレスは自分がやりたいようにプロデュースできるので、やりがいがありますね。そこはうれしいです（ニッコリ）。

——あの入場曲の『爆乳戦隊パイレンジ

ャー』もインパクトありますよね、「パイパイパパイパイ、パ〜イレンジャー〜♪」っていうフレーズが耳に残るというか（笑）。

愛川　あ〜、なんか私が入場曲に使ってからけっこう口ずさんでる人も多いみたいで、着うたサイトのダウンロード数でいきなりランクインしたって聞きましたね。

――へ〜、パイレンジャーのパイブルーとしてはうれしいんじゃないですか？（笑）。

愛川　そうですね（笑）。

――さて、いま愛川さんはスターダムという団体に所属してるわけですが、一つ気になるのがほかの選手とうまくやってるのかなってことなんですよ。

愛川　え、どういうことですか？

――以前、デビュー前に練習風景を取材させてもらったときに、ほかの選手は途中休憩とかはみんなで一緒に固まって和気あいあいとしてるのに、愛川さんだけ一人でポツンとしてたのが印象的だったんです（笑）。いまは団体として旗揚げもしたわけですし、仲よくやってるのかな、と。

愛川　あ、それはいまでも変わらないですね（アッサリ）。

――あ、変わらない（笑）。

愛川　べつに周りにいじめられてるとかではなく、単純に私がそういう性格というか、マイペースすぎるところがあるんですよ。

――え〜と、協調性がない？

愛川　協調性は……ないです。まあ、スターダムは10代の子が多いので、私が話題についていけるかなっていう部分も（苦笑）。

――自分の本（『血心』）に書いてましたよね。「みんなは『練習が楽しみで、早くここに来たくなる』って話してるけど、私は練習が憂鬱だ」って。

愛川　アハハハ！　それは本心です（笑）。練習は好きじゃないんですけど、試合をするなら練習をしないと不安でしょうがないから、練習したくなるって感じですね。

――自分の不安を少しでもなくすために。

愛川　はい、「お願いだから練習させてください」くらいの感覚です。やっぱりタレントの仕事をしながらだと、練習しないで試合をしなきゃいけないみたいな状況もあるんですよ。だから、そういうときは小川さんに頼み込んで「練習させてください」って。あ、でもホントに練習はそんなに好きじゃないですよ！

――そんな強調しなくても（笑）。でも、この前のタッグマッチでも、隣に並んだ選手よりも愛川さんのほうが筋肉のつき方とかプロレスラーっぽいっていうか、たくましかったですよ。



おのずとセールスポイントの巨乳が目立つような攻撃を受けることが多々あるゆずポン。やはり“見られる仕事”をしていただけに、やられる表情一つとってみても、いやはやバツグンである。

愛川　……それ、レスラーとしてはうれしいですけど、女性としてはほめられてるか微妙です（笑）。

――失礼しました！　そもそも愛川さんって、プロレスをやる前から身体を張るような仕事が多くなかったですか？

愛川　そうですね、潜水やシンクロナイズドスイミング、あとはチアダンスやったりとか、身体を使う系がホントに多かったですね。身体を使ってナンボというか。そのときはホント、一生懸命に練習しましたし、昔からバレエをやっていて、その発表会に向けて猛稽古する習慣があったので、自然と「練習しなくちゃ」って感覚は身についてるのかもしれないですね。

――それがいまもうまく活きてる、と。ちなみに試合の映像とかを親御さんに見せたりとかは？

愛川　見せてないです。もともとプロレスやることにも凄く反対してたんですよ。いまは「頑張って」って言ってもらえるようになったんですけど、「試合は怖いから観には行けない」って言いますし。専門誌とかも読んでないと思います。

――でも、ブログとかでケガの様子とかはチェックしてるんじゃないですか？

愛川　だからあんまりひどいのは載せられないですね、心配かけちゃうから。いつも試合が終わったあとは電話して、「全然、大丈夫だから」って言ってるんですけど。いまは試合を観にきてほしいとかも、あんまり思わないですね。自信がないとかじゃなく、私が親だったら自分の子どもがあんなに痛がってるのを見たくないなって思うので。

――もともと、愛川さんって凄いお嬢様育ちなんですよね。実家は果物の加工業で農園や工場を持ってて、愛川さんはバレ

明日のニューヒロイン候補！『スターダム』注目選手


美闘陽子（びとう・ようこ）
ゆずポンとともに美人レスラーとして『アメトーーク！』に出演。極真空手の全国大会で上位入賞のキャリアを誇り、『スターダム』のエース候補として期待がかかる。


世IV子（よしこ）
現在、『スターダム』で大暴れしているのがこの世IV子。元ヤン臭の漂うリングネーム、17歳にしてこのパンチの効いたルックスと、大型ヒールの素質充分！


夢（はるか）
女子プロレスラー最年少の小学2年生。『スターダム』では“キッズファイト”と称して、ほほえましくも頼もしいSB仕込みのキックを武器にファイトを展開中。



長野美香（ながの・みか）
『ジュエルス』で美しすぎる格闘家として活躍中の長野も『スターダム』に参加。風香のリングコスチュームを譲り受け、プロレスと総合の両立を目指す。

グラレスラーの勧誘活動をしても一切反応はないですね（笑）

エ以外にも書道やピアノや水泳を習ってたっていう。

愛川　そうなんですよ。ホント、こうなってちょっとごめんなさいって感じです（笑）。

—プロレスを始めてからファン層って変わりました？

愛川　どうなんですかねー。凄くプロレスを反対する人もいるので、もしかしたら「ファンを卒業します」って人もいたかもしれないですね。でも、プロレス好きの人が私に興味を持ってくれたっていうのも感じます。

—ファンから何かプレゼントもらったりします？

愛川　はい、いただいてます。お菓子とか食べるものが多いですね。

—やっぱりプロレスを始めてから食べる量とか変わりましたか？　デビュー前に話を聞いたときには「タンパク質がほしくなる」って言ってましたけど（笑）。

愛川　そうですね、焼肉とかめっちゃ食べてますね（笑）。食べないと動けないから、体型とかあまり気にせずに。だから最近は太り気味なんで「ダイエットしようかな」って思ってます。グラビアの仕事があると、やっぱり体型を作らないといけないから痩せるんですよ。プロレスを始めてからは一度だけ、『フライデー』でやらせてもらったんですけど。

—そのときは傷跡とかは大丈夫だったんですか？

愛川　それは大丈夫だったんですけど、体重落とすのがやっぱりたいへんでしたね。そもそも私、勝手にドンドン太っていくタイプなので。人生で最高65キロぐらいまでいったことありますからね。

—あれですよね、ラーメン屋でバイトしてたときに、まかないで毎日のようにラーメンを食べてたっていう（笑）。

愛川　はい、だから気をつけてます。まだまだグラビアもできるように（笑）。

—いまって、もっと試合ができればやりたい感じですか？

愛川　いやあ、月2回でもキツイ感じなので。私は休まないとダメなタイプっていうか、集中して頑張って、休んでっていうのが一番合ってると思います。



あいかわ・ゆずき■1983年5月16日、愛媛県出身。2003年に芸能界デビュー。バスト100cmの爆乳で男性誌の巻頭グラビアや表紙を飾り、グラドルとしての地位を確立。2010年10月31日の『ゆずポン祭』で高橋奈苗を相手にプロレスデビュー。現在は『スターダム』に所属。158cn、50kg、B100/W60/H89、B型。

愛川ゆず季

—昔、『愛川ゆず季ノート』っていうのがあって、マネージャーさんがそこにいろいろ課題を書いて渡してたそうですけど、いまもそういうのはあるんですか？

愛川　あ、自分で作ってますよ。試合に向けてどういうところに気をつけようとか、忘れっぽいんでいろいろ書いてます。べつにマメってわけじゃないんですけど、デビューする前からちょこちょこメモってますね。

—ゴッチノートみたいですねえ（笑）。ちなみに、大会中に愛川さんの事務所の後輩がダンスをやったりしてますけど、ほかのアイドルでプロレス入りに興味を示してる人っています？

愛川　それがいろいろ声をかけたり、ブログに書いて呼びかけたりしてるんですけど、一切ないですね（笑）。

—ハハハ！　愛川さんはテコンドーとかバックボーンもあって、なおかつデビュー戦で凄い試合をやったので、ハードルを上げちゃったのかもしれないですね。

愛川　ああ〜、そうなのかもしれないですねえ。グラレスラーっていうジャンルを開拓したかったんですけど……。

—一代で終わっちゃうかもしれない、と（笑）。あと、タイムリーな話題なので聞いておきたいんですが、愛川さんに必殺技の「ラ・ゆずヒストラル」を伝授したNOSAWA論外さんの逮捕についてはどう思いました？

愛川　いやもう、ビックリしましたよ！　普通にYahoo!のトップになっていたので、「エー!?」みたいな。

—もともと、どういうきっかけでNOSAWAさんに教えてもらうように？

愛川　私が初めてプロレスの練習をしたときにコーチしていただいたのがNOSAWAさんだったんですよ。小川さんが連れてきてくれて。そのときに「じゃあ、まずプロレスごっこからやってみて」って言われたのに、何も動けなかったのを覚えてますね。でも、実際にコーチしてもらったのは2回ぐらいなので、ホントに教えてもらったというと語弊があるというか。

—じゃあ、逮捕されてからは連絡も何も？

愛川　いや、連絡先も知らないです（笑）。

—そうですか（笑）。基本的に指導を受けてるのは風香さんですか？

愛川　いまは高橋奈苗さんですね。

—その高橋さんも尊敬する、大ベテランの堀田さんに愛川さんはデビュー2戦目で勝利しちゃったわけですけど、自分で事の大きさみたいなのは把握してるんですか？

愛川　はい、一応は理解してるつもりです（笑）。これからもいただいたチャンスは無駄にしないようにしていきたいですね。

—では、グラレスラーとしての今後のビジョンを教えてください！

愛川　やっぱり私もけっこういい年齢なんで、タイムリミットもあると思いますし、いまできることを一生懸命頑張って、一試合一試合を大事に闘っていきたいなと思います。あと、会場で観るときは「ゆずポ〜ンキック！」ってかけ声をお願いします！

【11年3月2日／都内・某所にて収録】



『ハッスル』の〝不遇のヒロイン〟から いまや女子プロ界のキーパーソンへ！

——朱里さん、大きなマスクを着けてますけどカゼですか？

朱里　いえ、昨日の試合中に自分の歯が唇のあたりを貫通しちゃって。すぐに縫ったんですけど、腫れ上がってグロいのでカムフラージュです。いまはこんな感じになっちゃってて……（マスクを取って傷跡を見せる）。

——うわ～、顔のケガだとお母さんも心配しません？

朱里　あ、お母さんには「花粉症だよ」って言ってごまかしてます（笑）。あの、私、『ｋａｍｉｐｒｏ』さんの取材ってひさしぶりですよね？

——そうですね。『ハッスル』でKG（朱里の以前のリングネーム）だった頃は何回か出てもらったんですけど、『ＳＭＡＳＨ』になってからは初めてですね。ちなみに、いまっておいくつになりました？

朱里　もう22になりました。あれからあっという間でしたね～、いろいろありましたけど（笑）。

——いろいろあった『ハッスル』時代のことも今日は振り返ってもらいます！（笑）。しかし、『ＳＭＡＳＨ』旗揚げから約1年ですけど、いまやすっかり女子プロ界の注目選手になっちゃいましたね。存在感が大きくなったというか。

朱里　はい、おかげさまで大きくなりました！　身体も大きくなりましたし（笑）。

——やっぱりゴツくなりました？

朱里　10キロ増えて、いまは60くらいですね。美容院とかで「ゴツくなったよね」って言われちゃうんですけど。

——たしか風香さんとシュートボクシングルールで対戦したときは48キロ契約でしたよね？

朱里　そうです。あれはもう死ぬかと思

『ハッスル』時代はつらかったけどKGは私にとって原点なんです



『SMASH』の女子エース
朱里

『ハッスル』活動停止にともない、『SMASH』の旗揚げに参加。現在の女子プロ界で確固たる地位を築いた朱里が、ひさびさに『kamipro』登場！　不遇の『ハッスル』時代を振り返りながら、『SMASH』への思いを語ってくれた。女子プロの明るい未来はここにある！

聞き手／鈴木佑　撮影／笹井孝祐

いましたね～。ホントに体調悪くて。風香さんがブログで「減量が凄いキッイ」とか書いてたから、「だったら体重あげてくれぇ」とか思ってしまいました（笑）。

――風香さんとは身長差もありますしね。さて、『SMASH』旗揚げからの1年を振り返ってみて率直にどうですか？

朱里　自分で言うのもヘンですけど、リングでの立ち方一つとっても「全然変わったな」って思いますね。周りからも「成長したね」って言ってもらえました。

――『ハッスル』のときと見比べるとやっぱり違いますか？

朱里　もう、『ハッスル』の試合は観れないです（苦笑）。しょっぱくてしょっぱくて……、心が痛くなりました。

――心が痛い（笑）。じゃあ、いまは充実してる感じですかね。

朱里　そうですね、やることも凄く多いですし。やっぱり試合してるだけじゃなくて、今年に入ってからはグッズの販売部長もやってるので。

――あれはギミック的なものではなくて実際にそうなんですか？

朱里　本当に全部やってるんです！　『SMASH』は手作り感覚というか、大原（はじめ）さんだったらチケット、児玉（ユースケ）さんだったらファンクラブ、TAJIRIさんは総括ってかたちで、所属選手で役割を分担してるんです。だから私もグッズの見積を出したり、自分でデザインをしてみたり、企画を考えたり。今年は福袋を提案して、けっこう売れたんでうれしかったですね（ニッコリ）。

――在庫がさばけた、と（笑）。

朱里　え!?　……まぁ、はい（笑）。なので、いまはホント普通のOLっていう感じですね。朝から出社して、パソコンに向かって仕事して、それから練習に行って。あとはチケットの営業もありますし。

――朱里さんは『ハッスル』時代はアルバイトもしてましたけど、いまは『SMASH』一本って感じですか？

朱里　そうですね。

――『SMASH』になって、『ハッスル』と一番違いを感じる部分ってどんなところですか？

朱里　やっぱり個人的には「自分たちみんなで作り上げてる」っていう意識が大きくなりましたね。ホント、毎日ミーティングがあって、大会の反省会や今後のことを話したり。



KG時代、『kamipro Special 2009 SPRING』に「かわいすぎる女子レスラー」として、デビュー直後にもかかわらず7ページで特集された朱里。「50の質問」掲載など、ファンなら必見の内容なんである。

――『ハッスル』のときは雑用ばっかりだったんですよね。

朱里　はい、雑用、雑用、雑用という感じで。もちろんいまも雑用はあるんですけど、自分たちの団体っていう気持ちが凄くあるので、苦にならないっていうか。

――『ハッスル』のときは自分たちの団体っていう気持ちがなかった？

朱里　はい！　うん？　い、いや、そんなことはないですけど（あわてて）。

――ハハハハ。あとは『ハッスル』のときは男子との試合ばっかりだったのが、『SMASH』では女子との試合が増えましたよね。

朱里

『ハッスル』時代の試合を観るとしょっぱすぎて心が痛くなります

朱里　そうですね。やっぱり女子だけのプロレスは、まったく違うものって感じですね。私、それまで女子プロの試合を観ても、あんまり「これは凄い！」って思ったことがなかったんですよ。試合の作りっていうか、「なんでここでこうなっちゃうの？」みたいな部分や、大技ばっかりってところが気になったり。

――そこは朱里さんがいわゆる〝女子プロ育ち〟じゃないのも関係あるかもしれないですね。いまはTAJIRIさんにプロレスを教わってるんですか？

朱里　はい、いろいろ試合の組み立て方とかサイコロジーを勉強させていただいてます。やっぱりTAJIRIさんとも『ハッスル』のときに比べると、関係がより密接になった感じです。

――それで『SMASH』になって上達した、と。研究として、ほかの選手の映像も観たりしますか？

朱里　周りの人に言われて、稔さんの映像は凄く観ましたね。試合でも『稔スペシャル』を使ったこともありますし。あとは髙田（延彦）さんがハイキックで大きな空手家をKOした試合を観たり。

――あ～、北尾光司戦ですね。そういえば朱里さんも華名さんをハイキックでKOした試合がありましたよね。

朱里　ちょっと影響受けて（笑）。やっぱり私の試合スタイルがキックをベースにしてることもあって、そういう昔の髙田さんとか橋本（真也）さんの試合は凄く勉強になりますね。あとは大谷（晋二郎）さんの若い頃や（ケンドー・）カシンさん、UWFの試合も観たりしますよ。昔の盛り上がった時代の映像を観ると「お～！」って思いますね。

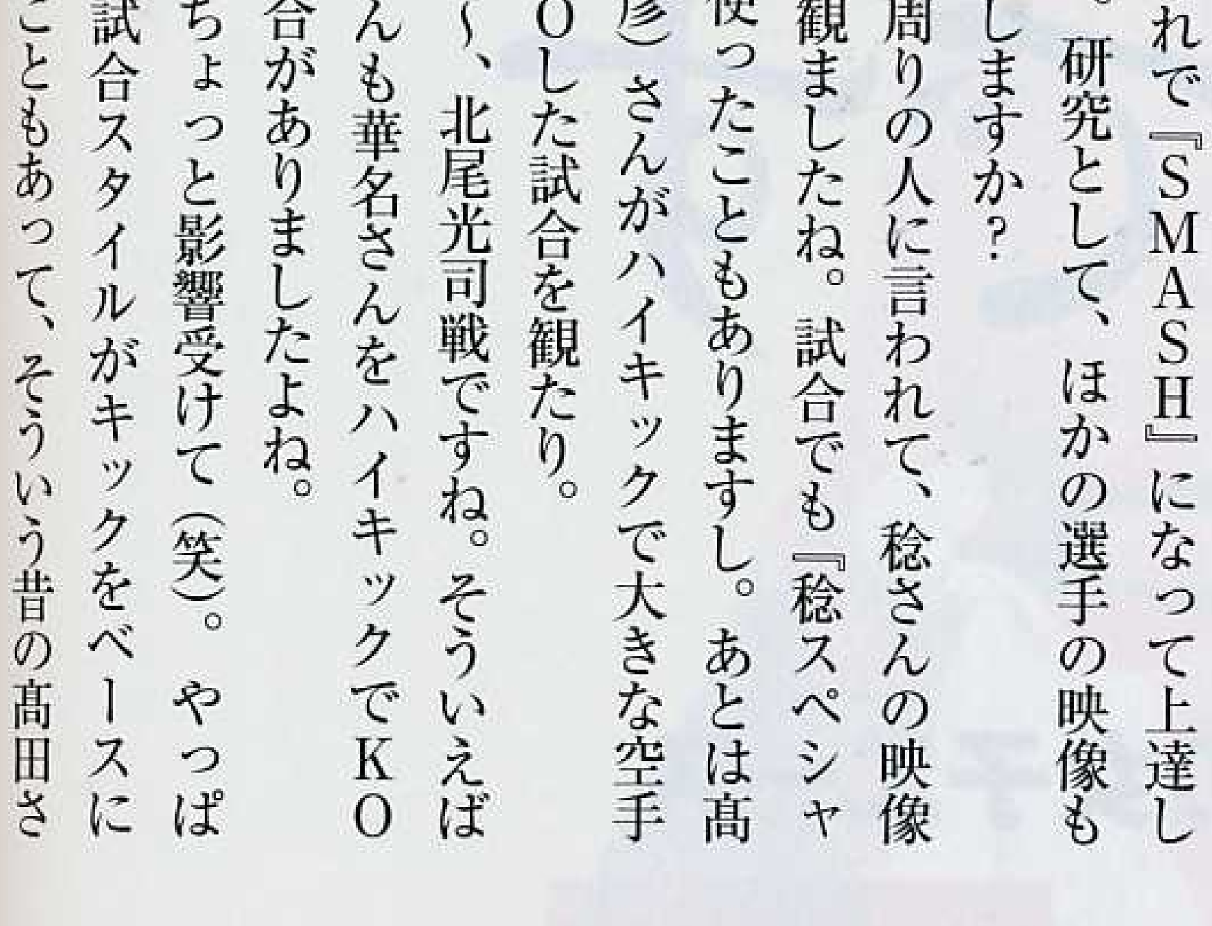
――女子プロの映像はあまり観ないんですか？　いまのではなく対抗戦時代とか。

朱里　ちょこっと観た程度なんですけど、長与（千種）さんはホントに素晴らしいと思いました。ブル中野さんとの試合とか観てても「見せ方が凄いな～」と思って。

――北斗（晶）さんとかどうでした？

朱里　もちろん凄い方だと思うんですけど、神取（忍）さんとの試合だけはちょっと自分的にえぐくて……。

――受け付けなかった、と。（笑）。朱里さんは『SMASH』の旗揚げ戦で、いまの



『SMASH』の会場では、団体をスポンサードしている新宿界隈の飲食店などの宣伝映像が流れている。地域密着型を標榜する『SMASH』ならではの試み。もちろん朱里もその宣伝に一役買っている。



『ハッスル』時代と比べると、そのファイトスタイルもさることながら、試合中の表情がじつに堂々としている朱里。『SMASH』では他団体やフリーなど“外敵”を、女子エースとして迎え撃っている。

――女子プロ界を代表する実力者の里村明衣子選手と対戦したわけですけど、当たってみていかがでした？

朱里　里村さんって、ほかの女子選手とは全然違うんですよ。いまの女子プロを観てても「う〜ん」って思ってたのが、里村さんの場合だと試合はもちろん、その独特なオーラに凄くビックリしちゃって。うまく言い表わせないんですけど。

――なるほど。朱里さんは華名さんとのストーリーも、『SMASH』では軸になってましたよね。『ハッスル』の頃から朱里さんは「華名さんとやりたい」って発言してましたけど、いざやるとなったら「あんまり絡みたくない」って言ってたのを覚えてます？

朱里　あ〜、覚えてます（笑）。その頃はそこまで華名のことを知らなかったんで、外からの情報で「ちょっと当たりたくないな」っていうのがあったんですよ。でも、いざやってみたら凄く手が合うなって思いましたね。あのちょっとヒステリックなヒールキャラも、なんか凄くうらやましいなって思いますし。

――え、うらやましい？

朱里　罵声は浴びますけど、キャラ的におもしろいっていうか、絶対においしいと思うんですよ。逆に「自分がやったらどうなるんだろうな」とか思いますし。

――ちょっとヒール志向もあるんですね。あと、朱里さんがさくらえみさんに対戦をアピールするときに、なぜかリング上で情熱的なダンスを披露したのも一部で話題を呼びましたけど（笑）。

朱里　ああ〜、あれはホントに自分にカツを入れるためというか、私はちゃんと言葉で表現できない人なので、それだったら身体で表現しよう、と（笑）。

――もともとお母さんがダンサーで、朱里さんも習ってたんですよね。

朱里　そうですね。お母さんは私をダンサーにしたかったみたいで。まあ、踊ったのはダンスフロアじゃなくリング上でしたけど（笑）。

――いま、こうして女子の注目選手が『SMASH』のリングに集まってきて、新たな女子プロの発信地みたいになってる感じですけど、そういう実感はありますか？

朱里　なんか自然にそうなった感じですよね。知らないあいだに波が来たっていうか、もちろん「ここに出たらおいしいんじゃないか」みたいなのもあると思いますし。華名なんかもそんな感じですよね。もっと『SMASH』が盛り上がることで、女子プロにも注目が集まればいいなって思います。

――いまは『ハッスル』で一緒だった人たちが、皆さん離ればなれになってるわけですけど、連絡を取り合ったりはしてますか？

朱里　川田（利明）さんのラーメン屋さんはオープンしてからすぐに、大原くんとかと行きましたよ。

――『麺ジャラスK』ですね。川田さんとお話も？

朱里　はい、ご挨拶させていただいて。ただ、ちょっと細くなられてました。

――あー、いまはレスラー活動よりも店舗経営がメインですもんね。どうですか、おいしかったですか？

朱里　はい、唐揚げがおいしかったです！

――唐揚げがおいしい（笑）。

朱里　あとは天龍（源一郎）さんとも、全日本プロレスの打ち上げパーティみたいなところでひさびさにお会いしました。

――あ、そういう場所にも顔を出してる

んですね。
朱里 そこで天龍さんとお会いして、「お疲れさまです」って挨拶したら、「お～、KG～、何やってんだ～？」って（天龍の声をモノマネしながら）。
――坂田亘さんとか、『ハッスルマンズワールド』の人たちと交流は？
朱里 あ～……。
――全然観てないですか？
朱里 ちょっとわかんないですね、観てないです。
――ノータッチだ、と。
朱里 ……（苦笑）。
――ノーコメントだ、と（笑）。いま振り返ってみて、朱里さんにとって『ハッスル』ってどういうものでしたか？
朱里 『ハッスル』に入るまではまったくプロレスを観たことがなくて、まさかいまこんなふうになると思ってなかったので、私にとっては「〝始まり〟だったんだな」って思いますね。やっぱりつらいこともありましたけど、いま思うと「いろいろな経験ができたかな」って。いまは「あんなにたいへんだったんだから」っていう思いもありますし。
――あれ以下はないだろう、と（笑）。『ハッスル』末期には大会がその前日に中止が決定して、会場の入り口でファンの人たちに直接謝罪したこともありましたよね。
朱里 ああ、ありましたね～。あのときは逆に励まされたりして、「ファンの方ってホントにありがたいな」って思いましたね……（しみじみと）。
――ちなみに『ハッスル』時代って、朱里さんは未払いとかあったんですか？
朱里 ……（苦笑）。
――それもノーコメントだ、と（笑）。朱里さん、その頃に「コンタクトレンズも買えない」って言ってましたけど。
朱里 あ、いまはレーシック手術をしたんですよ！ 『SMASH』が旗揚げする前に、バイトしてお金を貯めて。
――お、頑張りましたね～。
朱里 でも、『ハッスル』のおかげで自分の知名度も上がりましたし、やっぱりKGと言ったらわかる人もいるんで、そういう部分では自分の原点なので感謝してます。
――あのHGとRGの妹分としてデビューしたわけですもんね。あと、『ハッスル』のときに一番かわいそうだなと思ったエピソードが、朱里さんのお母さんが心配しすぎて身体を壊したっていう話なんですよ。『ハッスル』が継続しないってなったときに、お母さんはどんな反応でした？
朱里 「これからどうするの？」ちゃんと普通に働くの？」みたいな感じでしたね。それなのにまたこういう世界に入っちゃったんですけど（苦笑）。
――『SMASH』でやるって決めたときに、心配みたいなものはなかったですか？
朱里 やっぱり自分の上がるリングがなくなっちゃったことが悲しかったですし、「ここまできたんだからもっとやりたい」っていう気持ちがあったんですよ。それに、そのときの自分はホントに何もない状態だったので、『SMASH』に手を差し伸べてもらったというか、TAJIRIさんや小路（晃）さん、大原くんについていこうと思って。酒井社長にも感謝してます。
――この1年でリング上もさることながら、内面的にも変わったんじゃないですか？ たとえば責任感とか。

「いまは自分の団体を自信をもって『おもしろい』って言えるんです」

朱里 凄く変わりましたね。『ハッスル』のときは自分が一番下っ端だったわけじゃないですか？ いまは「女子は自分が引っぱっていかなきゃ」っていう思いが強いので。
――実質的なキャリアもまだ2年くらいなわけですけど、プレッシャーとかはありませんか？
朱里 あの……私、毎回毎回お腹が痛くなっちゃうんですね。すぐお腹壊しちゃうんですよ（照）。
――へぇ～、デリケートなんですね。「朱里、どこ行った？」「トイレです」みたいな？
朱里 そうなんです（笑）。会場でなっちゃうんです。
――試合前にお客さんの知らないところでそんな敵とも闘ってる、と（笑）。お客さんといえば、さっきチケット営業の話が出ましたけど、朱里さんって手売りで相当数をさばくらしいですね。『ジュエルス』に出場したときも100枚近く売って、石岡沙織選手が「KGがあれだけ売るなら私も売ってやる」って燃えたっていう話を聞きましたよ。
朱里 営業もそうなんですが、本当に応援してくれてる方がいてうれしいです！
――いまのプロレス団体の多くは『SMASH』みたいに地域密着だったり、ファンとの距離が近くないと生き残るのって難しいですよね。
朱里 はい。こっちもやるからにはいっ





前日中止となった09年10月29日の『ハッスル』後楽園大会で、朱里は来場した観客に深々と謝罪。そして『SMASH』旗揚げ直前の10年2月13日、朱里はSB後楽園大会で風香に判定勝利を収めた。



ぱいのお客さんに観てほしいですし、そんながガラガラなとこでやっても、何のためにやってるのかわからないと思うので。

——朱里さんは『ハッスル』が活動休止になってから『ジュエルス』とシュートボクシングに参戦しましたけど、いまは格闘技とプロレスを両立しようとは思ってないんですか？

朱里　やっぱり両立はきついですね。やる仕事もたくさんあるし、そんなに甘いもんじゃないっていうか。個人的にも格闘技が強くてプロレスもうまいっていう人を聞いたことがないですし……いますかね？

——まあ、いないですね（笑）。でも女子だったら、まだ男子に比べると可能性はあるかもしれないですけどね。『Girl's S-cup』とかも観に来てましたよね？

朱里　はい、観に行きました！

——女子格だといまはRENAさんなんかが凄く注目されてますけど、どう思います？

朱里　う〜ん、「注目されてるな、私より若いな、凄いな」っていうぐらいですかねえ。一度、計量のときに「お疲れさまです」くらいの挨拶はしたことあるんですけど。

——格闘技でいうと、大晦日の古木克明選手の試合時に、『SMASH』の皆さんでセコンドにつきましたよね。

朱里　なんかあのときは刺激になったというか、凄く感動しましたね。ただ、「なんでTAJIRIさんの曲で入場するんだろう」とは思いました（笑）。

——ハハハ！

朱里　まあ、とりあえずいまは格闘技との両立は考えてなくて、プロレス一本で頑張りたいですね。もっとたくさんの人に「朱里の試合が観たい」って思われるような存在になりたいです。

——朱里さんはもともと役者を目指していて、その活動の一環みたいなかたちで『ハッスル』でデビューしたので、プロレスの入り口としてはちょっと特殊な感じだと思うんですよ。どうですか、いまってプロレスは好きですか？

朱里　大好きですね！（ニッコリ）。ただ、もともと女優さんになりたかったので、もっといろんなメディアに出ていきたいなって思ったりはしますね。

——たとえばアクション映画だったりとかですか？　そのまま『KG（カラテガール）』っていう映画もありましたけど（笑）。

朱里　あ〜、それは凄く思いますね。でも、ぶっちゃけていうと、今後の目標っていうのはちゃんとは見えてなくて。ただ、あんまりちっちゃい枠にとらわれたくはないですね。いま、業界は厳しくなってきてますけど、なんとかして盛り上げたいっていう気持ちは凄くあるので、そのために試行錯誤してるというか。

——やっぱり『SMASH』という団体にこだわりはありますか？

朱里　そうですね、『SMASH』で頑張りたいって気持ちはありますね。もっと大きくしたい。あの、いまって、自分の団体を自信をもって「おもしろい」って言えるんですよ。

——『ハッスル』のときは自信をもって言えなかった？（笑）。

朱里　というより、まだそういう考えがなかったので（笑）。やっぱり自分の団体に自信がないと、チケットも売りたくないと思うんですよ。でも自信をもっておもしろいと言える団体なので、そういう試合以外の仕事も頑張れるっていうか。

——お忙しそうですけど、ちゃんとプライベートの時間ってあります？

朱里　う〜ん、ほとんどないかもしれないですね。何かしら仕事とか練習とかしてますね。

——へ〜、最近のマイブームとかないんですか？

朱里　あんまりないですけど……、ぶっちゃけいうと『ときメモ』（笑）。

——『ときめきメモリアル』！　ファイヤー原田と一緒じゃないですか（笑）。え、それって女の子用もあるんですか？

朱里　それがあるんですよ！　夜な夜な、DSで一人コソコソやってます。

——そんなバーチャルじゃなく、リアルの世界のときめきはどうなんでしょう？

朱里　もう、いまは自分の世界でいいんです（笑）。「楽しいな」って思いながらオタク全開でやってるときが、いま一番癒されますね、はい……。というか、なんか私、かわいそうな感じになってないですか？　こんな話で大丈夫でしたか？

——いえいえ、『ハッスル』のときよりは全然かわいそうじゃないですよ（笑）。今後も充実した朱里さんのご活躍を期待してます！


【11年2月28日／都内・SMASH本社にて収録】

朱里

しゅり■本名・近藤朱里。1989年2月8日、神奈川県出身。08年10月26日の『ハッスル』栃木大会で"カラテガール"KGとしてデビュー。10年3月、『SMASH』の旗揚げに参加、現在は女子部門のエースとして活躍中。164cm、51kg。ブログ『☆朱里のハッとした出来事☆』http://www.diamondblog.jp/syuri/

——待ちに待ったRENA選手の次戦が

RENA　だって怖いじゃないですか。



「今年はもう一本ベルト獲りますわ!!」

RENAがついに帰ってきた!

RENAがついにリングに帰ってくる!　昨年夏の『Girls S-cup 2010』以降、
試合が遠のいていたRENAだが、4月23日の後楽園ホール大会に参戦することが決定した。
ひさびさの試合で期待感が高まるなか、その意気込みと、
そして昨年の活躍をあらためて振り返ってもらった。RENAオジ必読!

聞き手／松下ミワ　撮影／吉場正和、浜田智則　試合写真／中原義史

4.23 シュートボクシングにてひさびさの出場が決定!

知らない人に声をかけられたら急ぎ足で逃げるんです、私

―待ちに待ったRENA選手の次戦が決まったということで、今回はいろいろお話をおうかがいしたいと思います。

RENA　よろしくお願いします！

―それにしても、前号の今田耕司さんとの対談でお話しいただいた『炎の体育会TV』を含め、年始からこちら、メディアでの露出がかなりありましたね。

RENA　そうですね、おかげさまで（笑）。

―RENA選手のブログを見ると、先日もなんとケンドーコバヤシさんや中川家の礼二さんと共演されたみたいで。

RENA　はい。このあいだ関西の番組でご一緒させていただきました。でも、凄いですよねえ。なんかテレビに出てるんじゃないくて、目の前でテレビ観てるみたいですよお。

―そうなってくると、街を歩いていても声をかけられる機会が多くなってきたんじゃないですか？

RENA　いえいえいえ。凡人ですよ、凡人。フフフ。

―芸人さんたちをKOしている時点であきらかに凡人ではないと思います（笑）。実際、街を歩いてると振り返られたりしますよね？

RENA　うーん、そういうのもありますねえ。でも、しゃべりかけられそうになったら早歩きみたいにして急ぎ足で逃げるんです、私。

―ワハハハハ！　なんでそこで逃げるんですか。

RENA　だって怖いじゃないですか。知らない人に声をかけられるなんて。だから「気づかれた！」って思ったらサッと早歩きですよ（笑）。

―でもそういった露出もこれまでの活躍が凄く響いてると思うんですけど、あらためて去年1年というのはRENA選手にとってどういう1年でした？

RENA　そうですねえ。去年はクリスティーナ（・ジャルジェビック）戦から始まり、渡辺久江戦前のケガもあり、『Girls S-cup』の激闘もありという感じで、なんかけっこう忙しい感じでしたね。



『炎の体育会TV』での共演をきっかけに、『kamipro』No.156で今田耕司と対談したRENA。そのほかにもテレビ、雑誌を問わずRENAにはどんどん出演のオファーが来ているのだ。

―やっぱり選手としての手応えというのは前年よりもありました？

RENA　それはありますね。09年と10年とではちょっと違うなというか、やっぱり少し強くなってるなっていうのはDVDを観たりするとわかりますね。なんか09年の試合の映像を観てると、もうなんかすべてが「あかんやろ！」みたいな（笑）。

―へえ～。見直してみるとそんなに違うんですか？

RENA　観てたら笑ってしまうんですよね。「そこで、それ出す!?」みたいな。試合中、凄く慌ててたりすることもあるし、「なんでここでバタバタしてんねん」って。だからまたこれから年を重ねていったら10年の映像を観たときにまた笑えてくるんでしょうね。

―なるほど。あのー、じつは報告がかなり遅くなってしまったんですけど、昨年はそんなRENA選手の活躍を見て『kamipro』で毎年勝手に選ばせていただいているkamipro AWARDのMVPに……。

RENA　なんですか？　かみぷろあわーど……って？

―えぇっと、その年の活躍した選手、試合、大会だったり、MVPやベストバウトを『kamipro』が勝手に決めて一方的に表彰している賞なんです。

RENA　……あ、知ってる！　それってこのあいだ雑誌でやっていただきませんでしたっけ？

―そうです、そうです。1月の号なのでかなり前の話なんですが、なんとRENA選手をMVPに選ばせていただいたんですよ。

RENA　フフフフ、ありがとうございます（渋い声で）。

―あ、もう知っているぞ、と（笑）。

RENA　知ってますよお。あのアリスター・オーフレイムと一緒ってことですよね？

―そのとおりです！

RENA　しかも『Girls S-cup』もベスト興行に選んでいただいて。凄いですよね。女子のイベントが入賞するなんて。

―これもRENA選手の活躍があってこそだったと思うんですが、やっぱり去年から今年にかけて、マスコミの反応とかも変わりました？

RENA　うーん、どうかなあ。でも取材はけっこうしていただくようになってますね。先月も専門誌3誌とも取材していただいて。取材も楽しいですし、「出れるときに出たろ！」ぐらいに思ってますから。ハハハハハ！

―ただ、取材が増えて練習の負担にはなってないですか？

RENA　まあ、なってないと言ったらウソになりますけど、東京に行ったらやっぱりまる一日潰れてしまうんでねえ。でも、その日にできなかったことは休みの日にやったりしてるんで、そこは全然大丈夫ですよ。

―ちなみに、東京には月にどのくらいらっしゃってるんでしょう？

RENA　いまね、けっこう行ってますよ。週に1回は必ず行ってて、多いときは週に2回行くときもありますね。

―週2回！　はー、そんなに来てるんですか。移動だけでも疲れるでしょうし、よく身体がもちますね。

RENA　そこはなんとか。練習ではヒーヒー言ってるんですけどね（笑）。

―ブログでも「カゼ、ひきました」みたいなことがよく載ってますし。

RENA　そうそう。しょっちゅう体調崩してます。でも、10時間以上寝たら治るんで。RENAは睡眠さえあれば大丈夫なんですよ（笑）。

―そういうもんなんですか（笑）。でも、



昨年8月の『Girls S-cup』では、まさに年間MVP級の死闘を繰り広げたRENA。今年の同イベントはまだ発表されていないが、あの興奮を生で観たいというファンの熱はきっと昨年以上に違いない。

年末は「RENAの試合を観たい」と言ってもらえて本当にうれしかった

これから先、RENA選手がもっともっと活躍されるなかで、そういう状態が加速していくとちょっと心配じゃないですか？

RENA　いやー、そこまで増えるとは思わないですし、ま、増えてほしいですけどね。ただ及川先生も「もうじきおまえの時代じゃなくなるから、出られるときに出とけ」って言ってくれてるんですよ（笑）。それに、練習もちゃんと及川先生に相談したりしながら見ていただいてるんで、そこらへんの調整は大丈夫ですよ。

——それは安心しました。そんななか、やっぱり昨年『Girls S-cup』で優勝されて、これだけ報道なんかがあると、ファンの方たちはRENA選手の試合をもっと観たいという気持ちが高まってたと思うんですよ。そのなかでなかなか試合が決まりませんでしたよね。

RENA　それは、じつはちょっとケガが長引いてたんですよね……。まあ、負傷箇所はあんまり詳しくはお話しできないんですけど。でもRENAとしてはずーっと休みがなかったんで、いい休みになったというか、ハハハハ。

——でも、けっこう試合ができないと不安だったんじゃないですか？

RENA　もちろん心配な部分もあったんですけど、もう「心配してもしゃーないわ」と思って。それに、この先こんなに休めることもないやろうし、この際ゆっくり休もうって感じだったんです。

——ちなみに、私たち勝手に「RENA選手に大晦日に出てほしい！」とか言ってましたけど……。

RENA　だから「RENA、ちょっと出れへんねんけど……」みたいな（笑）。でも、そうやってRENAの試合を観たいと言っていただいたことは本当にうれしかったです。

——いや、ホントに観たかったです。ちなみに、テレビがつくというのはどうでしょうか？

RENA　そりゃ、テレビがついたら気合いが入りますよね。まあ、だから何度も言ってるんですけど、私はシーザー会長が行けというところには行きますから！

——おお！　その一方で、去年のS-cupや今年の2月の大会もそうですけど、シュートボクシング自体がかなり盛り上がってるいい雰囲気がありますよね。

RENA　そうですよ！　いや、凄いなと思いますね。もう満員ですもんね。いま満員になる興行が少ないなか、あれだけお客さんが集まるというのは本当に凄いなと思います。

——そうやってシュートボクシングへの注目度がかなり盛り上がってきてるのって何が原因だと思います？

RENA　やっぱり出場する選手の知名度もあるでしょうし、それとやっぱり技術的にも高いですしね。あとは、シュートボクシングはルールもおもしろいからだと思いますね。

——確かに、立ち関節が許されているのがまた新鮮というか、ほかの立ち技競技にはないルールですもんね。

RENA　おもしろいですよね。よく考えますよお。

——それに、去年のS-cupはブアカーオ選手も参戦しましたし、やっぱりそういうビッグネームの参戦もいいですよね。

RENA　個人的にはビッグネームもどんどん上がってくれれば盛り上がると思いますね。

——ちなみに、S-cupなんかは毎回大会場で開催されてますけど、RENA選手もやはり大会場での試合のほうが気合いが入る感じですか？

RENA　うーん、でもRENAはじつは後楽園ホールが一番好きなんですよね。狭くもなく広くもなく、そのお客さんの顔も全部見えるみたいな。やっぱり闘いの聖地というか独特な雰囲気があって、一番「試合や！」って気になりますもん。

——そういう意味では、4月23日の試合は後楽園ホールでの大会になりますね。

RENA　いやー、気合い入るわー（笑）。もういま練習もハードになってますからね。また始まりますね、闘いの季節が。

——いいですねえ。正直、ひさびさの試合なんでワクワクするんじゃないですか？

RENA　なんか新鮮というか、こんなに試合期間が空いたことも初めてですからね。

——逆に期間が空いたことによる怖さみたいなのはあります？

RENA　全然。普通にワクワクしてますよ。でもまだ対戦相手が決まってないんですけどね。「おまえの相手は苦労するわあ」みたいな感じで言われてます。フフフフ。

——誰と対戦したいとかそういう欲はあるんですか？

RENA　あんまりそういうのはないんですよね。強いて言えば、外国の方とやりたいかなあ。外国人選手のほうがレベル的にも強いかなあって思ってるんで。

——ただ、体重的に合う選手がいるかが心配ですね。RENA選手の場合、どうしても体重が上の選手と闘わざるをえなくなりがちなんですけど。

RENA　そこですよね。そこが一番たいへんなんですよお。でも、弱い人とやるよりは強い人とやったほうが絶対にいいですし。だからたいへんですけど、私はやりますよ。

——4月の大会が今年一発目になるわけですけど、そんななかで今年のRENA選手の目標といいますか、今年は何を目指して闘いたいと思われてますか？

RENA　やっぱりシュートボクシングの女子のベルトが復活するというような話も上がってるみたいなんで、また文句言いながらそれに向けてやっていこうかなって（笑）。

——文句を言いながら（笑）。

RENA　「しんどーい」とか（笑）。

——そして、まだ先の話かもしれないですけど、やっぱりまた今年もRENA選手の『Girls S-cup』が観たいというファンは多いと思うんですよ。

RENA　確かに、女子の大会であそこまで大きな大会ってないですもんね。ま、大会発表もまだやし、どうなるかわからないですけど、開催されるんやったらまたそっちのベルトを獲りにいきます。

——しかも、いまは女子の試合を観たいという熱がどんどん高まってますしね。

RENA　あ、そうですよね。やっぱりうれしいですよね。だから、生意気なことを言わせてもらえるとすると、これからも私がいけるところまで引っぱったろと思ってますよ。

——最近は専門誌の女子格のページも増えてますし。

RENA　ホントにいまちゃんと女子格闘技というのがどんどん上がってきてると思うんで、それをピークに持っていきたいですし、やっぱり年明けのテレビのおかげで新たなファンも来てくれると思うんで、次の試合も頑張ってブッ倒したいと思ってます！

——我々もおおいに期待してます！

RENA　あっ、あとですね、ちょっと一言だけいいですか？

——どうぞ、何かいい足りなかったですか？

RENA　いやあの……今回の地震に関してなんですけど、何か私にもできることはないかなって考えてるんですよね。私たちみたいな格闘技の選手が何かできることがあれば、できるだけ協力したいと思ってます。そのことをぜひ伝えてほしいなって思いまして。

——わかりました。そのためにもまずは4月の大会、日本中を勇気づけるような闘いをお願いします！

RENA　はい。精一杯、闘わせていただきます！

【11年3月12日／電話取材にて収録】



れーな■1991年6月29日、大阪府出身。小学6年生のときに及川道場へ入門。グローブ空手の大会で実績を積み、07年に『クボチューン・レーナM15』のリングネームでJ-GIRLSでプロデビュー。09年に『Girls S-cup』で優勝。10年の同イベントでもベルトをさらい見事2連覇達成。SBのガールズのベルトも含め、あらゆるタイトルを狙う女子立ち技最強の格闘家。160cm、52kg。



『SHOOT BOXING 2011 act.2』
東京・後楽園ホール
4月23日（土）開場17:00 開始17:30

出場予定選手
RENA

お問い合わせ
シュートボクシング協会 TEL.03-3843-1212

《お知らせ》

後楽園ホールは、3月11日に発生した地震の影響により施設の点検・補修を実施しております。
このため、3月11日より3月18日までのイベントを、すべて中止と決定させてただきました。
尚、19日以降については、未定となっております。
誠に申し訳ありませんが、何卒ご了承ください。

後楽園ホール

未曾有の天災がもたらした影響とは?
そのときレスラーと格闘家は——?

3.11東日本大震災 マット界ドキュメント

3月11日、突如として日本列島を襲った歴史的な大地震。東北地方を中心として大きな被害を受け、いまなお行方不明者の救助作業が行なわれ、その支援活動も世界規模の広まりを見せている。ここではこの天災がマット界にどのような影響をもたらしたか、その模様をリポートする。

文/高崎計三　構成/鈴木佑

こんなときだからこそプロレス・格闘技がやれることがあるはずだ

3月11日（金）午後2時46分、東北地方を中心に観測史上最高のマグニチュード9・0という大地震に見舞われた。この未曾有の天災がマット界に与えた影響も大きい。当日の動きをまとめてみよう。

そもそもこの日は、マット界にとってはバッドニュース続きだった。午前中には『kamipro』編集部から、今号をもってエンターブレインからの発行が終了となる旨が発表された。程なく、SRCオフィシャルサイトにおいて、ドン・キホーテがSRC事業から正式撤退したことがあきらかにされた。

これらの発表に格闘技ファンが動揺を隠せないなか、震災が発生した。東京都内も震度5強というかなり強い揺れを感じたが、とくに甚大な被害が発生したのは岩手・宮城・福島など東北地方の太平洋側。そのあとに大津波もたびたび押し寄せ、本稿執筆時点（15日夜）では被害の全容はまだまだあきらかになりそうにはない。

11日、まさにその宮城県で興行を行なう予定だったのが全日本プロレスだ。この日は宮城・石巻市総合体育館で開催予定で、選手たちは会場に向かうバスの中で被災したという。鈴木みのるは当日の午後4時8分、ブログにこう書き記している。

「大地震が発生した。

とりあえず全日本プロレスのバス二台とも無事。

選手も全員無事だ。

今日の大会は中止になる模様。

みんな…無事か？」

その後、バスの車内で取ったメモをもとに、12日（土）にあらためてこう振り返った。

「宮城県石巻市に試合の為に向かう途中、地震にあった。

突然バスが速度を落とす。

路肩に止める。

バスが倒れるほどの揺れ。

何が起きたかわからない。

直ぐに高速を降りる。

田んぼの中の出口だったから、その場待機。

停電であたりは真っ暗。

吹雪になってきた。

寒い。

ニュースをみながら一夜開ける。

ミネラルウォーターを大量に持っていたので、みんなで分け合う。」

選手たちが地震の情報を得ることができたのは12日になってからで、翌朝6時には東京方面に向けて出発。その理由も「仙台空港が津波に飲み込まれる様子をTVでみた。地図を確認するとここからほど近い。いつまでもココにいれない」ということだから、いかに緊迫していたかがわかる。結局13日（日）午前9時頃に無事帰京するまで、36時間バスの中にいたということだ。

一方、興行スタッフのほうは前日に現地入りしていたために別行動となり、石巻高校に設置された避難所ですごしたという。こちらは14日（月）夕方に帰京できたとのこと。

全日本ではこのあとに予定されていた12日の青森・弘前市、13日の青森市、15日（火）の青森・むつ市、19日（土）の秋田市の4大会を延期。17日（木）の宮城・気仙沼大会を中止した。

さらにみちのくプロレスも11日予定の『みちのくロックフェスティバル』を中止。12日の岩手・矢巾、13日の仙台大会を中止。HPで「選手、スタッフは無事でいます」とアナウンスしている。

前述のとおり震度5強の揺れとなった東京でも、多くの興行が中止となった。11日に新宿FACEで予定されていた『ジュエルス』をはじめとして、翌12日もプロレス・格闘技関係の関東圏の興行は軒並み中止、あるいは延期と発表された。



15日に鈴木みのるは「あれから」と題したブログをアップ。波紋を広げている石原都知事の「やっぱり天罰」発言に対して豪快に苦言を呈している。

そのなかで、12日に後楽園ホールで大会を行なう予定だった修斗は、「後楽園ホールがダメージを受け、安全確認が取れるまで催事が行えないという事で、大会延期を余儀なくされました」と発表。また、18日（金）に同所に初進出の予定だった『SMASH』は、後楽園ホールが使用できなくなったために代替会場を全力で探していると発表した。

このためファン、関係者は「後楽園の会場ダメージとは？」とさらなる不安に駆られることとなったが、報道によれば地震の影響で天井にゆがみが生じたため、補修と点検に時間がかかるとのことだった。なお、『SMASH』はその後、同日の開催を断念。大会を5月3日（火・祝）に延期することを決めた。

19日（土）に同所で大会開催予定だった『Krush』は、「同イベント開催として準備を進めておりましたが、その後の地震による各方面への深刻な影響、および社会情勢を鑑み、同ホールや関係各所と協議を重ねました結果、大変残念ではございますが『大会延期』と決定いたしましたことを、ここにご報告申し上げます」というリリースを発表。格闘技の聖地・後楽園ホールの一日も早い"復帰"を待ちたいものだ。

13日（日）には首都圏の交通機関もほとんど運行を再開し、冬晴れのなかで人々の生活も一見平穏を取り戻したかに見えたが、余震は収まることがなく、また電力不足も懸念されたことから、やはりほとんどの興行が中止・延期に。この日は渋谷でDEEPが音楽とのコラボイベントを初開催する予定だったが、これも会場破損のため中止となってしまった。

西日本をはじめとして地震の影響のなかった地域での興行は一部を除いて開催されたが、13日に新日本プロレス・浜松大会に出場した金本浩二は、ブログの「新日本プロレス金本浩二としての本音です」というエントリーで複雑な心境を吐露している。

「今日は浜松大会でした。

しかしやってる場合違うでしょ？

今はどんな状況か理解してるんですか!?

自分は本日の大会は中止（延期）にすべきだったと思います」

で始まる記述は、タイトルに記しているとおり「本音」だろう。テレビがほとんどの番組を休止して地震情報を流し続けていることもあり、この時期の興行・娯楽には「不謹慎」という声が出るのも事実だ。だが、一方で「こんなときだからこそ楽しませてほしい」という声も、また否定できない。

かつて阪神大震災の直後、全日本プロレスが大阪大会を敢行し、小橋建太と川田利明が大激闘を繰り広げたという出来事があった。ジャイアント馬場は、被災者のためにあえて大会を行ない、実際に多くの被災者に勇気を与えたと聞く。これも一つのやり方ではある（もちろん、観客の安全が確保されたうえでの話だが）。

電力不足の懸念が消えず計画停電も予定されていることから、まだ興行の完全再開には時間がかかりそうな気配もある。現に、21日（祝・月）にディファ有明で予定されていた井上京子の新団体・ディアナの旗揚げ戦も4月17日（日）への延期が発表された。

K−1・谷川貞治EPは12日に「格闘技で勇気のチカラ与えます！　仙台でやりたいです。皆さん、命を大切に。死ぬ気で頑張りましょう！」とツイート。一部からは反感も買ったが、こんなときだからこそ、プロレス・格闘技がやれることもあるはずだ。時間はかかるかもしれないが、被災地の復興、明るい日本を取り戻す過程にマット界が力を発揮するときが来た！

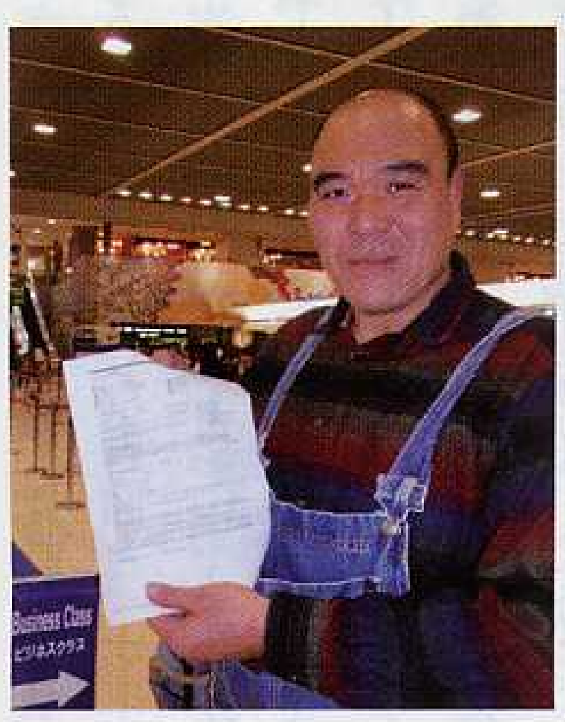
涙涙で感動の引退興行も台ナシ!?
風来の借金王がブラジル行きをドタキャン！



「俺も悪いけど俺の手綱をとれなかった人も悪い！」

カンボジアへ高飛び直前に緊急キャッチ!!

安田忠夫



聞き手／小松伸太郎（THE PEHLWANS）　構成／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

最後の最後にまたまた安田がやっちゃった⁉

かつては大晦日の格闘技興行でジェロム・レ・バンナを下し、日本中を感動の渦に叩き込んだ安田忠夫。今年２月４日に安田忠夫引退興行実行委員会の主催のもと、後楽園ホールで涙涙の引退試合を行なったのだが、その波乱のプロレスラー人生に幕を閉じたと思いきや、その直後に最後の大波乱を巻き起こしたのだ。

発端は、第二の人生として「ブラジルで相撲を教える」ことを公言していた〝平成の借金王〟安田が、そのブラジル行き当日の２月28日、空港に姿を現わさなかったことに始まる。

ギャラや海外渡航支度金を含め、30万円を主催者からもらっていた安田だったが、引退興行が一応成功したこともあり、また悪いムシがうごめきだしたのか、なんでも、事前に「あと30万もらわないとブラジルには行かない。カンボジアのカジノで働くほうが条件もいいので、そっちのほうへ行きたい」と、一方的に通告したのだとか。

たまらないのは引退興行の主催者であり、一足先にブラジル入りをしていた田崎健太氏（Son−God−Cool社長）だ。田崎氏はこの安田の〝裏切り〟に対して「残念だ」とブログで明かすと、チケットが前売りで２００～３００枚しか売れていなかったこと（しかもその大半は自分たちの関係で売ったと明記）、また、安田の愛娘の今後の芸能活動情報についても加えて掲載。そして、この安田のブラジル行きドタキャンについては、一部プロレス携帯サイトがニュースとして報道。

そこに異を唱えたのが、安田とは旧知の仲である、ご存知ＧＫことフリーライターの金沢克彦氏だ。金沢氏は「ただの内輪揉め。こんなことをわざわざ表に出す必要はない。いまさら安田に誠意を求めようなんて、誰も思いません」という大意のメールを、このニュースを取り扱ったプロレス＆格闘技ブログ『カクトウログ』の管理人に送付。

金沢氏は前述のチケットの半分以上は、安田と愛娘の関係で売ったものだということを含め事実関係の違いを明かし、「ＡＹＡＭＩちゃんの名前を出したり芸能活動に関して触れる必要はない」と指摘。同ＨＰでは、そのメールの内容を金沢氏の許諾のうえ、全文掲載した（詳しくは『カクトウログ』を各自調査）。

実行委員会はこの安田にまつわる騒動のなか、金沢氏の進言どおりにブログの不適切部分を修正および削除。そして、ブラジルから田崎氏自身が「悪魔の安田さんを見ましたが、その前の優しい安田さんは未だに好きです。もっと早く金沢さんとコミュニケーションをとっておけばよかった」と金沢氏にメール。

対する金沢氏も、「田崎さんと私がもっとコミュニケーションをとって、安田のことをうまくコントロールしていたらという痛恨の思い」と田崎氏に返信。そして「彼（安田）も生きて行くうえで（ブラジルではなくカンボジアへ行くという）選択をした」と、この騒動を終えての結論を出したのだった。（以上のやりとりも『カクトウログ』に掲載）。

さて、そんななか、本誌ではまだ事態が収拾する前、当の本人であり、カンボジアへ渡航寸前の安田を緊急キャッチ！　カンボジアの時点における、安田の生々しく、そして思わず馬鹿負けしそうなインタビューをご覧あれ！



安田は引退興行で3試合に出場。vs曙、vs鈴木みのる&高山善廣（パートナーは大谷晋二郎）、そして最後は角界出身レスラーの先輩である天龍と対戦した。

——安田さん、今回の騒動は実行委員会から各マスコへ送信された書面と、ホームページに謝罪文が出たことであきらかになったんですが、いったいどういうことなんですか？

安田　まあ、向こうが言っていることには本当のこともあれば嘘もある。だから、俺も悪い部分はあるけど、田崎（健太＝安田引退興行の実行委員長）さんにも悪い部分があるんじゃないか。両方悪いから壊れたんでしょって。でも、興行がうまくいったんだから、そこでシャンシャンしようよって。

——もしかしたら、興行をやる前から壊れていたんですか？

安田　全然壊れてないです！　チケットを必死に売っていたんですから。ただ、娘が怒っていたのは、自分の名前を出されたっていうこともあるんだけど、（最初に）売れたチケットの200～300枚の中の半分は安田家系とチケットぴあで売っていたってこと。

——実際は？

安田　そう、金額にしたら大差ですよ！だって、俺らはね、特別リングサイドを売っているんだから。でもさ、そういう裏の話をするよりも、興行があんなにうまいこといったんだからいいじゃない。（※編集注・プロレス&格闘技サイト『カクトウログ』においてGK金沢氏がその部分を指摘したことを受け、実行委員会HPでは3月1日夜、文書からAYAMIさんの名前を削除、「200～300枚のほとんどはスタッフ及び安田さんの関係でした」と修正している）。

——そんなこと言われても（笑）。

安田　金遣いがどうのこうのって言うけど、俺が金遣いが荒いのなんて、みんな知っていることじゃない？

——開き直りますね（笑）。

安田　正直言うと、2月21日までは行く気でいたのよ。でも、儲かったって聞いたからさ。24日に「儲かったんなら、あと30万円ぐらいちょうだいよ！」って言ったの。

——本当に言ったんですか！

安田　うん。「30万、ちょうだい！　ちょうだい！」ってバカみたいにね（笑）。ある人に相談したら、「それぐらい出してもらってもいいんじゃない？　出してくれないなら、行かなきゃいいじゃん」って言われて。あと、ブログには大韓航空って書いてあったでしょ？

——ありましたね。それでブラジルに行く手はずになっていたんですよね。

安田　うん。でも、田崎さんは別ルートのチケットでブラジルに行っているんですよ。

——別ルートのチケットって？

安田　それも興行の上がりから出してるんじゃないの？　まあ、その行く先々でほかの取材もして、自分の仕事代でチケット代を稼ごうってことなんだろうけどね。あと、田崎さんはロサンゼルスに行っているんですよ。ロサンゼルスには総合をやったときにお世話になった人がいるから、その人の店に顔を出してって頼んだのに出してない。

——それはあまり関係ないというか、ところどころに不満があるんですね（笑）。

安田　まあ、そういう細かいことはどうでもいいんだけど、結局一番大事なところがナアナアだったから、おかしくなるんですよ。たとえば、彼らは引退興行のDVDを発売しようとしているでしょ？

——ああ、ホームページにはそう書いてありますね。

安田　でも、そんなの出したら、選手一人

カリカリ怒るガキだから ガキである俺を扱えなかったんだよ

一人に別途でギャラを支払う可能性も出てくるわけよ。

――確かに肖像権の問題が出てくるかもしれないですね。

安田　そうそう。でも、そういう契約を一切交わしてないからね。まあ、マイナスだと思っていた興行が成功しちゃったから、こんなおかしくなったんだよな。成功したがための苦しみみたいな（笑）。でもね、今日、なんでこんなに冷静でいられるのかっていうと、（実行委員会の）5人のメンバーの中の一人が謝りに来てくれたんですよ。

――ええ、そうなんですか！

安田　うん。だから、カリカリ怒ってるのってガキみたいじゃんって。ガキだから、ガキである俺を扱えなかったんでしょ？　でも、過去、アントニオ猪木さんとかは俺をうまく扱っていたわけじゃん。

――猪木さんとは次元が違うし、それもまた凄い言い分ですね（笑）。

安田　だってさ、ブログでは（空港で）「待ってた」って書かれていたけど、当初の予定では迎えに来てくれるはずだったんだから。「来い」って言われても、行けないよ。金がないんだから。

――ああ、成田までの交通費。

安田　そうそう。彼らだって俺が金がないのは知っているわけでしょ？　だから、迎えに来てくれるはずだったんだから。それなのに「待ってた」って、おかしいよね。俺は25日の時点で航空会社にキャンセル入れてるんだから。だって、寄付するって聞いたから、少しでも多いほうがいいでしょ？

――まあ、そうですね。

安田　確かにもらったお金を大事に使わない俺が悪い。でも、そんなのいままでの俺を知ってればわかるじゃん。

――返答に困ります（笑）。

安田　お金をもらうときはどうしても低姿勢になるじゃん？　「今回はこれで最後で」って。でも、それで博打に行ってしまうのが安田忠夫という。そんなことプロレスファンだったら、誰でも知っとるわい（笑）。そんな俺を日本で調教できないなら、ブラジルに行っても調教できないよ。だから、そっちのためにも行かなくてよかったんじゃないって思うよ。

――被害が大きくなる前に（笑）。

安田　そうそう。で、そんな話をカンボジアのカジノ関係のゴールデンパームっていう会社の社長にしたら、すぐに飛行機を取ってくれて、いま成田にいるわけですよ。



こちらがケンドー・カシンを通じて安田と知り合い、引退興行の実行委員となったson-god-cool代表取締役社長・田崎健太氏。『Number』に安田の記事を書いた矢先、まさかこんな事態になるとは思ってもみなかったことだろう。

――ブログに書かれていましたけど、そのカンボジア行きの話は興行の前にもあったんですよね。1ヵ月2000ドルくれるからそっちに行きたいって。

安田　あれも最初から2000ドルなんてもらえないですよ。まずは見習いなんですから。

――へえ。なんの仕事をするんですか？

安田　まあ、セキュリティもできるし、俺は博打好きじゃん？　負けている人がいたらディーラーを代わるとか、ちょっとマネージャー的な存在でもあるんだよね。あと、言っていいのかわからないけど、その社長はマカオではジャンケットっていう資格を持っているんですよ。

――ジャンケット？

安田　うん。カジノにお客を紹介する事業者。だから、マカオにあるベネチアンのVIPルームにも入れるんですよ。俺もそのカードを作ってもらって、本当だったら3000万ぐらいデポジットしなきゃ入れないところに入り口から入っていけるんですよ。

――それは凄いですね！

安田　中ではそのカードを出せば、何やっても5パーセント引き。そこのレートで換金すると、日本円で1～2円ですけど、若干いいんですよ。

――1月の頭にマカオに行かれていたのはその方に連れていってもらったんですか？

安田　まあね。で、その人の会社に料理をやっていた人がいるのね。その人は昔サッカーもやっていたみたいで、俺にカロリー計算しながら料理を作ってくれるわけ。で、練習して、今日は何カロリーしか食ってないから、「じゃあ、ヤッさん、ラーメン食いに行く？」って言ってくれるの。俺もついていっちゃうよね、すぐ腹減るからさ（笑）。

――じゃあ、そちらのカンボジアの社長のほうが面倒見がいいから、安田さんの心もぐらついたということですか？

安田　ぐらついたけど、25日までは行くつもりだったんですよ。30万を出してくれるならね。だって、それぐらいの給料がなきゃしょうがないでしょ？

――最初の約束だと、1月から1ヵ月につき5万円というお金をもらうことになっていたんですよね？　ブログではその後、安田さんがおねだりする場面が続いていましたけど。

安田　だから、それが俺の性格じゃない！　それが安田忠夫でしょ？　結局、「安田さんをブラジルに行かせたいので」ってチケットを売ったもんだから、顔が立たないのよ。だから、あんなブログを出しているの。でも、こんなの出して誰が喜ぶの？　ファンの夢を壊すだけじゃない。せっかくいい興行って言われてるんだから、これで終わりにしようよって。安田忠夫を調教できなかったのは実行委員会の力不足……と、全部人のせいにする安田ということでいいんじゃない？

――いいんですか？（笑）。

安田　だって、こんな俺だからしょうがないよ！　過去に俺を使ってきた人たちは

引退興行の最後は娘のAYAMIさんからのメッセージ。「昔はパパのことが好きじゃなかった。たけど、自殺未遂で意識が戻らないパパを見て、どんなパパでも私にとっては大切なお父さんだと思い、涙が止まらなかった。いまではパパが大好き」と涙ながらに語りかけ、感動的な幕引きとなったのだが……。



田忠夫

どっちも悪いんだから お互いに自分の失敗は認めようよ

だましだましうまく使ってきたわけでしょ。それなのにせっかく楽しんでくれた人たちを不快にする。ひどいですよね。でも、俺はプロレスでタイガーマスクになれなかったけど、こうやって寄付してくれたことで、最後に伊達直人になれた、と。そういうオチでいいじゃん？

――ダッハハハハ！　とんだ伊達直人ですね（笑）。

安田　あとさ、あの人は酒に飲まれることがあるから、飲まれないでねって。俺のこと『Number』の記事で睡眠薬中毒みたいに書いてたけど。

――ああ、睡眠薬を常用しているっていう。

安田　それもそんなに飲んでないんだよ。ただ、腹減っているからさ、効いちゃうわけよ。で、一人でいると、「なんでこんなに頑張ったのに、これしかもらえないんだよ」ってキレちゃうところがあるんだよね。そうすると電話しちゃうんだけど、イライラしているから早口になっちゃう。早く金がほしいから脅すような口調にもなるから、彼らもビビっちゃったんだよね。それを薬でラリってるみたいに書かれちゃったんだけど。まあ、それは俺の責任だよね。

――そう思いますが（笑）。

安田　でも、俺のなかには待たされているあいだに、「なんでこんな思いをしなきゃいけないんだ？　あんなにお客さんを喜ばせて、パチンコも打てないなんて……」って思いが募っちゃうんだよね。だから、「もう一回ぐらいパチンコ打ちてえや。だから、30万ぐらいくれや！」って言ったんだけど、そのときの言葉がブログで使われちゃったんだよね。だって、前借りでもなんでもあと30万ぐらいもらってもいいと思ったからさ。

――実際の儲けた金額からすると。

安田　うん。だって、寄付するぐらいなら、30万ぐらい出してくれてもいいじゃん。だったら、俺も黙ってブラジルに行ってるんだから。25日の時点でお金を振り込んでくれたらよかったんだよ。でも、あの人は先にロサンゼルスに出発しちゃったわけじゃない。まあ、こういうことを言いだしたらキリがないんだから、やめようよって。どっちも悪いんだから。お互いに自分の失敗は認めようよって。

――お互いに（笑）。ちなみにこの期間はギャンブルはやっていなかったんですか？

安田　金ないんだから、やれるわけねえじゃん。まあ、もらったお金でやっちゃったけどね。

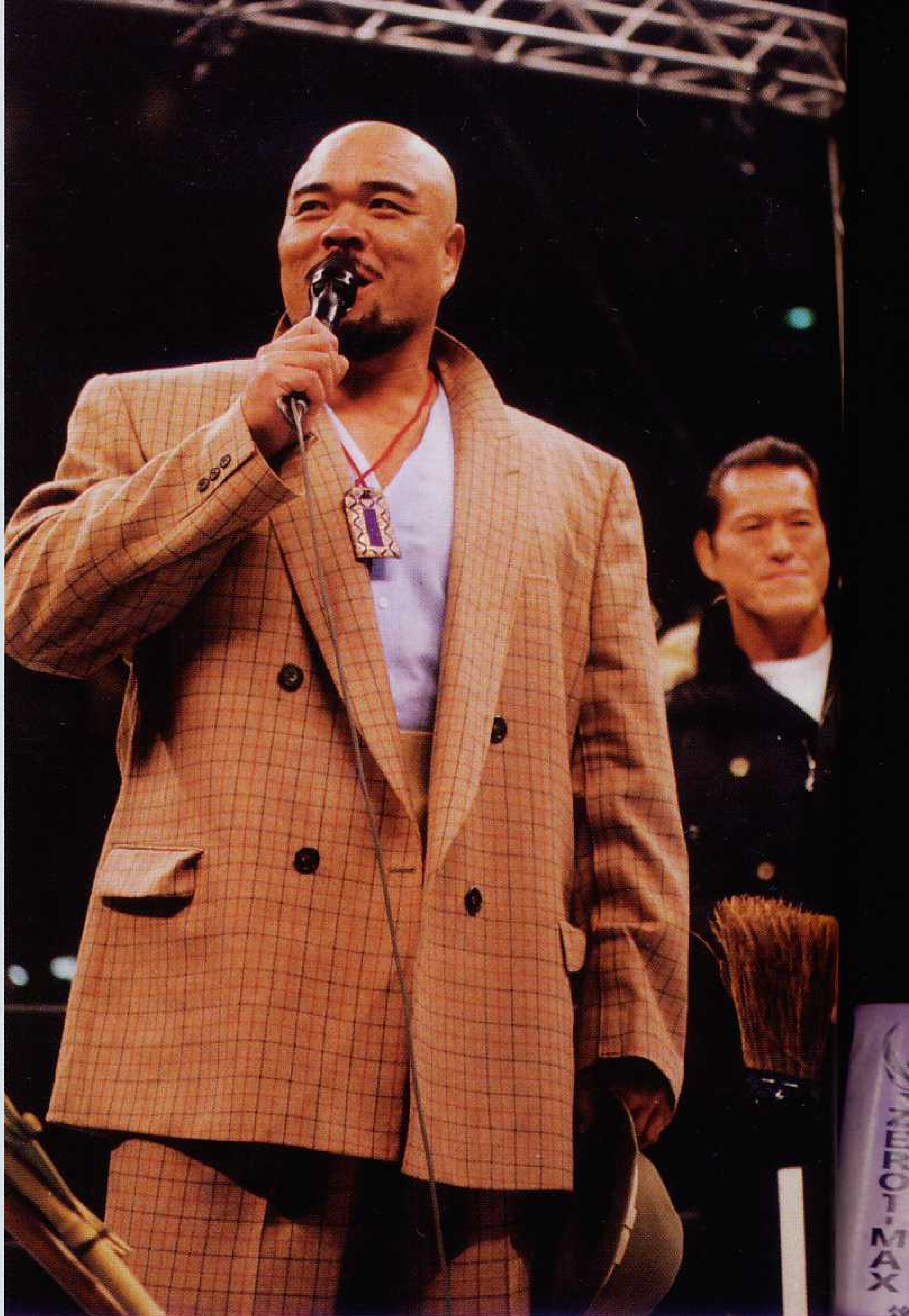
――やってるじゃないですか（笑）。

安田　でも、試合終わったあとも差し入れをしてくれるわけじゃないし、何してくれるわけでもない。先月もらった20万なんてないのは彼らも知っているわけですからね。それなのに何もしないで、俺を金の亡者みたいに書いて。「だったら、キレイにスパッと折半して分けようよ」って言ったことがあるもん。興行に俺の名前も使っているんだからさ、半分半分でいいじゃ

もう日本ではプロレスはやらない！
でも、カンボジアでやるかもしれないよ

んって。
――ブログに書かれていた「最初から半分もらわなきゃ引退試合を受けなかった」という言葉はそこからきてるんですかね？
安田　そういうことじゃない？　だから、言った言わないになるから、こんなことやめたいんだよね。子どもの口ゲンカに参加するつもりはないんで。興行が成功したんだからいいじゃんって。ブラジルに行かなかったのは安田のキャラだから。プロレスファンの皆さん、許してって。
――いやあ、どうでしょうか（笑）。ちなみに安田さんはブラジルで相撲を教えるということに関しては本当に興味はあったんですか？
安田　あった、あった！　だけど、この人たち飯食わしてくんねえじゃん！　だって、はなから飯食う量が自分たちと同じ量だと思ってんだから。
――はぁ……。
安田　でしょ？　倍食うわけだから。でも、ゴールデンパームはチケットもすぐに取ってくれて、お金もくれて、成田までの交通費も出してくれて、飯代もくれたからね。そりゃ、そっちに行っちゃうに決まってんじゃん。銭ゲバ・安田なんだから！
――自分で言いますか（笑）。でも、結局のところ、安田さんはそういうちゃんといたりつくせりのタニマチがほしかったということなんですよね？
安田　どうだろう？　そんなことはないんだけど。
――でも、安田さんの手綱を握るにはそうじゃないと無理でしょう。
安田　だから、そういう懐の深さがないと俺は扱えないよね。彼らにはそういう懐の深さがなかった、と。それなのに、こういうブログを書いて、ファンの夢を壊すのはやめようよって。だって、あの日の興行で喜んでくれたファンもけっこう多かったような気がするんだけど。
――みんな感動してましたしね。
安田　それを壊さないでほしいね。だって、あんたたちが呼んだ客だけじゃないでしょって。俺のファンで興行に来てくれた人もいるわけだから。その人たちの夢を壊すようなことをしないでっていうのが本音ですよ。だから、両方悪いんだからさ。それを一方的に俺が悪いって書くのをやめようよ。俺は悪いところは自分で認めているよって。あんたは悪いところはないの？　そんな完璧な人間はいないよって。いたら神様でしょう。違う？
――まあ、そうですね（笑）。
安田　だから、人間誰しも自分がかわいいけど、悪いことをしたらごめんなさいって言わないといけないんで。今回のことは俺のルーズさがいけないんだけど、その手綱をとれなかった人も悪いだろうと。そういう話になるでしょう。
――もう、田崎さんの立場になれば、乗った馬を間違えたとしか言いようがないですね（笑）。
安田　乗った馬はよかったんだよ。働くときは働くんだから。だって、乗った馬がよかったからマイナスがプラスになったわけでしょ？　違う？　まあ、あの人たちの腕もあったのかもしんないし。ただ、その馬は走るだけ走ったら、暴れ始めちゃった、と。それで振り落とされたって感覚じゃないの？
――エサ代も普通の馬よりもよけいにかかるんでしょうし（笑）。
安田　エサ代が人の倍かかる。（高見山のマネをしながら）2ば～い、2ば～いで4倍かかる。金遣い荒いから。
――ダッハハハハ！　ちなみにカンボジアにはどれぐらい行かれているんですか？
安田　当分行っていると思いますよ。その会社があるかぎりはね。使ってくれるかぎりは黙って働きます。そのほうが幸せじゃん。マカオでも面倒みてもらってさ。だからさ、バカ馬調教できなかったんだから、いってこいだべ、と。最初のうちはうまく扱ったわけでしょ？　興行まではバカ馬はちゃんと走ったわけでしょ？　でも、終わった途端、バカ馬は暴れただけよ。
――でも、プロレスはこれで引退ということでいいんですか？
安田　日本ではやりません。でも、カンボジアではやるかもしれないよ？　日本のリングには上がらないって言ったじゃん。それだけは誓うよ。日本のリングには上がらない！
――わかりました。では、最後に心配をかけた日本のプロレスファンに一言お願いします。
安田　あいかわらず、ど～もすいません（笑）。でも、伊達直人になれたから許して！

【11年3月11日／千葉県・成田国際空港第2ターミナルにて収録】



やすだ・ただお■1963年10月9日、東京都出身。大相撲で孝乃富士（最高位・小結）として活躍。廃業後に新日本プロレスに入門。05年に解雇処分となってからはZERO1 MAX、『ハッスル』、IGFなどに参戦。2月4日に引退。現在はカンボジアに滞在中。

安田

『パワーホール』不発! 不可解な判定負け!! UFCデビュー戦で何が起こったのか?

福田力

「それでもUFCは自分に合ってると思う」

長州力と山本"KID"徳郁を師匠に持つ福田力が、2.27『UFC127』シドニー大会でUFCデビュー! MMA10戦全勝の戦績を誇るニック・リングを相手に、6度のテイクダウンを奪うなど優位に試合を進めたが、不可解な判定負けを喫してしまった。さらに長州に使用許可を得た入場テーマ曲『パワーホール』も流れずじまい。いったいシドニーで何があったのか?

聞き手&撮影/堀江ガンツ　試合写真/Josh Hedges(UFC)、Getty

——UFCデビュー戦から3日経ったわけですけど、顔がほとんど傷もなくきれいですね。

福田　おかげさまで、ケガがなくてよかったです。

——ホントにフルラウンド闘ったとは思えないほど無傷で、あらためて「なんで判定負けなんだ?」って感じですけど。ご本人としてはいかがですか? 日本ではファンも関係者も「福田の勝ちだ」って言ってますが。

福田　自分としては、とにかく一生懸命やっただけなんで。判定がどうのこうのより、「あそこは、もっとこうしたほうがよかったな」とか、そういう反省点がいっぱいありましたね。

——3ラウンドが終わったときに「よし、勝ったぞ!」みたいなのはなかったんですか?

福田　「イケたかな」とは思ったんですけど、結果は「負け」だったんで。次に向けて頑張るだけですね。

——判定に対して「なんでだよ!?」みたいな思いはないんですか?

福田　お互い一生懸命闘ったと思うし、判定は人それぞれの見方なんで、一本やKOを奪わなかったら、こういうこともあるなって思ってます。

——あんな判定だったのに、けっこうサバサバしてますね?

福田　そうですね。結果、怒ったところで結果は変わらないんで。だったら前を向いて、次に勝てるように頑張ったほうがいいと思うんですよね。

——でも、あの判定はダナ・ホワイトもツイッターで「またジャッジがバカなことをやりやがった!」と、怒りのツイートをしてたくらいのものですよ。

福田　そう言ってもらえるのは、単純にうれしかったです。でも、これを糧にもっと頑張ればいいなって思ってます。ウジウジ考えてても仕方がないんで。

——試合後、ダナと話す機会はあったんですか?

福田　会えなかったんですけど、マッチメイカーのジョー・シルバさんとか、何人かのスタッフの方とは話させてもらいました。

——なんて言ってました?

福田　ジョー・シルバさんには、自分から話しかけたんですよ。やっぱりUFCは厳しい戦場なんで、一回負けただけでリリースされる選手もいるじゃないですか。だから「まだUFCで闘いたい。もう一回チャンスをください」ってお願いして。

——判定への文句じゃなくて、次の試合へのお願いですか(笑)。あれだけの試合をしていながら「クビになるんじゃないか」ってビクビクしてたんですか?

福田　はい。やっぱり結果は負けなんで。そこはちょっと心配でした。でも「大丈夫、次もある。俺はおまえが勝ったと思ってる」と言ってもらえたんで。

——そりゃそうですよ! それにしても、あの判定はどんな基準なんでしょうね。今回は現地オーストラリアのジャッジだったんですよね?

福田　そうみたいですね。周りは「ジャッジとして経験不足なんじゃないか」とは言ってました。

——オーストラリアで、MMAの大会が頻繁に開催されているとは思えませんしね。

福田　UFCはレフェリー&ジャッジや、メディカルチェックまですべて外部に委託することで、公平さを保つポリシーみたいなんですよ。だから、事前に日本のメディカルチェックを受けて診断書も提出し


HALEO
THE
HALEO



RIKI FUKUDA

[11.02.27　UFC127 Penn vs Fitch]
オーストラリア・ニューサウスウェールズ州シドニー　エイサー・アリーナ

○ ニック・リング vs 福田力 ×
(3R終了 判定3-0)

福田は１ラウンドから両足タックルで二度のテイクダウンを奪取。その後も福田は試合を優位に進める。判定は当然、福田勝利と思われたが、ジャッジは３者とも29-28でニックを支持する不可解判定となった。

てたんですけど、あらためて現地のメディカルチェックを受けさせられましたから。

―ちゃんと興行と競技、メディカルが分かれているんですね。でも、これがオーストラリアじゃなかったら……と思うと残念です！

福田　まあ、毎回オーストラリアで闘うわけじゃないと思うんで（笑）、次頑張ります。

―現地の機関に、今回の判定についての異議申し立てみたいなものはできるんですか？

福田　できるみたいで、一応マネージャーが書類を出してるんですよ。これで覆るとは思ってないんですけど、今後の勉強のためにも出しておいたほうがいいかなって。

―世界的にやってるスポーツだと、その土地土地によって、審判の基準が微妙に違うことって多々ありますからね。

福田　そうですね。なかでも総合はとくに難しいと思うんですよ。どこに基準を置くかによって、判定は全然違ってくると思いますから。

―これまでUFCは「テイクダウンのポイントが重要視される」と言われてきましたけど、セコンド陣はそういう判定基準も含めて作戦を立ててたんですよね？

福田　そうですね。ベストのプランを立ててくれてたと思います。そして、ほぼプランどおりの闘いができたとは思うんですけど、何かが足りなかったんでしょうね。

―今回はどんな作戦だったんですか？

福田　テイクダウンしてパウンドっていう作戦だったんですけど、テイクダウンはできても、なかなかその先にいかせてもらえなかったですね。だから、ポジションをキープしながら、しっかりと強いパウンドを入れられるようにするっていうのが、今後の課題の一つだと思います。

―対戦相手のニック・リングの印象はどうですか？

福田　やっぱり蹴りが凄くうまかったです。そんなに重くはないんですけど、スピードがあって、上下に散らしてきたので、凄くいやらしかったですね。パンチはそこまで嫌だとは思わなかったんですけど、蹴りが予想以上でした。

―UFCのオクタゴンはやってみてどうでした？　日本を主戦場にしていた選手は、みんなあの広さにペースを乱すことが多いようですけど。

福田　確かに広かったですね。でも、自分はそんなにやりづらさは感じなかったです。ただ、ケージ際の攻防はもっと練習しなきゃいけないなって思いました。

―それ以外に、日本とUFCの違いを感じたことはありましたか？

福田　やっぱりブーイングや歓声の凄さですね。試合中、ちょっと見合った感じになると、すぐにもの凄いブーイングがくるんで「いかなきゃ！」って思っちゃいましたし、会場が盛り上がると自分も乗っていける感じがしましたね。

―では、精神的にはあの舞台が合ってるタイプなんですかね。

福田　そうですね。けっこう尻を叩かれないとやれないような性格なんで（笑）。あの歓声やブーイングはいいかもしれないです。

―ファンがブーイングで尻を叩いてくれましたか（笑）。

やらそうじゃないみたいなんで。次回こ

福田　あと、試合前にはダナ（・ホワイト）が尻を叩いてくれたんですよ。

——そうなんですか？

福田　試合前日、計量が終わったあと、出場する選手みんながロッカールームに呼ばれたんですよ。そこでダナがみんなに檄を飛ばすんです。

——どんなことを言うんですか？

福田　自分はあんまり言葉がよくわからないんで、あとで訳してもらったんですけど、「明日は1万8000人の観客がおまえたちの闘いを観に来る。それだけじゃなく、テレビやインターネットを通じて世界中の人々が観ているんだから、プロとしてのプライドを持って闘え」とか。「今大会のボーナスは当初5万ドルだったが、俺の一声で7万5000ドルにさせた。だから、おまえたちも気合いを入れて闘え！」みたいなことを言ってましたね。

——へえ、ボーナスという〝ニンジン〟をぶら下げたうえで、ファイターたちを鼓舞するわけですか。

福田　自分、なんかそれ聞いてたらテンション上がってきちゃって、気合い入りましたね。「カッコいいな。俺もプロとしてちゃんとしたものを見せたい」って凄く思いましたね。

——目の前に7万5000ドルがチラつくし（笑）。

福田　見たことがない額ですからね（笑）。あと、ダナの言葉を聞いて、「自分は明日、世界最高峰の舞台に立つんだな。最高のものを見せなきゃいけないな」って、なんかそれだけで感動しちゃいました（笑）。

——ダナの言葉によって、UFC出場をあらためて実感したというか。

福田　そうですね。

——そして当日を迎えるわけですけど、長州さんからわざわざ許可をもらった入場テーマ曲『パワーホール』はどうしちゃったんですか？

福田　じつは流れなかったんですよ。前日くらいに急にテレビマッチになっちゃって。

——あれは、別の曲が流れたんですか？

福田　いや、入場自体がなくなっちゃったんですよ。

テレビマッチになったことで、自分の入場シーン自体がなくなっちゃったんです



ふくだ・りき■1981年1月6日、岐阜県出身。山梨学院大学レスリング部に所属し、卒業後、WJプロレスの練習生として入団。デビュー前に退団し、04年にMMAデビュー。09年6月に中西裕一を破りDEEPミドル級王座を奪取。09年4月にはDREAMにも出場し、ムリーロ・ニンジャを破った。183cm、84kg。

——入場自体がなくなった？

福田　そうなんです。なんかコマーシャル中に二人ともオクタゴンに入って、コマーシャル明けにすぐ始められなきゃいけないらしいんですよ。

——じゃあ、コマーシャルの最中に、控室から急いでオクタゴンに放り込まれる感じですか？

福田　そうなんです（苦笑）。自分は普通に入場するもんだと思ってたんですけど。普段は、だいたい試合前にスタッフが控室に呼びにきて、入場ゲート前で待機。そして曲がかかったら入場する感じじゃないですか。

——そうですね。

福田　でも、このあいだは、入場ゲートをすぎても、スタッフが「もっと、どんどん前に歩け」って言うんですよ。それで、場内にライトもつけてない暗いなか、テーマ曲なしでどんどん花道を歩かされて、あれよあれよという間にケージの前まで来ちゃって。その場で顔にパッとワセリン塗られて「すぐケージに上がれ」って言われたんですよ。

——心の準備もできないままに（笑）。

福田　そうなんです。普段は精神統一して、気合いを入れてからリングインするんですけど、そんな暇もなく「さっさと上がれ！」って言われて、「えぇ～～～!?」みたいな感じでした（笑）。

——それは対戦相手も一緒ですか？

福田　一緒ですね。ケージの前に来たとき、ニック・リングもすぐうしろにいたんで。

——生放送だとそういう制約もあるんですね。

福田　最初は「版権がひっかかって、流れないのかな」って思ったんですけど、どうやらそうじゃないみたいなんで。次回こそ『パワーホール』を期待してください。でも、楽しみにしてくれた人や、長州さんに申し訳ないですけどね。

——福田選手の試合以外にも、入場シーンなしの試合ってあったんですか？

福田　アイオンTVに流れた試合って、ボクも含めて3試合だったと思うんですけど、その3試合はみんな同じく入場シーンなしでしたね。こういうテレビが優先される大会っていうのも、ボクは初めてだったんで、それも勉強になりました。

——やっぱりメジャーな舞台って、いろいろたいへんですね。

福田　ただ、テレビマッチになって、いいこともあったんですよ。

——何があったんですか？

福田　テレビに映るって決まったら、急にスポンサーが増えたんです。

——へえ、そうなんですか！

福田　それがありがたかったですね（笑）。やっぱりテレビに出るのと出ないのとでは、コマーシャル効果も全然違ってくるみたいで。

——じゃあ、次回も入場シーンなしのテレビマッチがいいですかね？

福田　いや、スポンサーがつくのはありがたいんですけど、次はちゃんとテーマ曲が流れる試合に出たいです（笑）。

——次の試合はいつ頃になりそうですか？

福田　まだ具体的な話は何も来てないんですけど、自分としては3カ月後くらいにはやりたいですね。

——わかりました。では、次こそUFC初勝利と、大音量の『パワーホール』に期待してます！

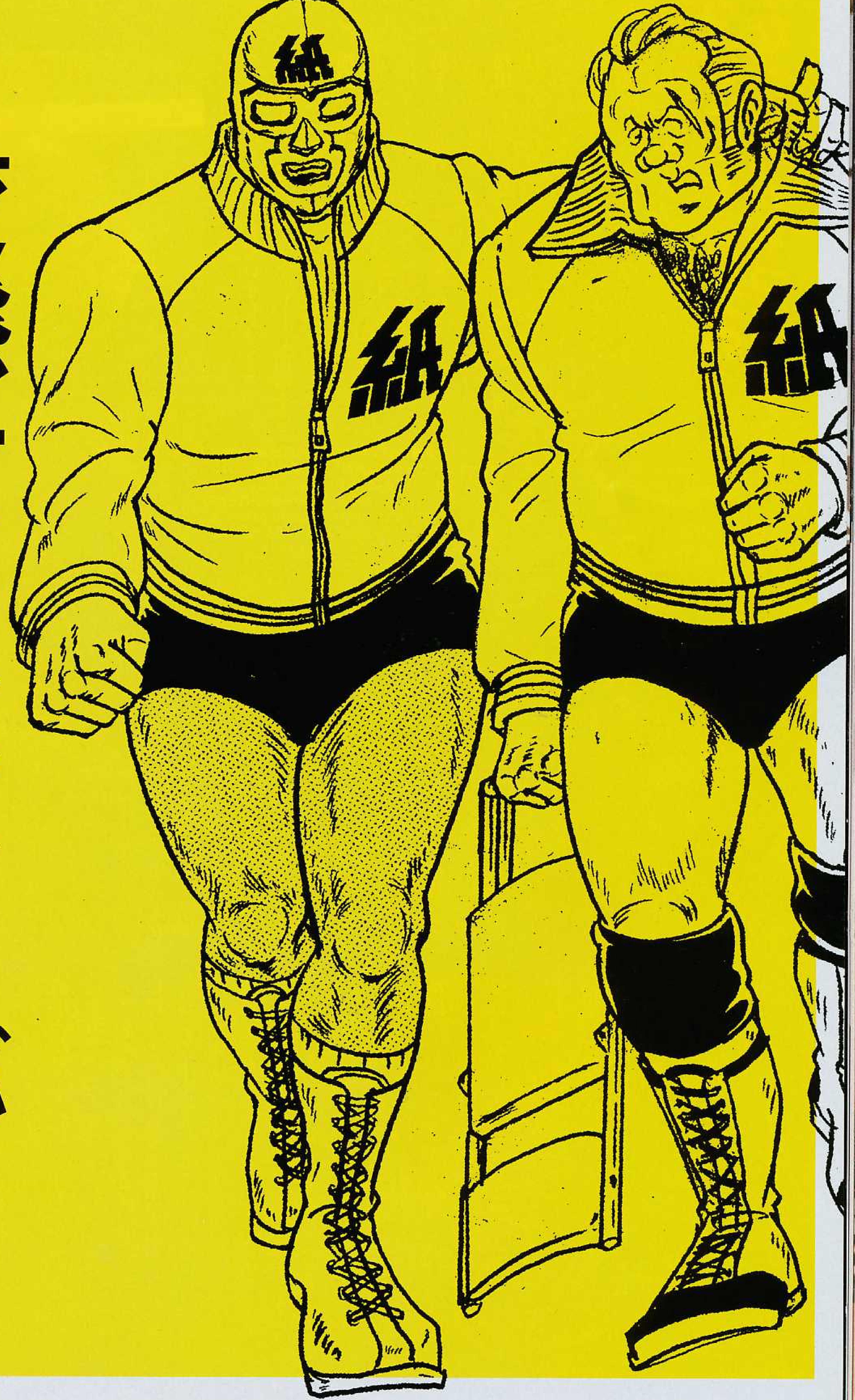
【11年3月2日／都内・『新宿中村屋』にて収録】

BA-YE 2011開催!

4.2 SAT. KITAZAWA TOWN-HALL

変態ナイトフィーバー in SHIMOKITA

1年半ぶりに『kamipro』のトークイベントが帰ってくる!
玉ちゃん金ちゃん揃い踏みに加えてサダハルンバも降臨!!
そして『kamipro』の今後はいったいどうなる!?
本誌絶賛連載中の爆笑コーナーを生で味わえ!



kamipro BOM-B

4月2日（土）開場18:30／開始19:00
北沢タウンホール［下北沢］

［チケット］当日2,800円（前売2,500円）全席自由
※未就学児童入場不可　※録音・写真・動画撮影禁止

決定カード

ダークマッチ
今後の行方やいかに!?
いったい何が起きたのか？「kamipro地獄変」

オープニングマッチ
谷川貞治の「危機脱出講座」

スーパーファイト
金原弘光の「蘇れ!UWFインター伝説」

メインイベント
玉ちゃんの変態座談会
【出演】玉袋筋太郎／椎名基樹／堀江ガンツ

カミプロドットコム kamipro.com

チケット、内容に関するお問い合わせは
エンターブレインのカスタマーサポートではなく以下となります。
内容に関する問い合わせ　ツースリー TEL.03-3235-9214
チケットに関する問い合わせ　e+（イープラス） http://eplus.jp/

チケット絶賛発売中!!

「俺はいまズッファの一員になった」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2011年4月28日(木)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが八百長と聞いて思い浮かべる試合は?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805 東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部 「いかんともし難いお手上げ的事態」係まで

※応募締切は2011年4月8日(木)当日消印有効

PRESENT 01 SPECIAL PRESENT

1名様



愛川ゆず季 直筆サイン入り単行本『血心』

[三交社/¥1,365(税込)]

ゆずポンがグラビアアイドルから"グラレスラー"として、高橋奈苗とのデビュー戦を迎えるまでを振り返った一冊。愛媛のお嬢様時代や、芸能界のシビアな実態、そしてプロレスデビューを決心するまで、その胸中を赤裸々に記している。今回はこちらにサインを入れてプレゼント!

ブログ■http://ameblo.jp/yuzuponpon/

PRESENT 02



1名様

朱里直筆サイン色紙

[非売品]

ひさびさの『kamipro』登場となった『SMASH』の女子エース、朱里。大きなマスクを着けている理由は今号掲載のインタビューをチェック!

ブログ■http://www.diamondblog.jp/syuri/

PRESENT 03



キューティー鈴木 直筆サイン色紙

1名様

[非売品]

アイドルレスラー時代と変わらぬ可憐さを誇るキューティーの直筆サイン色紙。なお、現在お腹には第二子となるお子さんがいるとのことです。

PRESENT 04



1名様

福田力 リバーサル×HALEO限定コラボTシャツ

[リバーサル/¥5,040(税込)]

先日、UFCデビューをはたした福田のTシャツ。次こそはオクタゴンのど真ん中で『パワーホール』が聞きたいぞ! サイズはL。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT 05



1名様

ベルナール・アッカTシャツ

[NO NEED NEW/¥3,675(税込)]

マスオさんファイター、アッカのTシャツの右脇には、ドイツ語でのベルナールの名前の由来にあたる「強い熊」の文字が。サイズはL。

NO NEED NEW■http://no-need-new.com/

PRESENT 06



1名様

単行本

『自伝大木金太郎 伝説のパッチギ王』

[講談社/¥890(税込)]

アントン、馬場さんらとともに一世を風靡した伝説のプロレスラーが、密入国、恩師・力道山との日々など、波乱の半生を語りつくした一冊。

講談社■http://www.kodansha.co.jp/

PRESENT 07



3名様

単行本

『武道のリアル』

[エンターブレイン/¥1,785(税込)]

『戦争のリアル』に続く、押井守の対談本第2弾。戦争を描き続けた押井守と、小説家にして武道家である今野敏が武道の本質に迫る!

HP(押井守)■http://www.oshiimamoru.com/

PRESENT 08



1名様

DVD

『プロレススーパースター列伝 ダニー・スパイビー&ジョージ・スコット』

[クエスト/¥5,040(税込)]

スーパースターの往年の勇姿と現在の素顔に迫った感動のドキュメント。今回は黄"金の鷲"スパイビーと"空飛ぶ砲弾"ジョージ・スコット。

PRESENT 09



1名様

DVD

『極真館 極真空手型全集 中巻』

[クエスト/¥5,880(税込)]

故大山倍達総裁の遺志を受け継ぐ型の第一人者、岡崎寛人師範による詳しい動作の解説と分解組手を収録。極真空手愛好者は必見です!

PRESENT 10



1名様

DVD

『Krush 2010』

[クエスト/¥5,880(税込)]

佐藤嘉洋や大和哲也、野杁正明などK-1のリングで活躍する選手たちも続々参戦する『Krush』。2010年の激闘から厳選された試合を収録。

HP■http://www.queststation.com/

PRESENT 11



1名様

『INOKI アントニオ猪木引退記念公式写真集』

われらがアントニオ猪木の引退の際に出版された記念写真集! 撮影はアントンといえばこの人、大御所カメラマンの原悦生氏だ。

闘道館■http://www.toudoukan.com/

kamipro157 応募券 カビキラー

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.157
2011年4月7日 発行

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
青柳昌行
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（人気店に出資のため非番）
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
高橋くん
編集次長
松林 貴
デザインGM
出田 一（TwoThree）
デザイン隊長
金井ヒサくん（TwoThree）
デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
今村陽子
笹井孝祐
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
ノーコメント
スコット入江CEO（TwoThree）
営業部
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本“ザ・腰痛”義之
庶務部
原 正典
山内ユリコ
編集チアガール
金川“ナツコ”奈津子
安部“クリン”悠子
編集チアマダム
廣橋久美子
発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
印刷
図書印刷株式会社
協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

『kamipro』についてのお知らせ

いつも『kamipro』をご愛読いただき、まことにありがとうございます。

2005年10月に現在の『kamipro』として新装刊し、株式会社エンターブレインからの発行となってプロレス・格闘技界の情報を伝えてまいりましたが、このたび今号『kamipro』No.157をもちまして、エンターブレインからの発行は終了とさせていただくこととなりました。

今後の発行につきましては近日中にご報告させていただきますが、これまでに培ったノウハウを活かし、ウェブや携帯サイト、さらには新規媒体などを含めたさまざまなメディアにおいて展開を行なっていく所存です。

なお、『kamipro』公式サイト『kamipro.com（カミプロ・ドットコム）』（無料サービス）および、『kamipro』公式携帯サイト『kamipro Move（カミプロ・ムーブ）』（有料サービス）につきましては、これまで同様にサービスを継続してまいりますので、引き続きご利用いただければ幸甚に存じます。

読者の皆さまにはこれまでのご愛読に対し、並びに関係各位にはこれまでのご協力に対して心より感謝申し上げます。皆さま方には今後ともこれまでと変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

kamipro編集部 一同

【年間定期購読をご契約の皆さまへ】
現在、定期購読中の方には『kamipro』No.157以降の未発送分について、エンターブレインの通販サイト[ebten（エビテン）]より個別にメールでご連絡させていただきます。
2011年3月31日までにメールが届かない場合には、恐れ入りますが下記サイトよりご連絡くださいますようお願いいたします。

■ebten ーエビテンー　http://ebten.jp/

株式会社エンターブレイン

NEXT ISSUE

No.158は……出せんのか!?

近日中に『kamipro.com』および『kamipro Move』でご報告いたします。
JZカルバンのように首を長くしてお待ちください。

GENDAI

BISCAL®
ビスカル

製薬会社だから提供出来る信頼・安全!
毎日食べてウチのコ、ハッスル!!

ペットは大事な家族の一員です。ずっとずっと長生きしてもらうためにもペットの健康維持は飼い主様にとって大切な役目のひとつ。栄養ビスケット『ビスカル』は、毎日与えていただくことで3〜4日頃よりふん尿臭が軽減します。栄養も満点。国内自社工場で製造しておりますので安心してご使用下さい。ペットと一緒の爽やかな生活を提供します。


ビスカル 150g


ビスカル 300g


ビスカル 900g

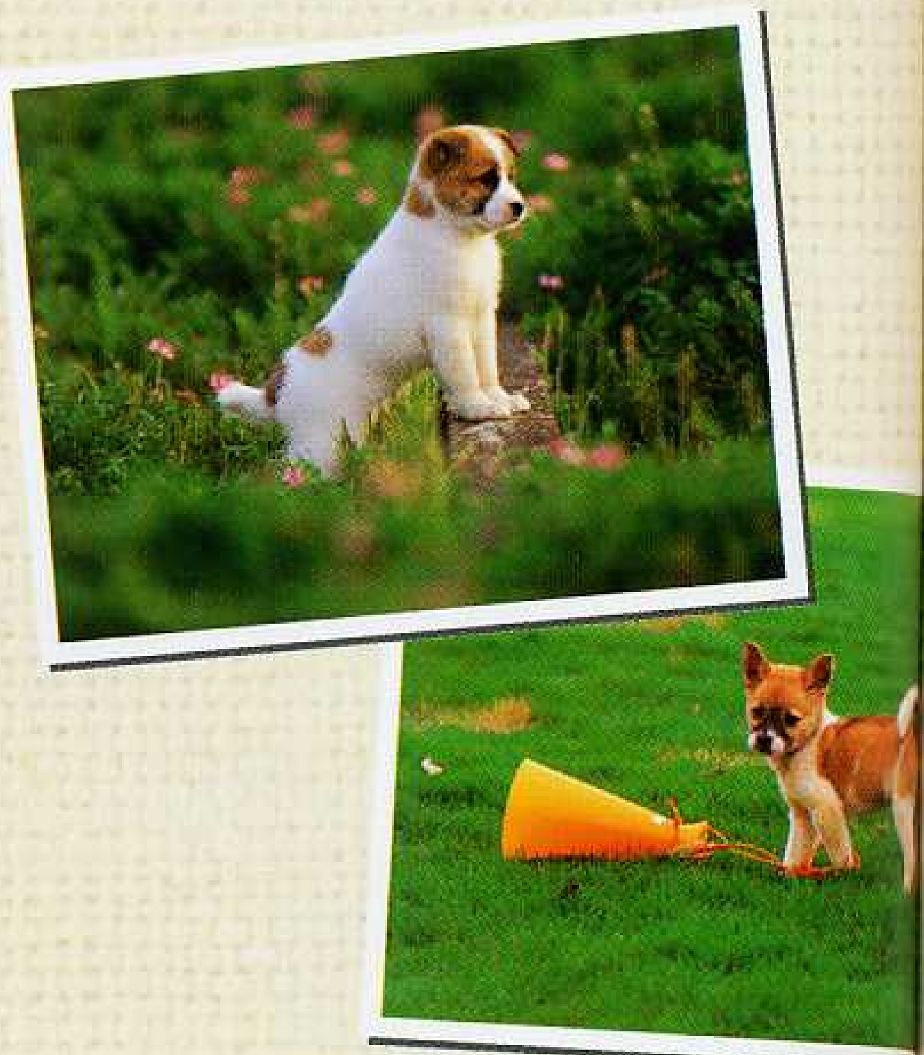

ビスカル 2.5kg


ビスカル小粒 65g


ビスカル小粒 180g


ビスカルシニア小粒 60g


ビスカルシニア 300g




ビスカルダイエット 300g


ビスカルダイエット 900g




ビスカルcat 100g


ビスカルcat 200g

詳細(ビスカル他)はコチラ→ http://www.gendai.ne.jp/

HPから商品の
ご購入も出来ます!!



ペットの健康と幸せ支え、人と地球に、やすらぎと潤いを提供すること。
これからも変わらない現代製薬の使命です。

心の癒しや潤いを求める社会の変化の中で、ペットの存在は大きく変化してきました。今、ペットは、大切な伴侶や家族を意味するコンパニオン・アニマルとして捉えられています。ペットの暮らしをトータルに支えながら、人と社会に心の豊かさを発信していくこと。この理念を実現するために私たち現代製薬は、昭和32年創立されました。以来、私たちは医薬品から化粧品、食品まで様々な製品を提供し、そのフィールドをさらに多彩に広げ、深めつつあります。
高齢化や少子化が進む中でペットと人との関係は、さらに密接になっていくと考えられます。また、地球環境の悪化が深刻に進む今、ペットの存在は尊い生命と共存の素晴らしさを子どもたちに教えてくれることでしょう。その意味で私たちが果たすべき役割はますます重要になってきています。だからこそ現代製薬はその責任の重さを自覚しながら、さらに優れた品質の製品をお届けすることで業界をリードしていく決意です。今も、これからもペットの健康と幸せを支え、人々と地球にやすらぎと潤いを提供すること。それが創業以来変わらない、私たち現代製薬の使命です。

現代製薬株式会社

本社所在地 〒190-1222 東京都西多摩郡瑞穂町箱根ヶ崎東松原8-4 TEL：042-556-1971 FAX：042-557-2516
大阪営業所 〒567-0821 大阪府茨木市末広町2-24 末広13番館203号 TEL：072-633-3223 FAX：072-633-3065



kamipro 2011 157
女たちの生き様から本当の"プロレス"が見えてくる!
俺たちの女子プロレス伝説!!
2011年4月7日
発行人/浜村弘一 編集人/斉藤倫一、青柳晶行
発行所/株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元/株式会社角川グループパブリッシング 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
enterbrain

特別定価:本体895円＋税
雑誌61972-75 Ⓗ2011.07
Printed in Japan 図書印刷株式会社

9784047271173
ISBN978-4-04-727117-3
C9476 ¥895E
1929476008954

kamipro 2011 157

女たちの生き様から本当の"プロレス"が見えてくる!

俺たちの女子プロレス伝説!!

2011年4月7日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤信一　発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

eb! enterbrain

kamipro 2011 157

「DREAMのことを心配してる場合じゃないっ」

eb! enterbrain